

高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第47集

奥谷南遺跡Ⅱ

四国横断自動車道(南国～伊野)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2000.3

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター



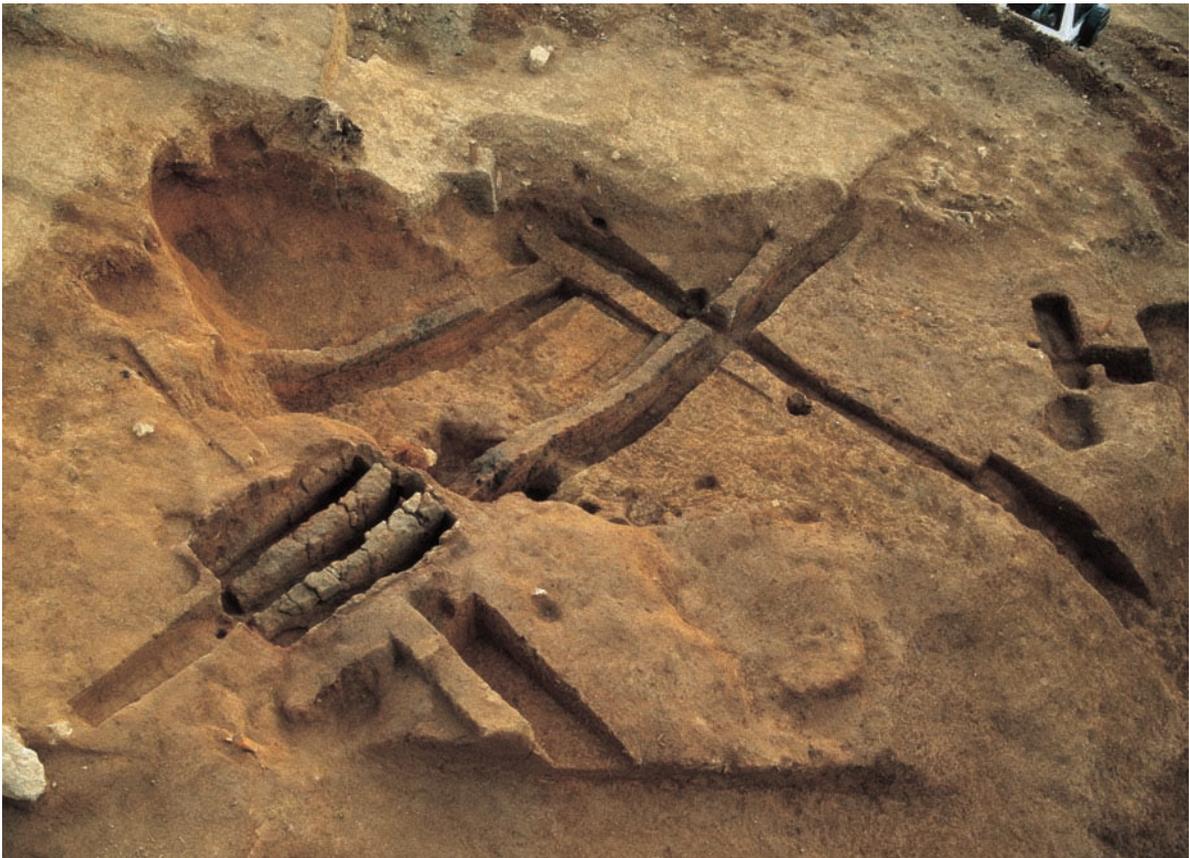
奥谷南遺跡Ⅵ・Ⅶ区遠景（南西方向より）



奥谷南遺跡Ⅶ区全景（上空から）



窯周辺の遺構（上空から）



窯周辺の遺構（斜面上方から）



窯焼成部検出状況



窯焼成部遺物出土状況



窯焼成部遺物出土状況



窯焼成部遺物出土状況



窯焼成部完掘状況



窯燃焼部堆積状況



須恵器窯と灰原の拡がり



須恵器窯と灰原の堆積状況



焼成部完掘状況



ロストル構造をもつ須恵器窯



窯断ち割り状況



窯断ち割り状況



VI区出土緑釉陶器（黒笹90号窯式） 内面



VI区出土緑釉陶器（黒笹90号窯式） 外面



須恵器窯出土遺物（鉢・供膳具）



須恵器窯出土遺物（土師器羽釜・移動式カマド）

序

奥谷南遺跡の所在する南国市は県下で最も遺跡の多く分布するところであり、四国横断自動車道（南国～伊野間）建設に伴う発掘調査でも数多くの遺跡が確認されました。

奥谷南遺跡の調査は平成6年度から平成8年度にかけて行われ、多くの成果を上げることができました。

平成6年度を中心とした調査では縄文時代の貯蔵穴群、弥生時代の高地性集落と集団墓、近世の儒墓が確認され、この地における先人達の様々な営みが浮き彫りになってきました。これらの成果は『奥谷南遺跡Ⅰ』として平成11年度に報告いたしているところでもあります。

今回は平成6年度、7年度にわたる調査により確認されました山岳寺院関連施設とロストル構造を持つ須恵器窯等、古代を中心とした成果を『奥谷南遺跡Ⅱ』として報告いたします。何れも高知県における該期の文化や産業を知る上で貴重な発見であり、当時の暮らしの復元に重要な手掛りを与えてくれるものと確信しております。

最後になりましたが調査の実施、報告書の作成にあたり関係各位から多大なご協力とご指導をいただきましたことに厚く御礼申し上げます。今後とも一層のご支援をいただけますようよろしくお願い申し上げます。

平成12年3月

(財) 高知県文化財団 埋蔵文化財センター
所長 河 崎 正 幸

例 言

1. 本書は四国横断自動車道建設に伴って高知県文化財団埋蔵文化財センターが1994(平成6)年・1995(平成7)年度に実施した奥谷南遺跡の発掘調査の中で、Ⅵ・Ⅶ区に関する調査についての発掘調査報告書である。
2. 本調査は日本道路公団高松建設局(現四国支社)の依頼を受け、高知県教育委員会が受託し、財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターが調査を実施した。奥谷南遺跡の調査は1994～1996年の3ヶ年にわたり、発掘調査報告書は3分冊にわたって刊行する予定であり、本報告書は第2分冊にあたる。
3. 奥谷南遺跡は高知県南国市岡豊町小蓮に所在する。
4. 発掘調査は1994(平成6)年4月から1996(平成8)年10月まで実施している。今回報告するⅥ区及びⅦ区の調査はⅥ区が1995年2月6日から3月17日までの日程で、高知県文化財団埋蔵文化財センター主任調査員小嶋博満が担当し、Ⅶ区の調査は1995年12月18日から1996年2月27日までの日程で、高知県文化財団埋蔵文化財センター主任調査員松村信博、調査補助員山本純代が担当し、主任調査員山崎正明の協力を得た。なおⅦ区の調査に際し、高知県埋蔵文化財センターの出原恵三・前田光雄・松田直則・吉成承三・藤方正治・武吉眞裕・山本哲也・竹村三葉・松田重治・池澤俊幸の諸氏、並びに田上浩氏(高知市教育委員会)に測量作業等の発掘調査に関する協力を得ることができた。記して感謝の意を表する。
5. 本報告書の作成は1998・1999年度に(財)高知県文化財団埋蔵文化財センターにおいて主任調査員松村信博、調査補助員山本純代が担当して行った。なお、Ⅵ区については主任調査員小嶋博満が整理作業を進め、松村・山本が引き継いで内容をまとめた。
6. 本報告書の編集は松村が行った。執筆分担は以下のとおりである。第1章～第3章・第4章第1節・第5章(松村)、第4章第2節・第6章並びに遺物観察表(山本)。Ⅵ区の整理は小嶋、観察表は、すべて山本純代によるものである。
7. 本報告書に関わる自然遺物などのうち、一部のものについて鑑定・同定及び分析を(株)パリノサーヴェイに依頼し、報文をいただいた。
8. 調査途上で、周辺の地形・遺構の位置関係を記録するため空中写真撮影を実施した。空中写真撮影業務は(株)アイシーに委託した。
9. 出土遺物ならびに写真・図面類は高知県文化財団埋蔵文化財センター(高知県南国市篠原1437-1)に保管している。
10. 調査に参加した作業員の方々は、以下のとおりである。ここに挙げる人々によって発掘調査全体が支えられ、そのおかげで大きな成果を得ることができた。記して感謝をささげたい。

(1994年度発掘調査-Ⅶ区)

井上速男・井上郁雄・石川功・岡田稔夫・小松栄一・小松好・小松木義・小松浜子・小松重喜・小松光尾・浜口興・森本幸栄・森本倫代・永田美津子・島井博志・島井澄子・島井周子・

高村秀吉・高橋弘喜・武市隆男・武市和子・吉川競・吉川勉・山本純代

(1995年度発掘調査-Ⅶ区)

井上速男・井上郁雄・石川功・植田純子・小松栄一・小松好・小松木義・小松浜子・小松重喜・小松光尾・永田美津子・浜口興・森本幸栄・森本倫代・松木富子・山本裕美子

(整理作業) 1994～1999年

岩貞泰代・楠瀬憲子・小松経子・竹村延子・松木富子・宮本幸子・矢野雅・山本裕美子・前田玲子・高橋千代・久万公子・川井由香・西内宏美・中西純子・白木こずえ・小野山美香・山口知子・大原喜子・浜田雅代・白木由里・尾崎富貴・岩本須美子・高橋加奈・横飛美紀・森綾子・川久保香・入野三千子・橋田美紀・北村宜子

11. 本報告書作成に際して、以下の諸氏に貴重な御教示・御助言をいただいた。記して感謝する次第である。(敬称略)

岡本健児(高知県文化財保護審議会会長)・倉田芳郎(駒沢大学教授)・吉村正親(京都市埋蔵文化財研究所)・浅野晴樹(埼玉県埋蔵文化財調査事業団)・百瀬正恒(京都市埋蔵文化財研究所)・森隆(富山県文化振興事業団)・橋本久和(高槻市教育委員会)・森島康雄(京都府埋蔵文化財センター)・伊能近富(京都府埋蔵文化財センター)・中島恒次郎(太宰府市教育委員会)・岡本桂典(高知県歴史民俗資料館)・山田真一(長野県豊科町郷土博物館)、片桐孝浩・佐藤竜馬・長井博志(香川県埋蔵文化財センター)、木立雅朗(立命館大学助教授)、前田光雄・松田直則・山本哲也・出原恵三・廣田佳久・吉成承三・武吉眞裕・池澤俊幸・筒井三葉はじめ高知県埋蔵文化財センターの諸氏

凡 例

1. 本報告書に用いた高度は海拔高であり、北方位については真北を用いた。
2. 本報告書における遺構名称については、調査区ごとの通し番号とし、遺跡全体で統一した呼称は採用していない。本報告書ではⅥ・Ⅶの2つの調査区について各々の遺構番号を採用する。
3. 奥谷南遺跡では、3分冊を予定しているが、遺物については1冊ごとの通し番号をつける予定である。本報告書では遺物にⅥ・Ⅶ区全体を通した通し番号をつけた。
4. 遺構・遺物の縮尺は以下のとおりである。

遺構

1/40 (掘立柱建物)、1/30 (掘立柱建物以外の遺構)。

上記の縮尺に統一するが、例外も含まれる。遺物出土状況等が含まれる図面については1/20など他の縮尺で掲載する図面もある。それについては図面ごとに明記する。

遺物

1/4 (土師器・須恵器・磁器・瓦)

1/3 (石器)

本文目次

第1章	調査に至る経過～奥谷南遺跡平成7年度調査の経過……………	(松村)… 1
第2章	調査の方法	
	第1節 調査の方法……………	(松村)… 5
	第2節 調査日誌抄……………	(松村)… 9
第3章	Ⅵ区調査の成果	
	第1節 基本層序……………	(松村)… 13
	第2節 遺構と遺物……………	(松村)… 13
第4章	Ⅶ区調査の成果	
	第1節 基本層序……………	(松村)… 19
	第2節 遺構と遺物……………	(山本)… 22
第5章	まとめ —奥谷南遺跡Ⅵ・Ⅶ区の位置づけ— ……	(松村)… 67
第6章	考察	
	第1節 奥谷南遺跡出土土器について……………	(山本)… 77
	第2節 奥谷南Ⅵ区包含層出土の緑釉陶器について……………	(山本)… 86
第7章	付編 自然科学分析……………	(株)パリノ・サーヴェイ… 89

挿図目次

Fig.1	奥谷南遺跡位置図	1
Fig.2	奥谷南遺跡及び周辺の遺跡位置図	3
Fig.3	奥谷南遺跡調査区位置図	4
Fig.4	Ⅵ区設定グリッド	5
Fig.5	調査区全体図	7
Fig.6	調査区トレンチ位置図	8
Fig.7	Ⅵ区遺構全体図及び遺物出土状況図・エレベーション図	14
Fig.8	Ⅵ区SB-1、SA-1、SK-1遺構平面・エレベーション図	15
Fig.9	Ⅵ区出土遺物実測図	17
Fig.10	Ⅶ区セクション図 (1)	20
Fig.11	Ⅶ区セクション図 (2)	21
Fig.12	Ⅶ区山岳寺院関連遺構 (S=1/160)	23
Fig.13	Ⅶ区SB-1、SB-2遺構平面・エレベーション図	24
Fig.14	Ⅶ区SB-3、SB-4遺構平面・エレベーション図	25
Fig.15	Ⅶ区SA-1遺構平面・エレベーション・出土遺物実測図	26
Fig.16	Ⅶ区P-5、P-32、P-41出土遺物実測図	26
Fig.17	Ⅶ区SK-1遺物出土状況平面・遺構平面セクション図及び出土遺物実測図	27
Fig.18	Ⅶ区SK-2遺構平面・エレベーション図及び出土遺物実測図	28
Fig.19	Ⅶ区SK-3、SK-4遺構平面・エレベーション図	30
Fig.20	通路状遺構出土製塩土器実測図	31
Fig.21	通路状遺構平面図	31
Fig.22	窯跡周辺遺構	33
Fig.23	窯平面・断面・セクション図	34
Fig.24	窯体及び周辺トレンチ位置図・セクション図	35
Fig.25	窯焼成部礫出土状況及び ^{しょう} 牀平面図・エレベーション図	37
Fig.26	窯焼成部遺物出土状況及びエレベーション図	38
Fig.27	窯体内出土遺物実測図 (1)	40
Fig.28	窯体内出土遺物実測図 (2)	41
Fig.29	灰原・礫層・灰層Ⅰ～Ⅳのひろがり及び遺物出土地点	42
Fig.30	灰原出土遺物実測図	43
Fig.31	焼成土坑位置図	44
Fig.32	焼成土坑遺構平面・セクション図及び出土遺物	45
Fig.33	Ⅶ区SK-10礫出土状況・焼土、炭化物出土状況・セクション図	46

Fig.34	Ⅶ区SK-12遺構平面・エレベーション図	46
Fig.35	Ⅶ区包含層出土遺物実測図（表採、Ⅰ・Ⅱ層）	49
Fig.36	Ⅶ区包含層出土遺物実測図（Ⅲ層-1）	50
Fig.37	Ⅶ区包含層出土遺物実測図（Ⅲ層-2）	51
Fig.38	Ⅶ区包含層出土遺物実測図（Ⅲ層-3）	52
Fig.39	Ⅶ区包含層出土遺物実測図（Ⅲ層-4）	53
Fig.40	Ⅶ区包含層出土遺物実測図（Ⅲ層-5）	54
Fig.41	Ⅶ区包含層出土遺物実測図（Ⅳ・Ⅴ層）	55

表目次

Tab. 1	Ⅶ区遺構計測表	16
Tab. 2	Ⅶ区出土遺物観察表	18
Tab. 3	Ⅶ区平坦部ピット計測表	29
Tab. 4	Ⅶ区出土遺物観察表（1）	56
Tab. 5	Ⅶ区出土遺物観察表（2）	57
Tab. 6	Ⅶ区出土遺物観察表（3）	58
Tab. 7	Ⅶ区出土遺物観察表（4）	59
Tab. 8	Ⅶ区出土遺物観察表（5）	60
Tab. 9	Ⅶ区出土遺物観察表（6）	61
Tab.10	Ⅶ区出土遺物観察表（7）	62
Tab.11	Ⅶ区出土遺物観察表（8）	63
Tab.12	Ⅶ区出土遺物観察表（9）	64
Tab.13	Ⅶ区出土遺物観察表（10）	65
Tab.14	Ⅶ区出土遺物観察表（11）	65
Tab.15	Ⅶ区出土遺物観察表（12）	65
Tab.16	Ⅶ区出土遺物観察表（13）	66

写真図版

- 巻頭カラー1 奥谷南遺跡Ⅵ・Ⅶ区遠景(南西方向より)
- 巻頭カラー2 奥谷南遺跡Ⅶ区全景(上空から)
- 巻頭カラー3 窯周辺の遺構(上空から)、(斜面上方から)
- 巻頭カラー4 窯焼成部検出状況、焼成部遺物出土状況
- 巻頭カラー5 焼成部遺物出土状況
- 巻頭カラー6 窯焼成部完掘状況、窯燃焼部堆積状況
- 巻頭カラー7 須恵器窯と灰原の拡がり、須恵器窯と灰原の堆積状況
- 巻頭カラー8 窯焼成部完掘状況、ロストル構造をもつ須恵器窯
- 巻頭カラー9 窯断ち割り状況
- 巻頭カラー10 Ⅶ区出土緑釉陶器(黒笹90号窯式) 内面、外面
- 巻頭カラー11 須恵器窯出土遺物(鉢・供膳具)、(土師器羽釜・移動式カマド)

- PL1 奥谷南遺跡Ⅵ区・Ⅶ区 遠景
- PL2 奥谷南遺跡Ⅶ区 全景(上空から)、遠景
- PL3 Ⅶ区調査前風景(北から)、同上(東から)
- PL4 Ⅶ区遺構完掘状況(北から)、同上(南から)
- PL5 Ⅶ区SB-1完掘状況、調査区西端セクション
- PL6 Ⅶ区遺物出土状況
- PL7 Ⅶ区調査風景
- PL8 Ⅶ区尾根上から西方向(蒲原山・長畝古墳群)をのぞむ、尾根上から南方向平野部をのぞむ
- PL9 Ⅶ区調査前風景、Ⅶ区尾根上から東方向(岡豊山)をのぞむ
- PL10 Ⅶ区山岳寺院関連遺構面検出状況、同上完掘状況
- PL11 Ⅶ区山岳寺院関連遺構面完掘状況(南東から)、同上(東から)
- PL12 Ⅶ区 (南から)、同上
- PL13 Ⅶ区遺物出土状況(SK-2)、同上(包含層)
- PL14 Ⅶ区土坑墓完掘状況(SK-3、SK-4)、Ⅶ区遺構全体図
- PL15 Ⅶ区SK-2及びSB-1柱穴、礫出土状況及び完掘状況
- PL16 Ⅶ区通路状遺構(南から)、TR-10
- PL17 Ⅶ区窯体検出状況(西から)、同上(西上方から)
- PL18 Ⅶ区焼成部検出状況(北西から)、同上(北東から)
- PL19 Ⅶ区焼成部半截状況(北東から)、同上(北西から)
- PL20 Ⅶ区焼成部遺物出土状況、同上
- PL21 Ⅶ区焼成部発掘状況(北西から)、同上(東から)

- PL22 VII区焼成部発掘状況(北東から)、同上(南東から)
- PL23 VII区焼成部発掘状況(北東から)、同上(南東から)
- PL24 VII区焼成部発掘状況(西から)、同上(北西から)
- PL25 VII区焼成部発掘状況(北東から)、同上(北西上から)
- PL26 VII区焼成部発掘状況(北西から)、同上(南東から)
- PL27 VII区窯跡及び東側礫集中部、包含層遺物出土状況
- PL28 VII区窯跡焚口及び焼成部(西から)、同上(南西から)
- PL29 VII区灰原、灰原セクション及び燃焼部
- PL30 VII区燃焼部セクション、焚口遺物出土状況
- PL31 VII区燃焼部セクション、燃焼部完掘状況
- PL32 VII区焚口セクション、焚口前面土手状の高まりセクション
- PL33 VII区灰原南北セクション、同上東西セクション
- PL34 VII区窯跡全景(西から)、同上(北東から)
- PL35 VII区北東上段から窯跡斜面をのぞむ、窯跡完掘状況
- PL36 VII区^{しょう}床断面(南西から)、同上(西から)
- PL37 VII区焼成部^{しょう}床断面(北西から)、^{しょう}床断面(南西から)
- PL38 VII区SK-10、SK-12礫出土状況、SK-10礫出土状況
- PL39 VII区SK-10骨片出土状況、SK-10完掘状況
- PL40 VII区TR-6・7セクション、SK-13完掘状況、SX-1検出状況
- PL41 VII区SK-11完掘状況、SK-11セクション
- PL42 VII区SK-15、SK-17
- PL43 VII区調査風景
- PL44 VII区調査風景
- PL45 調査に参加した人々、窯(K-1)完掘状況
- PL46 VI区出土遺物
- PL47 VI区出土遺物
- PL48 VII区SK-2及び下斜面出土遺物
- PL49 VII区P-41、SK-1、SK-2出土遺物
- PL50 VII区窯跡(K-1)出土遺物
- PL51 VII区窯跡(K-1)出土遺物
- PL52 VII区窯跡(K-1)出土遺物
- PL53 VII区窯跡(K-1)出土遺物
- PL54 VII区窯跡(K-1)、SK-13、SK-17出土遺物
- PL55 VII区表採及び包含層出土遺物
- PL56 VII区包含層出土遺物
- PL57 VII区包含層出土遺物

- PL58 Ⅶ区包含層出土遺物
PL59 Ⅶ区包含層 Ⅲ層・Ⅳ層・Ⅴ層 出土遺物
PL60 Ⅶ区包含層出土黑色土器
PL61 Ⅶ区包含層出土遺物
PL62 Ⅶ区包含層出土遺物
PL63 Ⅶ区包含層出土遺物
PL64 Ⅶ区包含層出土遺物
PL65 Ⅶ区包含層出土瓦

第1章 調査に至る経過～奥谷南遺跡平成7年度調査の経過

奥谷南遺跡は南国市岡豊町小蓮に所在し、約3万 m^2 の範囲に広がる旧石器時代から近世にかけての遺跡である。今回の調査は、四国横断自動車道建設に伴う奥谷南遺跡の2年目の調査にあたる。従来、縄文時代の石斧が出土し、縄文時代の散布地として知られていた当遺跡であるが、平成5年度に実施した試掘調査により、縄文時代から近世にかけての遺物及び遺構が、四国横断道建設予定地点から確認された。平成5年度の試掘調査の結果を受けて、翌平成6年度には遺跡西端の丘陵上から東端の丘陵東斜面にかけてI区～VI区の調査区を設定(Fig.3参照)、I～IV・VI区の5,400 m^2 の範囲について調査を進めた。平成5年度の確認調査及び平成6年度調査(I～IV・VI区)の経過については、『奥谷南遺跡I』に記した。



奥谷南遺跡遠景

I～IV・VI区については平成6年度に調査を終了したが、家屋移転の関係で調査に着手できなかったV区と地形の制約等の理由により確認調査のできなかったVI区上方の斜面と平坦部については、平成7年度以降に調査を持ち越していた。平成7年度には、長期の調査期間が必要と想定されたV区の家屋移転後の跡地の試掘調査から着手する予定であった。しかし、家屋の移転が予定よりも遅れて平成8年2月以降になり、平成7年度中にV区の調査を終えることが不可能となった。この段階でV区については平成8年度に調査を持ち越すことが確定、まず着手可能なVI区上方斜面について平成7年12月に調査を開始した。

VI区斜面の上方は、VI区の2倍以上の面積を持つ平坦部(標高70m前後)とこの平坦部から南西下方に連なる緩やかな斜面、平坦部の上方に標高100mに達する尾根道と斜面という地形的特徴を持つ。確認トレンチ(TR-1～10)による調査の結果、調査範囲を平坦部とその南西下方緩斜面に限定し、調査地点の呼称を新たにVII区とした。(地点特定のため、調査に際しては斜面部



Fig.1 奥谷南遺跡位置図

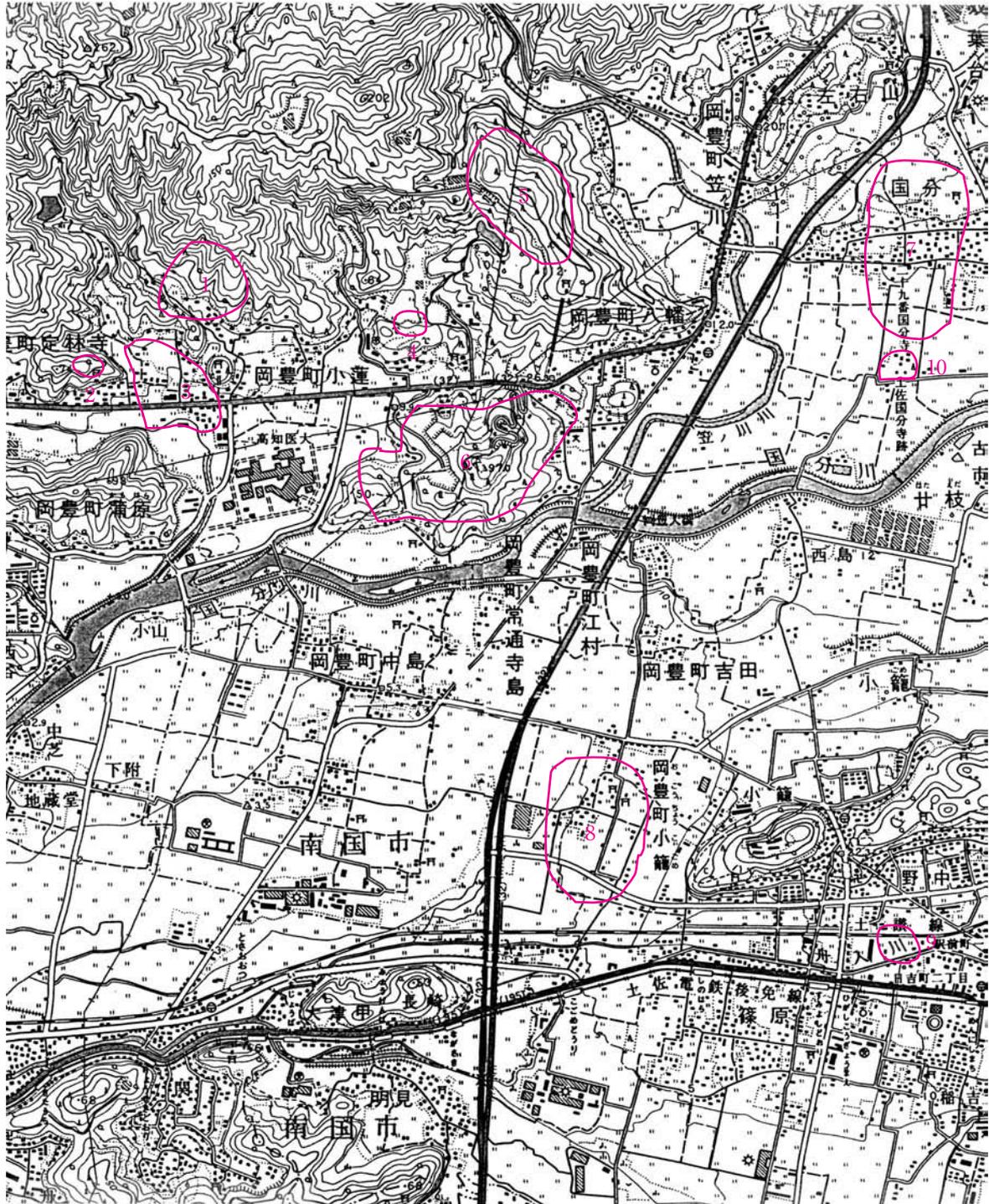
をⅦ区の中でⅦ-S区として調査を進める。)

Ⅶ区の調査期間は平成7年12月20日～平成8年2月27日であり、調査面積は750m²である。
また、家屋移転後の跡地(Ⅴ区)は、宅地のため平坦地として造成されていたが、北側の削り取られた斜面を除けば全て埋め立てにより造成されており、埋め立て土除去後の下層残存状況は極めて良好であった。移転予定家屋(植田速水氏邸)の東側には、高さ約8mのチャート巨岩がそびえている。植田氏邸は、この巨岩よりもさらに大きいチャート巨岩をダイナマイトにより撤去した跡に建設されたようで、埋め立て土の下層にはこの巨岩の根石に当たるチャート岩塊と落磐による数メートル大の岩類、その落磐によりパックされた状態の堆積土層が確認された。Ⅴ区の調査は、平成8年2月26日から開始し、家屋解体後の残存廃棄物(主な廃材等は撤去済で残りの若干の廃材など)と埋め立て土の除去作業を重機を使用して行い、並行してトレンチを設定し土層確認作業を行った。平成7年度中のⅤ区の調査としては、表土・埋め立て土除去作業及びトレンチによる下層の堆積状況・含有遺物確認、そして、近世遺構面の調査までを終えたに過ぎない。チャートの岩陰及びその周辺から大量に出土した旧石器時代～縄文時代草創期、縄文時代早期・前期等の遺物に関しては平成8年度調査によるものである。

平成7年度調査でのⅤ区の調査期間は平成8年2月26日～3月31日であり、調査面積は500m²である。

なお、工事に際する排土置き場進入路建設に関して、Ⅴ区の北側斜面の露頭を一部削るが必要が生じたため、平成7年5月13日から3日間の日程で確認調査を実施した。調査面積は約20m²である。

Ⅴ区の調査については平成8年度調査に継続しており、調査の大部分が8年度調査による。地点的なまとまりという点からも、Ⅳ区(6年度調査)・Ⅴ区(7・8年度調査)については『奥谷南遺跡Ⅲ』でまとめて報告することとし、本報告書では遺跡東端東側斜面に位置するⅥ区(6年度)及びⅦ区(7年度)に関する報告をまとめることとする。



No.	遺跡名	種別	時期	No.	遺跡名	種別	時期
1	奥谷南遺跡		旧石器～近世	6	岡豊城跡	城跡	中世
2	長畝古墳群	古墳	弥生～古墳	7	国分寺遺跡群	散布地	古墳～近世
3	栄工田遺跡	集落跡	縄文～中世	8	小籠遺跡	集落跡	弥生～近世
4	小蓮古墳	古墳	古墳	9	野中庵寺跡	寺院跡	平安
5	舟岩古墳群	古墳	古墳	10	土佐国分寺跡	寺院跡	古墳～近世

Fig.2 奥谷南遺跡及び周辺の遺跡地図 (S=1/25000)

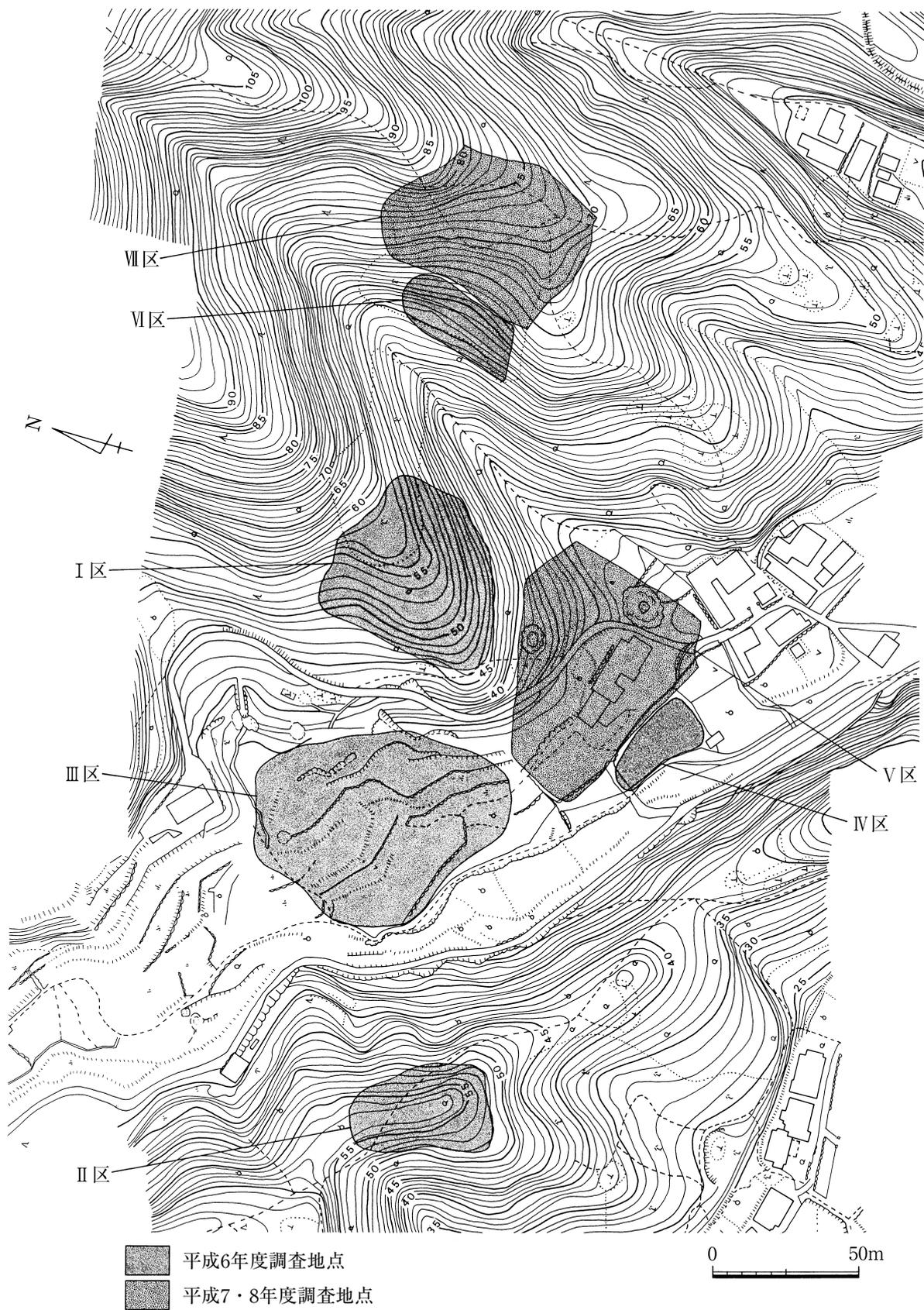


Fig.3 奥谷南遺跡調査区位置図

第2章 調査の方法

第1節 調査の方法

1. VI区

平成6年度に調査を実施した。調査期間は平成7年2月6日～3月17日、調査面積は200m²である。

調査対象区の平坦部に地形に即した測量杭を展開、調査区内の工事用杭から各杭の公共座標を測り込み、測量の基準点として設定した。VI区については、重機の進入路を確保できなかったため、全て人力による調査である。

伐採の後に残った、株・竹等の除去作業の後、表土剥ぎ作業、遺構検出、遺構調査など全ての作業を人力のみで行う。遺物出土状況・遺構検出状況・完掘状況等、写真撮影の後、1/20スケールで実測し記録する。

遺物は表土下20～30cmの遺構形成面直上の包含層に比較的まとまって出土したが、遺構面は埋め立てにより形成されており、トレンチで最終確認した結果、遺構面下の埋め立て土中にも若干の遺物が含まれていることが判った。

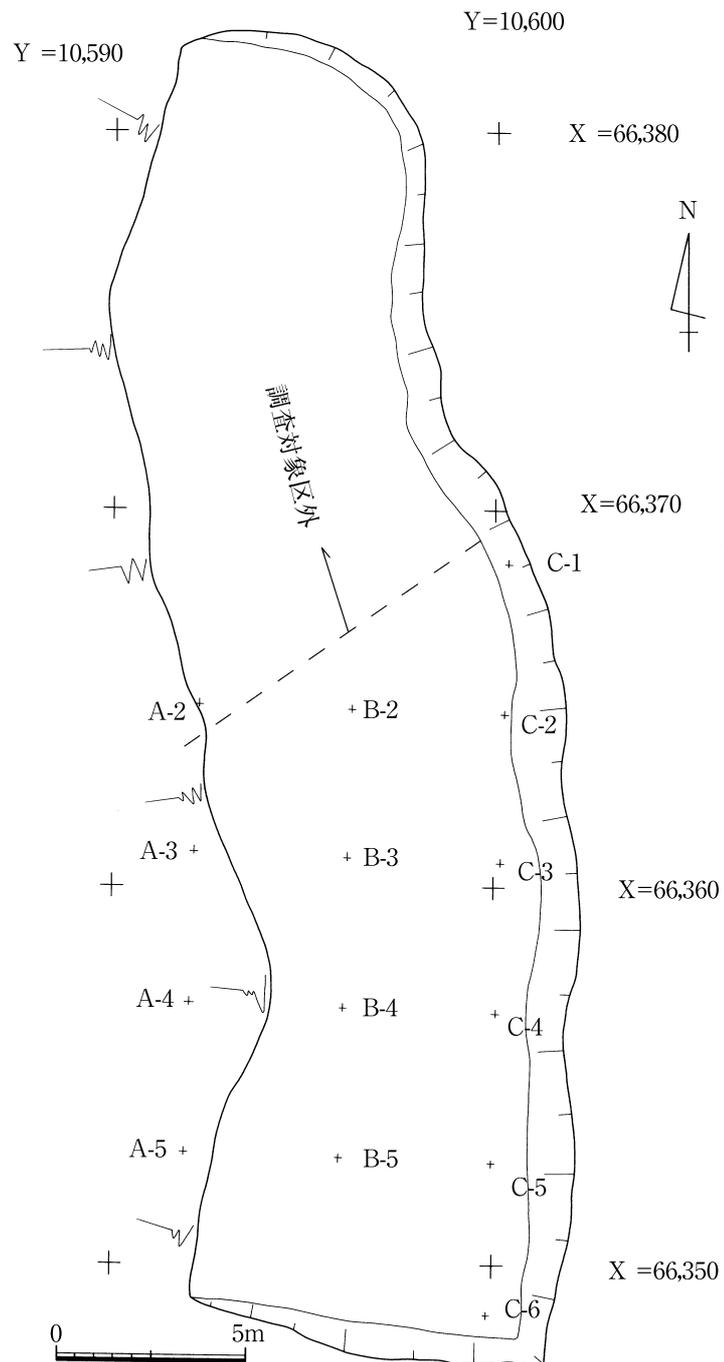


Fig.4 VI区 設定グリッド

2. VII区

平成7年度に調査を実施した。調査期間は平成7年12月20日～平成8年2月27日、調査面積は750m²である。

平坦面をVII区として設定、緩斜面をVII-S区と地点を区別して遺物を取り上げた。当初、平坦面の調査から始めたために平坦面の長軸に即して測量杭の方向を任意に設定、これをを基準として調査区全体のグリッドを設定した。杭の公共座標及び標高は、調査区東側の尾根上斜面及び下方斜面に設置された工事用測量杭-No.13上(X=66,405.436 Y=10,639.938 標高90.214m)、No.13下(X=66,296.159 Y=10,645.468 標高62.920m)から測り込んで測量する。図示してある測量杭の主な座標値は以下のとおりである。

	X	Y	標高(m)
X 12	66340.224	10608.605	68.440
X 13	66336.495	10610.290	69.197
Y 13	66338.185	10613.922	70.237
C 11	66352.208	10625.032	73.588
E 9	66362.833	10628.902	76.658

測量杭はおおよそ北西方向を座標北として設定、座標西から座標東方向にむけてA～Dのアルファベット番号を振り、座標北から南にかけて数字の1から昇順に番号を振って調査を進める。平坦面の調査と並行して進めた緩斜面及び尾根のトレンチ調査によりVII-S区設定が必要となったため、グリッドの延長の必要が生じ、Aの西側に連なるグリッドは東から西へ順番にZ・Y・Xと呼称するようにした。すなわち、本調査で使用したグリッド呼称は任意座標の東西方向で西から東へX・Y・Z・A・B・C・D～、南北方向で北から南へ1・2・3～13となる。

調査自体は12月20日からの開始であるが、重機の搬入準備・搬入路の確保などの作業については12月18日から進めた。伐採された雑木・竹類が調査対象地に山積みされた状態であったため、重機による除去作業と並行しての調査となった。

重機は主に調査排土の移動、雑木・竹など伐採済樹木の移動、表層腐植土の掘削、残存木株除去の補助などの作業に利用したが、包含層の掘り下げ・遺構の調査など大部分の作業は人力のみの作業である。

遺物出土状況・遺構検出状況・完掘状況など必要と認められる場面においては写真撮影を行い、図面化作業を行った。遺構平面図・断面図などについては1/20のスケールで、遺物出土状況を含む図面については基本的に1/10のスケールである。特にVII-S区から検出されたロストル構造を持つ須恵器窯については、高知平野において現段階で類例がないということも勘案し、調査の段階に応じて写真撮影・測量を繰り返し、遺構の移設自体はできなかったものの、調査後、後日検証可能なように窯体の大半を持ち帰った。

また、周辺の地形と遺構との関連を明らかにするために、窯の灰原検出時点で産業用ラジコンヘリコプターを利用した空中写真撮影を実施した。

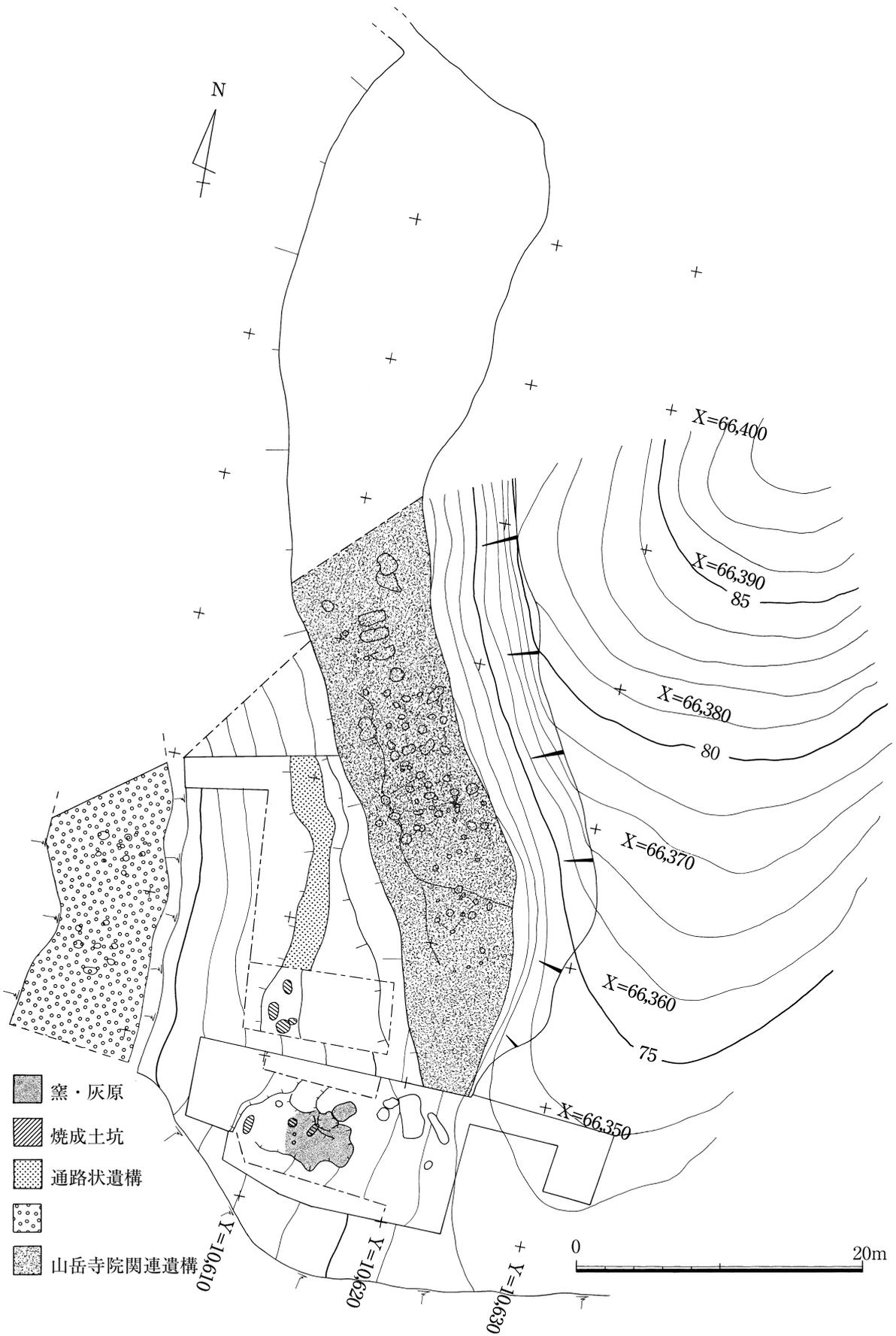


Fig.5 調査区全体図

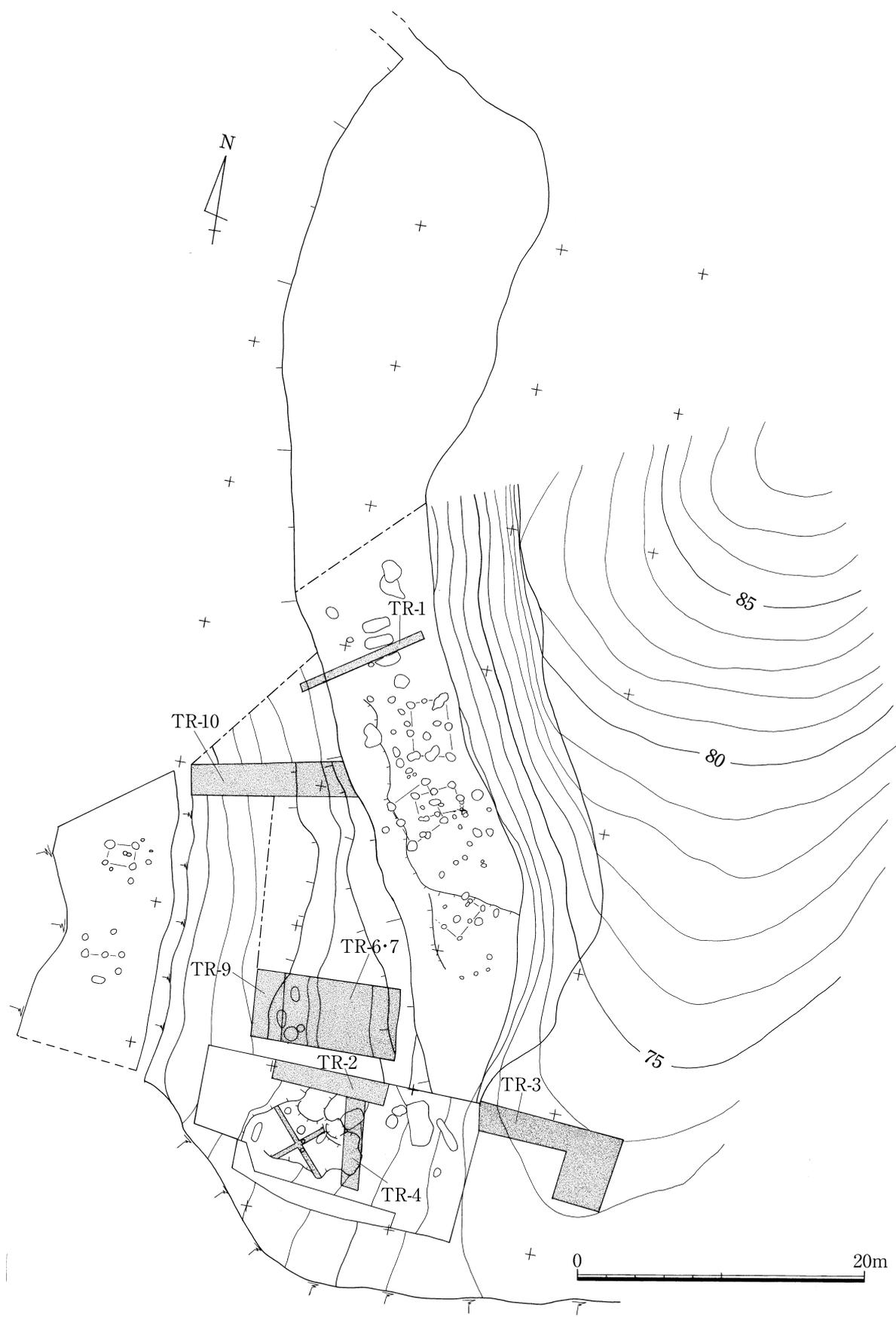


Fig.6 調査区トレンチ位置図

第2節 調査区の概要

本報告書において取り扱うⅥ区・Ⅶ区は奥谷南遺跡の中では、東端に位置する調査区である。1994～1996年の3年にわたる調査で、当遺跡が旧石器時代(後期旧石器時代後半)・縄文時代草創期・早期・前期・中期・後期、弥生時代前期・中期・後期、古代・中世・近世と出土遺物量の多寡はあり断続的ではあるものの極めて多岐にわたる時代に機能していた遺跡であることが判明している。その中で遺跡東端東斜面は、古代の遺物、特に10世紀の遺物が集中して出土した地点として注目される。

近接する尾根周辺には現在に続く墓域が営まれているが、調査対象地には現在の墓域はない。Ⅶ区平坦部から検出した2基の長方形の土坑から人骨がまとまって出土したことから、この2基の土坑が土壙墓であることが確認された。土地の所有権の委譲等の記録から明治22年以降の墓域であることは判明したが、現在へと続く墓域ではなく、地表には痕跡をとどめない。

この平坦部には、小祠が現在も信仰の対象として祀られていたが、調査開始時には工事対象区外へ移設済であり、痕跡を留めているのみであった。

現代に至っても地元の人々によって利用される一種の聖域的な空間であったものの、大地に遺構を留める、もしくは大量の遺物が残された時期は10世紀を中心とした一時期のみである。遺構出土一括遺物もそのことを物語っている。

調査の対象となった地点は、標高63m～65mの斜面を埋め立てて平坦部を造りだしたⅥ区と、標高70m～75mの斜面を削り出して形成した平坦部(Ⅶ区平坦部)の上下2ヶ所の平坦地形とその南に位置する緩斜面である。さらに標高100m地点まで急斜面が続き、尾根上は尾根道として利用可能な地形だが、遺構・遺物が全く検出できず今回の調査の対象範囲には加えなかった。調査対象範囲については平成5年度の試掘調査時に設定した4ヶ所のトレンチに加え、平成7年度に範囲を確定するためにⅦ区及びその周辺斜面にトレンチを設定して実施した確認調査の結果、確定したものである。

第3節 調査日誌抄

Ⅶ区調査日誌抄

1995.12.18～12.27・1996.01.05～02.27

- 12.18(月) 調査前現地踏査。機械搬入路・調査地点等の最終確認を行う。
- 12.19(火) 重機(PC120)搬入。調査地点への進入路確保。
- 12.20(水) 現地調査開始。調査員1名、重機オペレーター1名、作業員7名の体制で始める。調査区は平成6年度調査と連続する地点ではあるが、6年度分と区分するためⅦ区と設定する。調査区の土砂・倒木を重機と人力により取り除いた後、調査区の北限ラインを設定。ラインに沿って幅50cmでトレンチ状に地山

まで掘り下げ、遺物遺構の残存状況を確認する。表土と包含層の2層の存在を確認。TR-1設定、平坦部がどのように形成されたのかを確認する。

- 12.21(木) 調査区を南側に向けて拡張していく。グリッド設定を行う。東西方向A～、南北方向1～、のアルファベット・数字を付し測量杭を設定。A-2・B-2周辺から土師器が集中して出土。遺構の存在が予想されるが明瞭ではない。遺構を確かめるため、TR-1を延長、調査区を横断させる。遺構確認。ピット及び土坑。東側の崖より土師器坏・甕出土。
- 12.22(金) 包含層の掘り下げ作業継続。地山直上

で遺構検出。遺物は遺構上面あるいはその周辺に集中しており、表土付近出土遺物を除くと10世紀の遺物ばかりで一括性が高い。東側尾根上をトレンチ調査により確認したが遺物・遺構は認められなかった。

12.25(月) TR-1南側の遺構検出作業。包含層を掘り下げ地山直上まで仕上げていく。須恵器甕の破片がまとまって出土、掘り下げる過程で遺構のプランが確認できたため、検出した上で写真撮影。午前中から雪がちらついていたが、午後になりふぶいてきたため途中で作業中止。

12.26(火) 昨日来の雪が現場付近一帯に残っていたが、雪をかき分けた上で南側の緩斜面にトレンチ(TR-2)を設定。平坦部のⅦ区に対して、南緩斜面をⅦ-S区とする。重機及び人力で調査したが、60cm以上の土の堆積が確認できたため、土器の出土するまで重機により土の除去作業を行う。表土→礫層→遺物包含層の順に堆積しており、包含層は2層確認することができた。包含層中より完形に近い土器が出土、軟質の須恵器で10世紀のものである。測量を残して年内の現場作業を終える。

12.27(水) Ⅶ区・Cラインの測量杭を延長、さらにⅦとⅦ-Sの中間に杭(D-6・7・9、E-9)を設置、D-9杭を基点にⅦ-S区の杭(X-12・13、Y-13)を打つ。J.Vの測量用杭から測量杭の公共座標及び標高を測り込む。

1995年調査終了

1996年

1996.1.5(金) TR-2包含層掘り下げ作業。下層から出土する土器は少量。堆積厚し。TR-2の東側尾根上にTR-3を設定、L字状にトレンチを拡張するが遺物・良好な遺構ともに確認できず、TR-3の調査を終える。山崎正明(埋文センター)調査に参加。Ⅶ区南側の包含層掘り下げ作業を進める。

01.08(月) Ⅶ区遺構検出作業を一斉に行う。南側へ8mほど拡張、遺構を検出する。包含層中より白磁Ⅳ類(11世紀末～12世紀初頭)出土。10世紀前後の遺物のみではなく、Ⅶ区遺構面が新しい時期にも利用されていたことが判明。Ⅶ-S区、TR-2に直行させてTR-4を設定、調査を開始する。

01.09(火) Ⅶ区、遺構検出状況測量・測量杭Ⅶ区全面に設置。北半の遺構再確認。Ⅶ-S区TR-4



の調査続行。遺物集中地点とそれに伴う焼土確認。遺構の存在が予想される。遺物は10世紀中葉。TR-3・4の測量を行う。

01.10(水) Ⅶ区、遺構の調査開始。SK-1に須恵器甕がほぼ一個体埋まっていることを確認する。また、SK-2には土師器・須恵器・瓦などとともに何点かの鉄製品(いずれも小破片)が含まれる。ピットなど遺構の調査を進めるが、SK-1・2以外の遺物量は少ない。Ⅶ-S区TR-4のセクションがはっきり分かるように徐々に掘り下げていく。橙色の粘土層が他の層と明確に異なっており、何らかの焼成遺構、窯の可能性もある状況となった。午後、埋文センター前田光雄・武吉真裕遺構確認のため調査現場へ。検討の結果、規模は小さいもののこの遺構は窯であるという結論に達した。資料も一括性の高い良好なものである。とりあえずTR-4の東壁セクションを仕上げた後、窯の全体像を掘り出すという手順で作業を進める。

01.11(木) Ⅶ区SK-1セクション測量。Ⅶ区-Ⅶ区間の斜面の伐採。斜面を利用して排土をⅦ区へ移動させる。Ⅶ区遺構面ではSK-3・4の調査。時期は不明だが土坑墓と断定。最下層周辺から人骨が多量に出土。Ⅶ-S区TR-4東壁セクション測量。ビデオ撮影開始。以後調査の状況に即して8mmビデオでの記録を行う。TR-3完掘状況写真撮影。

01.12(金) Ⅶ区SK-1バンク除去作業。バンク除去後、須恵器出土状況写真撮影・1/10実測図作成。B-3・4遺構完掘状況1/20測量レベルかけ。SK-2土器出土状況写真撮影。Ⅶ-S区表土およびⅡ層除去作業。Ⅲ層以下を人力により掘り下げ、窯本体及び地山直上の地形を明確にしようと試みる。窯の全体像はあと一歩のところまで確認できず。しかし窯上方の斜面に焼土と礫で囲まれた遺構を確認した。午前山本哲也、午後松田直則・吉成承三・竹村三

業（埋文センター）調査現場来訪。

- 01.13(土) 調査区周辺全体の地形測量を行う。1 mコンタ地形図完成。Ⅶ区遺構面、SK-1・2の平面図完成。TR-4北壁セクション、土層観察終了。
- 01.16(火) Ⅶ区平坦面南端にTR-5を設定して土層・遺構・包含層の有無を確認するものの遺物検出できず。Ⅶ区全域の遺構検出までを行う。Ⅶ-S区については窯の全体像を検出し、隅丸長方形のプランが確認された。窯の周辺の包含層についても当時の地山付近まで掘り下げが完了、TR-4より上方の全体像が明らかになってくる。藤方正治・出原恵三（埋文センター）が相次いで現場を訪れる。遺跡の重要性を確認。
- 01.17(水) 岡本健児先生・岡本桂典氏（高知県歴史民俗資料館）に現場を見て遺跡の性格を確認していただく。遺跡の性格については山岳寺院であり、窯跡も含めて非常におもしろい資料だと遺跡の重要性を指摘していただく。
- 窯の長軸方向にサブトレを設定、層位を確認しながら包含層の掘り下げ作業を行う。バンク北側に先行サブトレを入れる。Ⅶ区全域の遺構検出作業の残りをを行う。遺構検出完了。同時に遺構調査に入る。
- 01.18(木) Ⅶ区遺構面平面測量完成。松木富子測量援助のため来跡。助かる。Ⅶ-S区については、包含層掘り下げ作業継続。灰原の広がりがある程度予想できる状態になる。松田直則・吉成承三、出土遺物の取り上げ、写真撮影など現場調査に参加。午後、松田知彦（高知県教育委員会）・廣田佳久・江戸秀輝・坂本憲昭（埋文センター）相次いで来跡。
- 01.19(金) 朝からセンターの調査員各位が続々と測量等現場作業援助のため来跡。田上浩（高知県教育委員会）・武吉眞裕・吉成承三の各調査員、終日調査に参加。松木富子測量に参



加。

Ⅶ区遺構平面図のレベル測量ほぼ終了。Ⅶ-S区は窯下方のバンクの層位の確認と灰原の広がり確認、その段階でのⅦ-S区全域の写真撮影を行う。粘土掘り抜き壁のセクション・TR-2北壁（バンク南壁）セクション撮影及び測量完成。灰原の下方で新たな土坑（SK-11）検出。

- 01.20(土) 記者発表。地元対象の説明会を兼ねる。測量等現場作業に、田上浩（高知県教委）・山崎正明・武吉眞裕・藤方正治・山本哲也・出原恵三・池澤俊幸（埋文センター）の各調査員参加。窯の調査・斜面の調査進む。
- 道路公団と協議の上、発掘調査期間の延長を決定。
- 01.21(日) 藤方・池澤・武吉・松田・竹村の各調査員調査に参加。斜面セクションや窯セクション、包含層の掘り下げなど効率的に進む。
- 01.22(月) 1月22日から1月26日にかけて現場作業休止。
- 01.29(月) 調査再開。作業は午前中のみ。窯のバンク除去掘り出し作業。窯の実態が徐々に姿を現し始める。ロストル構造を持つ窯であることが判明する。
- 01.30(火) TR-6・7斜面部の調査（包含層掘り下げ）、窯焼成部遺物取り上げ作業。
- 01.31(水) 窯の調査を進める。
- 02.01(木) Ⅶ区遺構面の調査及び窯の調査。TR-6・7周辺、焼成遺構の検出。
- 02.02(金) 雪後晴。午前中で現場作業は終了。
- 02.05(月) 灰原及び窯焼成部の調査。並行して、TR-6・7周辺斜面包含層の掘り下げ及び焼成遺構の調査。
- 02.06(火) 前日同様の作業内容、最後にⅦ区遺構面、Ⅶ-S区緩斜面全域の清掃を行う。
- 02.07(水) 航空測量
- 02.08(木) 窯(K-1)の調査。
- 02.09(金) 今回の現場始まって以来の突風が吹き

荒れ、寒さの厳しい一日であった。TR-10の掘り下げ作業と窯周辺灰原確認作業を行う。サブトレⅠ・Ⅱについては、ピットを2箇所検出・撮影の後掘り上げる。京都の百瀬さん・埼玉の浅野さん来高。土器を見ていただき、現場へも足を運んでいただく。貴重な助言多く頂く。

02.12(月) 現場で測量作業。窯周辺部のコンタ作成、セクションの確認、写真の撮影を行う。

02.13(火) 終日小雨が降る悪天候。TR-10の調査、あと少し。TR-6～7の調査、SK-13下層遺構の調査完了。炭化物を埋土に含むピットを1基確認したのみ。窯周辺の調査、灰原の掘り下げに入る。灰-I～Ⅱに至るまでほぼ調査のめどが立った。灰原に入っている土器は今のところ須恵器のみ。灰層は全部で4層確認することができた。下層から瓦が出土する可能性も考えられるが、現段階では供膳具を中心とする須恵器を焼いた窯の可能性が高い。

02.14(水) 終日晴の穏やかな気候。山崎正明調査員この日以降調査に参加する。TR-6～7地形測量・TR-10セクションポイント及びトレンチ位置図測量・Ⅶ区平坦面、調査区外地形測量・TR-6～7遺構埋土セクション及び土層図作成。窯(K-1)灰原Ⅲ拡がりの確認と灰原の調査に関しては一層ごとに平面プランを確認しつつ掘り下げていく。灰-I-1・2、灰-II-1・2までは完全に終了する。灰-Ⅲ-1層を除去した後、灰-Ⅲ-2層の全体的な拡がりを確認するところまで作業を進める。

02.15(木) 昨日に引き続き、窯灰原・Ⅶ-S-2区遺構面・TR-10の調査。3グループに分かれて遺構調査・測量作業を行う。窯灰原Ⅲ-2層の調査、拡がりの確認・灰層の掘り下げ・遺物出土状況の確認・Ⅳ-1層上面のレベルの確認・Ⅳ-1層出土遺物検出・Ⅳ-2層上面レベルの確認と段階を追って目まぐるしく調査を展開する。Ⅶ-S-2区遺構面については、ピット4を完掘、南壁際サブトレの深掘りを行い、南壁セクションの最終確認と土層観察を行う。TR-10についてはほぼ完掘。セクション図作成も終了。トレンチで斜面部に2段の平坦面が形成されていることを確認していたのだが、上段の平坦面は予想外に広い。平坦部の上面に遺構はなかったが、人為的に削り出された部分である。

02.16(金) TR-6・7周辺及びK-1焼成部・燃焼部・灰原の調査。



02.19(月) TR-6・7周辺及びK-1焼成部・燃焼部・灰原の調査。

02.20(火) TR-6・7周辺及びK-1焼成部・燃焼部・灰原の調査。

02.21(水) 駒沢大学倉田先生現場へ足を運んでくださる。窯の状況や周辺の遺構について貴重な御教示をいただく。

02.22(木) 窯の全貌が明らかになった。午後、最後の全体写真撮影の後窯のたち割り作業を開始する。地山をロストル構造に掘り込んだことが確認された。

02.23(金) 窯たち割り。構造が徐々に明らかになる。山本裕美子・松木富子測量に参加。

02.24(土) Ⅶ-S区窯の最終確認と測量をのぞいてほぼ調査終了。

02.25(日) 小雨の降る中、最後の測量作業を進めたのだが、午後になって雨足が強まり作業を断念する。

02.26(月) 測量と窯の最終確認、そして窯体のサンプル採取を進める。

02.27(火) 午前中、最後の窯体サンプルを剥ぎ取って山を下りるとほぼ同時に重機(パワーショベル・ブルドーザー)がⅦ区の斜面を削り取ってしまった。瞬く間の出来事であり、機械力のすさまじさに愕然とする。Ⅶ区の調査は完全に終了する。

第3章 VI区調査の成果(平成6年度調査)

第1節 基本層序

表土下20～30cmに遺物が集中しており、この面が生活面として利用されていたことが確認された。その下層は、土師器細片を含む土により人為的に埋め立てられたことがわかる堆積状況を示している。標高64.2～64.7m付近に形成されたVI区の平坦面は、上方の斜面側を若干削り出しているものの、平坦部の形成は斜面の埋め立てによる。VI区の埋め立てには東側上方に位置するVII区平坦部の岩盤を削り出した際に生じた排土を利用したと考えられる。

I層表土・灰褐色～黒褐色腐植土

II層にぶい黄褐色～褐色礫混粘土・遺物包含層

III層黄褐色～にぶい黄褐色礫混粘土・II層と比べると礫含有量が少なく、遺物も土師器細片を極少量含むのみである。III層は分層が可能であるが、分層できる層の間での堆積内容はほとんど同じであり、一時期に堆積した層だと考えられる。

VI区平坦部の奥行き、及び形状はFig.4に示したとおりで、幅6.4～8.7m、長さ40mほどであった。そのうち調査対象としたのは、長さ19m、斜面部も含め面積200m²程の範囲である。

第2節 遺構

今回の調査範囲では17基の遺構が検出された。掘立柱建物跡1棟(SB-1)、柵列1列(SA-1)を復元し、それ以外の遺構については遺構の規模により土坑状遺構をSK、ピット状遺構をPとし、検出された遺構にSK-1、P-1～P-9までの遺構番号を付し、その規模と位置についてFig.7及びTab.2に示した。遺構面は斜面側が若干低くなっているものの、ほぼ平坦面を形成している。

遺構からの出土遺物はFig.9-1の土師器杯(P-4)、2の土師器杯(SA-1・P-3)、3の土師器碗(SK-1)の3点について図示した。それ以外にSB-1・P-3及びP-8から土師器細片が出土しているが、細かい時期の特定はできない。1・2の杯の底部切り離し技法はヘラ切りであり、3は輪高台を持つ。1・2は10世紀中葉以前の10世紀に属する遺物である。3については詳細な時期の比定はできないものの11世紀後半～12世紀の時期幅で捉えられる。高知平野では輪高台の碗は12世紀には登場していると考えられており、輪高台土師器碗の初現は隣接する栄エ田遺跡のSK-12出土の一括資料の例に見られるように11世紀後半まで遡る。

SB-1 (Fig.10)

棟方向はE-6°-Nの東西棟で斜面の方向に規定された方向である。1間×1間で、柱間距離は梁間1.44m、桁行1.92m。出土遺物は、P-3から土師器細片が5点ほど出土している。遺構形成時期は特定できない。

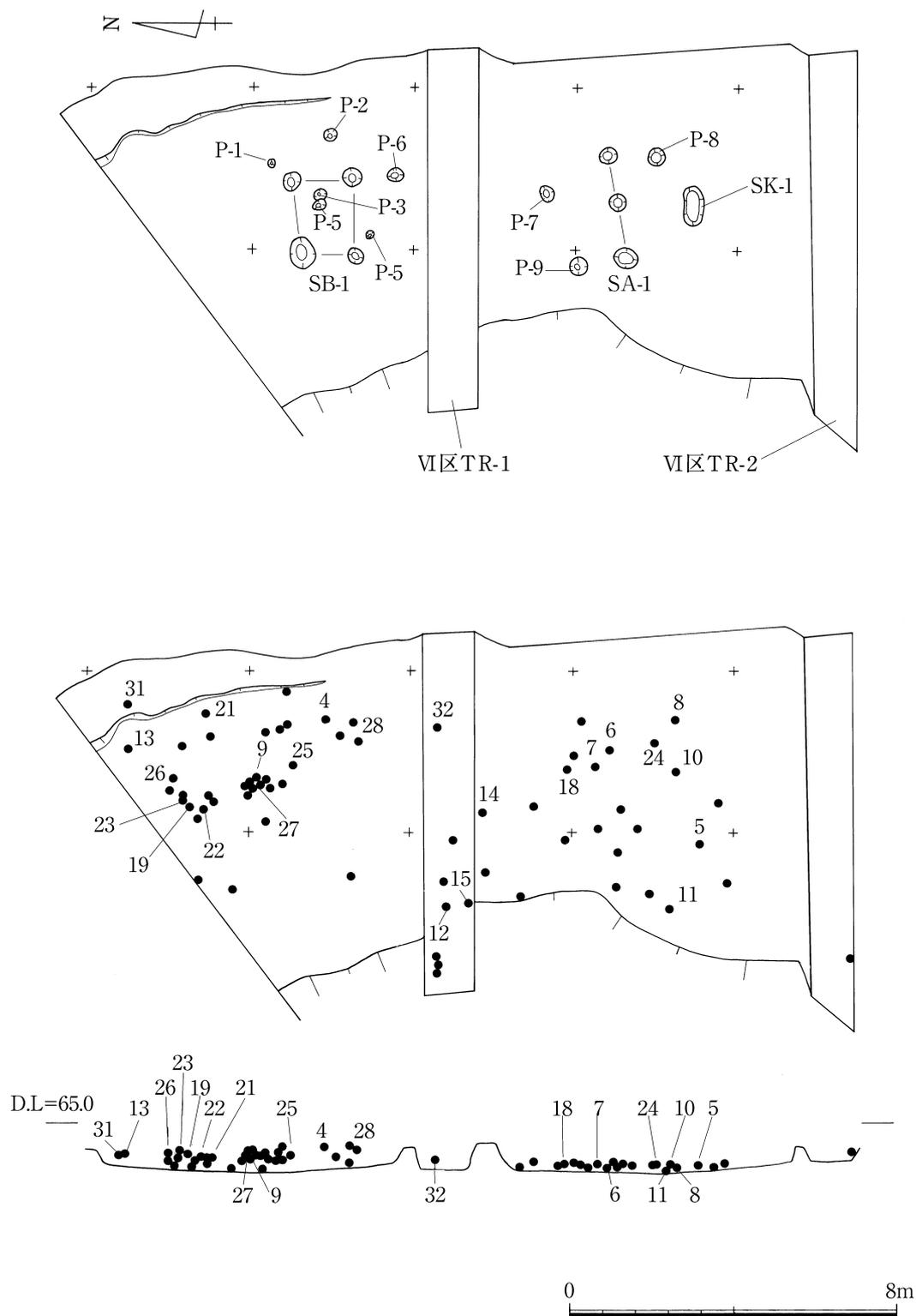


Fig.7 VI区 遺構全体図及び遺物出土状況図・エレベーション図

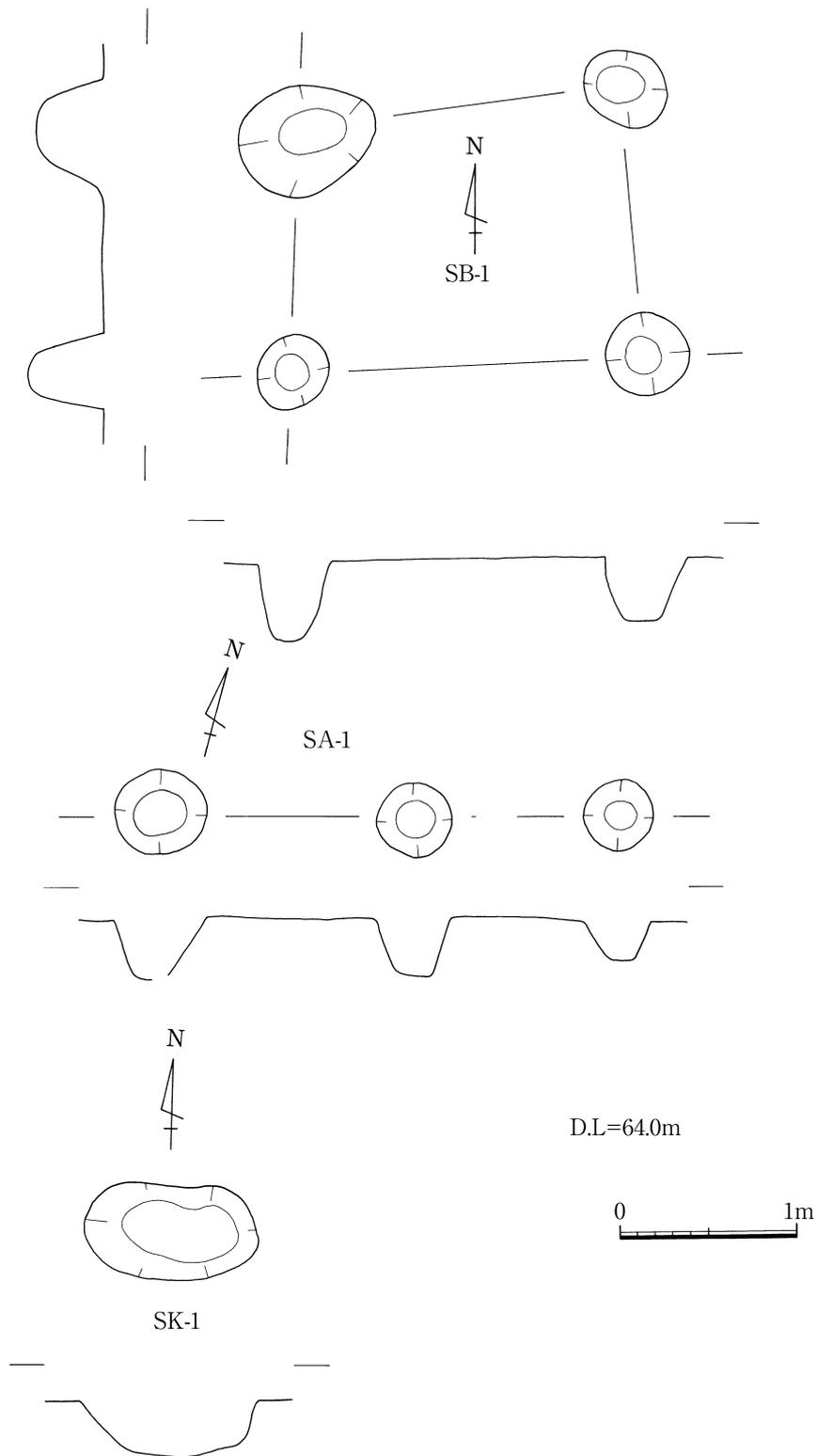


Fig.8 VI区 SB-1、SA-1、SK-1遺構平面・エレベーション図

SA-1 (Fig.10)

E-9°-Nの東西方向の柵列である。ピット間の距離は1.25～1.44m。P-3からFig.9-2の土師器杯底部が出土しており、10世紀中葉の遺構だと考えられる。

SK-1 (Fig.10)

長軸96cm、短軸46cmの楕円形の土坑である。深さは最深部で33cm。土坑の方向はほぼ東西方向であり、斜面に対して直交する方向に形成されている。出土遺物は3の土師器碗と10点ほどの土師器細片である。11世紀後半以降に形成された遺構である。

Tab.1 VI区遺構計測表

遺構名	長軸	短軸	深さ	出土遺物
P-1	16	14	11	
P-2	30	28	22	
P-3	30	26	17	
P-4	30	26	13	土師器細片6点
P-5	18	18	4	
P-6	36	28	7	
P-7	34	32	27	
P-8	42	40	25	土師器細片23点
P-9	42	42	31	
SB-1・P-1	82	62	34	
SB-1・P-2	46	38	15	
SB-1・P-3	44	42	31	土師器細片5点
SB-1・P-4	38	36	39	
SA-1・P-1	38	38	21	
SA-1・P-2	44	38	31	
SA-1・P-3	56	46	30	
SK-1	96	46	33	土師器細片10点

第3節 包含層出土遺物

Fig.9-3～28が図示可能な包含層出土遺物である。3～16が土師器供膳具、17・18は黒色土器・碗、19～21は土師器煮炊具(甕)、22が須恵器鉢、23が須恵器壺、24が布目瓦、25が砥石、26が緑釉陶器、27・28が青磁碗、29が白磁碗である。

包含層出土遺物の中で特筆すべき遺物は、Fig.38-299～302の篠窯産須恵器鉢とFig.9-28のK-90号窯式陰刻花文緑釉陶器である。須恵器篠鉢については底部の出土であるが、Ⅶ-S区包含層出土資料と同一個体であり、接合が認められたため、詳細についてはⅦ区で取り扱う。糸切り底であり、伊能編年H期に属するⅦ区包含層出土の299～301の口縁と同じ時期に属する底部である。

小片ではあるが緑釉陶器の段皿は、猿投窯の陰刻花文緑釉陶器の検出例は、高知県では初例であり、遺跡の性格を考える上で極めて重要な資料であるといえる。

包含層出土資料の中で所属時期がある程度特定可能な資料は、9世紀後半～10世紀中葉・11世紀後半～12世紀・12世紀後半～13世紀の3時期に分けられる。大半の資料が9世紀後半～10世紀中葉に属する。土師器供膳具において底部切り離し技法が確認可能なものは全てヘラ切りであり、煮炊具も口縁部のみ出土だが、長胴甕であり9世紀末～10世紀前半に比定される。11世紀後半～12世紀前半の遺物としては29の白磁Ⅳ類が、12世紀後半～13世紀の遺物としては24の東播系須恵器があげられる。

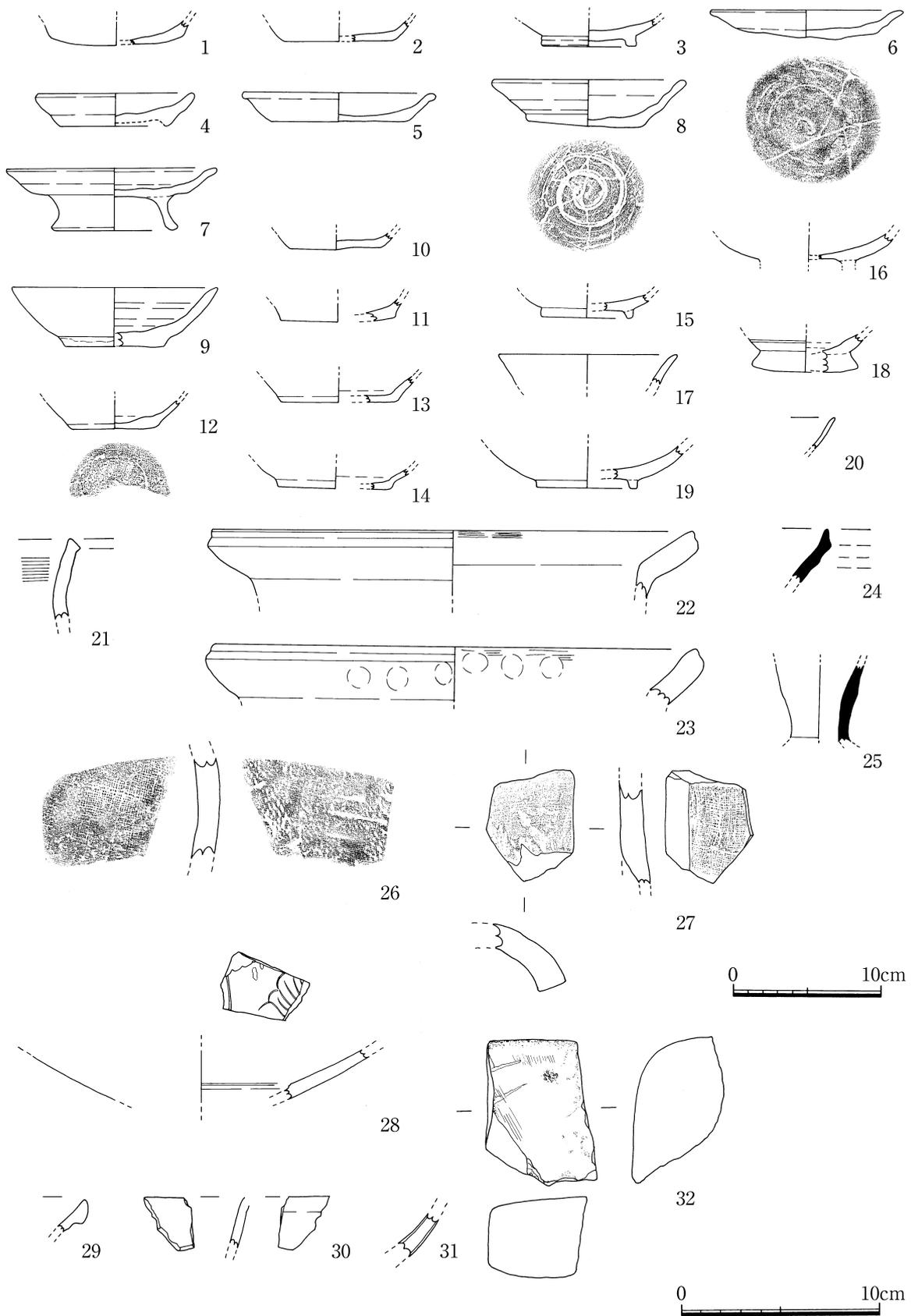


Fig.9 VI区 出土遺物実測図

Tab.2 VI区出土遺物観察表

Fig. No.	挿図番号	出土地点	種類	器種	法量 (cm)			色調	胎土	特徴	摩耗	備考	焼成	残存率
					口径	器高	底径							
9	1	VI区・P7	土師器	杯	-	-	9.0	7.5YR7/6 橙色	チャートの 細粒砂を含む。		著			底1/3
9	2	VI区SA1 ・P-3	土師器	杯	-	-	8.4	7.5YR6/6 橙色	チャートの 細粒砂を含む。		著		やや軟	底1/2
9	3	SK-1	土師器	椀	-	-	6.4	10YR8/4 浅黄橙色	チャートの 細粒砂を含む。		著	高台一部欠損。	やや軟	底完
9	4	VI区	土師器	小皿	10.4	2.2	7.0	10YR7/3 にぶい黄橙色	チャートの 細粒砂を含む。	内外回転ナデ痕。	やや	外底剥落。		1/2
9	5	VI区	土師器	小皿	12.8	2.0	9.4	10YR8/4 にぶい黄橙色	チャートの 細粒砂を含む。				やや軟	3/4
9	6	VI区	土師器	小皿	12.8	1.9	9.0	10YR8/4 浅黄橙色	チャートの 細粒砂を含む。		著		やや軟	口1/2 底完
9	7	VI区	土師器	台付皿	14.1	4.2	8.6	10YR8/4 浅黄橙色	チャートの 細粒砂を含む。	外底圧痕。	著			口1/8 底完
9	8	VI区	土師器	小皿	13.2	3.2	8.2	10YR7/3 にぶい黄橙色	チャートの 細粒砂を含む。	内外面回転ナデ痕。	やや			口2/3 底完
9	9	VI区	土師器	杯	13.8	4.0	6.6	10YR8/6 黄橙色	チャートの 細粒砂を含む。	底部外面に粘土塊が 付着。	著		やや軟	底1/2
9	10	VI区	土師器	杯	-	-	6.2	10YR7/6 明黄褐色	チャートの 細粒砂を含む。		著		やや軟	底1/3
9	11	VI区	土師器	杯	-	-	7.6	10YR8/4 浅黄橙色	チャートの 細粒砂を含む。	内底同心円状の条線、 外底に圧痕。立上り部 に粘土はみだし痕。	著	内底部 ミガキか。		底1/3
9	12	VI区	土師器	杯	-	-	6.0	10YR7/4 にぶい黄橙色	チャートの 細粒砂を含む。	外底に圧痕、立上り部 粘土はみだし痕。	著			底1/3
9	13	VI区	土師器	杯	-	-	8.0	7.5YR7/6 橙色	チャートの 細粒砂を含む。	内底落ち込む。	著	器壁薄い。	並	底1/4
9	14	VI区	土師器	椀	-	-	7.4	5YR7/6 橙色	チャートの 細粒砂を含む。	内底落ち込む。	著		やや硬	底1/6
9	15	VI区	土師器	椀	-	-	6.0	10YR8/2 灰白色	チャートの 細粒砂を含む。		著		軟	底1/6
9	16	VI区	土師器	椀	-	-	6.4	2.5Y7/4 浅黄色	チャートの 細粒砂を含む。		著			底小片
9	17	VI区	土師器	杯ある いは椀	-	-	-	10YR7/4 にぶい黄橙色	チャートの 細粒砂を含む。	内外面回転ナデ痕。				口1/10
9	18	VI区	土師器	杯ある いは椀	-	-	6.8	10YR7/3 にぶい黄橙色	チャートの 細粒砂を含む。	外底圧痕、切離し痕不明。 高台外面回転ナデ痕。 接合部に粘土はみだし痕。	内面 著			底1/2
9	19	VI区	黒色土器	椀	-	-	6.8	内5YR2/1黒色 外10YR7/4 にぶい黄橙色	チャートの 細粒砂を含む。	内面ミガキ。	外面 著		やや軟	底1/6 口小片
9	20	VI区	黒色土器	椀	-	-	-	2.5Y1/3 黒褐色	精選。石英、雲母 の微細砂を含む。	内外面ミガキ。	著	搬入品。		口小片
9	21	VI区	土師器	甕	-	-	-	10YR8/4 浅黄橙色	チャートの角粒、 赤色チャートの 風化礫を多く含む。	口縁内面と 外面粗い横ハケ。	著		やや軟	口小片
9	22	VI区	土師器	甕	32.6	-	-	5YR6/6 橙色	素地粗く、チャー ト角粒、風化礫を 多量に含む。長 石、石英の微細 砂を少量含む。	口縁部内面刷毛による 強い横ナデ。	著		硬	1/12
9	23	VI区	土師器	甕	32.6	-	-	5YR6/6 橙色	素地粗く、チャー ト角粒、風化礫を 多量に含む。長 石、石英の微細 砂を少量含む。	口縁部内面刷毛による 強い横ナデ。	著		硬	口1/10
9	24	VI区	須恵器	鉢	-	-	-	N2/黒色	チャートの粗粒砂を含む。	回転ナデ痕。		東播系。	硬	口小片
9	25	VI区	須恵器	長頸壺	-	-	-	10YR4/1 灰色	チャートの 細粒砂を含む。	内外面回転ナデ痕。 接合痕が観察される。			硬	頸部 のみ
9	28	VI区	緑釉陶器	段皿	-	-	-	素地5Y7/1灰白色	精選			釉層は薄い。	やや軟	小片
9	29	VI区	白磁	椀	-	-	-	7.5Y7/1 灰白色	精選	玉縁状口縁。		IV類	硬	口小片
9	30	VI区	青磁		-	-	-	2.5GY6/1 オリープ灰	精選	外面貫入が入る。			硬	口縁部 細片
9	31	VI区	青磁	椀	-	-	-	7.5Y6/2 灰オリープ色	精選	外面細かい貫入がはいる。			硬	体部 小片

第4章 VII区調査の成果(平成7年度調査)

第1節 基本層序

遺構面形成に際して部分的に埋め立てられた地点もあるが、多くの遺構は削り出された岩盤上に形成される。斜面の堆積状況は、堆積時期によって様々であり、侵食堆積を繰り返された地点もあれば、斜面が安定する傾斜になるまで一時期に堆積した地点もある。

地点により異なる堆積状況の中で、斜面部に形成される窯とその周辺の堆積層序を鍵層を中心に記述する。

I層 表土層。腐植土・植物を多く含み、褐色・灰褐色・暗灰褐色に発色する。層厚は薄く、5～10cm前後である。

II層 表土下の小礫を含む黄褐色あるいは褐色の粘土層である。遺物をほとんど含まない。礫粒径や礫集中の様相も地点によって大きく異なる。2～4層に分層できる地点もあるが、同じII層の範疇で捉えられる。地表化していない。

III層 褐色～暗褐色に発色する小礫混じりの粘土層。地点によっては黒褐色に近い黒っぽい土色を呈する。遺物包含層であり、特にVII-Sとして設定した窯遺構上層、TR-6～7周辺に遺物が集中していた。包含する遺物の時期は9世紀後半～10世紀が大半で、少量ではあるが11～13世紀にかけての遺物も検出されている。

IV層 礫混じり黄褐色粘土。礫含有量が多く、遺物も若干含む。

V層 褐色～にぶい黄褐色粘土。小礫を含む。

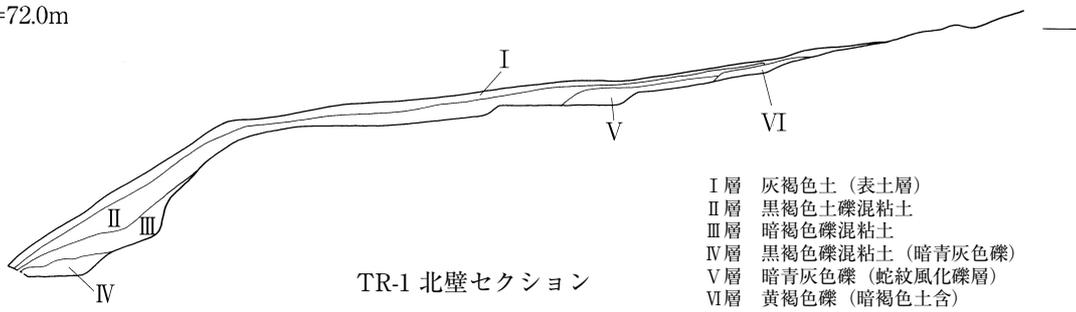
上方あるいは同レベルに生活面がなく、堆積作用の弱い尾根上の地点は、TR-3に認められるように、浅黄色の岩盤の上に黄褐色粘土が堆積しているのみである。

なおTR-6・7南壁セクションに認められるIV～VI層は、平坦面を形成するために人為的な意図を持って埋め立てられた層で、IV-1層のみが上面で地表化している。(第1遺構面)さらに、XI層・XII層上面も地表化しており(第2遺構面)、これら2つの遺構面上面からは焼成により赤変したラインと炭化物集中部を持つ焼成遺構が検出されている。



VII区 遺構面

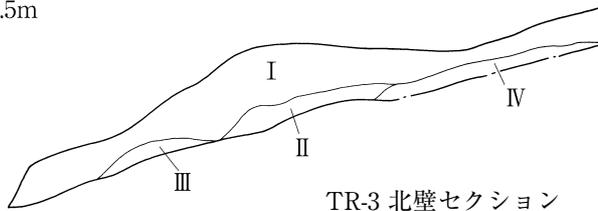
D.L.=72.0m



- I層 灰褐色土 (表土層)
- II層 黒褐色土礫混粘土
- III層 暗褐色礫混粘土
- IV層 黒褐色礫混粘土 (暗青灰色礫)
- V層 暗青灰色礫 (蛇紋風化礫層)
- VI層 黄褐色礫 (暗褐色土含)

TR-1 北壁セクション

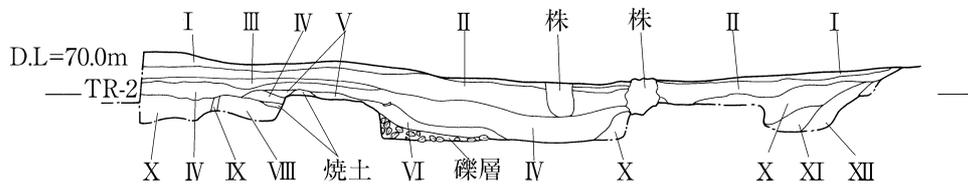
D.L.=73.5m



- I層 におい黄褐色礫混粘土
- II層 におい黄褐色～褐色礫混粘土
- III層 におい黄褐色礫混粘土 (浅黄色礫多し)
- IV層 地山・岩盤・浅黄色岩

TR-3 北壁セクション

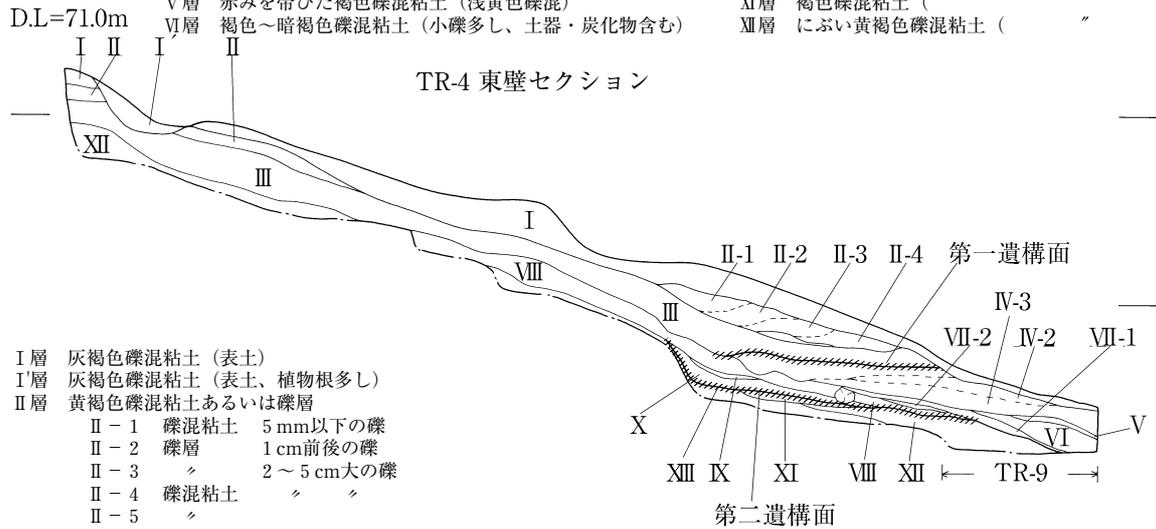
D.L.=70.0m



- I層 褐色粘礫土 (表土層)
- II層 黄褐色～褐色礫混粘土
- III層 におい黄褐色礫混粘土 (浅黄色礫非常に多し、土器含む)
- IV層 におい黄褐色～暗褐色礫混粘土 (浅黄色礫多し)
- V層 赤みを帯びた褐色礫混粘土 (浅黄色礫混)
- VI層 褐色～暗褐色礫混粘土 (小礫多し、土器・炭化物含む)
- VII層 明赤褐色粘土 (礫やや多し)
- VIII層 におい黄褐色礫混粘土 (浅黄色礫・焼土混、土器含む)
- IX層 赤褐色粘土 (礫少量混)
- X層 明赤褐色礫混粘土 (蛇紋岩小礫非常に多し、粘性強し)
- XI層 褐色礫混粘土 (" ")
- XII層 におい黄褐色礫混粘土 (" ")

TR-4 東壁セクション

D.L.=71.0m



- I層 灰褐色礫混粘土 (表土)
- I'層 灰褐色礫混粘土 (表土、植物根多し)
- II層 黄褐色礫混粘土あるいは礫層
 - II-1 礫混粘土 5mm以下の礫
 - II-2 礫層 1cm前後の礫
 - II-3 " 2～5cm大の礫
 - II-4 礫混粘土 " "
 - II-5 " " "
- III層 褐色礫混粘土 (浅黄色礫多し、炭化物・土器多く含む)
- IV層 におい黄褐色礫混粘土
 - IV-1
 - IV-2 含有礫の差
 - IV-3 (同時期に堆積)
- V層 黄褐色礫混粘土 (5mm前後の小礫多量)
- VI層 暗青灰褐色蛇文岩風化土
- VII層 VII-1 黄褐色礫混粘土 (小礫を含む)
- VII-2 " (若干小礫を含む)
- VIII層 黄褐色礫混粘土 (5mm前後の小礫多し)

- IX層 暗黄褐色礫混粘土
- X層 におい黄褐色礫混粘土 (5mm前後の礫非常に多し)
- XI層 褐色礫混粘土
- XII層 明黄褐色粘土 (若干小礫含む)
- XIII層 褐色粘土 (浅黄色小礫若干含む)



TR-6・7 南壁セクション

Fig.10 VII区 セクション図(1)

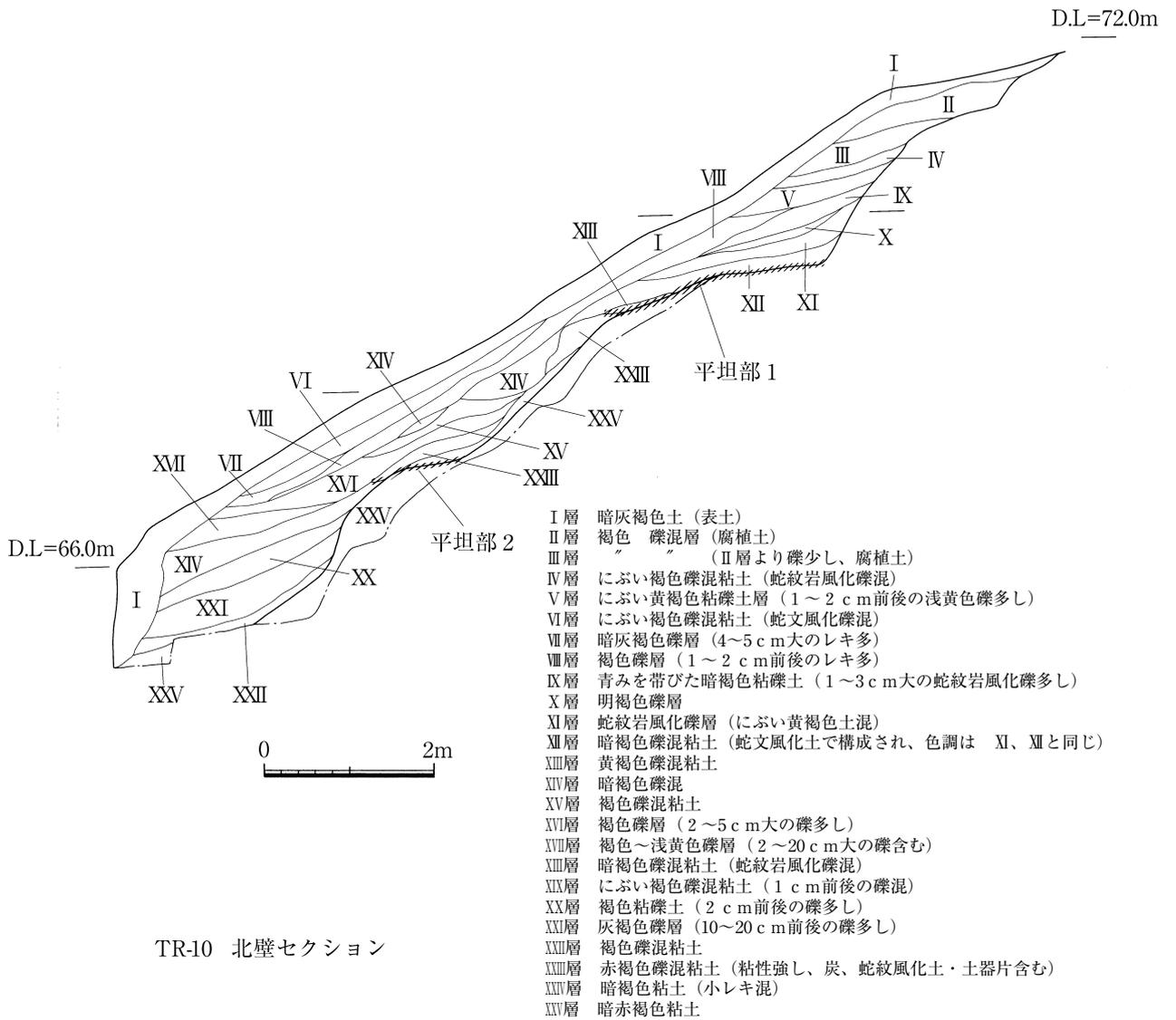


Fig.11 VII区 セクション図(2)

第2節 遺構と遺物

遺構No.については、調査時に平坦部と斜面部にわけ、それぞれ平坦部はSK-1から、斜面部はSK-10以降の番号を使用した。そのためSK-5～9は欠番となったが、今回報告時にも変更することなく使用した。ピットについては計測表作成のため全て遺構番号を変更した。

1. VII区 平坦部

(1) 山岳寺院関連遺構(Fig12)

9世紀末から12世紀にかけて機能していたとみられる寺院関連遺構を確認した。標高60～80mの山腹を削り出し、幅10～20m・奥行き70～80mの平坦地がつくりだされている。その面で遺構・遺物を検出した。

①掘立柱建物

SB-1(Fig13) 平坦部の中央部にある南北棟で建物群の中では北端に位置する。棟方向はN-14°-Wを測る。規模は2間×2間で梁間は2.4～2.7mで、桁行は3.6～4.3mである。柱間寸法は1.1～2.2mでばらつきがある。柱痕は確認できなかったが、P-1、P-3、P-4、P-5、P-7は柱の固定に用いたとみられる礫が残る。埋土は暗褐色～黒褐色粘質土(小礫混)単純一層である。P-4より土師器の細片が7点、P-5より土師器底部が2点と細片2点、布目瓦1点、P-7より土師器細片1点がそれぞれ出土しているが図示できるものはない。

SB-2(Fig13) SB1の南に位置する東西棟でN-68°-Eを測る。規模は2間×1間で梁間は1.66～1.76mで、桁行は2.66mである。柱間距離は1.18～1.48mでばらつきがある。埋土は暗褐色～黒褐色粘質土単純一層である。遺物は出土していない。

SB-3(Fig14) SB2と切り合い関係にあるが前後関係は不明である。棟方向はN-36°-Wの南北棟で、規模は2間×2間とみられるが梁間の北側では中間のピットは確認できなかった。梁間は2.9m桁行は3.1mで、柱間距離は1.3～1.8mである。埋土は暗褐色～黒褐色粘質土(小礫混)単純一層である。P-4より土師器細片2点が出土しているが図示できるものはない。

SB-4(Fig14) 建物群の南端に位置し、西側が削られており2間×1間が確認された。棟方向はN-30°-Eを測る。梁間は2.6m、桁行は1.4mで、梁間の柱間距離は1.2mと1.4mである。埋土は暗褐色～黒褐色粘質土(小礫混)単純一層である。P-2より底部糸切りの土師器片が1点出土しているが図示できるものはない。

②柵列

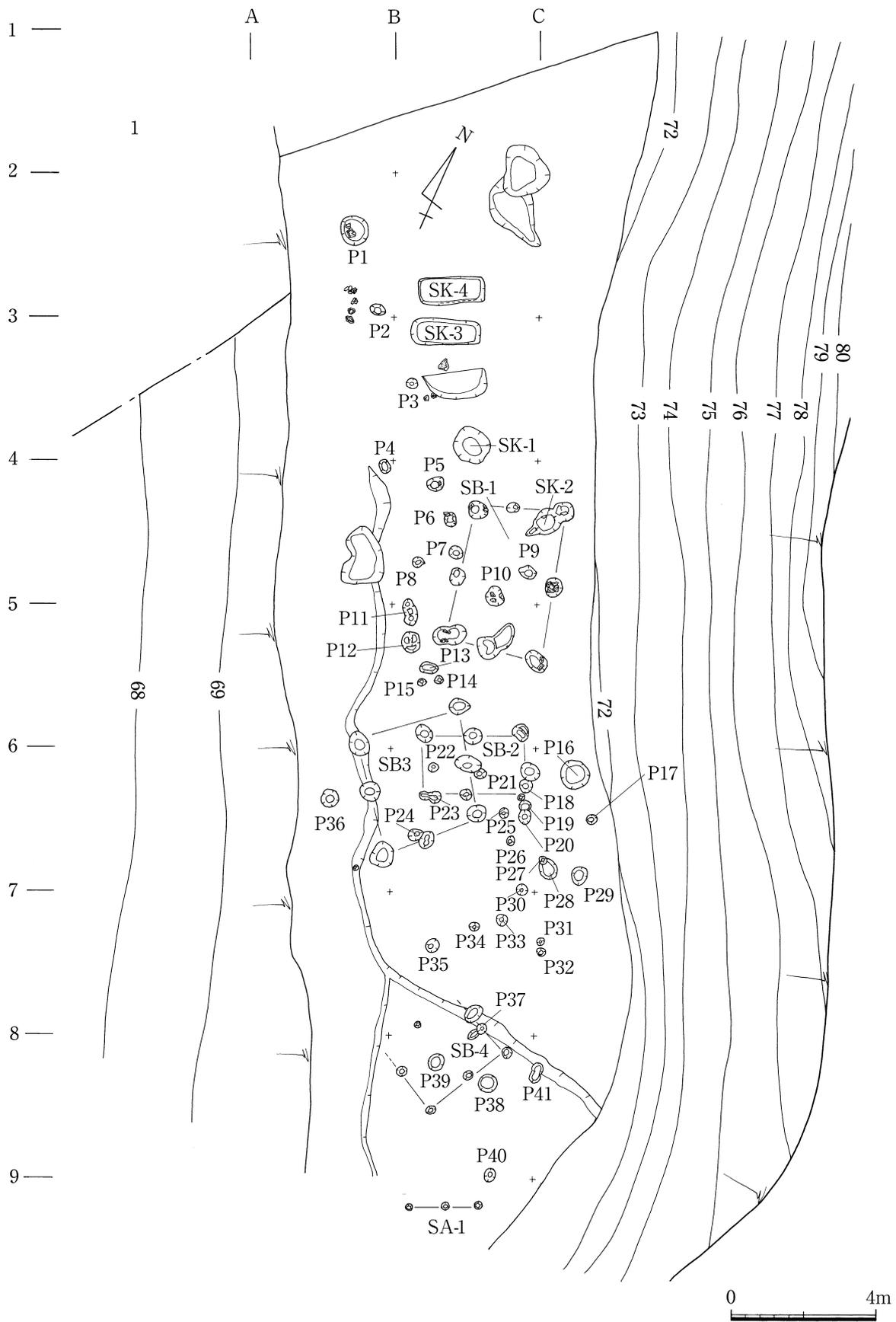


Fig.12 VII区 山岳寺院関連遺構

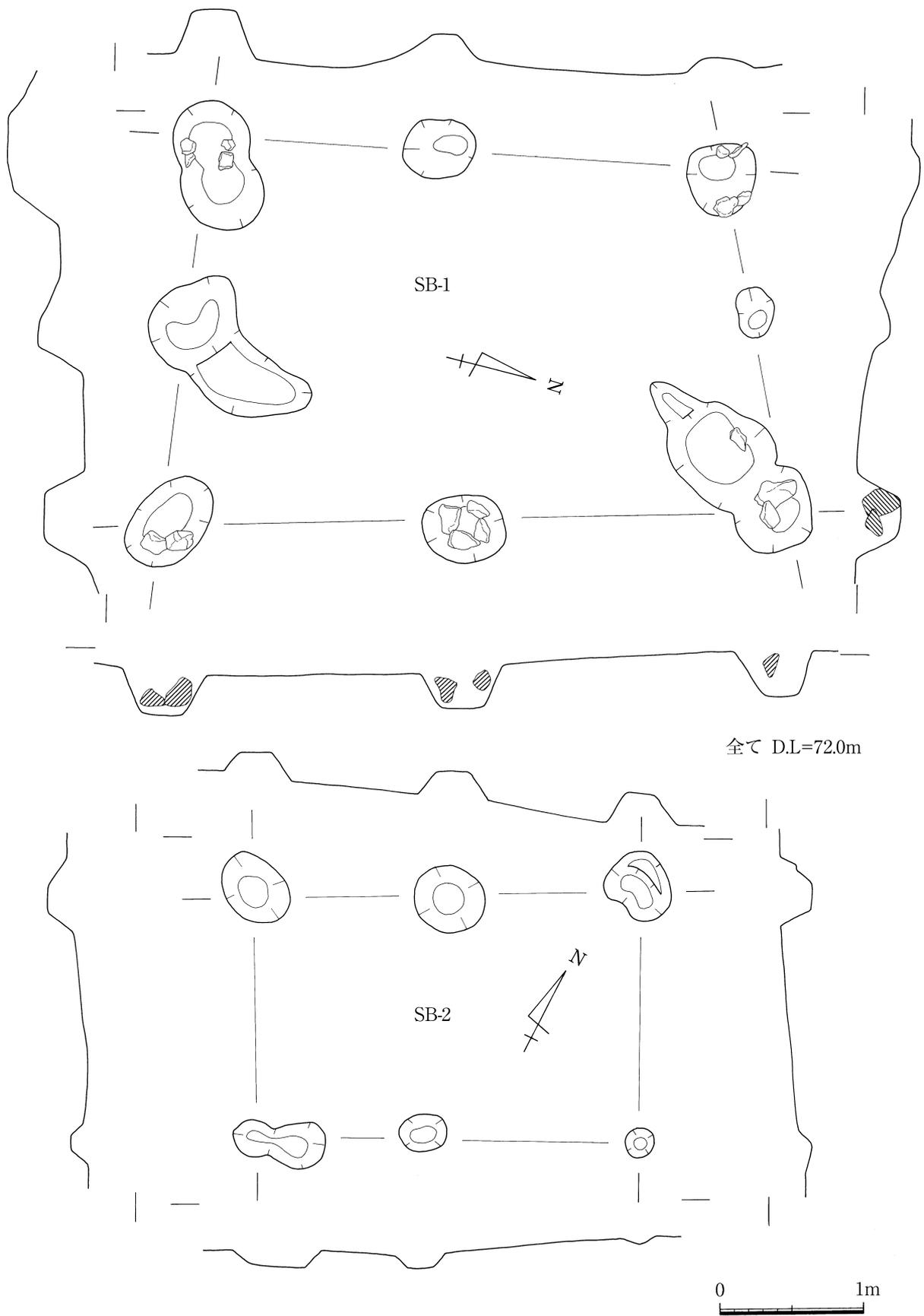


Fig.13 Ⅶ区 SB-1、SB-2遺構平面・エレベーション図

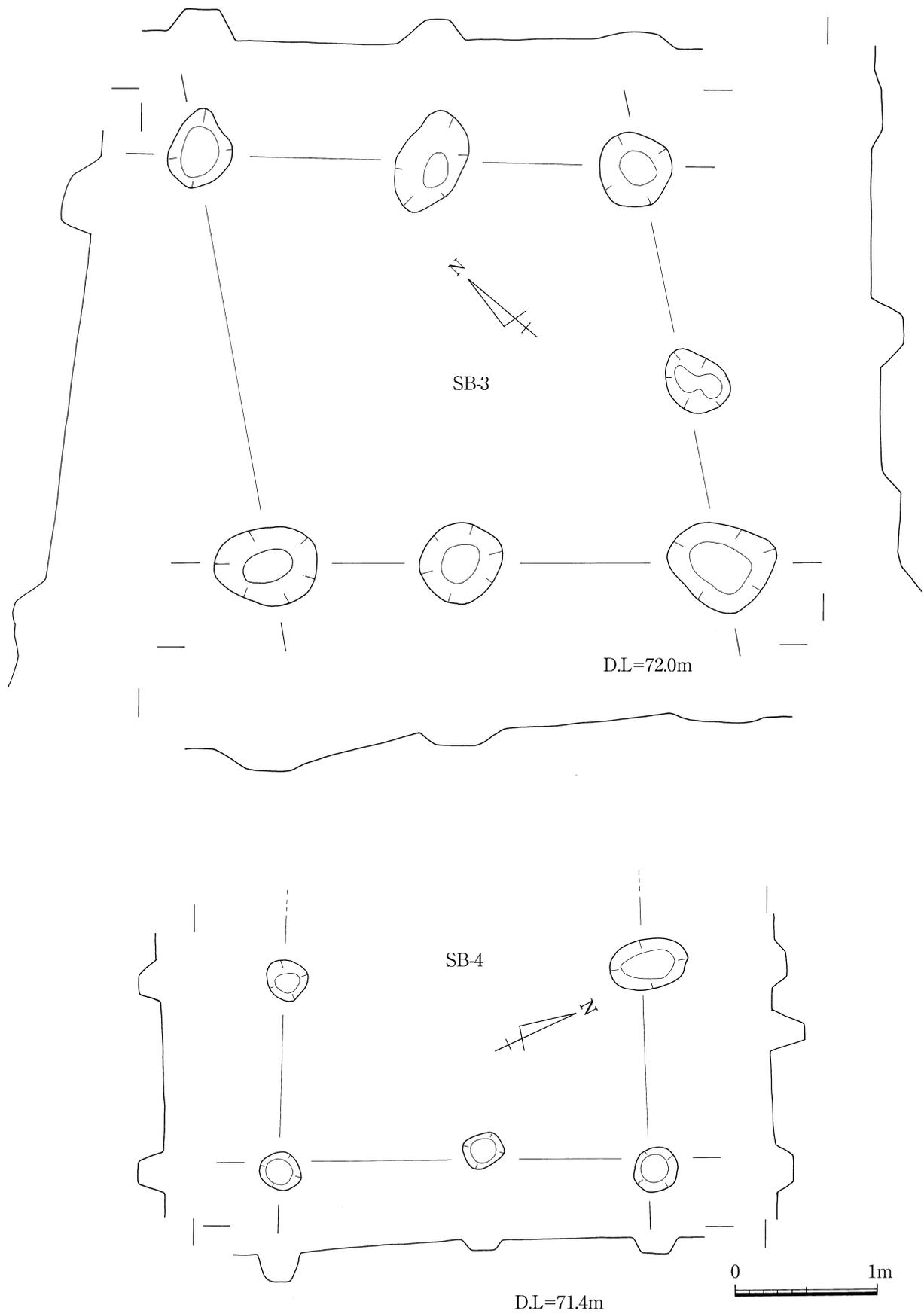


Fig.14 VII区 SB-3、SB-4遺構平面・エレベーション図

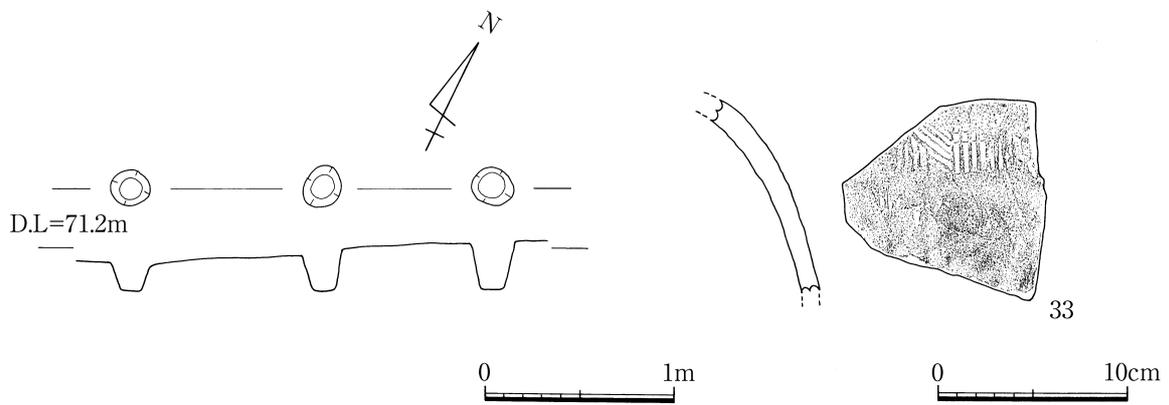


Fig.15 VII区 SA-1遺構平面・エレベーション・出土遺物実測図

SA-1 (Fig15) 平坦部の南端に位置する。埋土は暗褐色～黒褐色粘質土単純一層である。P-3より常滑か渥美と見られる胴部細片が出土している (33)。

③土壙

SK-1 (Fig17) SB-1の北隣に位置する。平面形は長軸97.5cm短軸79.5cmの楕円形で須恵器の大甕 (40) が土壙に据えつけた形で検出された。その場で押し潰されたように底部片の上に胴部片が重なりあって出土している。口縁部は破片が2点確認されたのみである。本県野市町の下ノ坪遺跡でも同

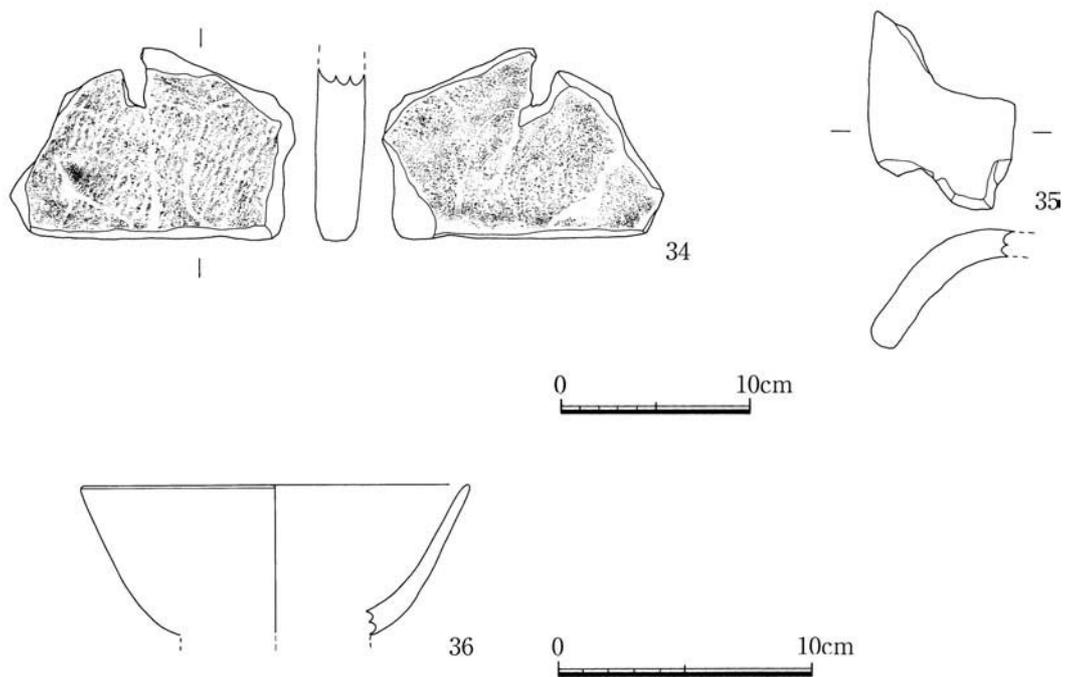


Fig.16 VII区 P-5、P-41出土遺物実測図

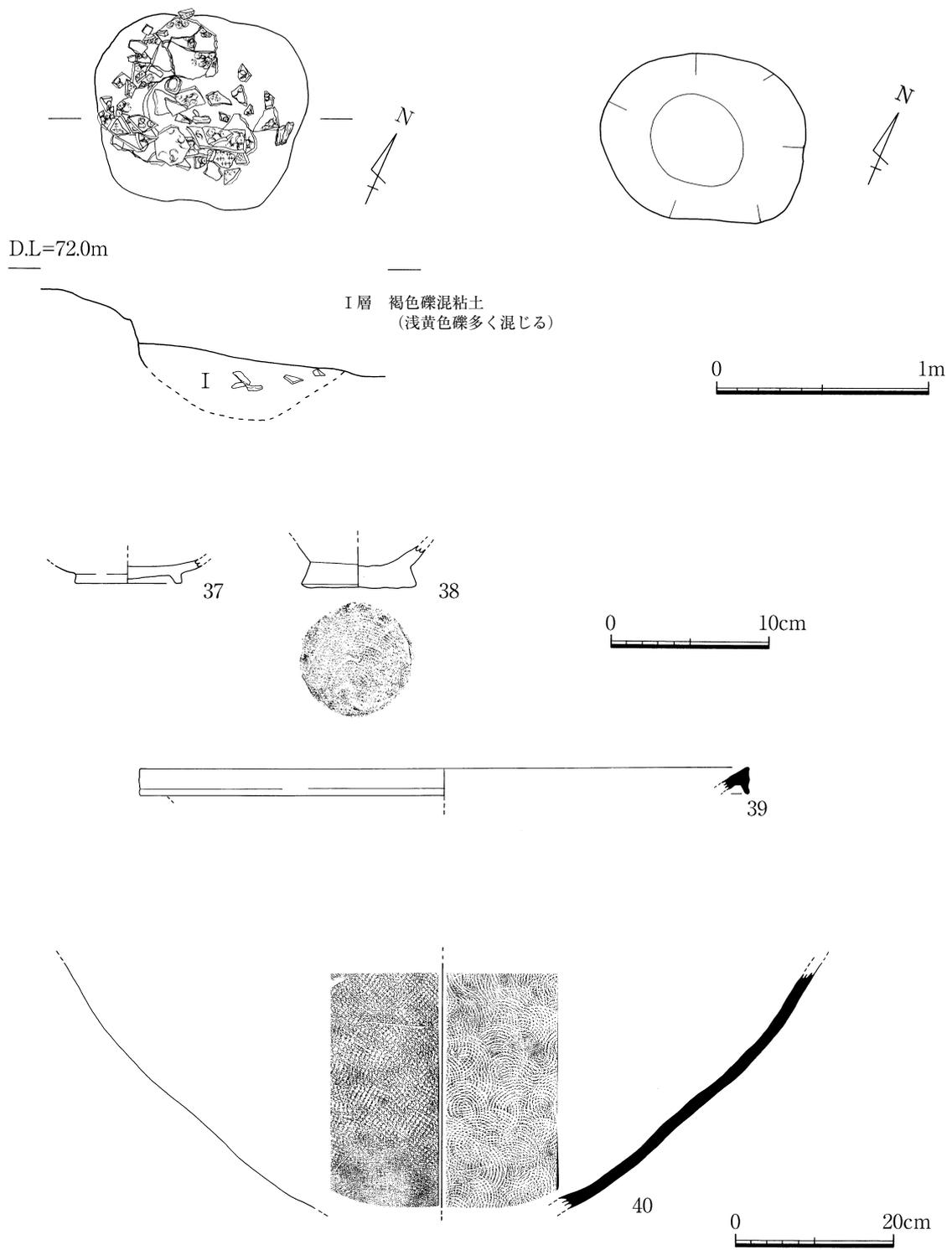


Fig.17 VII区 SK-1遺物出土状況平面・セクション・遺構平面図及び出土遺物実測図

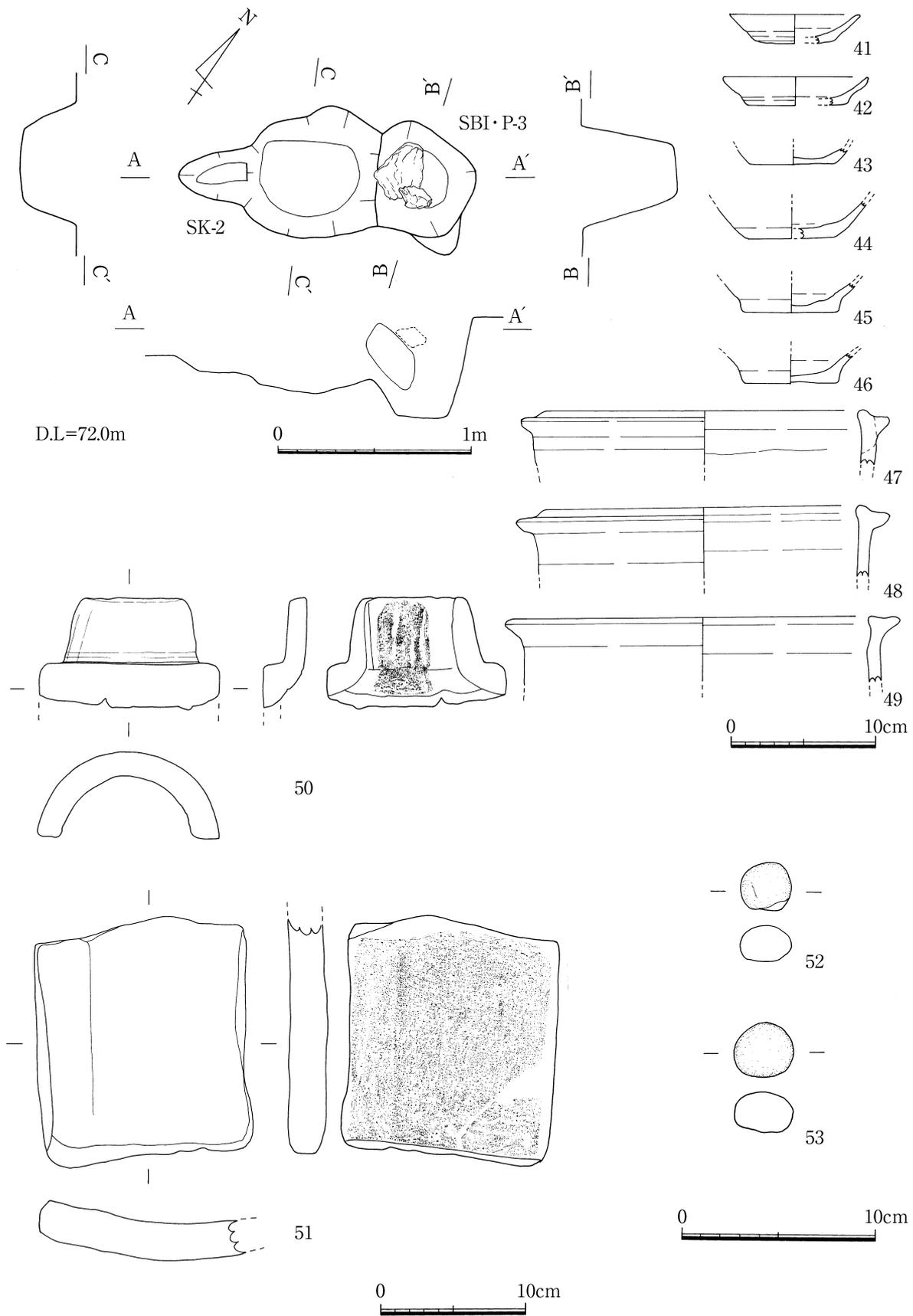


Fig.18 VII区 SK-2遺構平面・エレベーション図及び出土遺物実測図

様の状態で確認されている。他に図示可能な遺物は土師器の杯(38)と椀(37)である。この他土師器口縁部片1点、底部片21点、細片16点及び釘状の鉄製品と塊状の鉄が1点ずつ出土している。埋土は褐色粘質土層単純一層で、地山礫である浅黄色の礫を多く含む。

SK-2(Fig18) SB-1・P-3と切合い関係にあるが、検出時に埋土の違いは観察できず時期差はないものとみられる。土師器皿(41・42)、杯(44)、杯か椀か不明なもの(43・45・46)、羽釜(47~49)、布目瓦(50・51)、用途不明の円礫(52・53)等が全て中層以上より出土している。他に土師器供膳具底部片10点、土師器甕小片24点及び鉄製品が4点出土している。図示はしないが断面が四角形で釘状を呈するものが2点、同じく断面四角形の釘状で頭が直角に曲がるもの、そして1cm×4cm×0.5mmの板状を呈するものである。埋土は暗褐色～黒褐色粘質土単純一層である。

④ピット(Fig16)

P-5 長径34cm深さ20cmを測る楕円形のピットである。図示できる遺物は布目瓦(34・35)である。他に土師器底部1点、細片1点、須恵器細片1点が出土している。

P-41 長軸43cm短軸35cm深さ17.5cmを測る楕円形のピットである。龍泉窯系青磁碗(36)が出土している。

Tab.3 VII区平坦部ピット計測表

遺構名	長軸	短軸	深さ	出土遺物	P-21	38	28	11.5	
P-1	114	104	31	土師器底部及び細片	P-22	28	26	17.1	
P-2	42	38	33	土師器口縁部、底部及び細片	P-23	36	32	11.3	
P-3	30	28	14		P-24	40	32	20.2	
P-4	40	28	22.3	土師器細片	P-25	28	28	7.7	
P-5	34	26	20	平瓦(34)・丸瓦(35)	P-26	30	26	28.7	
P-6	34	42	14.7		P-27	22	21	17.7	
P-7	38	40	12.2		P-28	68	48	6.9	
P-8	34	30	14.8		P-29	50	44	6.4	
P-9	46	36	11.5		P-30	30	28	10.7	
P-10	56	46	36.7		P-31	22	20	11.4	
P-11	78	32	10.2		P-32	26	24	20.4	土師器底部及び細片
P-12	48	62	6.3		P-33	32	28	6.7	
P-13	52	30	11.8		P-34	26	26	10.3	
P-14	24	22	5.9		P-35	40	38	11.2	
P-15	24	22	15.2		P-36	54	48	13.1	
P-16	80	76	12.4		P-37	30	28	22.7	土師器細片
P-17	30	26	16.7		P-38	54	50	18.7	
P-18	38	36	6.5		P-39	52	42	17.3	土師器底部
P-19	32	28	6.6		P-40	40	30	40.4	
P-20	40	36	10		P-41	43	35	17.5	龍泉窯青磁(36)

(2) 近代の土壙墓(Fig19)

建物跡の北東より2基の土壙が検出された。人骨がまとまって出土しており土壙墓であると考えられる。地元の方の聞き取りからも明治22年以降のものであることが判明している。

SK-3 長軸1.83m短軸0.78m深さ1.7mを測り、頭位方向は東である。

SK-4 長軸1.86m短軸0.81m深さ1.35mを測り、頭位方向は西でSK-3と全く逆方向である。長軸方向の東側に0.8m程のテラス部を持つ。

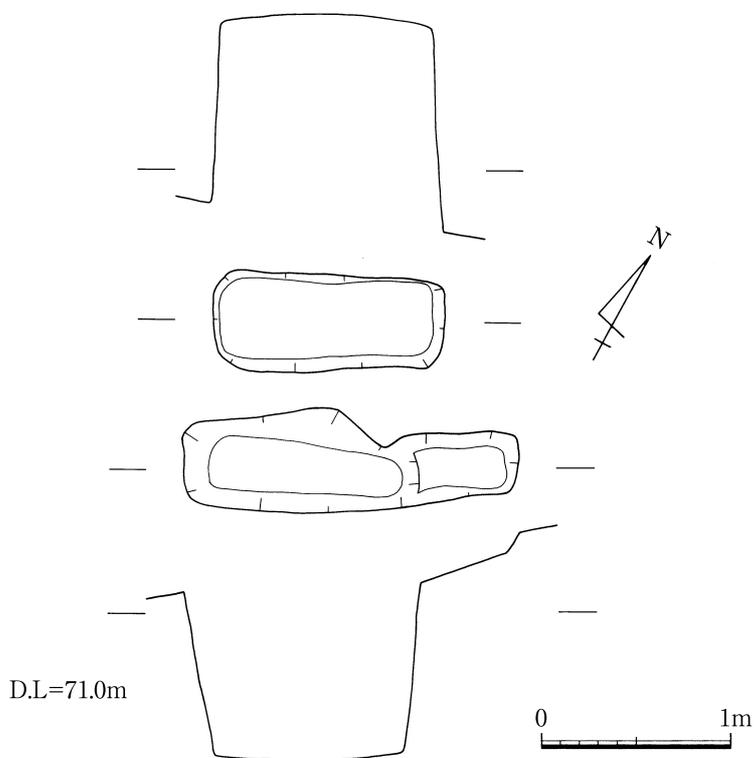


Fig.19 VII区 SK-3、SK-4遺構平面・エレベーション図

2. VII区 下斜面

(1) 通路状遺構 (Fig20・21)

山岳寺院関連遺構面の下方で、通路状遺構が確認された。斜面を削り出した70~72mの標高で最大巾2.4mの平坦面が長さ15mにわたって検出された。南から北に向かい緩やかな昇りとなっている。製塩土器(54)が検出面上から出土している。

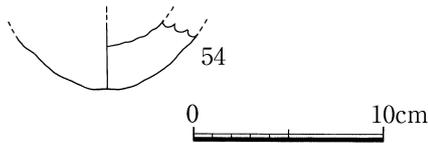


Fig.20 通路状遺構出土製塩土器実測図

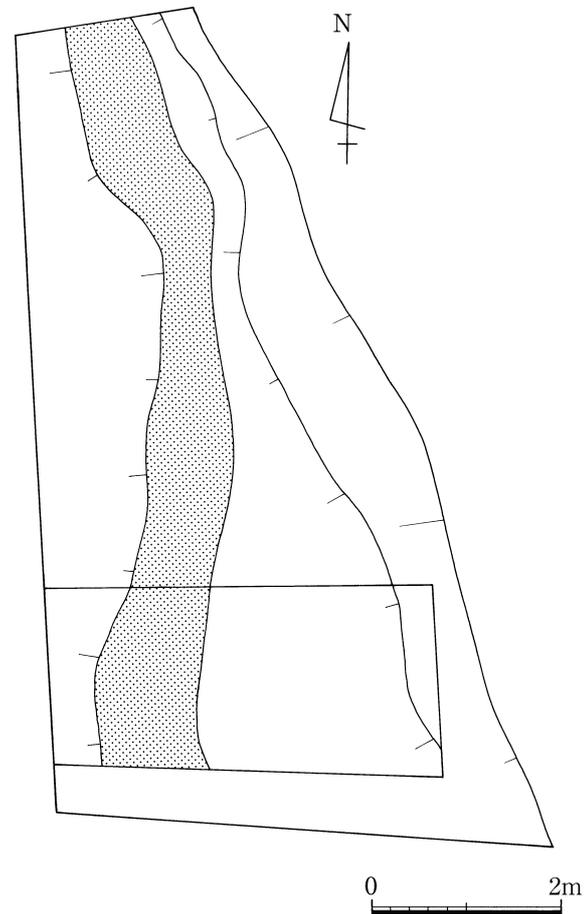


Fig.21 通路状遺構平面図

3. VII区 南西緩斜面(VII-S区)

(1) 窯(K-1) (Fig22~24)

山岳寺院遺構面の南側斜面において、10世紀中葉~後半にかけて機能していたロストル構造を持つ半地下式の須恵器窯を確認した。焼成部の天井は残存しておらず検出時には明赤褐色粘土(焼土)に覆われ、暗赤褐色の窯壁がベルト状に露出した状態であった。ドーム状の上部構造を持っていたと推察される。検出時に上を覆っていた粘土中には被熱していない割り石が規則的に並んでおり、これら割り石は側壁を支えるために塗り込められていたものであったとみられる。地下部分は地山をくりぬいて作出されており、ほぼ完全な形で残存していた。

窯体部全長1.66m、南西側最大幅1.8m、北東側幅0.97mの一方が膨らんだ長方形を呈し、煙道部から焚口前の土手状の高まりまで含めると3.22mを測る。焼成部は2本の牀を持ち両側壁に牀と同じ高さの段部が作出されており3本の火道を持つ。焼成部口には牀から続く2本の分焰柱を持つ。床面傾斜は燃焼部からほぼ垂直に立上り、焼成部下半より37°、22°、24°と3段階の角度を計る。奥壁は

垂直に立ち上がり、煙道部とみられる浅い窪みへ続く。これらの構造は地山粘土を掘り残すことによって造り出されている。焼成部床面及び牀表面、燃烧部奥壁は還元されたことを示す色調に発色し、堅く焼き締まっており、断面を観察すると内部は赤褐色を呈する。又分焰柱前面、燃烧部床面も赤褐色を示す色調に発色しており、燃烧部入口を境として色調に差が生じている。このことは、焼成部入り口において閉塞が行われた可能性を示唆している。焚口は台形状に開口し焚口床面には北に3個(北より25×18×24.3cm、25×17×33.5cm、30×20×33cm)南に1個(16×11×14.9cm)それぞれチャートの割り石を配する(Fig24)。これらの礫は全く被熱しておらず、接する焚口壁面は赤変していることより操業時には粘土中に塗り込められていたものであろう。焚口壁面は入口部分より若干広がり、燃烧部へと続く。焚口前面には土手状の高まりが築かれており、これは窯体造営時に粘土を堅く叩き締めて構築されている事がセクションにより確認された。この内側には灰層と焼土層が重なり合って堆積している。窯閉塞時に利用、又は焼成時に生じた残滓の掻き出し時に利用、等の用途が想定される。土手状の高まりの外側南西に4m四方の灰層の広がりが確認された(Fig29・30)。灰層の上面を遺物を含んだ礫層が覆っており、その下層は炭化物と赤褐色土との互層でありそれぞれ4層の灰層に分層された。しかし出土遺物から、灰層間の明確な時期差を指摘することはできない。



ロストル構造を持つ須恵器窯(K-1)

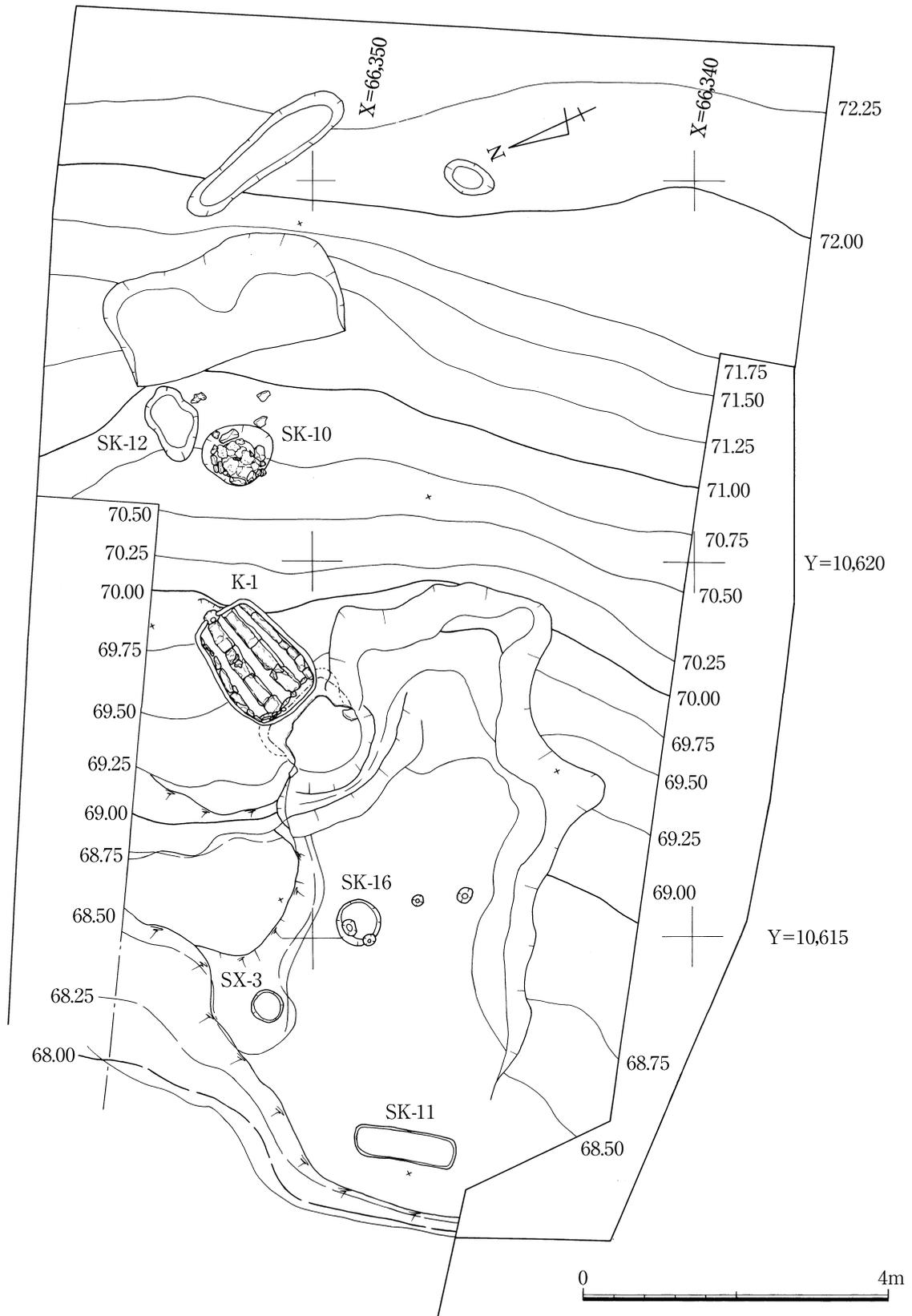
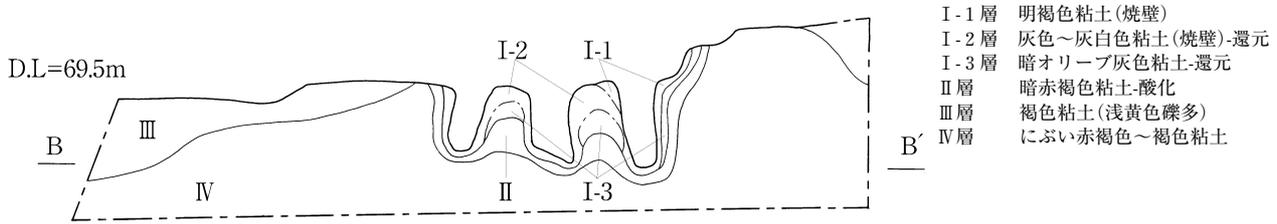
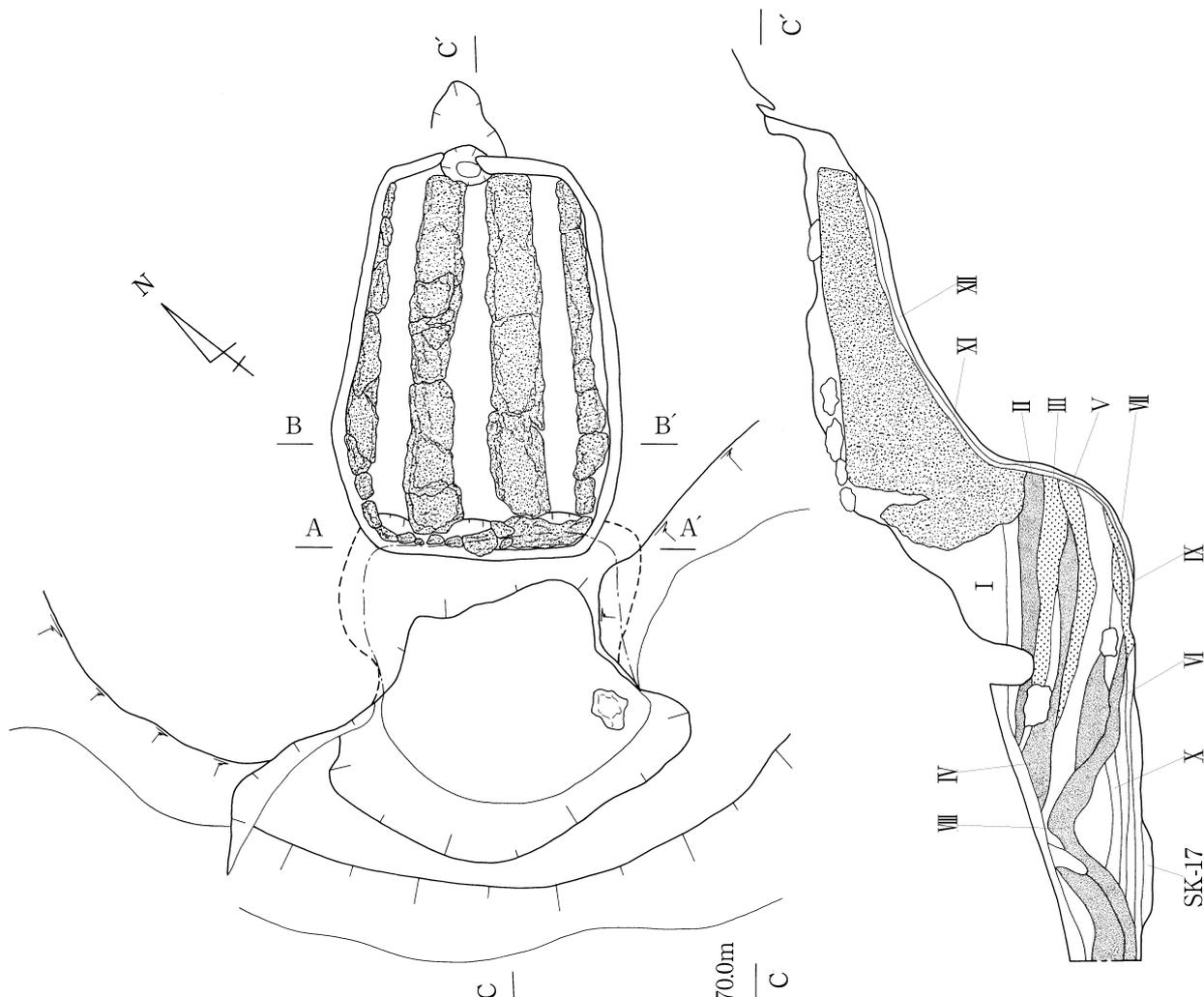


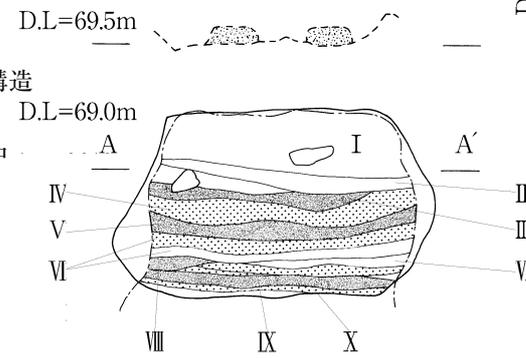
Fig.22 窯跡周辺遺構



- I-1層 明褐色粘土(焼壁)
- I-2層 灰色~灰白色粘土(焼壁)-還元
- I-3層 暗オリーブ灰色粘土-還元
- II層 暗赤褐色粘土-酸化
- III層 褐色粘土(浅黄色礫多)
- IV層 におい赤褐色~褐色粘土



- ロストル構造
- 炭化物集中
- 焼成面



- I層 におい褐色粘質土
- II層 黒色土-炭化物集中1
- III層 赤褐色粘土-第1焼成面
- IV層 黒色土-炭化物集中2
- V層 赤褐色粘土-第2焼成面
- VI層 黒色土-炭化物集中3
- VII層 明赤褐色粘土-第3焼成面
- VIII層 黒色土-炭化物集中4
- IX層 暗赤褐色粘土-第4焼成面
- X層 におい褐色粘土(小礫含)
- XI層 還元土層(青灰色)窯床面
- XII層 酸化土層(赤褐色)窯床面下層



Fig.23 窯平面・断面・セクション図.

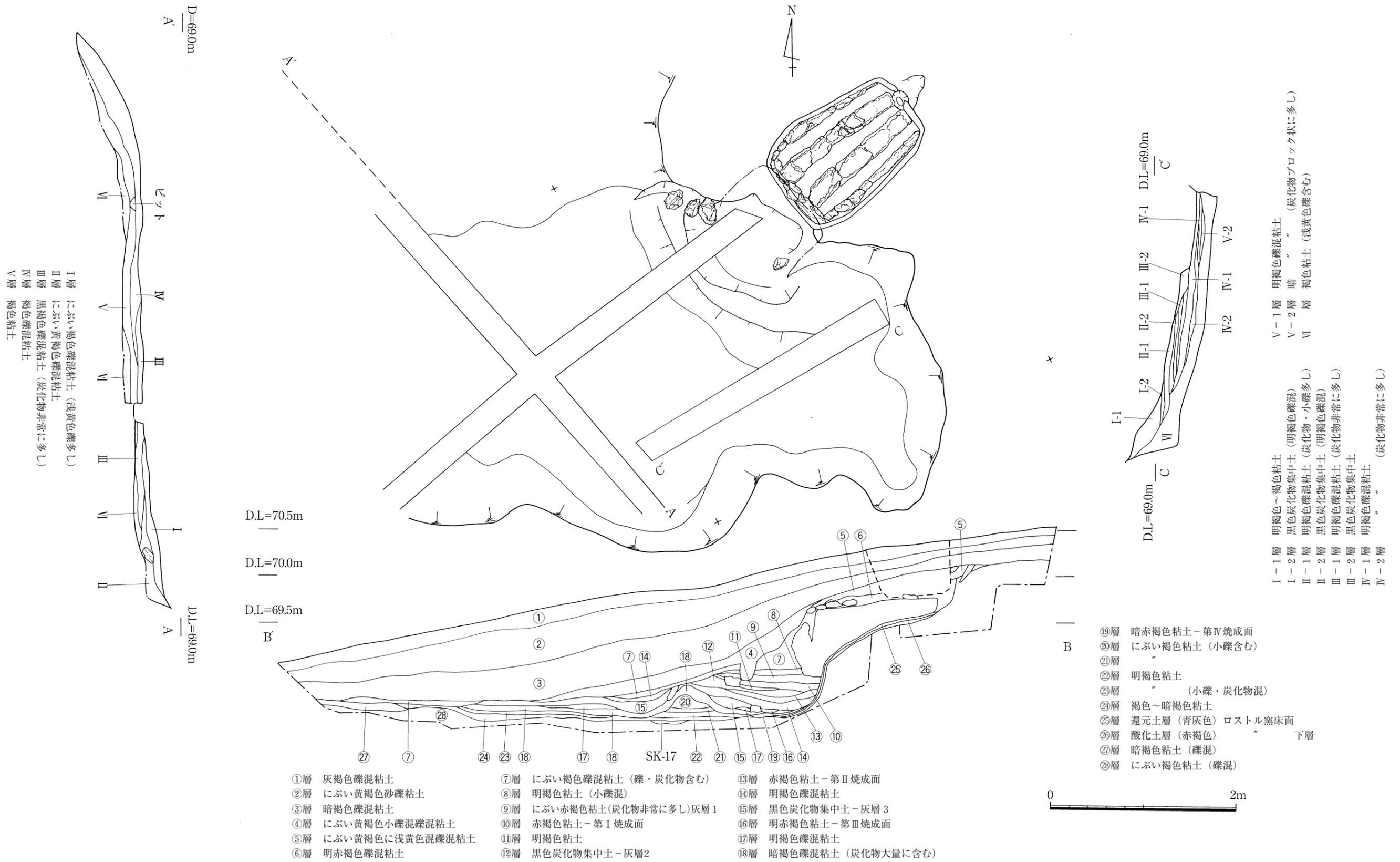


Fig.24 窯体及び周辺トレンチ位置図・セクション図

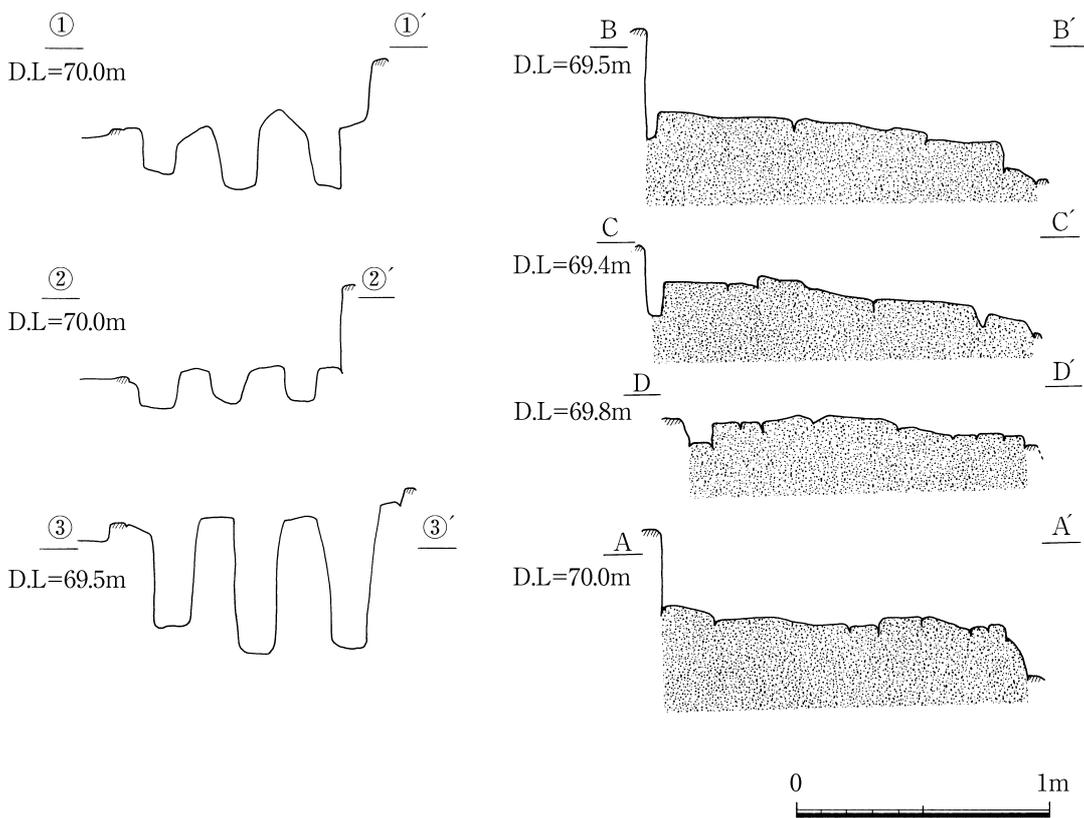
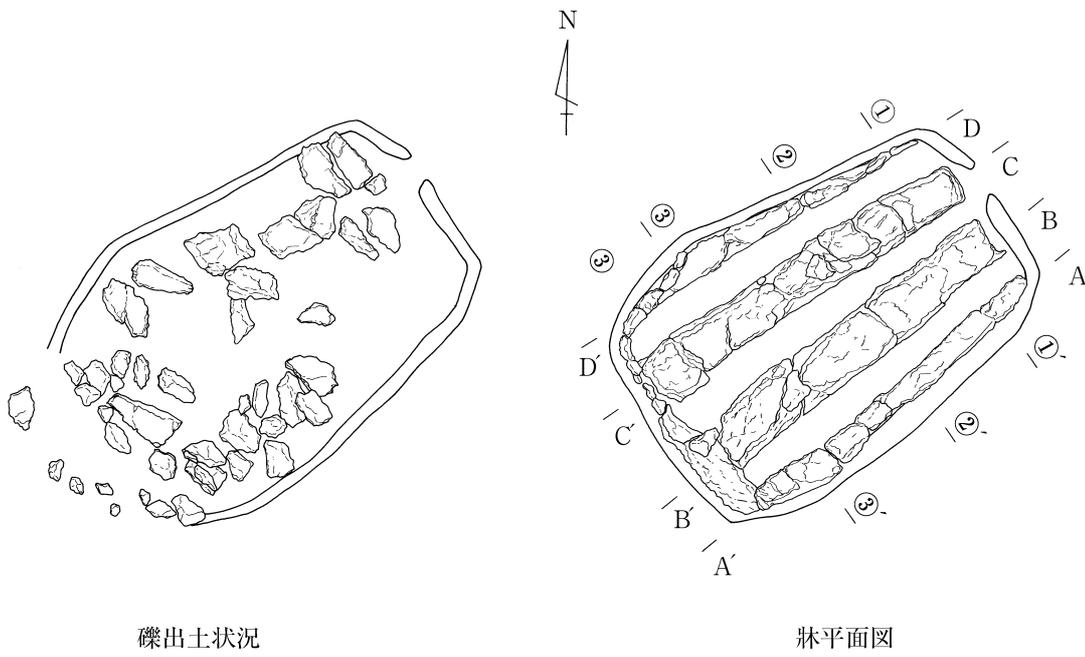


Fig.25 窯焼成部 礫出土状況及び^{しょう}牀平面図・エレベーション図

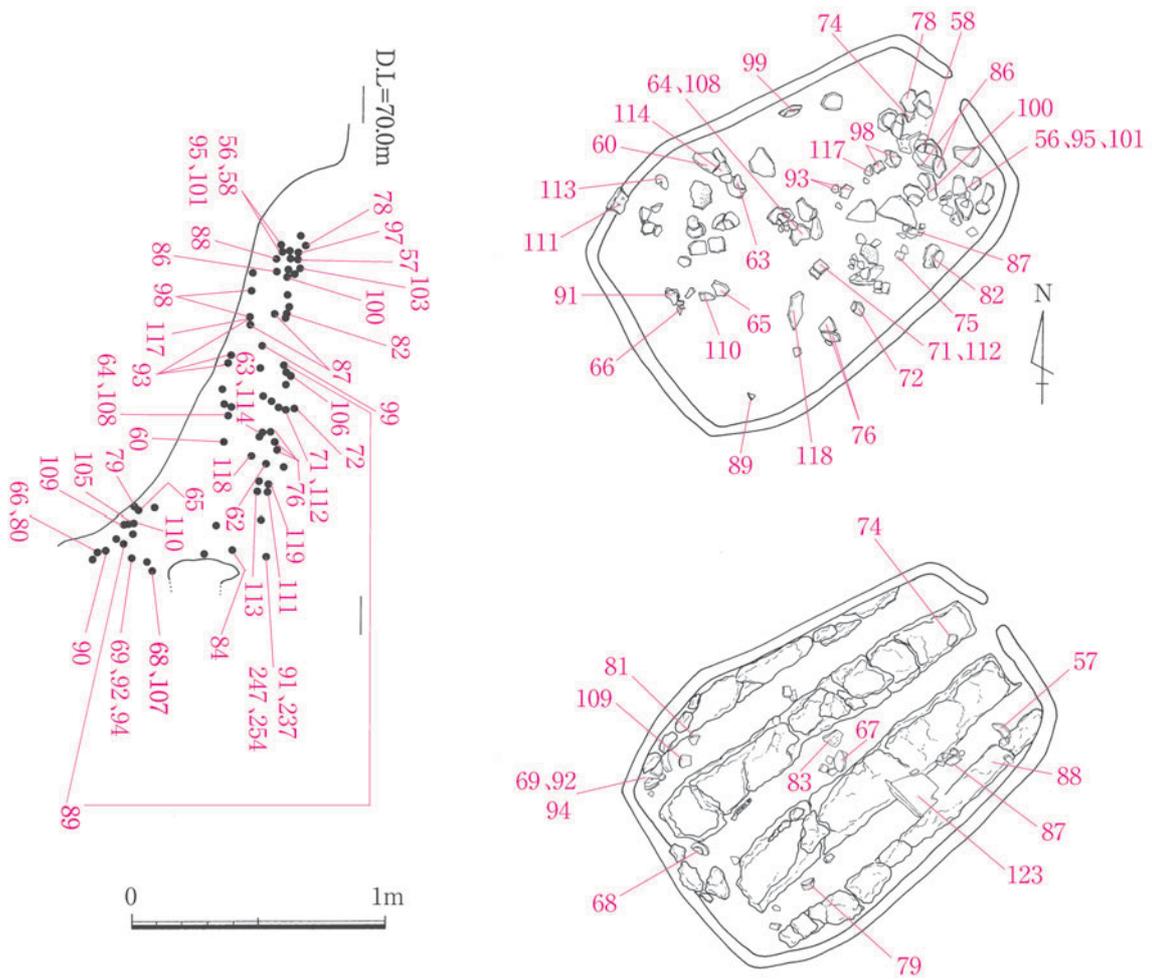


Fig.26 窯焼成部 遺物出土状況及びエレベーション図

出土遺物(Fig27・28)

①窯体内出土遺物

図示可能遺物は土師器杯(55～61)、甕(117)、羽釜(118～121)、移動式竈(123)、須恵器皿(62・63)、杯(64～85)、椀(86～101)、鉢(116)、布目瓦(122)である。供膳具は全て回転台成形である。底部の切離しはK-1及び灰原出土遺物については観察可能なものは全てヘラ切りである。窯体内出土の遺物は摩耗が激しいが、観察できない個体についてもヘラ切りであると思われる。7点ある土師器は内外両面か片面の一部又は広範囲に黒斑がある。須恵器、土師器の区別については、遺物を見るかぎり判断に迷うものが多いが、K-1及び灰原出土遺物については色調などに少しでも還元雰囲気を想定できるものは全て須恵器とした。須恵器の中には焼き歪みのみられるもの(63・82・100)や内面にガラス質の付着物がみられるもの(113)が含まれる。(98)は須恵質化した破片と土師器的な破片が接合している。

また、須恵器杯・椀の分類は、椀に特徴的な円盤状高台などを手掛りとしているが口縁部片は杯・椀各々に直立するもの、内・外湾するものが存在するため分類不可能とした(102～113)。また114・115は輪高台の椀底部であるがK-1出土遺物の中でも特に中間的な焼成を持つ。116の須恵器鉢は焼成が不良で摩耗が激しい。123の竈の破片は牀と牀の間に渡した状態で検出している。この他須恵器口縁部9点、底部片3点、土師器底部片2点、細片5点が出土している。

②灰原出土遺物

灰原出土の遺物も焼成及び調整等、K-1に準ずる。遺物は図示したものその他細片が多かった。土師器杯(124～126)、椀(127)、須恵器杯(128～132)、椀(134～136)、器種不明(137)、土師器羽釜(138)、布目瓦、(139)である。この他土師器甕胴部片も出土している。灰原出土の土師器も全て内面又は外面に黒斑がある。134・136の須恵器椀は焼き歪みがみられる。この他須恵器口縁部破片が1点、土師器口縁部4点、底部片1点、細片15点が出土している。

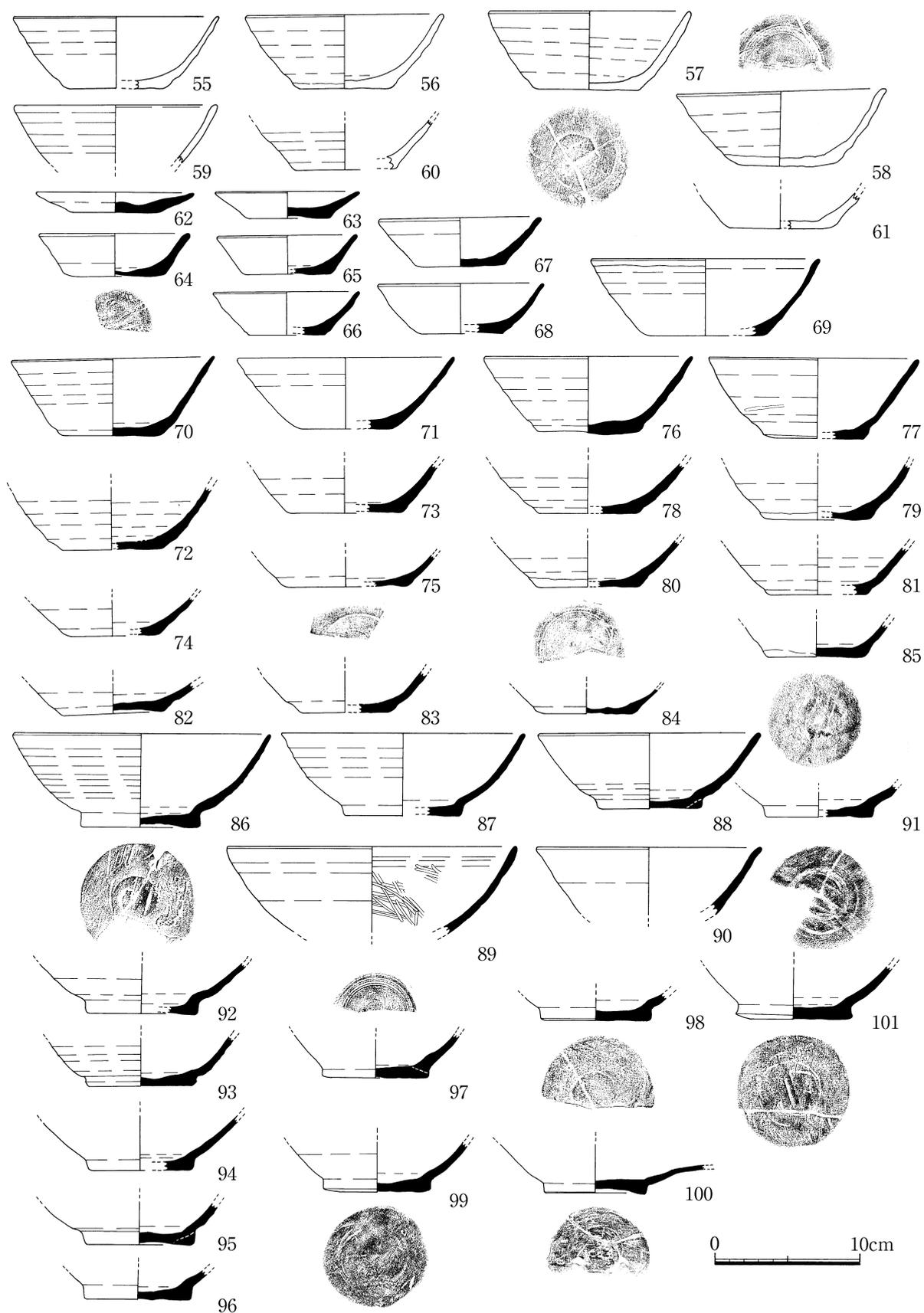


Fig.27 窯体内出土遺物実測図(1)

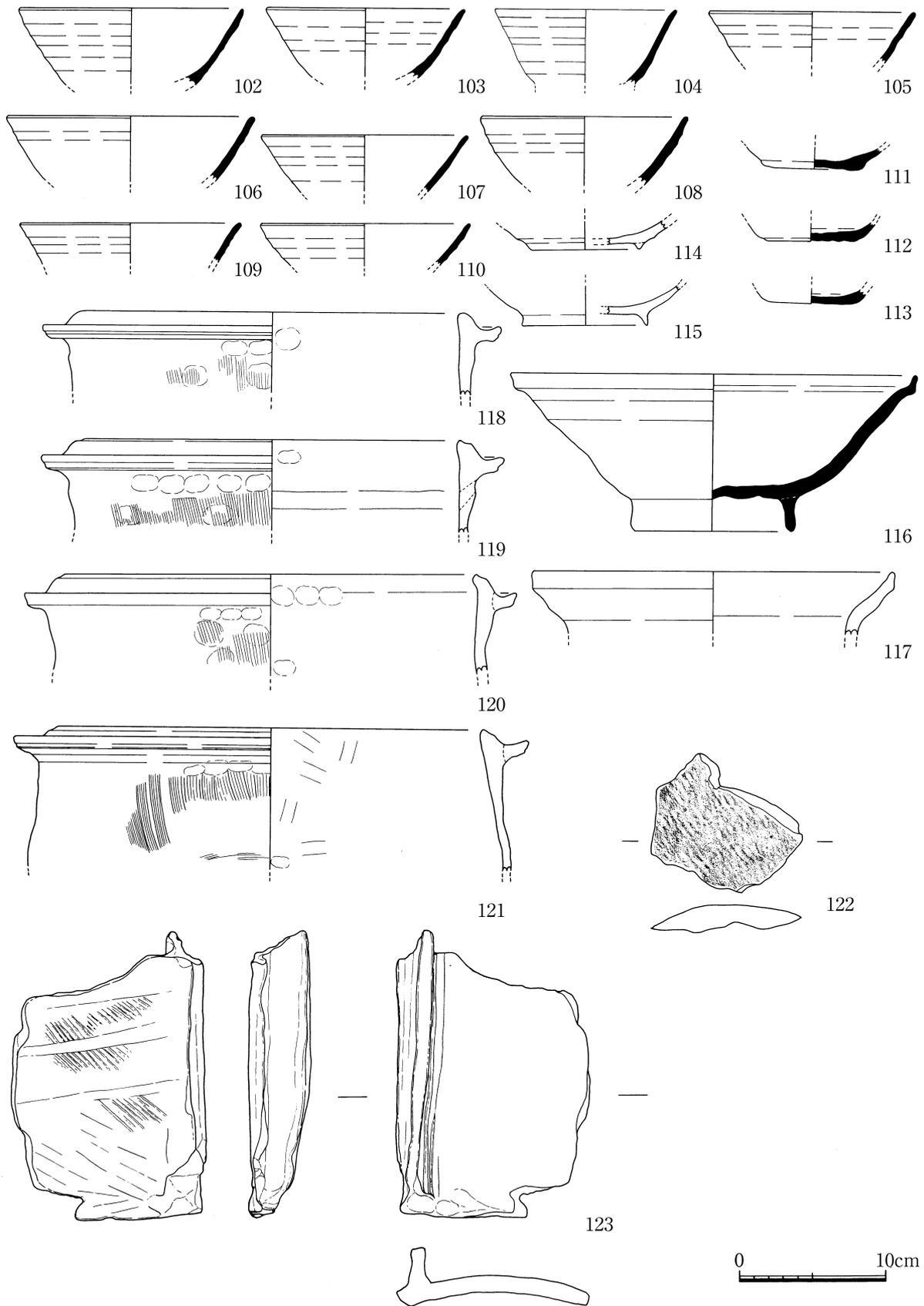


Fig.28 窯体内出土遺物実測図(2)

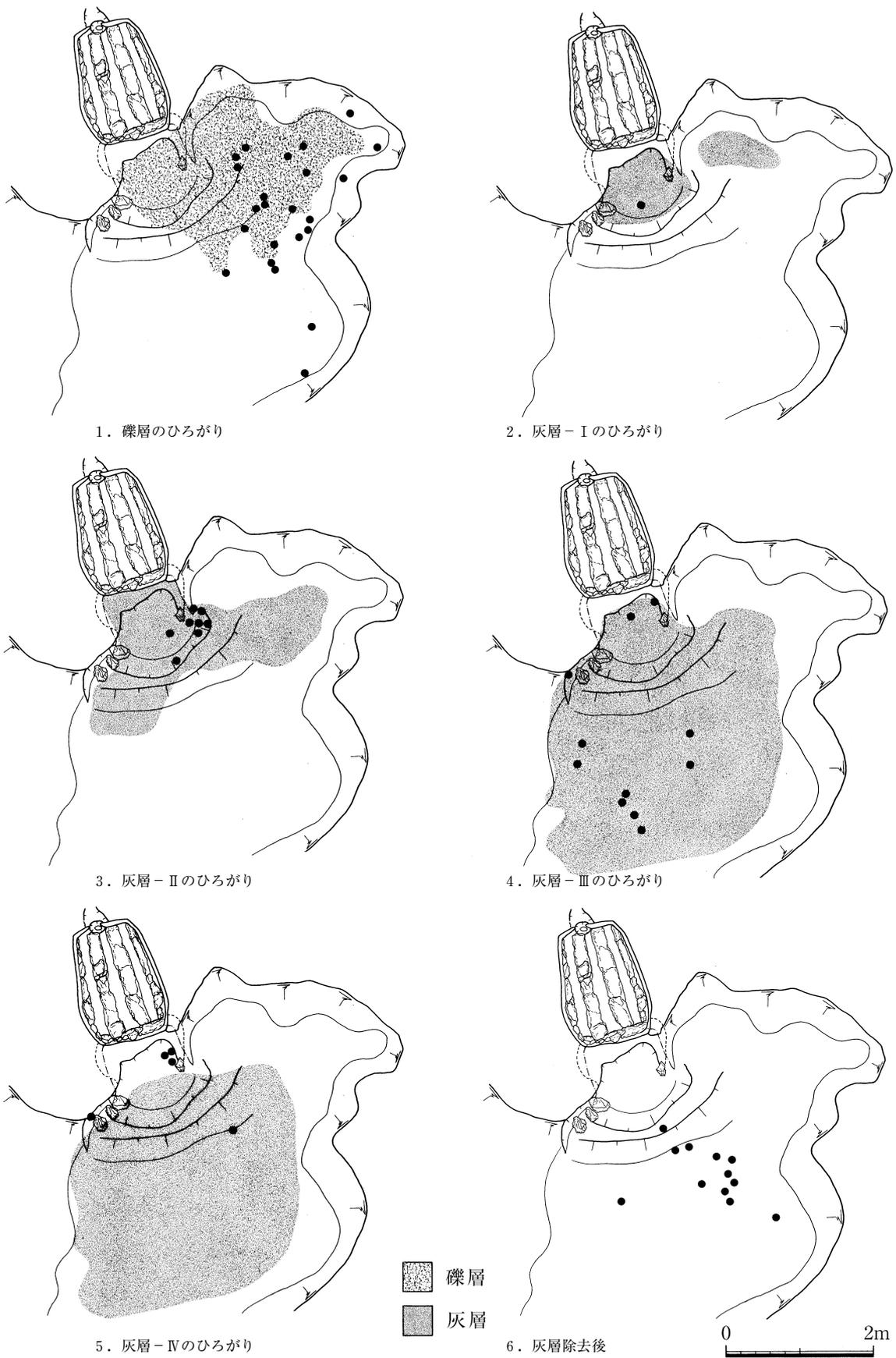


Fig.29 灰原・礫層・灰層 I～IV層の広がり及び遺物出土地点

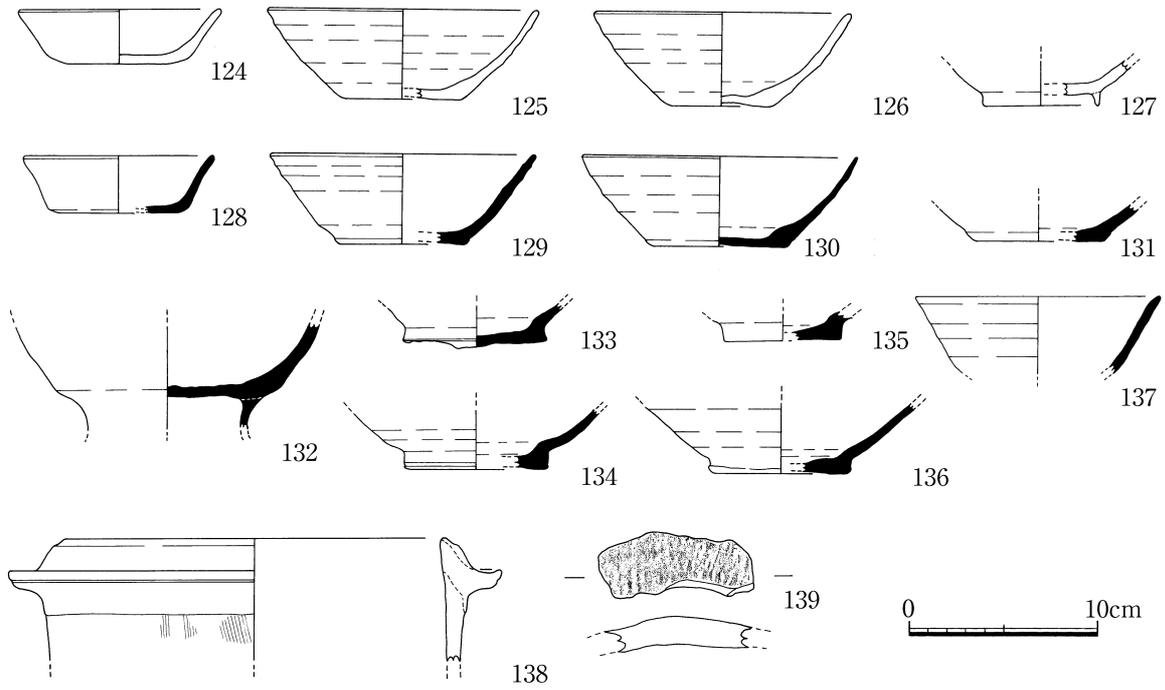


Fig.30 灰原出土遺物実測図

(2) 土坑(Fig31)

Ⅶ-S区の土坑についてはⅦ区との重複を避けるためSK-10から順次つけた。SK-11、13~16は検出層位及び出土遺物よりK-1と同時期(10世紀中~後半頃)か若干新しい時期に機能していた焼成土坑と考えられる。またSX-1も内部の状態の共通性から同様の焼成土坑と考えられる。(註1)

SK-10(Fig33) K-1の東斜面上で確認された。底面に石組みを持つ焼土坑である。最大長98cm、最大幅83cm、深さ20cm、方位はN-45°-Wを計る。礫は全て被熱しており、赤変する。礫の上には0.5~1cm位の骨片が30片ほどあり、パリノサーヴェイによる分析で人骨であることが確認されている(第7章「付編」参照)。礫除去後には床面に炭化物と焼土層が確認できたが壁面は被熱しておらず、遺物は皆無である。火葬施設と考えられる。(註2)

SK-11(Fig32) 窯の南西6mの平坦部の端に位置する。最大長1.07m、最大幅45cm、深さ19.5cm、平面形は長方形を呈する。側壁はほぼ垂直に立ち上がり床面中央は窪み、炭化物が集中する。四方の側壁のみが被熱して赤褐色を呈する。方位はN-8°-Eである。遺物は出土していない。

SK-13(Fig33) 窯の北西部で確認された。最大長1.23m、最大幅58.5cm、深さ10.5cm平面形は楕円形を呈する。方位はN-6°-Wである。側壁は傾斜を持って立ち上がり、床面は平坦で炭化物が集中する。四方の側壁のみが被熱する。土師器の椀(140)と土師器供膳具の小片が24点、土師器甕細片が2点、出土している。

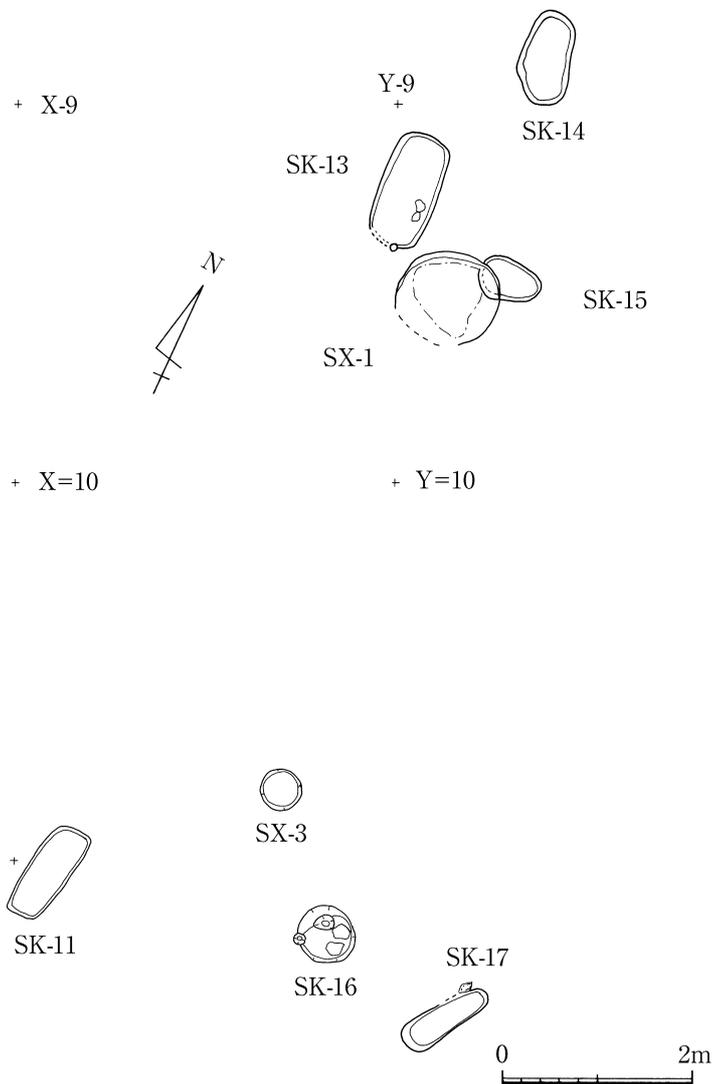


Fig.31 焼成土坑位置図

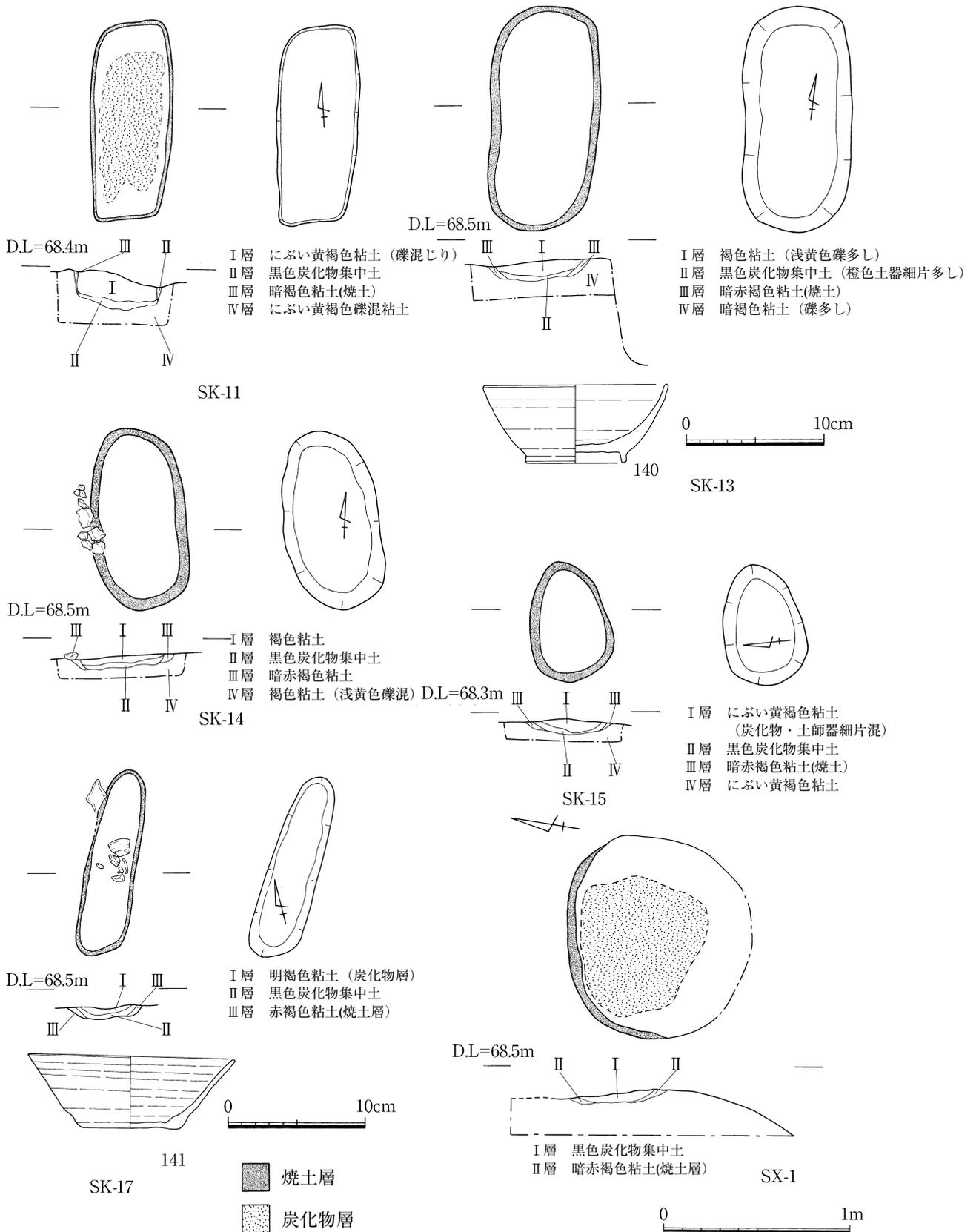


Fig.32 焼成土坑遺構平面・セクション図及び出土遺物実測図

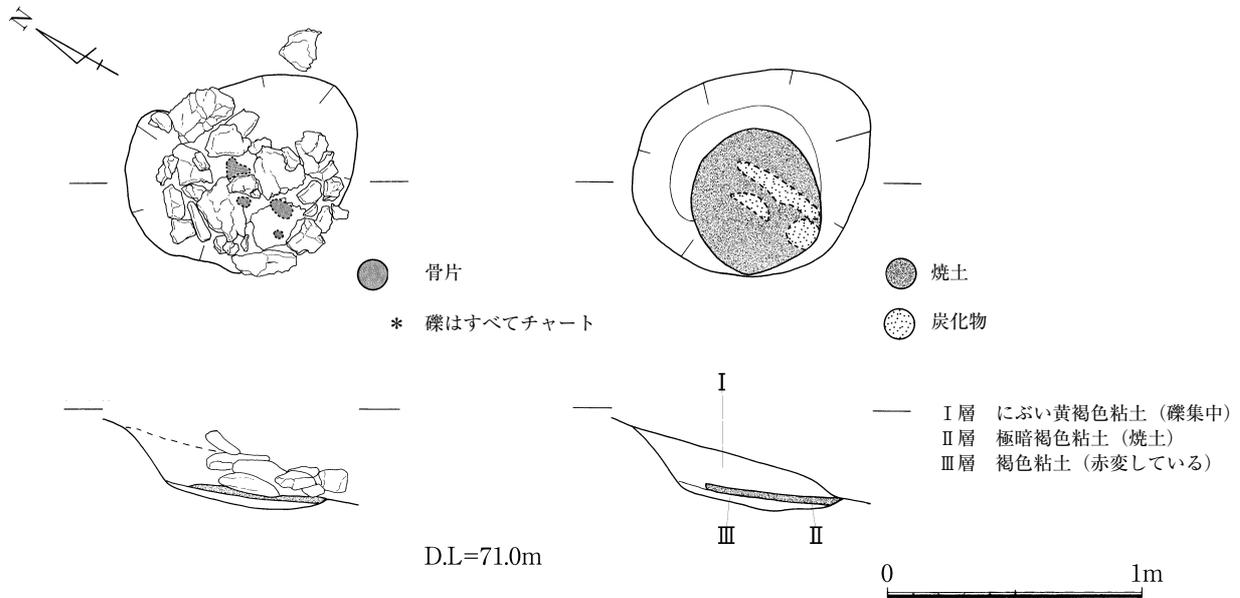


Fig.33 VII区 SK-10磔出土状況・焼土、炭化物出土状況・セクション図

SK-14(Fig33) SK-13の北東で確認された。最大長97.5cm、最大幅52.5cm、深さ6.75cmを計り方位N-65°-E、平面形は楕円形を呈する。壁面は傾斜を持って立ち上がり、床面は平坦で炭化物が集中する。四方の側壁のみが被熱する。土師器供膳具小片が5点、底部片1点、土師器甕小片が2点出土しているが図示できるものはない。

SK-15(Fig32) SK-13の東に位置し、最大長67.5cm、最大幅45cm、深さ8.25cmを計る。方位はN-80°-E、平面形は角の丸い三角形を呈する。壁面は床面からなだらかにU字状に立ち上がり、床面は炭化物が集中する。四方の側壁のみが被熱する。遺物は出土していない。

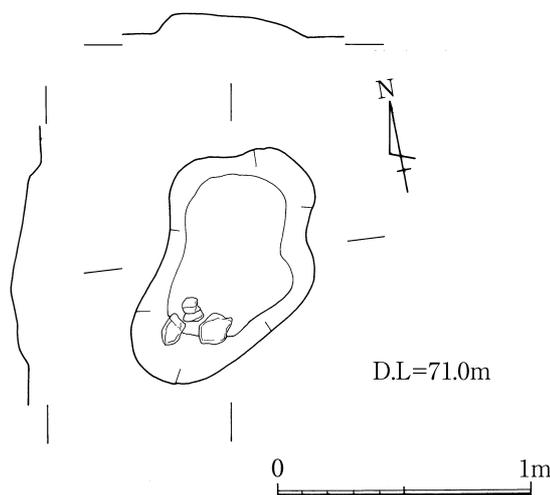


Fig.34 VII区 SK-12遺構平面・エレベーション図

SK-17(Fig32) K-1の灰層を除去後、その下層より確認された。最大長1.02m、最大幅28.5cm、深さ6.75cmを計り、方位はN-30°-E、平面形は楕円形を呈する。壁面は傾斜を持って立ち上がり、床面は平坦で炭化物が集中する。四方の側壁のみが被熱する。床面より内外面とも広範囲に黒斑がある土師器の杯(141)の他細片が1点出土している。検出層位と遺物により、K-1に先行する時期(10世紀前半頃)の焼成遺構とみられる。

SX-1(Fig32) SK-15を切る形で確認されている。上面が削られていることから南側の肩は残存しておらず平面形は不明であるが、SK11～17と同様床面に炭化物が集中し、壁面のみが被熱している。遺物は出土していない。

(3) その他の遺構

SK-12(Fig34) SK-10の北に隣接して確認された。最大長1.03m、最大幅67.5cm、深さ7.5cm、方位N-41°-Eを計る。遺物は出土していない。

(註1)

これらの焼成遺構は現地を見ていただいた倉田芳郎氏、木立雅朗氏からも「炭窯」ではないかのご指摘を受けた。また「古代の土師器生産と焼成遺構」(窯跡研究会編)によっても床面が被熱していないものは「製炭土坑」と定義づけられている。しかしSK17では、ほぼ完形の土師器が土坑内から出土していることもあり概要報告では土師器焼成土壌として報告した。その可能性も考えられるため今次報告では性格を確定し得なかった。

(註2)

香川県国分寺楠井遺跡では底面に石組みを持つ焼土坑から骨片が出土しており、火葬施設と報告している。北東の壁面と石組みは被熱し黒色灰層で覆われていた。この遺跡は13世紀中葉～16世紀前半頃に機能していた窯跡3基、掘立柱建物2棟、土壌墓等が確認されており奥谷南遺跡との遺構の構成も類似している。

4. 遺構外出土遺物 (Fig35～41)

包含層はⅠ～Ⅴ層に分けて取り上げた。Ⅰ・Ⅱ層からは古代、中世、近世の遺物が出土した。

(1) 表採遺物・Ⅰ層出土遺物・Ⅱ層出土遺物 (Fig35)

小皿(154・155)、底部糸切りの杯(142)、杯、輪高台椀、台付皿、土師器羽釜は古代に属すとみられる。151は染付の磁器である。にぶい青色の呉須により回線を描く。見込部分は透明釉をかけた後釉剥ぎを施し重ね焼を行い、高台内に裂孔が存在する。高台痕或いは窯工具痕とみられる丸い痕跡が残る。19世紀、長崎波佐見のものとみられる。152・153の合子身、蓋は時期ははっきりしないが近世のものとみられ、身は内面が全面煤けている。163は玉縁状の口縁を持つ白磁碗器の口縁片である。164は白磁碗底足片である。露胎部との境に二条の沈線を施し、その下は縦位の櫛描後なでる。内面見込にも沈線を施す。163は玉縁状の口縁を持つ白磁碗器の口縁片である。165は青磁碗である。内面に劃花紋と見られる文様を施しており酸化が不十分なため発色が悪い。

(2) Ⅲ層出土遺物 (Fig36～40)

Ⅲ層は褐色及び黒褐色の土壌化した2次堆積土である。主に窯遺構上面を中心とした斜面で確認された。

①供膳具 (Fig. 36・37)

土師器は小皿、杯、椀が出土している。須恵器は杯、椀が出土している。すべて回転台成形によるものである。222～232は器壁の厚い椀で、高台より輪高台(228～227)、円盤状高台(223～227)、長い高台(231・232)にわけることができる。217は口縁部内面に沈線を持ち、胎土から搬入品であるとみられる。須恵器は杯、椀が出土している。236の杯は胎土が他と異なる白色を呈する。238～

261は椀である。246～261の椀は厚い器壁を持ち、焼成はやや不良である。奥谷南遺跡K-1出土の円盤状高台椀からの流れの中で捉えられるものであるが、K-1ではヘラ切りのみであったのに対し、包含層中にはヘラ切り（247）と糸切り（256・257）が存在する。236・258は灰白色の軟質の胎土を持ち器壁の厚い椀である。236は高台の付かないもの、258は断面方形のハの字状に開く高台を持つ。形態分類及び詳細については後述の「第6章考察」を参照されたい。

②調理具、煮炊具、貯蔵具

土師器 282～289は甕の口縁部である。282・283は小型で口縁部が「く」の字状になり、端部は丸くおさめる。胴部は球形状になると見られる。285は口縁部が「く」の字状になり端部を上方に摘み挙げている。球形状の胴部である。284、286～289は長胴になるタイプである。284、286～288は口縁部が「く」の字状に曲がり端部を上方に摘み上げている。288は口縁部外面に2段の横ナデが施される。289は「く」の字状に曲がり端部は丸くおさめる。

290・291は羽釜である。半球形の長い胴部から口縁部が直立する。口縁部外面からそのまま幅の狭い鑊を有する椀津型である。

292～298は鉢である。口縁部破片のみで全体形が判るものはない。口縁形態は拡張されず端面が水平なもの（293）、端部が内外に肥厚し端面に凹部を持つもの（292・294）と内面にのみ肥厚が見られるもの（295）がある。

須恵器 296～298は鉢である。297は内湾しながら立上り口縁部は外反し端面は凹む。298は297のような鉢の底部と考えられる。299～302は篠窯産の鉢口縁部と底部である。305の須恵器甕は口縁部のみであるが精選された胎土を持ち、頸部に工具は不明であるが当たり痕が確認される。308は外面平行タタキ目を不定方向に施し内面は赤褐色に発色している。330は不明鉄製品である。中央に摘み様の突起があり鏡の模倣品の可能性がある。

(3) IV層出土遺物・V層出土遺物 (Fig41)

IV・V層は窯廃絶後すぐに堆積したものである。

土師器杯、台付皿、鉢、甕、羽釜、須恵器杯、椀、壺、黒色土器椀が出土している。341は土師器の鉢である。K-1出土の116、包含層Ⅲ層出土の298はいずれも焼成の甘い須恵器の鉢であるが、それらと同様の高い高台を持つタイプである。342は球胴型の体部を持つ土師器甕である。胎土から在産であるとみられる。343は須恵器甕の破片を使用した転用硯である。精選された胎土を持ち内面硯面は同心円状のタタキ目が摩耗し滑らかな状態になっている。349は小片ではあるが胎土から搬入品の黒色土器椀とみられる。350・351は土師器の甕である。350は球胴型で口縁部がく字状に屈曲し端部は上方に摘み上げる。351は長胴型である。口縁部はく字状に屈曲し端部は上方に摘み上げる。352は・353は椀津型の羽釜である。口縁部から上向きの中身の狭い鑊をめぐらす。

包含層出土遺物中大半の資料は、10世紀前半から11世紀初頭のものであるとみられる。表採遺物やI・II層中には近世の遺物や、II類の白磁椀や青磁碗など11世紀後半から13世紀初頭に比定される遺物が含まれている。IV層・V層には確認でき得るかぎり切り離しが糸切りのものはみられず、Ⅲ層以上で糸とヘラがみられるようになる。

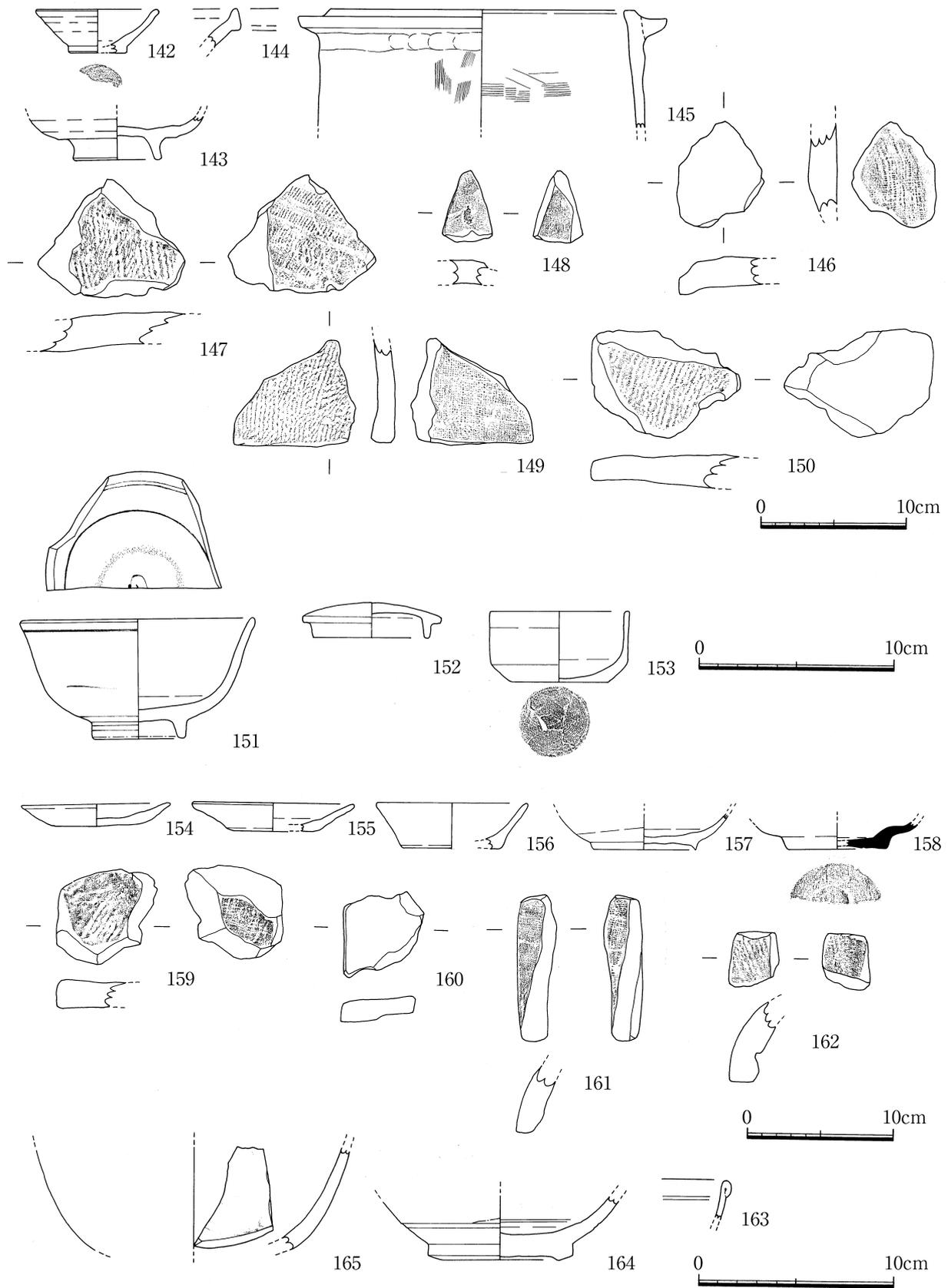


Fig.35 VII区 包含層出土遺物実測図(表採、I・II層)

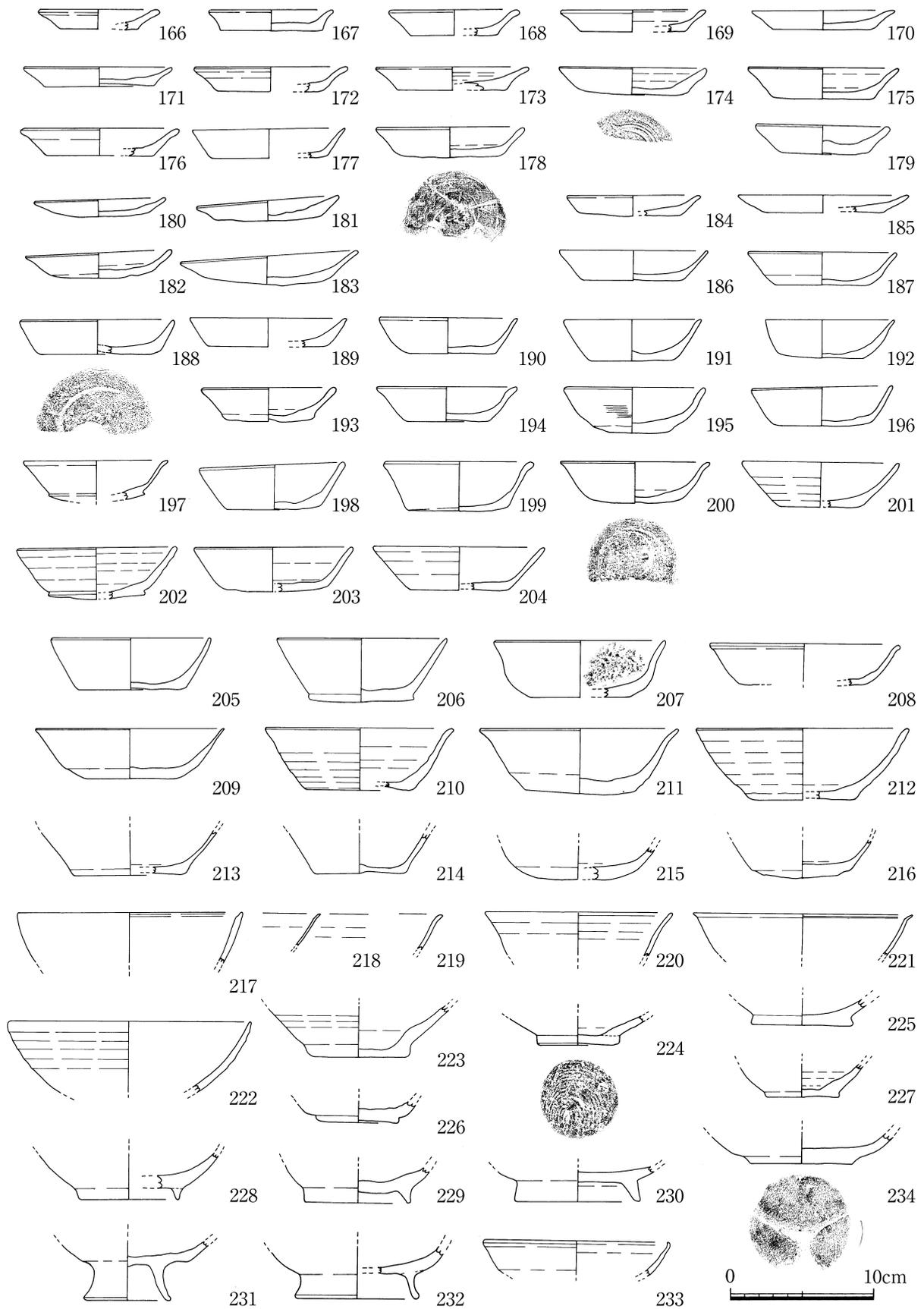


Fig.36 VII区 包含層出土遺物実測図(III層-1)

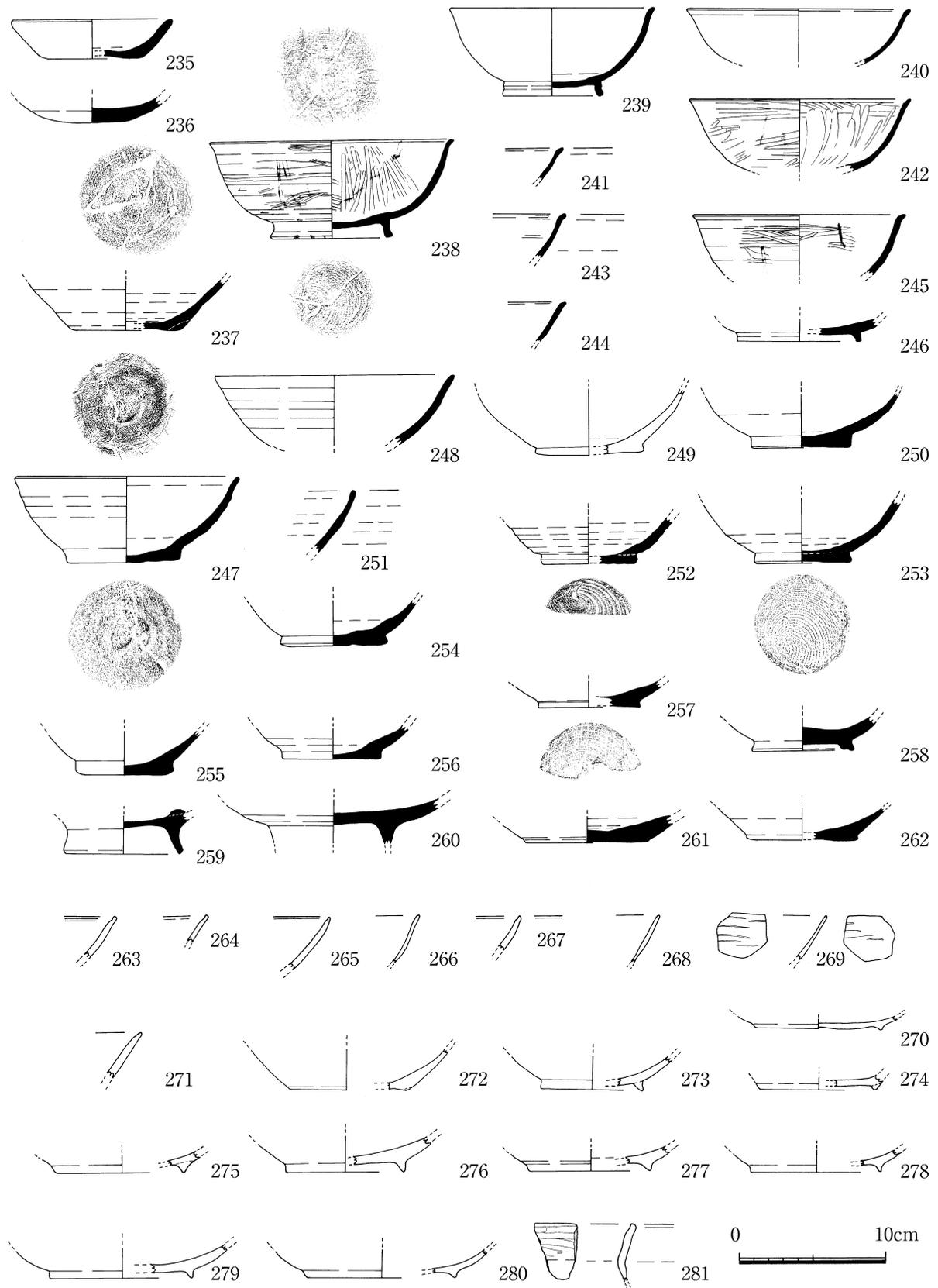


Fig.37 VII区 包含層出土遺物実測図(Ⅲ層-2)

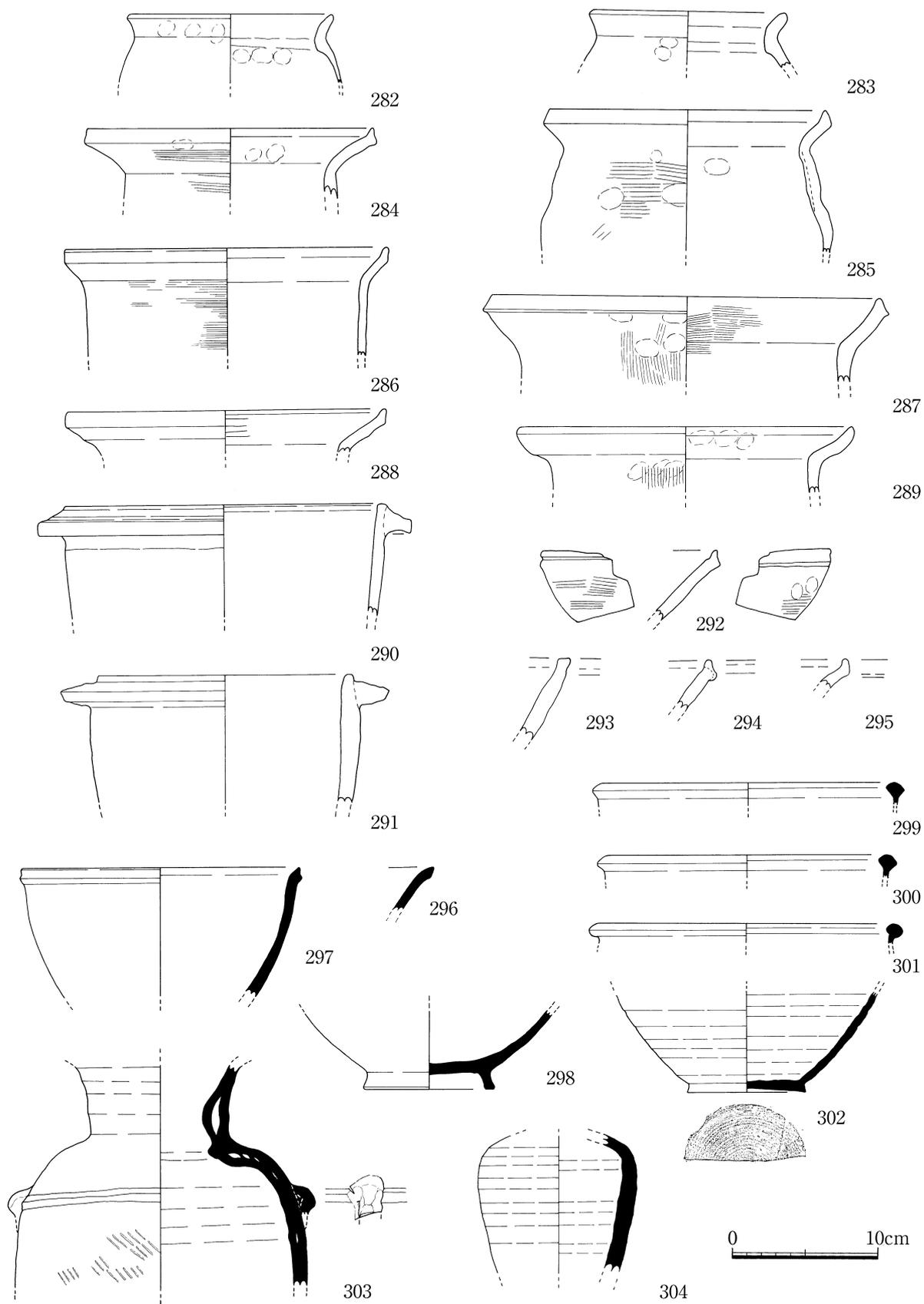


Fig.38 VII区 包含層出土遺物実測図(III層-3)

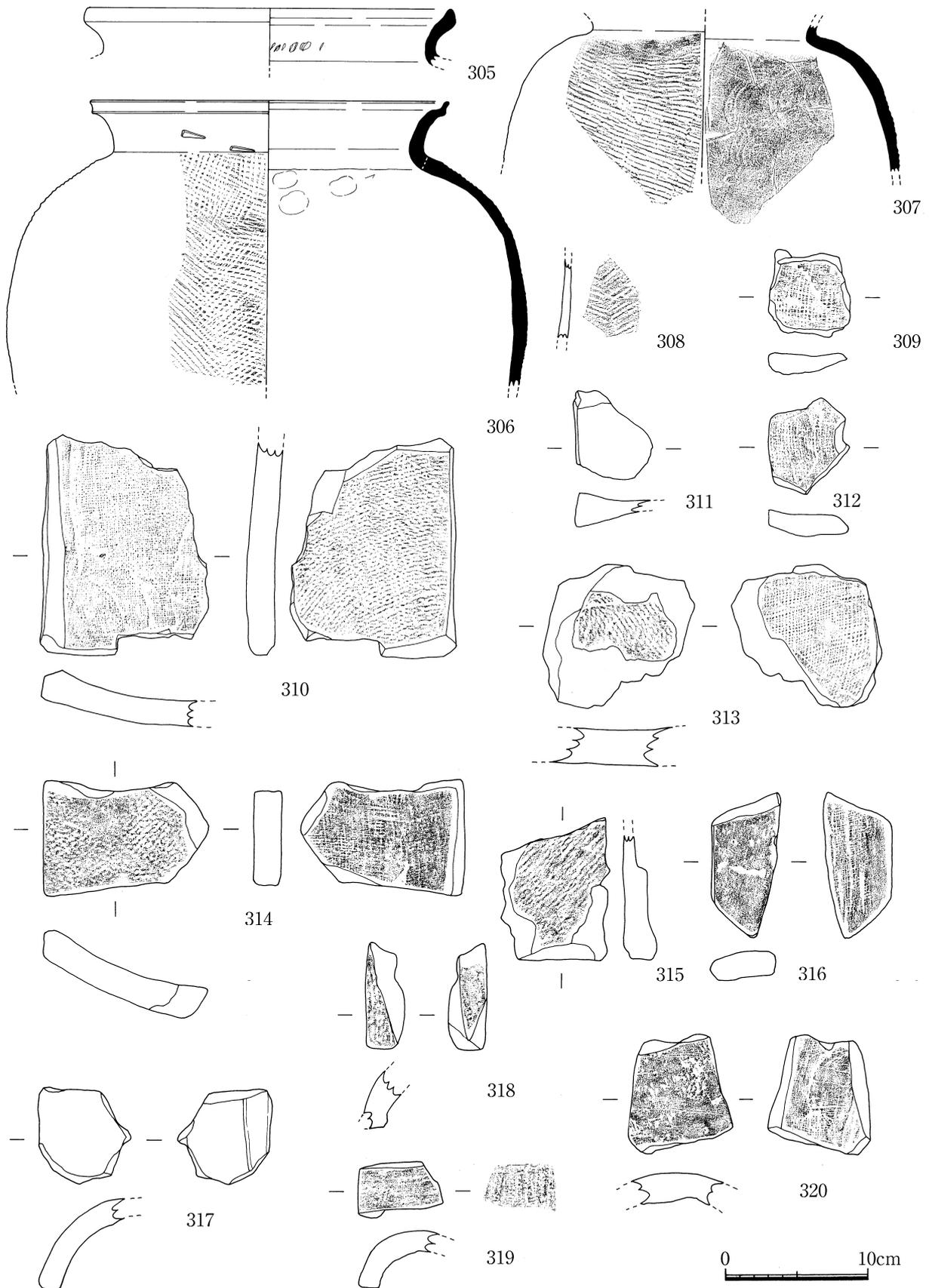


Fig.39 VII区 包含層出土遺物実測図(Ⅲ層-4)

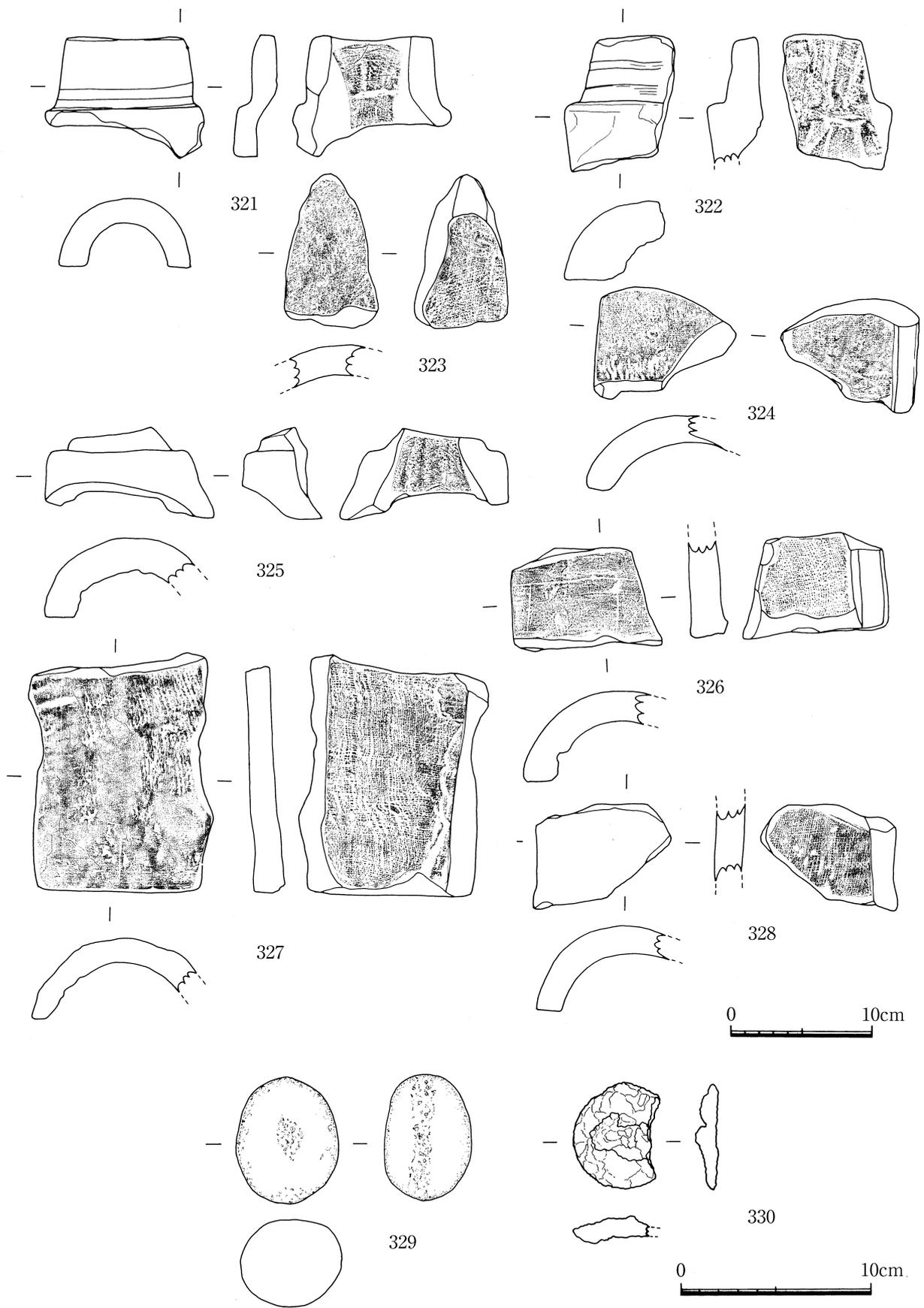


Fig.40 VII区 包含層出土遺物実測図(III層-5)

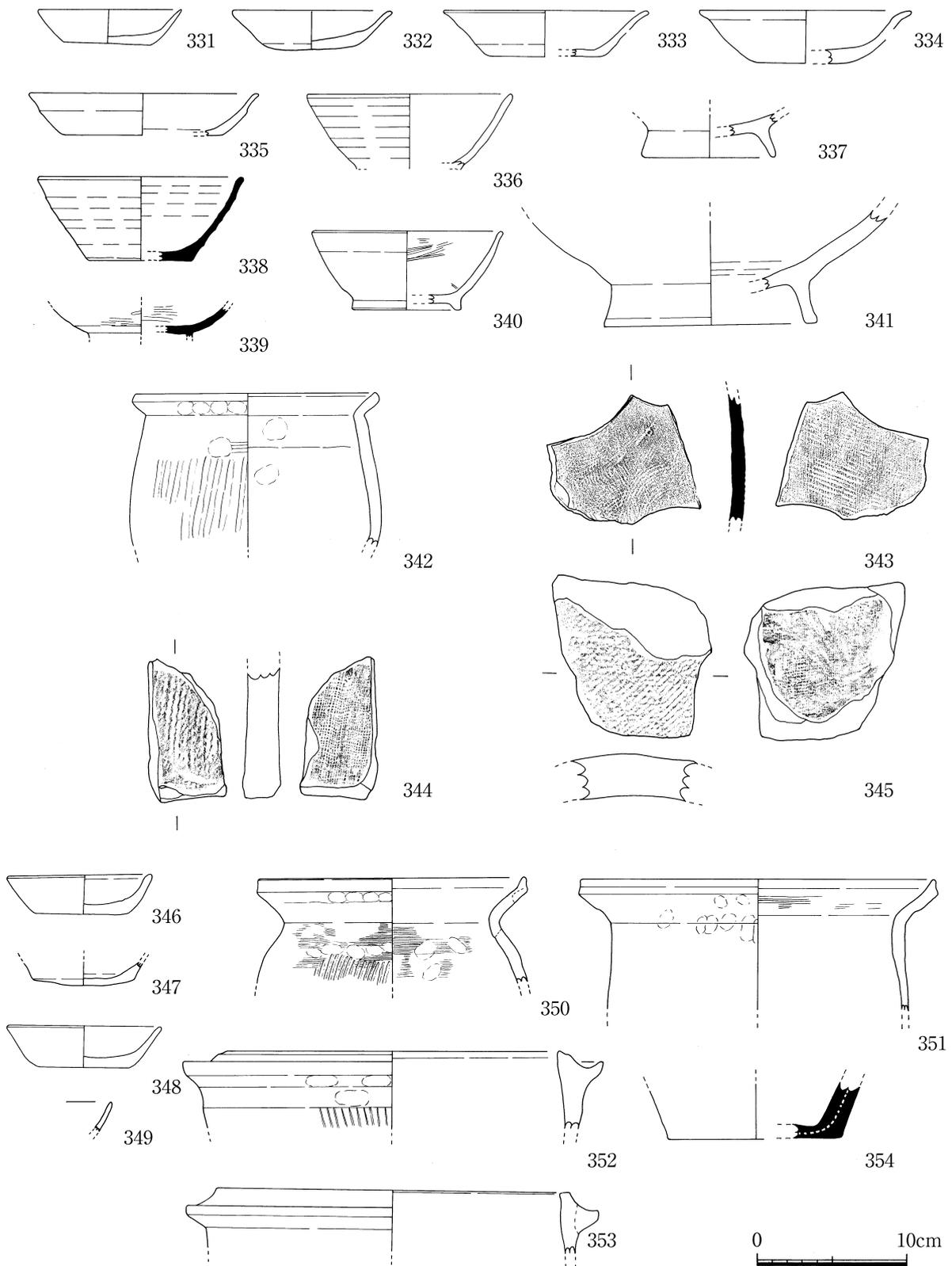


Fig.41 VII区 包含層出土遺物実測図(IV・V層)

Tab.4 VII区出土遺物観察表(1)

Fig. No.	挿図番号	出土地点	種類	器種	法量 (cm)			色調	胎土	特徴	摩耗	備考	焼成	残存率
					口径	器高	底径							
15	33	SA-1・P-3		不明	-	-	-	10YR5/2 灰黄褐色 10YR5/3 にぶい黄褐色		内面接合痕、 指頭圧痕残る。 仕上げはナデ。		常滑か 渥美か。	硬	胴部小片
16	36	P-41	青磁	碗	15.2	-	-	7.5Y6/2 灰ナデ	精選	内外面とも無文、大きな 単位の貫入が入る。 特に内面の陥入は大きく 上面のみ。				1/6
17	37	SK-1	土師器	碗	-	-	6.8	10YR8/3 浅黄褐色	チャートの 細粒砂を含む。		著			底完
17	38	SK-1	土師器	杯ある いは碗	-	-	6.7	10YR7/3 にぶい黄褐色	チャートの 細粒砂を含む。	外底糸切り痕。	著			底完
17	39	SK-1	須恵器	甕	76.0	-	-	N5/灰	チャートの 粗粒砂を含む。	横ナデ痕。			硬	口縁部細片
17	40	SK-1	須恵器	甕	-	-	-	N5/灰	チャートの 粗粒砂を含む。	内面同心円当具痕未調整 外面格子タタキ。		外面は室内安置具 接触部分が凹み、 同部に10cm程の円 形の痕跡が並ぶ。	硬	胴部下半
18	41	SK-2	土師器	皿	9.0	2.0	5.4	2.5Y6/2 灰黄色	チャートの 細粒砂を含む。		著		やや軟	3/8
18	42	SK-2	土師器	皿	10.0	2.0	7.0	7.5YR7/4 にぶい橙色	チャートの 細粒砂を含む。	内底落ち込む。				1/3
18	43	SK-2	土師器	杯ある いは碗	-	-	5.8	7.5YR7/6 橙色	チャートの 細粒砂を含む。		著		軟	底5/8
18	44	SK-2	土師器	杯	-	-	6.2	10YR7/3 にぶい黄褐色	チャートの 細粒砂を含む。	底部粘土巻き上げ痕。 内面の残存部は平滑。	著			底1/3
18	45	SK-2	土師器	杯ある いは碗	-	-	6.4	10YR7/3 にぶい黄褐色	チャートの 細粒砂を含む。	内底落ち込む。	著		軟	底完
18	46	SK-2	土師器	杯ある いは碗	-	-	6.5	5YR6/6 橙色	チャートの 細粒砂を含む。	内底落ち込む。 僅かに糸切り痕残る。	著		やや軟	底完
18	47	SK-2	土師器	羽釜	21.6	-	-	10YR6/2 灰黄褐色	赤色チャート、 チャート、長石の 細粒砂を含む。	内外面横ナデ。				口1/8
18	48	SK-2	土師器	羽釜	21.6	-	-	10YR6/4 にぶい黄褐色	赤色チャート、 チャート、長石の 細粒砂を含む。	内外面横ナデ。		外面煤ける。		口1/12
18	49	SK-2	土師器	羽釜	27.2	-	-	5YR6/6 橙色	赤色チャート、 チャート、長石の 粗粒砂を含む。	内外面横ナデ。	著			口1/4
20	54	VII区 下斜面	土師器	製塩土器	-	-	-	5YR6/6 橙色	0.5~0.6mm内外 のチャート角粒 を多量に含む。	内面布目痕。	著		やや軟	底部のみ
27	55	K-1	土師器	杯	14.0	5.0	6.8	2.5Y7/4 浅黄褐色	チャートの 細粒砂を含む。	外面僅かに回転ナデ痕。 立上り部に粘土はみ出し 痕。	著	内面口縁部より下と外面底 部に黒斑あり。		口1/4 底1/6
27	56	K-1	土師器	杯	13.4	5.1	6.4	10YR7/3 にぶい黄褐色	チャートの 細粒砂を含む。	平行圧痕。立上り部に 粘土はみ出し痕。		内面黒斑あり。	硬	1/2
27	57	K-1	土師器	杯	13.8	5.4	6.8	10YR7/3 にぶい黄褐色	チャートの 細粒砂を含む。	内外面回転ナデ痕。 外底ヘラ切り、平行圧痕。		内外面とも器高の 下2/3より内外底 まで黒斑あり。	硬	口1/3 底完
27	58	K-1	土師器	杯	14.4	5.2	7.0	10YR7/3 にぶい黄褐色	チャートの 細粒砂を含む。	内面回転ナデ痕、内底周 縁部に同心円状の条痕。	やや	内底に黒斑。	硬	口1/2 底1/2
27	59	K-1	土師器	杯	14.0	-	-	10YR6/6 明黄褐色	チャートの 細粒砂を含む。		著	一部黒斑あり。		口1/4
27	60	K-1	土師器	杯	-	-	6.8	10YR8/3 浅黄褐色	チャートの 細粒砂を含む。	僅かに回転ナデ痕。	著	内面黒斑あり。		底1/6
27	61	K-1	土師器	杯	-	-	6.8	10YR8/3 浅黄褐色	チャートの 細粒砂を含む。	内底落ち込み、周縁部 に同心円状の条痕。 平行圧痕。		内面黒斑あり。		底1/4
27	62	K-1	須恵器	皿	11.0	1.4	6.2	2.5Y7/1 灰白色	チャートの 細粒砂を含む。		著		やや軟	準完
27	63	K-1	須恵器	皿	10.0	1.9	6.0	5Y8/1 灰白色	チャートの 細粒砂を含む。	平行圧痕。立上り部に 粘土はみ出し痕。	著	焼き歪む。	やや軟	口1/3 底2/3
27	64	K-1	須恵器	小杯	10.2	3.0	6.6	2.5Y6/2 灰黄色	チャートの 細粒砂を含む。	立上り部に 粘土はみ出し痕。	著		やや軟	1/2
27	65	K-1	須恵器	小杯	9.6	2.7	6.0	2.5Y7/2 灰黄色	チャートの 細粒砂を含む。		著		やや軟	口1/8 底1/2
27	66	K-1	須恵器	小杯	10.0	3.0	5.2	2.5Y7/2 灰黄色	チャートの 細粒砂を含む。		著		やや軟	口1/4 底1/6
27	67	K-1	須恵器	小杯	11.0	3.4	6.2	2.5Y6/2 灰黄色	チャートの 細粒砂を含む。	立上り部に 粘土はみ出し痕。	著		やや軟	口1/3 底2/3

Tab.5 VII区出土遺物観察表(2)

Fig. No.	挿図番号	出土地点	種類	器種	法量 (cm)			色調	胎土	特徴	摩耗	備考	焼成	残存率
					口径	器高	底径							
27	68	K-1	須恵器	杯	11.4	3.4	5.6	2.5Y7/2 灰黄色	チャートの 細粒砂を含む。		著		やや軟	□1/3 底1/4
27	69	K-1	須恵器	杯	15.6	4.3	8.2	5Y8/1 灰白色	チャートの 細粒砂を含む。	内外面僅かに 回転ナデ痕。	やや		やや軟	□1/6 底1/8
27	70	K-1	須恵器	杯	14.0	5.3	6.6	2.5YR7/2 灰黄色	チャートの 細粒砂を含む。		著	内面ほぼ全面 に黒斑あり。	軟	□1/4 底完
27	71	K-1	須恵器	杯	15.0	4.9	6.2	2.5Y7/2 灰黄色	チャートの 細粒砂を含む。		著		やや軟	底1/6
27	72	K-1	須恵器	杯	-	-	6.8	2.5Y8/2 灰白色	チャートの 細粒砂を含む。	内面回転ナデ痕。内底周 縁部に同心円状の条痕。	外面著		やや軟	底1/6
27	73	K-1	須恵器	杯	-	-	7.9	5Y8/2 灰白色	チャートの 細粒砂を含む。	外面回転ナデ痕。 平行圧痕。	内面著		やや軟	底1/3
27	74	K-1	須恵器	杯	-	-	5.6	2.5Y8/2 灰白色	チャートの 細粒砂を含む。		著		やや軟	底1/8
27	75	K-1	須恵器	杯	-	-	8.2	2.5Y7/1 灰白色	チャートの 細粒砂を含む。		著		やや軟	底1/8
27	76	K-1	須恵器	杯	14.2	5.3	7.0	2.5Y7/2 灰黄色	チャートの 細粒砂を含む。	立上り部に緩い段部と 粘土はみ出し痕。	著	外面片側底 部～体部に 火ダスキ。	軟	□1/3 底完
27	77	K-1	須恵器	杯	14.4	5.6	7.0	10YR7/1 灰白色	チャートの 細粒砂を含む。	内底落ち込む、 同心円状の条痕。	著	内面より下 と外面底部及 び体部、一部 黒斑あり。	軟	半完
27	78	K-1	須恵器	杯	-	-	6.8	5Y8/1 灰白色	チャートの 細粒砂を含む。	内面回転ナデ痕。	外面著		やや軟	底1/6
27	79	K-1	須恵器	杯	-	-	7.4	2.5Y8/2 灰白色	チャートの 細粒砂を含む。	内面僅かに回転ナデ痕。 内底落ち込む。立上り部 粘土はみ出し痕。	著		やや軟	底1/4
27	80	K-1	須恵器	杯	-	-	7.0	2.5Y8/2 灰白色	チャートの 細粒砂を含む。	内外面回転ナデ痕。 外底に圧痕。立上り部 粘土はみ出し痕。				底1/4
27	81	K-1	須恵器	杯	-	-	6.6	2.5Y8/2 灰白色	チャートの 細粒砂を含む。		著		やや軟	底1/8
27	82	K-1	須恵器	杯	-	-	7.0	2.5Y7/2 灰黄色	チャートの 細粒砂を含む。	内面回転ナデ痕。圧痕。 立上り部粘土はみ出し痕。	外面著	焼き歪み。		底4/6
27	83	K-1	須恵器	杯	-	-	6.4	5Y8/1灰色	チャートの 細粒砂を含む。	内底周縁部に 同心円上の条線。	著		やや軟	底1/6
27	84	K-1	須恵器	杯	-	-	6.7	2.5Y8/2 灰白色	チャートの 細粒砂を含む。	内底周縁部に 同心円上の条線。	著		やや軟	底4/6
27	85	K-1	須恵器	杯	-	-	6.8	2.5Y8/2 灰白色	チャートの 細粒砂を含む。	内底周縁部に同心円上 の条線平行圧痕。	著		やや軟	底完
27	86	K-1	須恵器	椀	17.6	6.5	8.0	5Y7/1 灰白色	チャートの 細粒砂を含む。	内底落ち込む、平行圧痕。	やや		やや軟	□1/8 底3/4
27	87	K-1	須恵器	椀	16.8	5.7	8.0	2.5Y7/2 灰黄色	チャートの 細粒砂を含む。	内底落ち込む。	著		やや軟	□底 1/4
27	88	K-1	須恵器	椀	15.6	5.3	7.2		チャートの 細粒砂を含む。	内底落ち込む、平行圧痕。	著		やや軟	□1/8 底3/5
27	89	K-1	須恵器	椀	19.8	-	-	5Y8/1 灰白色	チャートの 細粒砂を含む。	外面僅かに回転ナデ痕。 内面不定方向の磨き、 口縁部回転ナデ痕。	外面著		やや軟	□1/6
27	90	K-1	須恵器	椀	15.3	-	-	5Y7/1 灰白色	チャートの 細粒砂を含む。	内外面回転ナデ痕。				□1/12
27	91	K-1	須恵器	椀	-	-	7.2	5Y8/1 灰白色	チャートの 細粒砂を含む。	内底落ち込む。平行圧痕。	著		やや軟	底3/4
27	92	K-1	須恵器	椀	-	-	7.4	2.5Y8/1 灰白色	チャートの 細粒砂を含む。	内底落ち込む。	著		やや軟	底1/6
27	93	K-1	須恵器	椀	-	-	7.2	5Y6/1灰色	チャートの 細粒砂を含む。	板状工具痕明瞭に残る。 立上り部に粘土はみ出し痕。	著			底1/3
27	94	K-1	須恵器	椀	-	-	7.0	2.5Y8/2 灰白色	チャートの 細粒砂を含む。	内底落ち込む。	著		やや軟	底1/3
27	95	K-1	須恵器	椀	-	-	7.2	5Y8/2 灰白色	チャートの 細粒砂を含む。	内底落ち込む、回転ナデ痕。 立上り部に粘土はみ出し痕。	やや		やや軟	底5/8
27	96	K-1	須恵器	椀	-	-	6.7	2.5Y5/3 黄褐色	チャートの 細粒砂を含む。	内底落ち込む。立上り 部粘土はみ出し痕。	著		やや軟	底1/4
27	97	K-1	須恵器	椀	-	-	7.3	2.5Y8/1 灰白色	チャートの 細粒砂を含む。	内底以外摩耗著。内底落ち 込む。周縁部に同心円上 の条線。外底平行圧痕。	著		やや軟	底1/2
27	98	K-1	須恵器	椀	-	-	7.6	5Y7/2 灰白色	チャートの 細粒砂を含む。	内底落ち込む、周縁部に 同心円上の条線。平行圧痕。	著	焼成発色の異なる 破片が接合。	やや軟	底3/5
27	99	K-1	須恵器	椀	-	-	7.3	2.5Y8/1 灰白色	チャートの 細粒砂を含む。	内底落ち込む。立上り 部粘土はみ出し痕。	著		やや軟	底完

Tab.6 Ⅶ区出土遺物観察表(3)

Fig. No.	挿図番号	出土地点	種類	器種	法量 (cm)			色調	胎土	特徴	摩耗	備考	焼成	残存率
					口径	器高	底径							
27	100	K-1	須恵器	椀	-	-	7.2	2.5Y5/1 黄灰色	チャートの細粒砂を含む。	内面回転ナデ痕。内底落ち込む。平行圧痕。立上り部に粘土はみ出し痕。	著	焼き歪み。		底2/3
27	101	K-1	須恵器	椀	-	-	8.1	2.5Y6/2 灰黄色	チャートの細粒砂を含む。	内底落ち込む。周縁部に同心円上の条痕。平行圧痕。	底部以外著	外底に4本の火ダスキ。	やや軟	底完
28	102	K-1	須恵器	杯あるいは椀	15.2	-	-	5Y8/2 灰白色	チャートの細粒砂を含む。	内外面回転ナデ痕。	著		やや軟	口1/12
28	103	K-1	須恵器	杯あるいは椀	13.4	-	-	5Y8/1 灰白色	チャートの細粒砂を含む。	内面僅かに回転ナデ痕。	著		やや軟	口1/8
28	104	K-1	須恵器	杯あるいは椀	12.4	-	-	2.5Y8/2 灰白色	チャートの細粒砂を含む。	内外面回転ナデ痕。		内面に付着物(2.5Y6/1黄灰色)。	やや軟	口1/3
28	105	K-1	須恵器	杯あるいは椀	14.0	-	-	5Y8/1 灰白色	チャートの細粒砂を含む。	内外面僅かに回転ナデ痕。	著		やや軟	口1/8
28	106	K-1	須恵器	杯あるいは椀	16.8	-	-	2.5Y8/2 灰白色	チャートの細粒砂を含む。		著		やや軟	口1/8
28	107	K-1	須恵器	杯あるいは椀	14.0	-	-	5Y8/1 灰白色	チャートの細粒砂を含む。	外面僅かに回転ナデ痕。	著		やや軟	口1/10
28	108	K-1	須恵器	杯あるいは椀	14.0	-	-	2.5Y7/2 灰黄色	チャートの細粒砂を含む。		著		やや軟	口1/4
28	109	K-1	須恵器	杯あるいは椀	15.0	-	-	5Y8/2 灰白色	チャートの細粒砂を含む。	外面僅かに回転ナデ痕。	著		やや軟	口1/6
28	110	K-1	須恵器	杯あるいは椀	14.2	-	-	2.5Y7/2 灰黄色	チャートの細粒砂を含む。	内外面僅かに回転ナデ痕。	著		やや軟	口1/8
28	111	K-1	須恵器	杯あるいは椀	-	-	6.8	2.5Y7/2 灰黄色	チャートの細粒砂を含む。		著	立上り部の接合痕明瞭に残る。	やや軟	底完
28	112	K-1	須恵器	杯あるいは椀	-	-	6.0	2.5Y6/1 黄灰色	チャートの細粒砂を含む。		著		やや軟	底1/2
28	113	K-1	須恵器	杯あるいは椀	-	-	6.0	2.5Y5/1 黄灰色	チャートの細粒砂を含む。		著	内部一面にガラス質の付着物	やや軟	底1/2
28	114	K-1	不明	椀	-	-	7.4	2.5Y6/2 灰黄色	チャートの細粒砂を含む。		著		やや軟	底1/8
28	115	K-1	不明	椀	-	-	8.6	2.5Y6/2 灰黄色	チャートの細粒砂を含む。		著		やや軟	底1/6
28	116	K-1	須恵器	鉢	27.7	10.9	10.7	2.5Y8/2 灰白色	赤色チャート、チャートの角粒、風化粒を多量に含む。	内外面僅かに回転ナデ痕。	著		やや軟	口2/3 底1/2
28	117	K-1	土師器	甕	24.6	-	-	2.5Y7/2 灰黄色	チャートの角粒、風化粒を多量に含む。	内外面口縁部横ハケ後横ナデ。頸部下横ハケ。			硬	口小片
28	118	K-1	土師器	羽釜	25.6	-	-	7.5YR4/2 灰褐色	素地粗く、チャート角粒、長石、石英の微細砂を多量に含む。	外面鏝より下タテ方向のハケ。鏝接合部に指頭圧痕顕著。			硬	口1/4 口1/10
28	119	K-1	土師器	羽釜	25.6	-	-	2.5Y5/3 黄褐色	素地粗く、チャート角粒、長石、石英の微細砂を多量に含む。	外面指頭圧痕顕著。後タテ方向のハケ調整。	著			
28	120	K-1	土師器	羽釜	28.2	-	-	10YR5/4 にぶい黄褐色	素地粗く、チャート角粒、長石、石英の微細砂を多量に含む。	内外面横ナデ。外面鏝から下はタテ方向のハケ調整。				口1/12
28	121	K-1	土師器	羽釜	26.0	-	-	2.5Y5/2 暗灰黄色	素地粗く、チャート角粒、長石、石英の微細砂を多量に含む。	口縁部内外面横ナデ。鏝下はタテ方向のハケ、その下はヨコ方向のハケ。			硬	口1/4
28	123	K-1	土師器	移動式竈	-	-	-	10YR7/4 にぶい黄褐色	チャートの角粒、風化粒を多く含む。	内面粗いハケで斜め方向に調整後、ヨコ方向のナデ。	著			
30	124	灰原	土師器	小杯	10.6	2.9	5.2	10YR7/4 にぶい黄褐色	チャートの細粒砂を含む。		著	外面2/3に黒班あり。		準完
30	125	灰原	土師器	杯	14.2	4.8	6.4	2.5Y8/4 淡黄色	チャートの細粒砂を含む。	外面回転ナデ痕。内底若干落ち込む。	著	内底に黒班あり。	軟	1/6
30	126	灰原	土師器	杯	13.4	5.0	5.2	10YR7/4 にぶい黄褐色	チャートの細粒砂を含む。	僅かにナデ痕。外底圧痕。	著	内面一部に黒班あり。		口1/2 底4/6
30	127	灰原	土師器	椀	-	-	6.0	2.5Y6/2 灰黄色	チャートの細粒砂を含む。		著			底1/8
30	128	灰原	須恵器	小杯	10.1	3.1	7.5	2.5Y5/2 暗灰黄色	チャートの細粒砂を含む。		著			口1/8 底1/4
30	129	灰原	須恵器	杯	14.0	4.8	6.8	5Y8/1 灰白色	チャートの細粒砂を含む。	内外面回転ナデ痕。外底平行圧痕、粘土はみ出し痕。	内面著		やや軟	口1/6 底1/3
30	130	灰原	須恵器	杯	14.6	4.8	7.0	2.5Y7/2 灰白色	チャートの細粒砂を含む。	内底落ち込む。	著		やや軟	口1/8 底1/2
30	131	灰原	須恵器	杯	-	-	6.8	5Y7/1 灰白色	チャートの細粒砂を含む。	内外面回転ナデ痕。外底立上り部粘土はみ出し痕。	著		やや軟	底1/4

Tab.7 VII区出土遺物観察表(4)

Fig. No.	挿図番号	出土地点	種類	器種	法量 (cm)			色調	胎土	特徴	摩耗	備考	焼成	残存率
					口径	器高	底径							
30	132	灰原	須恵器	台付杯	-	-	-	2.5Y6/2 灰黄色	チャートの細粒砂を含む。		著		軟	底完
30	133	灰原	須恵器	椀	-	-	7.6	10YR7/4 にぶい黄褐色	チャートの細粒砂を含む。	内底落ち込む。外底へら切り痕。	著		やや軟	底2/3
30	134	灰原	須恵器	椀	-	-	7.4	2.5Y8/1 灰白色	チャートの細粒砂を含む。	内底落ち込む。外底平行圧痕、立上り部粘土はみ出し痕。	著	焼き歪む。	やや軟	底1/6
30	135	灰原	須恵器	椀	-	-	6.0	2.5Y8/2 灰白色	チャートの細粒砂を含む。	内底落ち込む。底部へら切り。	著		やや軟	底1/8
30	136	灰原	須恵器	椀	-	-	7.4	2.5Y6/3 にぶい黄色	チャートの細粒砂を含む。	内外面回転ナデ痕。内底落ち込む。外底平行圧痕。立上り部粘土はみ出し痕。		焼き歪む。		底1/4
30	137	灰原	須恵器	杯あるいは椀	12.8	-	-	2.5Y8/2 灰白色	チャートの細粒砂を含む。	内外面回転ナデ痕。	著		やや軟	口1/6
30	138	灰原	土師器	羽釜	20.0	-	-	2.5Y6/2 灰黄色	素地粗く、チャート角粒、長石、石英の微細砂を多量に含む。	口縁部横ナデ痕。外面鐔の接合部粘土貼り付け痕が残る。鐔の下からタテ方向のハケ。	内面著		硬	口1/8
32	140	SK-13	土師器	椀	13.2	5.7	7.3	10YR7/6 明黄褐色	チャートの細粒砂を含む。	内外面回転ナデ痕。		外面体部火ダスキ。	硬	口1/8 底2/3
32	141	SK-17	土師器	杯	14.4	5.3	7.0	2.5Y7/3 浅黄色	チャートの細粒砂を含む。	内底落ち込む。	著	内外面とも広い範囲が黒変する。		口2/3 底完
35	142	表採	土師器	杯	8.4	3.0	4.0	10YR6/4 にぶい黄褐色	チャートの細粒砂を含む。	内外面回転ナデ痕。内底落ち込む。外底糸切り痕。			硬	口1/12 底1/4
35	143	表採	土師器	台付椀	-	-	5.8	10YR7/4 にぶい黄褐色	チャートの細粒砂を含む。	外面回転ナデ痕残る。	著		やや硬	底2/3
35	144	表採	土師器	鉢	-	-	-	7.5YR8/6 浅黄褐色	赤色チャート、チャートの粗粒砂を含む。	内面ナデ痕。	外面著		やや硬	口小片
35	145	表採	土師器	羽釜	19.6	-	-	7.5YR5/2 灰褐色	素地粗く、チャート角粒、長石、石英の微細砂を多量に含む。	体部内面横位のハケ。外面鐔部下指頭圧痕。以下縦位のハケ。		外面煤ける。	硬	口1/8
35	151	表採	磁器染付	碗	11.7	6.7	4.5	7.5Y7/1 灰白色	破断面白色。	具須により回線を描く発色はにぶい青。見込部分、透明釉をかけた後釉剥ぎを施し重ね焼を行う。高台内に裂孔が存在する。高台痕或いは窯工具痕と見られる丸い痕跡が残る。		破断面白色。近世(19世紀頃)長崎波佐見か。	硬	口1/8 底1/2
35	152	表土	かわらけ	合子身	7.2	3.7	5.0	10YR8/3 浅黄褐色	精選。	底部糸切り。内面一面煤ける。		近世	硬	準完
35	153	表土	かわらけ	合子蓋	6.0	1.8	-	7.5YR8/4 にぶい橙色	精選。	152の蓋と思われる。	著	近世	硬	準完
35	154	包II層	土師器	小皿	10.4	1.5	3.4	7.5YR8/4 浅黄褐色	チャートの細粒砂を含む。		著		やや軟	口小片 底5/6
35	155	包II層	土師器	小皿	11.0	2.0	6.3	10YR7/4 にぶい黄褐色	チャートの細粒砂を含む。	底部へら切り。	著			口1/4 底完
35	156	包II層	土師器	小杯	10.4	3.1	6.6	10YR7/4 にぶい黄褐色	チャートの細粒砂を含む。		著			口1/4 底1/2
35	157	包II層	土師器	椀	-	-	7.1	2.5Y7/3浅 黄色	チャートの細粒砂を含む。		内面著		軟	底2/3
35	158	包II層	須恵器	椀	-	-	6.8	5Y7/2 灰白色	チャートの細粒砂を含む。	内底落ち込む。外面回転ナデ。外底へら切り痕。			やや軟	底1/3
35	163	包II層	白磁	碗	-	-	-	2.5Y8/2 灰白色	精選。	内外面とも細かい貫入が入る。		II類。	硬	口小片
35	164	包II層	白磁	碗	-	-	7.4	5Y7/1 灰白色	精選。	露胎部との境に二条の沈線、その下縦位の櫛描後ナデ。内面見込に沈線。荒い貫入。			硬	底5/8
35	165	包II層	青磁	椀	-	-	-	5Y6/2 灰オリーブ色	精選。	内面に割花紋と思われる文様を施す。細かい貫入が内外面に入る。	著	酸化が不十分なため発色が悪い。	硬	
36	166	包III層	土師器	小皿	8.1	1.3	5.3	2.5Y8/2 灰白色	精選。	立上り部に粘土はみ出し痕。	著		やや軟	底1/4
36	167	包III層	土師器	小皿	8.7	1.5	7.0	10YR6/4 にぶい黄褐色	チャートの細粒砂を含む。		著			口1/6 底1/2
36	168	包III層	土師器	小皿	8.8	1.7	5.8	10YR7/3 にぶい黄褐色	チャートの細粒砂を含む。		著			口1/4 底1/3
36	169	包III層	土師器	小皿	10.0	1.5	7.0	10YR8/3 浅黄褐色	チャートの細粒砂を含む。		著		やや軟	口1/6 底1/4
36	170	包III層	土師器	小皿	10.0	1.3	6.8	10YR7/6 明黄褐色	チャートの細粒砂を含む。	外底へら切り痕。	著			口1/3 底1/2

Tab.8 VII区出土遺物観察表(5)

Fig. No.	挿図番号	出土地点	種類	器種	法量 (cm)			色調	胎土	特徴	摩耗	備考	焼成	残存率
					口径	器高	底径							
36	171	包Ⅲ層	土師器	小皿	10.2	1.3	7.6	7.5YR8/4 浅黄橙色	チャートの 細粒砂を含む。				やや軟	口1/2 底完
36	172	包Ⅲ層	土師器	小皿	10.6	1.8	7.2	7.5YR6/4 にぶい黄橙色	精選。	内外面回転ナデ痕。	著			口1/8 底1/6
36	173	包Ⅲ層	土師器	小皿	10.4	1.6	7.0	7.5YR6/4 にぶい橙色	チャートの 細粒砂を含む。	切離し痕不明。	著		やや軟	口1/2 底5/8
36	174	包Ⅲ層	土師器	小皿	10.2	1.9	7.6	10YR6/3 にぶい黄橙色	チャートの 細粒砂を含む。	内外面僅かに 回転ナデ痕。	著			準完
36	175	包Ⅲ層	土師器	小皿	10.4	2.2	7.0	7.5YR6/6 橙色	チャートの 細粒砂を含む。		著			口1/3 底7/8
36	176	包Ⅲ層	土師器	小皿	10.6	1.9	7.4	7.5YR7/6 橙色	チャートの 細粒砂を含む。		著		やや軟	口1/8 底1/6
36	177	包Ⅲ層	土師器	小皿	10.6	2.0	6.2	7.5YR8/8 黄橙色	チャートの 細粒砂を含む。		著			口1/4 底1/4
36	178	包Ⅲ層	土師器	小皿	10.2	2.2	7.0	10YR6/2 灰黄褐色	チャートの 細粒砂を含む。	外底圧痕。	著		硬	口1/4 底2/3
36	179	包Ⅲ層	土師器	小皿	9.2	2.0	6.6	5YR6/4 にぶい橙色	チャートの 細粒砂を含む。		著			口1/3 底3/8
36	180	包Ⅲ層	土師器	小皿	9.2	1.2	6.8	7.5YR7/6 橙色	チャートの 細粒砂を含む。		著		硬	完形
36	181	BNⅢ	土師器	小皿	9.6	1.6	7.4	10YR8/3 浅黄橙色	チャートの 細粒砂を含む。	底部ヘラ切り痕。	著		軟	準完
36	182	包Ⅲ層	土師器	小皿	10.1	1.8	7.0	10YR7/6 明黄褐色	チャートの 細粒砂を含む。		著			口1/2 底完
36	183	包Ⅲ層	土師器	小皿	12.4	1.9	9.0	10YR7/4 にぶい黄橙色	チャートの 細粒砂を含む。		著			準完
36	184	包Ⅲ層	土師器	小皿	9.3	1.5	6.4	10YR7/4 にぶい黄橙色	チャートの 細粒砂を含む。		著			口1/3 底完
36	185	包Ⅲ層	土師器	小皿	11.8	1.2	8.2	7.5YR7/6 橙色	チャートの 細粒砂を含む。	底部ヘラ切り痕。	著			口1/6 底1/4
36	186	包Ⅲ層	土師器	小皿	10.2	2.1	6.6	7.5YR8/6 浅黄橙色	チャートの 細粒砂を含む。		著			口1/6 底1/4
36	187	包Ⅲ層	土師器	小皿	10.4	2.4	6.6	7.5YR7/4 にぶい橙色	チャートの 細粒砂を含む。		著			口1/3 底5/8
36	188	包Ⅲ層	土師器	小皿	10.6	2.4	7.6	10YR7/4 にぶい黄橙色	チャートの 細粒砂を含む。	底部ヘラ切り痕。	著			底1/2
36	189	包Ⅲ層	土師器	小皿	11.0	2.0	7.2	10YR7/4 にぶい黄橙色	チャートの 細粒砂を含む。		著		やや軟	口1/4 底1/3
36	190	包Ⅲ層	土師器	小杯	9.6	2.5	6.4	10YR7/3 にぶい黄橙色	チャートの 細粒砂を含む。	外底ヘラ切り痕。 内底回転ナデ痕。	著	内底及び外底 の半分が黒褐色 に焼ける。	やや軟	口1/8 底完
36	191	包Ⅲ層	土師器	小杯	9.6	2.9	5.4	7.5YR8/4 浅黄橙色	チャートの 細粒砂を含む。	外底平行圧痕。胴部の貼 り付け痕が観察される。	著			底2/3
36	192	包Ⅲ層	土師器	小杯	9.0	2.7	6.4	7.5YR7/6 橙色	チャートの 細粒砂を含む。		著			準完
36	193	BNⅢ	土師器	小杯	9.2	2.4	6.4	7.5YR6/6 橙色	チャートの 細粒砂を含む。	外底切離し痕不明。立 上り部粘土はみ出し痕。	著		軟	完
36	194	包Ⅲ層	土師器	小杯	9.7	2.4	5.8	7.5YR7/6 橙色	チャートの 細粒砂を含む。		著			口1/3 底1/3
36	195	包Ⅲ層	土師器	小杯	9.7	3.2	5.5	10YR7/3 にぶい黄橙色	チャートの 細粒砂を含む。	外底粘土はみだし痕。	著			口1/6 底完
36	196	包Ⅲ層	土師器	小杯	9.8	2.8	7.0	2.5Y6/1 黄灰色	チャートの 細粒砂を含む。		著		やや軟	口1/3 底2/3
36	197	包Ⅲ層	土師器	小杯	10.0	2.7	6.6	7.5YR7/8 黄橙色	チャートの 細粒砂を含む。	粘土はみだし痕。				口1/3 底1/3
36	198	包Ⅲ層	土師器	小杯	10.0	3.1	6.6	10YR6/2 灰黄褐色	チャートの 細粒砂を含む。	内外面回転ナデ痕。 外底圧痕、立上り部 粘土はみ出し痕。	著	タール状の黒色 の付着物が認め られる内面僅か に煤が付着		口1/2 底完
36	199	包Ⅲ層	土師器	小杯	10.2	3.5	7.0	7.5YR7/6 橙色	チャートの 細粒砂を含む。		著	内面僅かに 煤が付着。	やや軟	口1/2 底完
36	200	包Ⅲ層	土師器	小杯	10.3	2.9	6.2	10YR7/3 にぶい黄橙色	チャートの 細粒砂を含む。					口1/3 底2/3
36	201	包Ⅲ層	土師器	小杯	11.0	3.1	5.4	10YR7/3 にぶい黄橙色	チャートの 細粒砂を含む。	内外面僅かに回転ナデ 痕外底平行圧痕。	やや			口1/8 底1/3
36	202	包Ⅲ層	土師器	小杯	10.9	3.6	6.5	10YR6/3 にぶい黄橙色	チャートの 細粒砂を含む。	内外面回転ナデ痕。 外底平行圧痕、立上り部 粘土はみ出し痕。	著			口1/5 底1/2
36	203	包Ⅲ層	土師器	杯	10.8	3.1	7.2	10YR7/6 明黄褐色	チャートの 細粒砂を含む。		著			口2/6 底1/2
36	204	包Ⅲ層	土師器	杯	11.8	3.0	6.6	7.5YR7/4 にぶい橙色	チャートの 細粒砂を含む。	外面回転ナデ痕。	著	外面に 黒斑あり。	やや軟	口1/8 底1/3

Tab.9 VII区出土遺物観察表(6)

Fig. No.	挿図番号	出土地点	種類	器種	法量 (cm)			色調	胎土	特徴	摩耗	備考	焼成	残存率
					口径	器高	底径							
36	205	包Ⅲ層	土師器	杯	11.2	3.6	7.8	10YR7/4 にぶい黄橙色	チャートの 細粒砂を含む。		著			口1/6 底完
36	206	包Ⅲ層	土師器	杯	11.8	4.5	7.4	7.5YR6/6 橙色	チャートの 細粒砂を含む。		著		やや軟	口1/6 底5/8
36	207	包Ⅲ層	土師器	杯	11.8	4.0	7.0	2.5Y6/2 灰黄色	チャートの 細粒砂を含む。	外底粘土はみ出し痕。	著	内底に圧痕。	やや軟	底1/2
36	208	包Ⅲ層	土師器	杯	13.0	2.8	8.4	5YR5/8 明赤褐色	チャートの 細粒砂を含む。	内底落ち込む。				口1/3 底1/4
36	209	包Ⅲ層	土師器	杯	13.0	3.6	7.0	7.5YR7/6 橙色	チャートの 細粒砂を含む。	底部へラ切りと 思われる。	著	外面半分に 黒班あり。		口1/12 底完
36	210	包Ⅲ層	土師器	杯	13.2	4.3	7.4	10YR7/3 にぶい黄橙色	チャートの 細粒砂を含む。	外面回転ナデ痕。 底部へラ切り。	内面 著			底1/4
36	211	包Ⅲ層	土師器	杯	13.6	4.6	7.6	10YR7/3 にぶい黄橙色	チャートの 細粒砂を含む。	外面回転ナデ痕僅かに残る。 外底平行圧痕、立上り部に 粘土はみ出し痕。体部接合 痕顕著に観察される。	著		やや軟	準完
36	212	包Ⅲ層	土師器	杯	14.6	5.0	7.5	10YR7/4 にぶい黄橙色	チャートの 細粒砂を含む。	内底落ち込む。外面回転ナデ 痕僅かに残る。外底立上り部 粘土はみ出し痕。	著	内底に 黒班あり。		口1/8 底1/4
36	213	包Ⅲ層	土師器	杯	-	-	7.8	10YR8/4 浅黄橙色	チャートの 細粒砂を含む。		著			底1/3
36	214	包Ⅲ層	土師器	杯	-	-	6.6	7.5YR6/6 橙色	チャートの 細粒砂を含む。		著			底7/8
36	215	包Ⅲ層	土師器	杯	-	-	5.2	10YR7/4 にぶい黄橙色	チャートの 細粒砂を含む。	外底へラ切り痕。	著			底1/3
36	216	包Ⅲ層	土師器	杯	-	-	7.0	10YR8/3 浅黄橙色	チャートの 細粒砂を含む。	外底圧痕、立上り部 粘土はみ出し痕。	著		やや軟	底完
36	217	包Ⅲ層	土師器	椀	15.6	-	-	10YR7/4 にぶい黄橙色	精選。雲母、長石 の微細砂を含む。	口縁部内面に沈線。		搬入品。		口1/12
36	218	包Ⅲ層	土師器	椀	-	-	-	7.5YR7/4 にぶい橙色	精選。		著		やや軟	口小片
36	219	包Ⅲ層	土師器	椀	-	-	-	7.5YR8/4 浅黄橙色	精選。		著		やや軟	口小片
36	220	包Ⅲ層	土師器	椀	13.0	-	-	5YR7/4 にぶい橙色	精選。	口縁部内面に沈線。	著			口小片
36	221	包Ⅲ層	土師器	椀	15.1	-	-	7.5YR8/4 浅黄橙色	精選。	口縁部内面に沈線。	著		やや軟	口1/10
36	222	包Ⅲ層	土師器	椀	16.8	-	-	2.5Y7/2 灰黄色	チャートの 細粒砂を含む。	内外面僅かに回転ナデ 痕。	著		やや軟	口1/3
36	223	包Ⅲ層	土師器	椀	-	-	7.0	7.5YR6/6 橙色	チャートの 細粒砂を含む。	内底落ち込む。	著		やや軟	底完
36	224	包Ⅲ層	土師器	椀	-	-	5.7	5YR6/6 橙色	チャートの 細粒砂を含む。	内底落ち込む。 外底糸切り痕。	著		軟	底完
36	225	包Ⅲ層	土師器	椀	-	-	6.8	7.5YR8/4 浅黄橙色	チャートの 細粒砂を含む。	外底糸切りと思われる。	著		やや軟	底完
36	226	包Ⅲ層	土師器	椀	-	-	5.7	7.5YR7/6 橙色	チャートの 細粒砂を含む。	外底糸切り痕。	著		軟	底完
36	227	包Ⅲ層	土師器	椀	-	-	5.2	10YR6/4 にぶい黄橙色	チャートの 細粒砂を含む。	内底落ち込む。 外底糸切り痕。				底完
36	228	包Ⅲ層	土師器	椀	-	-	7.0	10YR8/4 浅黄橙色	チャートの 細粒砂を含む。		著		やや軟	底1/4
36	229	包Ⅲ層	土師器	椀	-	-	7.2	10YR7/4 にぶい黄橙色	チャートの 細粒砂を含む。		著		やや軟	底1/3
36	230	包Ⅲ層	土師器	椀	-	-	8.6	10YR8/4 浅黄橙色	チャートの 細粒砂を含む。		著			底3/4
36	231	包Ⅲ層	土師器	台付皿	-	-	5.8	7.5YR7/3 にぶい橙色	精選。	内外面回転ナデ痕。外底 切離し後きれいにナデ消す。	やや			底完
36	232	包Ⅲ層	土師器	台付椀	-	-	8.2	10YR7/3 にぶい黄橙色	チャートの 細粒砂を含む。	高台部分内外面 僅かに回転ナデ痕。	著			底1/6
36	233	包Ⅲ層	土師器	杯ある いは椀	12.6	-	-	10YR8/3 浅黄橙色	チャートの 細粒砂を含む。		著		やや軟	口小片
36	234	包Ⅲ層	土師器	杯ある いは椀	-	-	7.0	7.5YR8/4 浅黄橙色	チャートの 細粒砂を含む。	内底回転ナデ痕。 外底僅かに糸切り痕。	著			底完
37	235	包Ⅲ層	須恵器	杯	10.8	2.7	6.6	2.5Y7/2 灰黄色	チャートの 細粒砂を含む。		著		やや軟	口1/3 底1/3
37	236	包Ⅲ層	須恵器	杯	-	-	6.0	2.5Y8/2 灰白色	チャートの 細粒砂を含む。		著		やや軟	底のみ
37	237	包Ⅲ層	須恵器	杯	-	-	7.0	2.5Y8/1 灰白色	チャートの 細粒砂を含む。	内底僅かに落ち込む、 周縁部に同心円上の条線。	外面 著		やや軟	底1/3
37	238	包Ⅲ層	須恵器	椀	16.4	6.7	8.2	2.5Y8/2 灰白色	精選。	内外面回転ナデ後ミガ キ。外底糸切り痕。	やや	内外面 十字火ダスキ。	硬	準完

Tab.10 VI区出土遺物観察表(7)

Fig. No.	挿図番号	出土地点	種類	器種	法量 (cm)			色調	胎土	特徴	摩耗	備考	焼成	残存率
					口径	器高	底径							
37	239	包Ⅲ層	須恵器	椀	13.8	6.1	6.8	10YR8/2 灰白色	精選。		著		やや軟	口1/5 底1/2
37	240	包Ⅲ層	須恵器	椀	15.2	-	-	10YR8/4 浅黄橙色	精選。		著		軟	口1/10
37	241	包Ⅲ層	須恵器	椀	-	-	-	2.5Y7/2 灰黄色	非常に精選。	内外面回転ナデ痕。後ミガキ。			硬	口小片
37	242	包Ⅲ層	須恵器	椀	15.0	-	-	2.5Y7/1 灰白色	非常に精選。	口縁部内面に沈線、内面回転ナデ後タテ方向に放射状のミガキ。外面上半は回転ナデ後ヨコ方向にミガキ。一方向のケズリ。底部付近は回転ナデ痕跡顕著。		外面 火ダスキ。	硬	口1/4
37	243	包Ⅲ層	須恵器	椀	-	-	-	5Y8/2 灰白色	精選。	内外回転ナデ後内面ミガキ、外面もミガキとみられる。	やや		硬	口1/12
37	244	包Ⅲ層	須恵器	椀	-	-	-	2.5Y8/2 灰白色	精選。		著		やや軟	口1/12
37	245	包Ⅲ層	須恵器	椀	14.4	-	-	2.5Y7/1 灰白色	非常に精選。	内外面回転ナデ後ミガキ。	やや	内外面 火ダスキ	硬	口1/6
37	246	包Ⅲ層	須恵器	椀	-	-	8.4	2.5Y8/2 灰白色	チャートの細粒砂を含む。		著		やや軟	底1/4
37	247	包Ⅲ層	須恵器	椀	15.0	5.9	7.8	2.5Y7/2 灰黄色	チャートの細粒砂を含む。		外面 著		やや軟	口1/2 底完
37	248	包Ⅲ層	須恵器	椀	16.2	-	-	2.5Y8/3 淡黄色	チャートの細粒砂を含む。	外面ナデ痕。	著			口1/4
37	249	包Ⅲ層		椀	-	-	7.3	2.5Y5/2 暗灰黄色	チャートの細粒砂を含む。	外底圧痕。	著	内外面とも 黒班あり。	軟	底2/3
37	250	包Ⅲ層	須恵器	椀	-	-	6.8	2.5Y7/4 浅黄色	チャートの細粒砂を含む。	外底僅かに糸切り痕残る。	著		やや軟	底完
37	251	包Ⅲ層	須恵器	椀	-	-	-	2.5Y7/2 灰黄色	チャートの細粒砂を含む。	内外面回転ナデ痕。				口1/8
37	252	包Ⅲ層	須恵器	椀	-	-	6.4	7.5Y7/1 灰白色	チャートの細粒砂を含む。	内外面回転ナデ痕。外底糸切り痕、粘土はみだし痕。		外面火ダスキ。		底1/3
37	253	包Ⅲ層	須恵器	椀	-	-	6.6	2.5Y7/3 浅黄色	精選。	内外面回転ナデ痕。内底落ち込む。外底糸切り痕。高台貼り付け痕が観察される。		内外面 十字火ダスキ。		底完
37	254	包Ⅲ層	須恵器	椀	-	-	7.4	5Y8/1 灰白色	チャートの細粒砂を含む。	内底落ち込む。外底切離し痕不明、立上り部粘土はみ出し痕。	著		やや軟	底完
37	255	包Ⅲ層	須恵器	椀	-	-	6.6	10YR8/2 灰白色	チャートの細粒砂を含む。		著		やや軟	底完
37	256	包Ⅲ層	須恵器	椀	16.2	-	-	2.5Y8/2 灰白色	チャートの細粒砂を含む。	内底落ち込む。外底糸切り痕。外面僅かに回転ナデ痕残る。	著			底1/2
37	257	包Ⅲ層	須恵器	椀	-	-	7.0	7.5Y7/1 灰白色	チャートの細粒砂を含む。	内底落ち込む。外底糸切り痕、平行圧痕。内外面回転ナデ痕。			やや軟	底1/2
37	258	包Ⅲ層	須恵器	椀	-	-	6.8	2.5Y8/1 灰白色	チャートの細粒砂を含む。		著		やや軟	底完
37	259	包Ⅲ層	須恵器	椀	-	-	7.8	5YR6/6 橙色	精選。	内底粘土巻き上げ痕。	著		硬	底完
37	260	包Ⅲ層	須恵器	椀	-	-	-	5YR6/6 橙色	チャートの細粒砂を含む。		著	台付皿かフタか。		(底完)
37	261	包Ⅲ層	須恵器	杯あるいは椀	-	-	8.2	7.5YR7/4 にぶい橙色	チャートの細粒砂を含む。	内底粘土巻き上げ痕顕著。外底糸切り痕僅かに残る。	著		やや軟	底1/3
37	262	包Ⅲ層	須恵器	杯あるいは椀	12.0	2.5	6.8	2.5Y6/2 灰黄色	チャートの細粒砂を含む。		著	器高の高い杯の可能性もあるが体部の摩耗がはげしく、不明。		底3/8
37	263	包Ⅲ層	黒色土器	椀	-	-	-	2.5Y3/1 黒褐色	非常に精選。雲母の微細砂含む。	内外面ミガキ。		搬入品。	硬	口小片
37	264	包Ⅲ層	黒色土器	椀	-	-	-	2.5Y3/1 黒褐色	精選。雲母の微細砂含む。	内外面ミガキ。		搬入品。		口1/12
37	265	包Ⅲ層	黒色土器	椀	-	-	-	内：2.5Y3/1 黒褐色 外：10YR6/4 にぶい黄橙色	精選。雲母の微細砂含む。	内外面ミガキ。	著	搬入品。		口小片
37	266	包Ⅲ層	黒色土器	椀	-	-	-	内：2.5Y3/1 黒褐色 外：7.5Y5/4 にぶい褐色	精選。雲母の微細砂含む。	内面ミガキと思われる。	著	搬入品。		口小片
37	267	包Ⅲ層	黒色土器	椀	-	-	-	内：N2/黒色 外：10YR6/6 明黄褐色	精選。雲母の微細砂含む。	内外面ミガキ。	著	搬入品。		口小片
37	268	包Ⅲ層	黒色土器	椀	-	-	-	内：2.5Y2/1 黒褐色 外：5YR5/6 明褐色	精選。雲母の微細砂含む。	内面ミガキと思われる。	著	搬入品。		口小片

Tab.11 VII区出土遺物観察表(8)

Fig. No.	挿図番号	出土地点	種類	器種	法量 (cm)			色調	胎土	特徴	摩耗	備考	焼成	残存率
					口径	器高	底径							
37	269	包Ⅲ層	黒色土器	椀	-	-	-	2.5Y2/1 黒色	精選。雲母の微細砂含む。	内外面とも丁寧なミガキ。		搬入品。		口小片
37	270	包Ⅲ層	黒色土器	椀	-	-	8.4	N3/1 暗灰色	精選。雲母の微細砂含む。	切離し痕不明。	著	搬入品。		底1/4
37	271	包Ⅲ層	黒色土器	椀	-	-	-	内:5Y4/1 灰色 外:2.5Y8/3 淡黄色	チャートの微細砂を含む。	内面ナデ後ミガキ。	著		やや軟	口小片
37	272	包Ⅲ層	黒色土器	椀	-	-	8.4	内:2.5GY3/1 暗オリーブ灰色 外:5YR7/6 橙色	チャートの微細砂を含む。		著			底1/4
37	273	包Ⅲ層	黒色土器	椀	-	-	7.0	内:5YR2/1 黒褐色 外:5YR6/6 橙色	チャートの微細砂を含む。	内面ミガキ。	著			底1/6
37	274	包Ⅲ層	黒色土器	椀	-	-	7.6	内:10YR4/1 褐灰色 外:10YR6/4 にぶい黄褐色	チャートの微細砂を含む。	内面ミガキ。	著			底1/8
37	275	包Ⅲ層	黒色土器	椀	-	-	8.6	内:2.5Y3/1 黒褐色 外:10YR6/4 にぶい黄褐色	チャート、火山ガラスの微細砂を含む。	内面ミガキ。	著			底1/10
37	276	包Ⅲ層	黒色土器	椀	-	-	8.0	内:5Y4/1 灰色 外:7.5YR7/4 にぶい橙色	チャートの微細砂を含む。	内面ミガキと思われる。	著			底1/6
37	277	包Ⅲ層	黒色土器	椀	-	-	8.2	内:7.5YR3/1 黒褐色 外:7.5YR6/4 にぶい橙色	チャートの微細砂を含む。	内面ミガキ。	著			底1/12
37	278	包Ⅲ層	黒色土器	椀	-	-	9.0	内:10YR4/1 褐灰色 外:10YR6/4 にぶい黄褐色	チャートの微細砂を含む。	内面ミガキ。	著			底1/12
37	279	包Ⅲ層	黒色土器	椀	-	-	9.6	内:5Y4/1 灰色 外:5YR6/8 橙色	チャートの微細砂を含む。	内面ミガキ。	著			底1/8
37	280	包Ⅲ層	黒色土器	椀	-	-	10.2	内:2.5Y3/1 黒褐色 外:7.5Y6/6 橙色	チャートの微細砂を含む。	内面ミガキ。	外面著			底1/6
37	281	包Ⅲ層	黒色土器	甕	-	-	-	内:10YR3/1 黒褐色 外:10YR4/3 にぶい黄褐色	精選。雲母の微細砂を多量に含む。	内面ミガキ。外面もミガキと思われる。		搬入品。		口小片
38	282	包Ⅲ層	土師器	甕	13.8	-	-	10YR6/4 にぶい黄褐色	チャート、石英の微細砂を多量に含む。	頸部内面でヘラケズリ。内外面指頭圧痕。胴部外面煤ける。	著	胴部外面煤ける。		口1/8
38	283	包Ⅲ層	土師器	甕	12.0	-	-	7.5YR7/4 にぶい橙色	チャート、石英の微細砂を多量に含む。	頸部内面でヘラケズリ。外面指頭圧痕。	著			口1/8
38	284	包Ⅲ層	土師器	甕	19.5	-	-	7.5YR6/4 にぶい橙色	チャートの角粒風化粒を含む。	内面横ナデ痕。外面横位の粗いハケ後横ナデ。		口縁部付近煤ける。		口1/12
38	285	包Ⅲ層	土師器	甕	19.0	-	-	7.5YR7/4 にぶい橙色	チャートの角粒風化粒を含む。	胴部外面横向きの粗いハケ。	著			口1/6
38	286	包Ⅲ層	土師器	甕	22.0	-	-	7.5YR8/4 浅黄褐色	チャートの角粒風化粒を含む。	内外面強い横ハケ調整。口縁部下2度の横ナデ。		外面煤ける。		口1/8
38	287	包Ⅲ層	土師器	甕	26.6	-	-	5YR6/6 橙色	素地粗く、チャート角粒、風化粒を多量に含む。	内面強い横位のハケ。外面口縁部横ナデ痕下半は指頭圧痕後縦位のハケ。			硬	口1/10
38	288	包Ⅲ層	土師器	甕	21.8	-	-	7.5YR7/6 橙色	チャートの角粒風化粒を含む。	内面僅かにナデ痕。	著			口小片
38	289	包Ⅲ層	土師器	甕	22.7	-	-	5YR6/6 橙色	素地粗く、チャート角粒、風化粒を多量に含む。	口縁部内面指頭圧痕後横ナデ痕、外面横ナデ痕。胴部指頭圧痕後タテ方向のハケ。	著			口1/12
38	290	包Ⅲ層	土師器	羽釜	24.0	-	-	7.5YR5/4 にぶい褐色	素地粗く、チャート角粒、長石、石英の微細砂を多量に含む。雲母の微細砂を少量含む。	内面横ナデ痕。	外面著	搬入品か。	硬	口1/8

Tab.12 Ⅵ区出土遺物観察表(9)

Fig. No.	挿図番号	出土地点	種類	器種	法量 (cm)			色調	胎土	特徴	摩耗	備考	焼成	残存率
					口径	器高	底径							
38	291	包Ⅲ層	土師器	羽釜	17.4	-	-	7.5YR6/6 橙色	素地粗く、チャート、長石、石英の微細砂を多量に含む。		著	外面赤変。		口1/8
38	292	包Ⅲ層	土師器	鉢	-	-	-	7.5YR7/6 橙色	チャートの粗粒砂を含む。	内外面粗いハケ。	著			口小片
38	293	包Ⅲ層	土師器	鉢	-	-	-	7.5YR8/6 浅黄橙色	チャートの粗粒砂を含む。		著			口小片
38	294	包Ⅲ層	土師器	鉢	-	-	-	7.5YR7/4 にぶい橙色	チャートの粗粒砂を含む。	内外面ナデ痕。			硬	口小片
38	295	包Ⅲ層	土師器	鉢	-	-	-	5YR6/4 にぶい橙色	チャートの粗粒砂を含む。	内外面ナデ痕 僅かに残る。	著			口小片
38	296	包Ⅲ層	須恵器	鉢	-	-	-	5Y8/2 灰白色	チャートの細粒砂を含む。		著		やや軟	口小片
38	297	包Ⅲ層	須恵器	鉢	19.0	-	-	2.5Y8/1 灰白色	チャートの細粒砂を含む。		著		やや軟	口1/3
38	298	包Ⅲ層	須恵器	鉢	-	-	9.0	2.5Y8/1 灰白色	チャートの細粒砂を含む。	外底ヘラ切り痕。	著		軟	底完
38	299	包Ⅲ層	須恵器	篠鉢	20.0	-	-	5Y6/1 灰色	精選。			鉢Ⅱ類伊野編年H期。	硬	口小片
38	300	包Ⅲ層	須恵器	篠鉢	19.0	-	-	7.5Y7/1 灰白色	精選。			鉢Ⅱ類伊野編年H期。	硬	口小片
38	301	包Ⅲ層	須恵器	篠鉢	20.4	-	-	5Y7/1 灰白色	精選。			鉢Ⅱ類伊野編年H期。	硬	口小片
38	302	包Ⅲ層	須恵器	篠鉢	-	-	8.2	N6/灰色	精選。	内外面回転ナデ痕顕著。底部糸切り、外底立上り部に粘土はみだし痕。		鉢Ⅱ類伊野編年H期鉢C。	硬	底1/3
38	303	包Ⅲ層	須恵器	双耳壺	胴径 18.5	-	-	N5/灰色	チャートの細粒砂を含む。	内面回転ナデ痕。頸部粘土接合痕。指頭圧痕。外面回ナデ痕。突帯より下は叩き後ナデ。耳は粘土板を突帯に貼り付け、周辺をナデで仕上げる。		外面一部自然釉がかかる。	硬	頸全 肩1/2
38	304	包K層	須恵器	壺	胴径 14.6	-	-	2.5Y6/1 黄灰色	精選。	内面横ナデ痕。 外面横ナデ後ケズリ。			良好	肩部1/4
39	305	包Ⅲ層	須恵器	甕	25.2	-	-	5Y5/1 灰色	精選。	内外面ナデ。頸部に当り痕、工具は不明。			硬	口1/6
39	306	包Ⅲ層	須恵器	甕	24.8	-	-	N6/1 灰色	チャートの細粒砂を含む。	外面平行タタキ目を不定方向に何度か施す。内面同心円状の当て具痕僅かに残る。指頭圧痕、口縁部内外面及び内面横ナデ痕。				口1/12
39	307	包Ⅲ層	須恵器	甕	胴径 27.6	-	-	2.5Y6/1 黄灰色	チャートの細粒砂を含む。	外面平行タタキ目顕著、内面同心円状当て具痕、頸部内外面タタキ後横ナデ。			硬	肩部1/8
39	308	包Ⅲ層	須恵器	甕	-	-	-	2.5YR5/3 にぶい赤橙色	チャートの細粒砂を含む。	外面平行タタキ目。			硬	細片
39	331	包Ⅳ層	土師器	小杯	9.5	2.3	6.0	10YR8/3 浅黄橙色	チャートの細粒砂を含む。	外底平行圧痕。	著	内外底に黒班あり。	やや軟	口1/3 底完
2	332	包Ⅳ層	土師器	小杯	10.6	2.7	-	7.5YR7/6 橙色	チャートの細粒砂を含む。		著			底1/2
3	333	包Ⅳ層	土師器	杯	13.6	3.1	4.0	10YR7/6 明黄褐色	チャートの細粒砂を含む。	僅かに回転ナデ痕。	著			口1/12 底1/2
5	334	包Ⅳ層	土師器	杯	14.0	3.5	5.6	10YR8/4 浅黄橙色	チャートの細粒砂を含む。	内面回転ナデ痕。	外面著		やや軟	口1/8
4	335	包Ⅳ層	土師器	杯	15.2	2.9	10.6	7.5YR7/6 橙色	チャートの細粒砂を含む。		著			口1/8
6	336	包Ⅳ層	土師器	杯	13.4	-	-	10YR7/6 明黄褐色	チャートの細粒砂を含む。	外面僅かに回転ナデ痕残る	著	内面一部に黒班あり。		口1/3
7	337	包Ⅳ層	土師器	台付皿	-	-	8.6	7.5YR6/6 橙色	精選。長石の細粒砂を含む。	外底に圧痕。	著			底1/3
8	338	包Ⅳ層	須恵器	杯	13.6	5.6	7.0	5Y8/2 灰白色	チャートの細粒砂を含む。	内外面回転ナデ痕。外底立上り部粘土はみだし痕			やや軟	底1/6
9	339	包Ⅳ層	須恵器	椀	-	-	6.8	5Y8/1 灰白色	非常に精選。	内外面ミガキ。外底ケズリ。内底立上り部タテ方向にナデた後横にミガキ。		高台は欠損又は摩耗。	硬	底1/8
10	340	包Ⅳ層	黑色土器	椀	12.4	5.3	7.2	内；5Y2/1 黒色 外；10YR7/3 にぶい黄橙色	チャートの細粒砂を含む。	内面コテ当て痕。内外面ミガキ。	著			口1/8 底1/3
11	341	包Ⅳ層	土師器	鉢	-	-	14.0	10YR7/4 にぶい黄橙色	赤色チャート、チャートの角粒、風化粒を含む。	内外面ナデ痕。				底1/6

Tab.13 VII区出土遺物観察表(10)

Fig. No.	挿図番号	出土地点	種類	器種	法量 (cm)			色調	胎土	特徴	摩耗	備考	焼成	残存率
					口径	器高	底径							
12	342	包IV層	土師器	甕	16.0	-	-	7.5YR7/4 にぶい橙色	チャートの角粒 風化粒を含む。	外面頸部より下タタキ。 口縁部に指頭圧痕。	著			口1/4
14	343	包IV層	須恵器	転用硯	-	-	-	内：2.5Y6/1 黄灰色 外： 2.5Y5/1黄灰色	精選。	外面平行タタキ後回転ナデ。 内面硯面は摩耗するが同心 円上のタタキ目が残る。		須恵器甕を硯に 転用したもの。	硬	
17	346	包V層	土師器	小杯	9.6	2.7	6.4	10YR6/4 にぶい黄橙色	チャートの 細粒砂を含む。	内面回転ナデ痕、内底 に同心円状の条痕。	外面 著	内面煤ける。		口1/2 底7/8
18	347	包V層	土師器	小杯	10.2	2.8	6.0	10YR7/4 にぶい黄橙色	チャートの 細粒砂を含む。	外底圧痕。	著		やや軟	口1/6 底完
19	348	包V層	土師器	杯	-	-	6.8	7.5YR6/6 橙色	チャートの 細粒砂を含む。	外底平行圧痕。	著		軟	底完
20	349	包V層	黒色土器	椀	-	-	-	2.5Y3/1 黒褐色	精選。雲母の 微細砂含む。	内外面ミガキ。		搬入品。		口小片
21	350	包V層	土師器	甕	17.7	-	-	7.5YR6/4 にぶい橙色	チャートの角粒 風化粒を含む。	内面及び外面上半強い横 ナデ。外面下半タタキ調整。				口1/4
22	351	包V層	土師器	甕	23.4	-	-	5YR6/6 橙色	素地粗く、チャ ート角粒、風化粒 を多量に含む。	口縁部内外面横ナデ痕。	著	外面半分に 黒班あり。	硬	口1/6
23	352	包V層	土師器	羽釜	22.0	-	-	7.5YR7/6 橙色	素地粗く、チャ ート角粒、長石、石 英の微細砂を多 量に含む。	外面口縁部下まで横ナデ、 以下はタテ方向のハケ。	著		硬	口1/6
24	353	包V層	土師器	羽釜	23.4	-	-	5YR5/6 明褐色	素地粗く、チャ ート角粒、長石、石 英の微細砂を多 量に含む。		著	内面 赤変する。	硬	口1/12
25	354	包V層	須恵器	壺	-	-	11.6	7.5Y6/灰色	チャートの細粒砂 を含む。	外底切離し後丁寧にな デ消す。内外面回転ナデ痕。				底1/6

Tab.14 VII区 出土遺物観察表(11) —石器・鉄器—

Fig. No.	挿図番号	出土地点	石質	器種	重量	特徴
9	32	VII区	砂岩	叩石	23.5	砥石としても使用
18	52	SK2			18.1	敲打痕のない円礫
18	53	SK2			25.1	敲打痕のない円礫
40	329	包III層	砂岩	叩石	211	階円形の球状を呈する叩石。上端部、周縁部、表裏面ともに敲打痕あり。
40	330	包III層	鉄	不明	31.5	中央に摘み様の突出部を持つ。

Tab.15 出土遺物観察表(12) —瓦—

Fig. No.	挿図番号	出土地点	種類	焼成	凹面		凸面		色調		厚さ	
					磨耗	特徴	磨耗	特徴	凹面	凸面		
9	26	VII区	平瓦	不良	布目痕。		繩蓆叩き			2.5Y7/3浅黄色	1.5	
9	27	VII区	丸瓦	並	布目痕。		横位の条痕			2.5Y6/2灰黄色	1.7	
16	34	P-5	平瓦			著	繩蓆叩き	著		7.5YR8/6浅黄橙色	2.7	
16	35	P-5	丸瓦	不良	僅かに布目痕。	著		著		10YR8/4浅黄橙色	7.5YR7/6橙色	2.0
18	50	SK2	丸瓦	不良	布目痕。タテ方向に圧痕。		ヨコ方向のナデ			10YR8/3浅黄橙	10YR8/3浅黄橙	2.7
18	51	SK2	平瓦	やや不良	布目痕僅かに残る。	著		著		2.5Y7/4浅黄色		2.6
28	122	K-1	不明	不良	剥落。		繩蓆叩き	著		2.5Y8/2灰白色		—
30	139	灰原IV	不明	不良		著	繩蓆叩き	著		7.5Y4/1灰色		—

Tab.16 出土遺物観察表(13) 一瓦一

Fig. No.	挿図番号	出土地点	種類	焼成	凹面		凸面		色調		厚さ
						磨耗	特徴	磨耗	凹面	凸面	
35	146	表採	平瓦	不良	布目痕。		赤変	著	7.5YR6/4にぶい橙色		2.0
35	147	表採	平瓦	やや不良	布目ではなく平行の圧痕。		縄蓆叩き		2.5Y6/4にぶい橙色		2.2
35	148	表採	不明	やや不良	僅かに布目痕。				7.5Y6/1灰色		1.7
35	149	表採	平瓦	やや不良	布目痕。		縄蓆叩き		N6/灰色		1.6
35	150	表採	不明	やや不良		著	縄蓆叩き		2.5Y7/3浅黄色		2.1
35	159	包Ⅱ層	平瓦								
35	160	包Ⅱ層	不明	不良	布目痕。	著		著	2.5Y8/3淡黄色	2.5Y8/1灰色	1.5
35	161	包Ⅱ層			布目痕、側縁面取り。		縄蓆叩き。後ナデ。		10YR7/4にぶい黄褐色	10YR7/6明黄褐色	1.6
35	162	包Ⅱ層	丸瓦	不良	布目痕、圧痕、側縁面取り。		縄蓆叩き		2.5Y8/2灰色		2.0
39	309	包Ⅲ層	不明	不良	布目痕。	著	剥落		10YR7/2浅黄褐色		—
39	310	包Ⅲ層	平瓦	良好	布目痕、圧痕。端部、側面面取り。		端部、側面面取り		N5/灰色		2.0
39	311	包Ⅲ層	平瓦	やや不良	剥落。		縄蓆叩き	著	7.5Y7/6橙色		2.4
39	312	包Ⅲ層	平瓦	不良	布目痕。	著	剥落		2.5Y8/1灰色		1.7
39	313	包Ⅲ層	平瓦	やや不良	布目痕。		縄蓆叩き		N4/灰色		2.5
39	314	包Ⅲ層	平瓦	不良	布目痕。外側はナデ消す。一部黒変。		縄蓆叩き。叩き後ナデ。側面面取り。一部黒変		10YR7/6にぶい黄橙	10YR7/6にぶい黄橙	2.0
39	315	包Ⅲ層	平瓦	不良	剥落。	著	縄蓆叩き	著	10YR7/6明黄褐色		2.4
39	316	包Ⅲ層	平瓦		布目痕。側面面取り。		ヨコ方向のナデ	著	7.5YR7/4にぶい橙色		2.1
39	317	包Ⅲ層	丸瓦	不良		著		著	10YR8/4浅黄褐色		1.8
39	318	包Ⅲ層	不明	不良			縄蓆叩き		10YR7/4にぶい黄橙色		2.0
39	319	包Ⅲ層	丸瓦	不良	布目痕、圧痕。	著		著	2.5Y8/2灰白色		1.8
39	320	包Ⅲ層	不明		布目痕、圧痕。		縄蓆叩き。叩き後横方向のナデ。		7.5YR7/4にぶい橙色		2.0
40	321	包Ⅲ層	丸瓦	不良	布目痕。タテ方向に圧痕。		タテ方向にヘラケズリ後横位ナデ		5Y8/1灰白色	5Y8/1灰白色	1.7
40	322	包Ⅲ層	丸瓦	並	布目圧痕。タテ方向に圧痕。指紋を残す。		横位ナデ。端部及び端面はヘラ調整。		2.5Y5/8黄灰色	2.5YR6/3にぶい黄色	4.0
40	323	包Ⅲ層	不明	やや不良	布目痕。			著	10YR8/6黄褐色		2.0
40	324	包Ⅲ層	丸瓦	やや不良	布目痕。側縁面取り。	著	縄蓆叩き。叩き後ナデ。	著	2.5Y8/4淡黄色		2.1
40	325	包Ⅲ層	丸瓦	不良	布目痕。		タテ方向のナデ	著	2.5Y8/4淡黄色		2.5
40	326	包Ⅲ層	丸瓦	良好	布目痕。角は面取り。		ヨコ方向にナデ。側面面取り。		5Y5/1灰白色		
40	327	包Ⅲ層	丸瓦	並	布目痕。タテ方向に圧痕。		縄蓆叩き。叩き後タテ方向にナデる		7.5YR7/6橙色	7.5YR7/6橙色	2.0
40	328	包Ⅲ層	丸瓦	不良	布目痕。		タテ方向のナデ	著	2.5Y8/3淡黄色		2.0
41	344	表採	平瓦	やや不良	端面まで布目痕。		縄蓆叩き	著	2.5Y8/4浅黄褐色	10YR8/2灰白色	2.1
41	345	包Ⅳ層	平瓦	不良	僅かに布目痕。	著		著	10YR8/2灰白色		3.1

第5章 まとめ—奥谷南遺跡Ⅵ・Ⅶ区的位置付け—

奥谷南遺跡Ⅵ・Ⅶ区の調査により、10世紀の段階で標高62～73mの山中に平坦面が形成され、遺構が構築されたことが明らかになった。Ⅵ・Ⅶ区は奥谷南遺跡の中では東端に位置している。調査年度別にⅥ区(平成6年度)・Ⅶ区(平成7年度)と区分して調査を行ったが、これらの調査区は出土遺物・遺構面形成の方法・地形的な連続性等から同じ性格を持つ一連の遺跡として捉えられる。

Ⅵ・Ⅶ区の平坦面の遺構群は山岳寺院に伴う遺構であり、焼成土坑(SK-10)は関連する火葬施設であり、須恵器窯(K-1)及び焼成土坑(SK-11・13～15・17)は山岳寺院に伴う生産施設である。そのことを、遺構・出土遺物・周辺の地名等を比較検討することによって明らかにしたい。

第1節 遺構及び遺物のまとめ

1. 遺構

Ⅵ区のP-1～9、SK-1、SA-1、SB-1、Ⅶ区のP-1～41、SK-1～4及びSK-10～17、SX-1～3、SA-1、SB-1～4、K-1が、今回の調査で確認された遺構である。(遺構番号はⅥ区とⅦ区で異なる番号を付したため、P-1～9、SK-1、SA-1、SB-1、はⅥ・Ⅶ区で重複するため呼称に混乱が生じるが、ここでは、Ⅵ区の遺構に関してSK-1(Ⅵ)と記述することとし、Ⅶ区に関しては調査区を記載せずSK-1とだけ記述して報告を進める。)

遺構は3ヶ所に大きく分けられる。Ⅵ区とした標高62～63m付近の平坦部とⅦ区の中で標高70～72m付近の平坦部、そして標高68mから71mにかけて広がるⅦ区南西の緩斜面である。Ⅵ・Ⅶ区の平坦部には、各々ピット・土坑等の遺構が形成され、建物跡があったことが確認できる。南西緩斜面からは須恵器の窯が検出されている。窯の西側には平坦な5m×6m程度の空間が形成され、作業場空間として利用されていたことがわかっている。窯が形成される以前には炭窯と推定される焼成土坑(SK-17)が形成されていた。

また、Ⅶ区平坦面とⅥ区平坦面の中間斜面に形成された幅1m前後の平坦面は、通路として利用された遺構として注目される。調査対象範囲において検出できたこの通路状遺構は、南西緩斜面の作業場領域とⅦ区平坦面をつなぐ役割を果たしたものと推定される。なお、この遺構面から内面に布目痕の残る製塩土器が検出されている。

遺構面の形成は、基本的には斜面の削平と削り出した段階で生じた土砂の埋立によるものと推定される。Ⅶ区では調査範囲の大半が削平のみによって形成されており、埋立により形成される遺構面は、調査対象範囲の南半に一部認められるだけである。なお、土層の確認はできていないが、今回の調査対象範囲外であるⅦ区に連続する北側谷奥の平坦部は、地形の特徴から、土砂の埋立によって形成された平坦地形だと考えられる。

これに対してⅥ区の平坦部は若干上方の斜面を削り出した部分は確認されるものの、その大半は

急峻な斜面を土砂によって埋め立てて形成されたものであり、埋積に使った土砂はⅦ区削平時に生じた土だと推定される。

Ⅶ区南西緩斜面の作業場領域を形成する平坦部の場合は、粘土を削り出して形成されており、埋め立てられて形成された地点は認められなかった。

これらの平坦面の形成はほぼ同一の時期に行われたものであり、遺構面からの出土遺物の時期により10世紀第1四半期～第2四半期を遺構面形成の時期として想定しておきたい。

今回検出した遺構は、(1)掘立柱建物、(2)土坑(焼成の認められないもの)、(3)土坑(焼成土坑)、(4)須恵器窯の4つに大別される。

(1) 掘立柱建物跡

上部構造や建物の性格は特定できないものの、柱穴の並びから復元し得る掘立柱建物跡は、Ⅵ区1棟、Ⅶ区4棟の計5棟を挙げることができる。斜面を削り出してあるいは埋め立てて、平坦面を形成しているといっても、検出された建物の位置においては、Ⅵ・Ⅶ区とも最大幅8mに過ぎない。この狭溢な平坦面に建てるのが可能な建物も、自ずとその規模が限定されてくる。SB-1(Ⅵ)が1間×1間、SB-1が2間×2間、SB-2が1間×2間、SB-3が2間×2間、SB-4が2間×1間以上、と確認された建物跡は梁間、桁行ともに1～2間程度の小規模な建物のみである。SB-2とSB-3は切り合い関係にあり、調査範囲においては同時期に小規模な建物跡が1～2棟存在したに過ぎない。

これらの建物跡を構成する柱穴から出土した遺物は僅少であり、実測可能遺物はない。時期がある程度特定できるものは、SB-1・SB-4のみであり、SB-1は10世紀、SB-4はP-2出土遺物(糸切り底)により10世紀後半以降に比定できる。

SB-1は各柱穴から柱を固定するために用いたと見られるチャート礫が検出されている。この石組みの柱穴は、岩盤上に形成されている。チャート礫により柱を固定することによって一定の重量を持つ建物を支え得たものと考えられ、瓦葺建物にも十分耐え得る強度を持ったものと推定できる。SB-1は瓦葺建物の可能性を持つ。残された石組みから推定される柱の直径は15cm前後である。

(2) 土坑

平坦部で検出された土坑SK-1(Ⅵ)・SK-1～4とⅦ区南西部緩斜面で検出された焼土・炭化物を伴う焼成土坑に大別される。この中で、SK-3・4は近代以降の土坑墓であることが確認されており、それ以外が10世紀～11世紀の時期幅で捉えられる遺構である。

Ⅵ・Ⅶ区ともに平坦部に形成される土坑に焼土は伴わない。性格不明の土坑が多い中で、SK-1からは須恵器の埋甕が確認されている。土坑内に底部を埋められた状態で検出され、底部と口縁の一部を除いて大半が失われていた。水を溜めるためなどの用途が推測されるが、実際の用途は特定できない。

(3) 焼成土坑

焼成土坑には、遺構内に礫が集中し石組み状を呈するもの(SK-10)と周囲の壁面が被熱により帯状に赤変し、底面に炭化物が敷き詰められたように検出されるもの(SX-1、SK-11・13・14・15・17)の

2形態がある。前者は火葬施設であり、後者は炭窯(製炭土坑)である。骨片鑑定によりSK-10から出土した骨が人骨であることが判明、SK-10が火葬施設であることが裏付けられた。

後者のうちで壁面がほとんど残っていない土坑についてはSXとしたが、壁面が削平され残存状況が悪いだけで他の土坑と同じ性格のものである。これらの焼成土坑の特徴は

- ①規模が長さ67～123cm、幅45～58cm程度、検出面からの深さが7～20cmと比較的小規模である。
- ②被熱により赤変しているのは四周の壁面のみであり、床面に赤変は認められない。
- ③赤変は帯状にラインを形成し、その幅は4～6cm前後である。
- ④数点の土器が残された遺構もあるが、大半の焼成土坑からは土器が検出されない。

SK-17あるいはSK-13など土師器が出土する土坑があったため、当初は土師器焼成土坑の可能性も考え、概要報告の段階では土師器焼成土坑として報告した。焼成土坑自体が土師器焼成土坑の条件を満たしていない点、土坑の規模・底面が被熱していない点などからも、これらの焼成土坑については炭窯(製炭土坑)と捉えたい。

なお、パリノ・サーヴェイに委託し、SK-10・13・14・17については被熱粘土の分析により焼成温度を求めた。SK-13・14が若干高いものの、いずれも550℃以下の焼成温度という結果になった。

(4) 須恵器窯(K-1)-ロストル構造を持つ須恵器窯

- ① ロストル構造を持ち、2条の火床(牀)がある。半地下式小型有牀窯と分類できる。
- ② 焼成部床面は傾斜している。
- ③ 窯体は粘土層を掘り込むことによって、その構造を造り出している。素堀りのままであり、スサ入粘土等による被覆は認められなかった。
- ④ 焼成部には天井部が崩れ落ちたとみられる赤変粘土が検出された。その粘土の下から火床(牀)上面に覆い被さるように、チャートの割り石が規則正しく並んで検出されている。これらの割り石は被熱しておらず、焼成室の側壁を構築するため側壁粘土に塗り込められていた石列だと捉えている。焼成室の側壁の高さや天井部形状は復元できず、推察する材料もない。
- ⑤ 焚口形状は、直径150cm前後の変形した円形である。両袖に被熱していない焚口石(チャート)を検出した。粘土で覆われていたものと思われる。
- ⑥ 焼成部は四周の側壁赤変ラインによって検出できたが、最奥部に赤変ラインの途切れた箇所を確認された。排煙口だと考えられる。
- ⑦ 焼成部には火床(牀)の間に渡しかけるような形で、土師器羽釜・移動式竈の破片が検出されている。製品(須恵器)が落ち込むのを防ぐ意味での窯道具として使用したと考えられる。
- ⑧ 灰原は4層に分層することができた。炭化物集中層に明褐色粘土層が間層として入っており、層の堆積順序は明瞭で、層ごとに遺物を採り上げる作業は容易であった。層ごとに出土遺物の型式に差は認められないことから、土器一型式以内の短期間に4回操業が行われたことがわかる。窯操業時期は10世紀中葉である。
- ⑨ この窯の最終焼成品は須恵器供膳具が中心であり、瓦はほとんど認められなかった。窯体内及び灰原からの瓦片は2点であり、この窯が瓦窯として利用されたかどうかは、はっきりしない。しかし、遺構及び包含層から検出された布目瓦と窯出土須恵器供膳具との焼成や胎土の類似か

ら、この窯が当初瓦窯であった可能性も十分考えられる。

- ⑩ 窯体検出時に礫の集中が検出された。拳大前後の角礫が投棄されたように層を成して堆積していたが、窯の南側に限定される。礫の用途は不明である。
- ⑪ 自然科学分析により焼成温度と焼成に使用した燃料材が確認できた。窯壁から求めた焼成温度は分炎柱下半(900℃+)、分炎柱(900℃+)、焼成部側壁(900℃±)、焼成部床面(900℃±)、焼成部火床(牀)上面(900℃+)、焼成部奥壁(900℃-)である。須恵器窯としては、焼成温度は極めて低く、製品が軟質の須恵器であることを裏付ける結果となった。燃料材は常緑広葉樹(アカガシ亜属)と落葉広葉樹(クリ)を利用している。
- ⑫ 窯の閉塞については、分炎柱及び燃焼部入り口の色調の差(上半が還元され、下半は酸化)を手がかりに、検討を加えたが、具体的な閉塞方法に迫ることはできなかった。

2. 出土遺物の時期

遺物についての詳細な分析とまとめは、山本純代により第4章及び第6章第1節・第2節に示されている。ここでは出土遺物の所属時期の概要について触れるにとどめる。

出土遺物は窯出土の一括資料と包含層出土資料に分けられる。

出土遺物で最も古い時期を示す遺物は、VI区から出土したK-90号窯式である猿投窯産の陰刻花文緑釉陶器(Fig.9-28)であり、9世紀後半に位置づけられる。しかし、これ以外に9世紀に属する遺物は全く認められない。供膳具からみた場合、10世紀前半が当遺跡で最古の資料であり、煮炊具の時期も最古の資料は10世紀前半と、供膳具と同様の様相を示している。優品である28の緑釉陶器の生産時期が使用された時期を必ずしも反映しないことを考慮すれば、須恵器あるいは土師器供膳具、土師器煮炊具の時期より、当遺跡に遺構が形成されはじめた時期は10世紀の前半とするのが妥当だと考える。

これらの在地産あるいは搬入の食器類・調理具類の存在は、当地が生活の場であったことを示している。窯出土資料は10世紀中葉に位置付けられ、まとまった出土量を示している。それを除く包含層出土資料は、10世紀前半から11世紀後半にかけて、各時期ともに一定の出土量が確認されている。今回の調査地点で10世紀から11世紀にかけて一定の規模の生活が継続して営まれていたことを示している。なお、12世紀代の遺物は龍泉窯青磁を除けばほとんど認められない。遺跡自体は12世紀後半まで存続したものの、調査地点周辺は12世紀以降生活の場としては機能していなかった可能性を指摘できる。

遺物の中で、特筆すべきは先述の猿投窯産緑釉陶器と篠窯産須恵器、在地産及び搬入品の黑色土器、製塩土器、移動式竈である。これらの遺物は、一般集落とは異なる奥谷南遺跡東端部遺構群の特殊な性格を物語っている。

また、遺構出土・包含層出土の布目瓦は、瓦葺建物の存在を示している。

3. 時期的な変遷

遺構と遺物から見た時期的な変遷をモデル化すれば、大きく4期に分けることができる。

須恵器窯(K-1)の操業時期と包含層中の遺物量を基準とし、K-1に先行するⅥ・Ⅶ区遺構面あるいはSK-17の形成時期を遺跡成立期としてⅠ期、K-1操業時期をⅡ期、Ⅱ期に続いて包含層中から一定量の土師器供膳具が確認できる時期をⅢ期、若干量の貿易陶磁が確認されるだけで、土師器がほとんど検出されない時期をⅣ期とする。

Ⅰ期-10世紀前半

Ⅱ期-10世紀中葉～後半

Ⅲ期-10世紀末～11世紀

Ⅳ期-12世紀

Ⅰ期が成立期、Ⅱ期が発展期、Ⅲ期が安定期、Ⅳ期が衰退期と位置付けられる。時期比定の根拠は、出土遺物量と形成された遺構である。明確に時期のわかる遺構は、Ⅰ期がSK-17、Ⅱ期がK-1、SK-13などごく限られているが、SK-1、SK-2など遺構の多くがⅡ～Ⅲ期の時期幅の中で捉えられる。包含層出土遺物もⅡ～Ⅲ期すなわち10世紀中葉から11世紀に属するものがほとんどであり、奥谷南遺跡Ⅵ・Ⅶ区の遺構群は、Ⅰ期に成立し、Ⅱ・Ⅲ期を通じて盛行した後、Ⅳ期になって衰退し、12世紀末から13世紀にかけてのいずれかの時期に終焉を迎える。

第2節 遺跡の性格—奥谷南遺跡の位置付け—

1. 山岳寺院の定義と土佐の山岳寺院

「山岳寺院」という語の定義については様々な解釈があり、研究者間で必ずしも統一見解が示されているわけではない。定義のいくつかに通ずるのは、①平安時代以降に成立するという時代背景、②山中に立地しているということ、③密教系の寺院であることの3点である。(③については修験道や修行の場など例外もある。)

これらの共通項に当てはまるものを「山岳寺院」とするならば、高知県で山岳寺院に該当する寺院は多い。奥谷南遺跡は、この中の①②は当てはまるものの、③について直接証明する遺物は出土していない。

高知県の山岳寺院は、文献資料等により創建年代がわかる例はほとんどなく、仏像等の製作年代により平安時代に創建されたことが推定されるのみである。これらの寺院の大半は、行基・空海が寺伝による創始者となっている。金剛頂寺(室戸市)・最御崎寺(室戸市)・神峯寺(安田町)・大日寺(野市町)・竹林寺(高知市)・禅師峯寺(南国市)・豊楽寺(大豊町)・定福寺(大豊町)・青龍時(土佐市)・清瀧寺(土佐市)などが現存する真言宗の山岳寺院であり、いずれも寺伝による行基あるいは空海の創建が伝えられている。修験道から転じて山岳寺院となった越知町金峰山寺(横倉寺)は土佐の寺院には珍しい山岳信仰に由来する寺院である。

また、現存しない山岳寺院の例もある。静岡県大知婆峠廃寺のように継続した調査が進められる例もあり、近年調査例が増えつつある。文献や伝承の全くない山岳寺院の例も各地で報告されるようになった。高知県にも現存しない寺院でその存在が知られている例として高知市蓮台寺・大豊町長徳寺の例が挙げられる。

これら土佐の山岳寺院は、集落と寺院の立地する場所との距離により、大きく4類型に分類可能である。

A類-金峰山寺(横倉寺).....居住域を大きくはなれた山岳信仰に由来する寺院

B類-蓮台寺・竹林寺・清瀧寺.....居住域と一定の距離を保ち、信仰空間を造り出す

C類-大日寺.....山中に造成された寺院だが居住域近くの里山に立地する

D類-定福寺・豊楽寺・長徳寺.....山間部の山地に立地するが、近くに集落がある寺院

土佐にはA類に相当する寺院はほとんど存在しない。一定の標高をもつ山中の寺院であっても、平野の占める割合が低い土佐にあっては、急峻な山中にも集落が営まれる例が多く、定福寺や豊楽寺など山中の寺院も居住域を大きくはなれることはない。

奥谷南遺跡の場合、山岳寺院だとしても集落に近接した里山に構築された点に特徴があり、上述の4類型の中ではC類に分類される。

2. 地名について

調査地点周辺の現在の字名は、「清山」(セイザン)及び「山神」(ヤマノカミ)である。字名の由来は、かつてここに存在した寺院「清山寺」と現在も地元の信仰の対象とされる標高140m付近の尾根上にある小祠だと考えられる。

天正16年(1588年)の長岡郡江村郷地検帳(長宗我部地検帳)に残された遺跡近辺の寺院関連地名として、江村郷小野村「セイザン」「ドウノ谷」「トウノ内」が挙げられる。小野村内の「ヲク谷」地名に挟まれて、これらの寺院関連地名が記録されている。現在の字清山は、山地部分と山麓部分とともに含むが、検地はここでは山麓部分のみを対象として実施されている。「セイザン」地名は、清山寺の寺中となっており、小野村で最も多くの領地を持つ小野民部丞の給地となっている。面積は出分を含めて二反拾九代一分才、内八代は下々田であり、それ以外には下ヤシキが一筆記録されているに過ぎない。清山寺の所有関係が記載されているのは、小野村岩原谷の扣地十一代一分才(下田と畠)のみであり、長宗我部氏支配下で岡豊城を取り囲み防御するかのよう郷内に30余箇所の寺院を配す「寺村」的村落景観を示す江村郷の中にあつては、規模の極めて小さく零細な寺院だと言える。地検帳の記載内容からすると、清山寺は今回の調査地点と直接結びつかない。かつて寺院があつたことを示す「ドウノ谷」「トウノ内」も検地段階ではサンハクヤシキ・下田・下ヤシキであり寺院の痕跡をとどめない。

これらの地名は、奥谷南遺跡東端遺構群(VI・VII区)が寺院関連のものであることの傍証にはなり、奥谷南遺跡の寺名が清山寺であつた可能性はあるが、決め手にはならない。しかし、清山寺というキーワードに着目して江村郷内に視点を移したとき、岡豊山東麓の清山寺村の存在-つまり同一郷内に同名の寺院があることに気付くのである。

江村郷の中で滝本寺・定林寺・蓮如寺・常通寺・清山寺については、寺名がそのまま村名となっており、寺自体が村落において重要な位置を示していたことが推察される。清山寺村は村名の由来となった寺が、検地段階で現存しない村である。寺自体がないだけでなく「清山寺」がどんな寺院なのかについても明らかではない。

清山寺村は「八幡ノ内 清山寺村」と記されているように、江村郷の中でも中心に位置しており、岡豊城の東麓一帯が村域であったと推定される。村内には「新町市屋敷」が形成され、初期戦国城下町として松本豊寿や小林健太郎によって詳細な景観復元あるいは地検帳を使った分析が試みられている。しかし、それらの論考の中でも清山寺地名については言及されていない。

地検帳の検地の順番通り、明治22年の地籍図の地割りに当てはめていくと、清山寺村の清山寺関連残存地名「清山寺ヤシキ」は岡豊山東麓の現岡豊保育園周辺の土地に比定される。ここには、上ヤシキ10筆、中ヤシキ1筆、サンハクヤシキ1筆が集中している。この谷にある西谷遺跡は南国市教育委員会によって440㎡が発掘調査され、1991年に成果が報告されている。それによれば、①検出された遺構の存続期間は15世紀後半から16世紀末であること、②15世紀後半から16世紀前半の間に整地層が認められること、③出土遺物に13～14世紀の貿易陶磁があり、瓦質鍋や土師器は15世紀代のものが多いこと、などが報告されている。①の遺構は長宗我部家臣の形成したもので②の整地層は1508年の岡豊城落城に伴うもの、と解釈できる。この地に16世紀末の段階で寺院の存在は認められないが、検出された最も古い遺物の時期-13世紀-すなわち長宗我部氏が江村郷に入って土豪化した段階から、家臣団の屋敷地が造成され始める時期-15世紀後半までは、清山寺村に清山寺が存在していた可能性がある。

奥谷南遺跡Ⅵ・Ⅶ区の存続期間10～12世紀と岡豊山東麓の清山寺13～15世紀を比較すると時期的な連続性が認められる。地名も同じ清山(寺)であり、長宗我部氏が元来小野村にあった清山寺を岡豊山東麓へ移転したという想定も成り立つ。

江村郷内での寺院の移動は、新市町でも認められる。市町の中に屋敷地を構える寺院は新念仏寺及び新福寺であるが、新福寺については江村郷内から移設された可能性を指摘できる。現存地名と地検帳がそれを示している。現在も定林寺地区に「シンプクジ」地名が残っている。地検帳にも定林寺村に「シンプクジ」は認められるが、中ヤシキとなっており寺院関連の土地ではない。新町市ヤシキ形成に伴って、新福寺は定林寺村から清山寺村岡豊新町へと移設されたことが推察される。

以上地名についての検討を行ってきたが、仮説の域を出ず、検証することが難しい内容が多い。新たな文献資料の出現は、ほとんど期待できず、発掘調査による検証が待たれる。現段階では、奥谷南遺跡Ⅵ・Ⅶ区は清山寺である可能性を提示しておきたい。

3. 遺跡の性格－まとめ－

奥谷南遺跡東端遺構群の特徴として、①10世紀に地形が改変され山中に平坦地がつくりだされる(山中に立地する)、②猿投窯産緑釉陶器・黒色土器・篠窯須恵器・製塩土器という高知県の一般集落では検出されない遺物の存在、③点数は少ないものの布目瓦の存在(瓦葺建物の存在)、④一定の技術を有するロストル構造を持つ須恵器窯の存在、⑤火葬墓の存在、⑥出土遺物から時期が10世紀前半から12世紀後半の間に限定できる、という6つの項目が挙げられる。これらの理由により、奥谷南遺跡東端遺構群－Ⅵ・Ⅶ区周辺が、平安時代に存在した山岳寺院であると考えたい。10世紀の土佐で、これだけの力を持つ勢力は、官衙の他には寺院以外に想定し得ず、「山岳寺院」の存在が浮かび上がってくるのである。



■ 四国横断自動車道関連 ● 寺院 ▲ 窠跡

0 1000 2000 3000

奥谷南遺跡周辺の遺跡 —窠跡及び古代の寺院—

遺跡名	種別	時期	遺跡名	種別	時期	遺跡名	種別	時期
1 奥谷南遺跡	集落跡・墓・生産遺跡他	旧石器～近世	11 土佐国府跡	官衙跡	弥生～中世	21 東谷窠跡群	窠跡	奈良～平安
2 長畝古墳群	古墳	弥生～古墳	12 田村遺跡群	集落跡	縄文～近世	22 西谷窠跡群	窠跡	奈良
3 栄工田遺跡	集落跡	縄文～中世	13 ひびのきサウジ遺跡	集落跡	弥生～近世	23 小山田窠跡群	窠跡	古墳～奈良
4 口コミノ谷古墳	古墳	古墳	14 下ノ坪遺跡	集落跡	弥生～平安	24 林ノ谷窠跡群	窠跡	古墳～平安
5 小蓮古墳	古墳	古墳	15 深淵遺跡	集落跡	縄文～近世	25 大谷古窠跡群	窠跡	奈良～平安
6 舟岩古墳群	古墳	古墳	16 深淵北遺跡	集落跡	弥生～中世	26 大法寺窠跡群	窠跡	奈良～平安
7 岡豊城跡	城跡	中世	17 大領遺跡	散布地	古墳～中世	27 タンガン窠跡	窠跡	飛鳥
8 東崎遺跡	集落跡	弥生～中世	18 土佐国分寺跡	寺院跡	奈良・平安	28 予岳窠跡	窠跡	古墳
9 小籠遺跡	集落跡	弥生～近世	19 比江廃寺跡	寺院跡	白鳳・奈良	29 亀山窠跡	窠跡	平安
10 国分寺遺跡群	散布地	古墳～近世	20 野中廃寺跡	寺院跡	平安	30 高間原古墳群	古墳	旧石器・古墳

遺跡一覧表

31 道原寺推定地

残念ながら、墨書土器や木簡などの文字資料は出土しておらず、仏具の出土も認められないなど、直接寺院の存在を示す証拠は検出されていない。しかし、居住好適地が近接する里山であるにもかかわらず大規模に地形を改変し、山中に平坦地を造り出している点(①)、猿投窯産緑釉陶器を筆頭に篠須恵器鉢、黒色土器碗など出土遺物の特殊性(②)、地検帳の段階で確認できる寺院関連地名などの傍証により、今回の調査地点が山岳寺院であることが首肯できる。

寺院名については、地検帳・現存地名から「清山寺」であった可能性が高い。仮に小野村の「清山寺」が清山寺村の「清山寺」と同一の寺院であり、長宗我部氏が江村郷へ入り在地土豪化した13世紀以降に岡豊山東麓へ移設されたと仮定すれば、古代山岳寺院として存在した清山寺は13世紀以降も中世寺院として命脈を保ったことになる。これは、岡豊山東麓の西谷遺跡(清山寺村清山寺推定地)から出土した遺物が13世紀～16世紀であることにも符合する。そして、奥谷南遺跡の山中に10世紀段階で遺構面を形成し、須恵器窯を構築した勢力の背後には、江村郷周辺を勢力下に収めた13世紀段階の長宗我部氏に匹敵する在地土豪の存在を考えることができる。

奥谷南遺跡の寺域は、今回の調査区以外にも広がっていることが予想される。

調査区の北尾根上の標高140m付近(字・山神)に長軸40m短軸15～6mほどの楕円形の2段になった平坦地がある。ここは現在も2ヶ所に祠が祀られ、地元の信仰の対象となっている。また、調査区の北東に位置する標高120mの尾根先端部から下方斜面にかけて(字・大谷)、高さ2～3mから4～5m程度のチャート巨石が50個ほど点在しており、標高60～70m付近には平坦な地形がひろがっている。山中で人為的な改変が加えられた箇所あるいは巨石が集中する箇所は、他にも数地点挙げられる。これらの寺域あるいは信仰対象の可能性のある地点は、遺跡北側の尾根上を通る山道の周辺に点在している。この山道は、深い所では2～3mも山肌が掘られて切通し状になっており、第2次世界大戦後自動車道が整備されるまでは遺跡南麓の小蓮地区と遺跡北側の山塊を越えた地点の集落白木谷地区を結ぶ「往還」として機能していた。地形の改変がいつ・何を目的として加えられたのかを検討したうえで、寺域確定のための詳細な地図を作成することが急務である。

須恵器窯の位置付け、など残された課題は多いが、現段階で判明している事実を提示してまとめにかえたい。

註・引用文献

- (1) 駒沢大学倉田芳郎先生から、これらの焼成土坑は炭窯であるという御指摘をいただいた。
- (2) 「山岳寺院」という言葉は、いろいろな角度から定義されている。

藤井直正は「一般に山岳寺院といえば、わが国の平安時代以降、修験道ならびに天台宗・真言宗のひろまりに伴って、都心をはなれた山境に造立された寺院を総称している。」と定義付け、さらに「山岳信仰に起源をもち、山岳信仰と一連のつながりをもつ修行僧による仏堂の造立、あるいは天台・真言二宗のひろまり等によって諸国に創立された寺院である。したがって、「山岳寺院」の遺跡といえば、過去に廃絶して堂塔坊舎、伽藍の遺構をのこしている寺院跡、あるいは主要堂宇は失われて、一～二の小堂をのこしているような寺院も包括しなければならない。」とする。

これに対し、江谷寛は「僧尼の山林修行のため人里と隔絶している場所」として平地寺院とセットになった形で山岳寺院を定義する藺田香融の見解と山林修行の場にみられる磨崖仏・誦経修

行の場という2つの意見がある。」とし、「単に山中にあるだけの立地」は「山岳寺院と考えられない。」とする。

久保智康は「山中立地寺院に対する呼称は基本分類も含め、未だ研究者間で認識を共有するに至っていない。これらをすべて「山岳信仰」の寺院と包括することはできず、又峻険な高山での連行のイメージだけが先行しかねない。山岳寺院という呼称も個人的にはややちゅうちょを覚えるが・後略」と、研究者間で認識の共有が得られていないことに言及し、時代背景の違いによる山岳寺院の性格の違いを、古代的なものの中世的なものに分けて理解し、13世紀が移行期だとする。古代的な山岳寺院が性格のより限定された純粋な形を留めた信仰空間であるのに対し、中世的な山岳寺院は院・坊・経塚・墓地・軍事に商工ゾーンも備えた空間になると対置して考える。

また、近江昌司は「古代山岳寺院小考」の中で、「山岳寺院」の名は比叡山・高野山以後にみられるような平安朝の密教系寺院をさすもので、上述の8世紀の山林修行・山居禅行を基調に展開する寺院とは区別すべきであろう。続日本紀にも見える「山林寺院」の名称が適当ではなかろうか。」と奈良時代の山中の寺院について「山林寺院」という語を用いて平安時代の山岳寺院と区別する。「古代山岳寺院」は平安時代の密教系寺院だとする。

藤井直正「山岳寺院」『新版 仏教考古学講座』第2巻-寺院- 雄山閣 1984年

江谷 寛「山岳寺院研究の課題」『考古学ジャーナル』No.426 雄山閣 1998年

久保智康「北陸の山岳寺院」『考古学ジャーナル』No.382 雄山閣 1994年

近江昌司「古代山岳寺院小考」『考古学ジャーナル』No.426 雄山閣 1998年

- (3) 後藤健一『大知婆峠廃寺跡 確認調査報告書 平成8年度』静岡県湖西市教育委員会 1997年
- (4) 『長宗我部地検帳 長岡郡 下』高知県立図書館 1959年
- (5) 島田豊寿「第5章 第4節 土居、市町、戦国城下町、岡豊城」『南国市史 上巻』南国市史編纂委員会 1983年
- (6) 島田(松本)豊寿「第5章 第1節 戦国的な岡豊城下町」『城下町の歴史地理的研究』吉川弘文館 1967年
- (7) 小林健太郎「戦国末期の城下市町-土佐国の二つの事例」『歴史景観の復元』桑原公聴編 古今書院 1992年
- (8) 同(7)
- (9) 山本哲也・松田直則・坂本憲昭『西谷遺跡発掘調査報告書-伝長宗我部氏屋敷跡の調査-』南国市教育委員会 1991年

参考文献

『南国市史 上巻』南国市史編纂委員会 1983年

『須恵器窯の技術と系譜-豊科、信濃、そして日本列島-発表要旨集』窯跡研究会 1999年

朝倉慶影「長宗我部元親の縁辺についての一考察」『高知の研究』第2巻古代・中世編 1982年

田中菅雄「地検帳による新町付近の図」『土佐史談』通刊152号

小林健太郎「長宗我部時代の城下町」1982年『高知の研究』第2巻古代・中世編

島田(松本)豊寿『城下町の歴史地理学的研究』吉川弘文館 1967年

『考古学ジャーナル』No.426 雄山閣 1998年

『考古学ジャーナル』No.382 雄山閣 1994年

第6章 考察

第1節 奥谷南遺跡出土土器について

今回の奥谷南遺跡Ⅵ区・Ⅶ区では包含層を含め10世紀初頭～13世紀初頭にかけての遺構、遺物が確認された。県下における古代末から中世にかけての土器については先学の研究があるが、ここでは奥谷南遺跡の出土遺物のうち、土器編年上注目される窯体内出土遺物と灰原出土遺物、及び包含層出土遺物より抽出したものについて簡単に諸特徴を述べる。なお、椀形態について池澤俊幸氏の分類を使用するとともに、適宜編年試案も援用する⁽¹⁾。なお実測遺物及び実測外供膳具について口縁部形態と底部形態のわかるものについては杯椀の区別なく、以下の基準により分類し、個体数を計測した(表1・2)。

口縁部形態：直立する—A

外反する—B

内湾する—C

底部形態： I類 外底立上りに段を有し、内底はなだらかなもの

I'類 Iの外底段部があいまいなもの

I-2類 外底立上りに段部を有し、内底が凹むもの

II類 外底からまっすぐに立ち上がるもの

III類 輪高台を付すもの

IV類 高い輪高台を付すもの

V類 外底から立ち上がり部に稜をもつもの

*全体形のわかる個体数が少ないが口縁部形態は杯・椀ともにA, B両形態がみられ、底部形態についてはI, I'; I-2, III類は椀に多く、I'; II, IV, Vは杯に多い傾向がみられた。

(1) K-1 窯体内出土土器

① 供膳具

K-1からは土師器杯、甕、羽釜、竈片、須恵器杯、椀、小皿、鉢、布目瓦、が出土している。供膳具は摩耗の激しい個体がほとんどであるが全て回転台成形、底部ヘラ切りであるとみられる。

口縁部	A	
	B	
底部	I	
	I'	
	I-2	
	II	
	III	
	IV	
	V	

		供膳具									炊炊具			計
		口縁		底部										
		A	B	I	I'	I-2	II	III	IV	V	他	口	他	
須恵器	外	11	13	1	1		1	1		3	34		7	72
	実	25	1	4	11	12	14	2		1				70
土師器	外	5	5				3			1	32	1	18	65
	実	3			1		5							9
計		44	19	5	13	12	23	3		5	66	1	25	216

表1 K1 出土土器 計測表

包含層出土遺物では92%を土師器が占めており、K-1においては71%が須恵器、29%が土師器と逆転している。また供膳具と煮炊具の出土比は88%：12%となっている。本文でも述べたが須恵器は全て焼成の「不良」な硬度と発色で

ある。

土師器杯

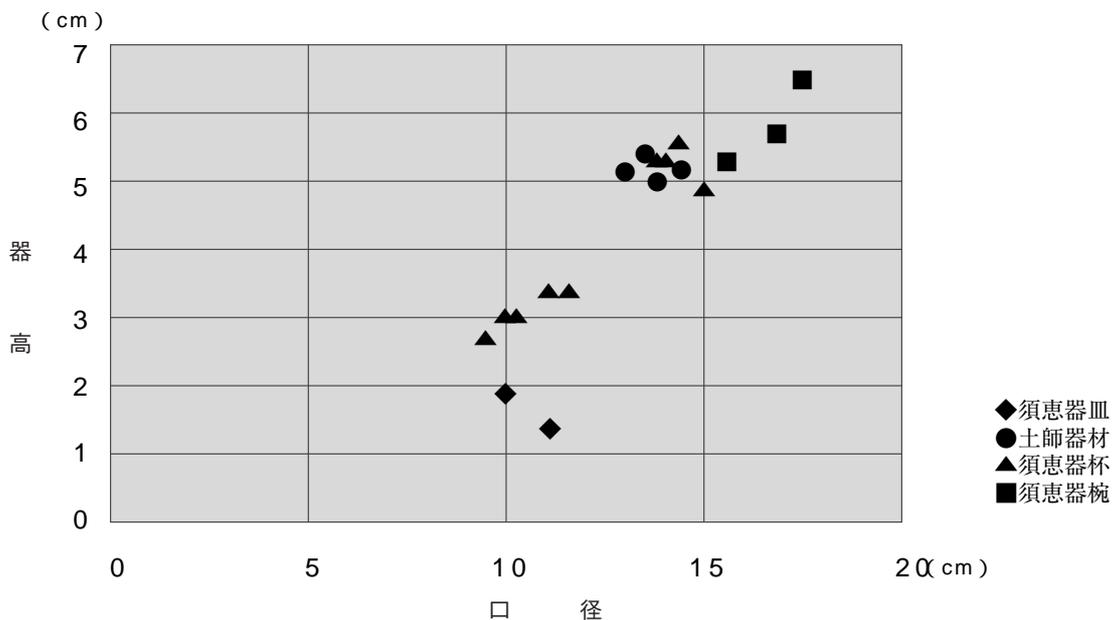
55~61の7点を図示し得た。口径13.4~14.4cm、器高5.0~5.4cm底径6.4~7.0cmを測り、底部から若干内湾しながら立ち上がる。口縁部は丸くおさめるもの(55~57・59)と、わずかに外反するもの(58)とがあるが、形態や法量から積極的に分類することはできない。形態的に類似するものが小籠遺跡SK136⁽²⁾、ひびのきサウジ遺跡SE1⁽³⁾に存在するが、SE1出土の杯は法量が小さく、やや時期が新しいとみられる。

須恵器皿

62・64の2点のみである。ひびのきサウジ遺跡SE1出土の土師器皿に酷似する形態と、法量である。

須恵器杯

口径9.6cm~11cm、器高2.7~3.4cm(64~68)と、口径14.0~15.6cm、器高4.3~5.6cm(69~77)の2種類の法量が出土している。このうち大きい杯は土師器杯とほぼ同じ法量となっており、形態的にも類似する。全体形がわかるものにはI'類(65、67、70、76、77)と、II類(66、68、69、71)があり、口縁部はいずれもA類である。底部片のうち72~75はII類、78~85はI'類である。ひびのきサウジ



K-1 出土土器 分布図。

遺跡SE 1出土の土師器杯を大小に分けて法量を比較すれば、小は類似し、大はひびのきサウジの方が小さいといえる。なお本県では9世紀末前後には供膳形態の須恵器は激減している。

須恵器碗

碗A

全体形が判る個体が少ないが、口径14.0cm～17cm、底径7cm～8cmを測る。底部はI-2類であり、口縁部は86～89はA類、90のみB類である。個体数が少ないので断定はできないが3種類の法量があるとみられる。ひびのきサウジ遺跡出土の円盤状高台碗も法量にバリエーションをもつが、須恵器・土師器がありK-1出土のものがヘラ切りのみに対し、土師器1点のみはヘラ切りで、後はすべて糸切りとなっている。

89は底部形態が不明であるが焼成は他の碗Aと同じである。口径19.8cmと、包含層出土の供膳具を含めて例外的に大きい。軟質で磨耗が激しいが内面には不定方向にミガキがみられる。

また杯、碗あるいは須恵器、土師器の判別は不能だが、114・115のような断面三角形の高台を持つ輪高台を有するものも出土しており、1器種を構成していた可能性がある。高台部は摩滅している可能性がある。

②須恵器鉢

116が該当する。高台が付き、口縁部は外側に傾斜し端部を上長くつまみ出している。内外面とも器表の磨耗が激しく、調整は確認できなかった。胎土から在地産とみられる。県内における10世紀の鉢は風指遺跡(中村市)⁽⁴⁾、船戸遺跡(中村市)⁽⁵⁾、下ノ坪遺跡(香美郡野市町)⁽⁶⁾の3遺跡で出土している篠窯産の捏鉢である。その後、ひびのきサウジ遺跡で在地産と考えられる須恵器片口鉢が出土している他、12世紀初頭に東播系須恵器鉢が搬入されはじめる時期まで出土例が認められなかった⁽⁷⁾。今回包含層中からも数点の土師器、須恵器鉢が出土しており在地産の鉢の存在を示唆している。形態的には他地域においても高台付の鉢は僅少で、篠窯鉢の古いものに高台の付くものがある⁽⁸⁾他、兵庫県相野窯跡群⁽⁹⁾に若干みられるが、体部・口縁形態は異なっており116の系譜については不明である。

③煮炊具

土師器甕

実測可能な遺物117の他、口縁部片1点、胴部片8点が出土している。117は口縁部の小片であるが内外面とも横方向のハケ調整の後横ナデ調整が施されている。口縁部は「く」の字型に屈曲し口縁端部は僅かに上方に摘みだしている。胎土から在地産とみられる。

土師器羽釜

4点(118～121)が出土している。いずれも半球形の体部と直立する口縁部からなり、口縁端部よりやや下がった所に幅の狭い上向きの鐳をめぐらす。口縁部内外面はヨコナデ調整、胴部外面は縦方向のハケ調整を施し、指頭圧痕を残す。粗い素地をもち、チャートの角粒、長石、石英の細粒砂を多量に含む。摂津型の羽釜である。下ノ坪遺跡ユニット7で摂津型模倣の羽釜が出土しており、以後10世紀後半から11世紀初頭にかけて広範囲に出土するとされる⁽¹⁰⁾。

土師器竈

123は竈片である。内面は粗いハケで斜め方向に調整後、横方向にナデて仕上げる。117の甕等と同様の胎土であり在地のものと考えられる。包含層を含めても竈片はこの1点のみであり、出土状況からも窯道具として使用された可能性がある。

以上窯体内土器について概観してみた。同土器群については吉成承三氏⁽¹¹⁾、池澤俊幸氏⁽¹²⁾らによって位置付けがなされている。円盤状高台椀の出現を大きな指標として下ノ坪遺跡ユニット7に後出するとし、杯・皿・椀の法量の縮小化、底部糸切りの導入といった様相を持つひびのきサウジ遺跡SE 1に先行するとされ、実年代は10世紀中葉から後半頃に比定されている。また各器種ごとの形態の斉一性が強いことからみるとK-1の操業期間は比較的短期間であったと考えられる。

(2) 灰原出土遺物

灰原は炭化物層と赤褐色土層の互層となっておりそれぞれ4層確認された。土師器、須恵器杯はそれぞれ2法量出土しており形態、法量ともほぼK-1と共通する。130は外底が段部を持たず内湾気味に立ち上がる杯形態であるが、内底が落ち込む特徴を有する。

(3) 包含層出土遺物

包含層では古代、中世、近世の遺物が確認されたが、このうち大勢を占める古代の遺物について若干のまとめを行う。

	供 膳 具											煮 炊 具				計			
	口 縁		底 部										他	甕 口			他	羽 釜	
	A	B	I	I'	I 2	II	II 2	III	IV	V	V 2								
須恵器	外	10	13	12	1	3	10		4		6		9		55		123		
	実	3	9	5	2	6	4		6	1							36		
土師器	外	91	47	23	1		728	4	37	6	165	4	249	25	90	2	1472		
	実	42	15	2	6	2	54	1	4	2							128		
計		146	84	42	10	11	796	5	51	9	171	4	258	25	145	2	1759		

表2 包含層出土土器 計測表

包含層出土遺物供膳具のうち実測可能な土器及び分類可能な遺物の総点数は1329点であり、土師器口縁195点、底部1039点。須恵器口縁35点、底部69点であ

る。土師器92%、須恵器8%で供膳具の多くを土師器が占める。

①供膳具

土師器 皿

166～189は皿である。底部は摩耗の激しい個体が多いが、確認できるものは全てヘラ切りである。166～168は外反気味に立ち上がり、口縁部は丸くおさめる。口径8.1～8.7と小型である。尾立遺跡SK 1・SD 2⁽¹³⁾に類似した形態、法量をもつ皿があり10世紀中頃からみられる皿の小型化が進んだ段階のものであるとみられる⁽¹⁴⁾。尾立遺跡においても糸切りが確認できる皿は1点のみでヘラ切りが大勢を占める。182、183は扁平で口縁部にかけ直線的に立ち上がる。類似したものが下ノ坪遺跡ユニット7にみられる。これ以外の皿は口径が9.2～11.8、器高1.2～2.4で平底の底部からやや外反気味に立上るもの(169～179)と直線的に延びるもの(180・181、184～189)があり、口縁部はいずれも丸くおさめる。ひびのきサウジ遺跡SE 1で同様の形態、法量をもつ皿が出土している。

土師器 杯

190～216は杯で法量により3種に分類できる。190～205は口径9.0～11.8、器高2.4～3.6を測る。206～211は口径11.8～13.6、器高2.8～4.6を測る。K-1で見られるような口径14cm以上で器高の高いものは212のみである。206は直線的な体部をもつ杯で下ノ坪遺跡ユニット7出土の杯に法量・形態共に類似しており、底部の切り離しもヘラ切りと共通する。当遺跡SK-17出土の土師器杯は形態的に206と同じ直線的な体部をもつが、法量が大きく小籠遺跡SK 136の杯に近い法量をもつ。灰原の灰層除去後に検出された遺構の検出状況からもK-1よりやや先行する時期のものとみられる。207・209～211は底部から斜め上方に立ち上がり、口縁部近くで外方へ屈曲する。尾立遺跡に類似の杯が存在するが口径は広く、器高は低くなっており、当遺跡出土のものの方が古相とみられる。ひびのきサウジ遺跡SE 1では2種類ある杯の法量が縮小し、新しい椀(椀A)がそれを補うものとして存在しており吉成承三氏は器高の深い杯形態から椀への転換と捉えている⁽⁵⁾。当遺跡でも大きい杯の法量は椀Aの法量と重なっており、器種の変容の過程とみられる。

土師器 椀

217～230は土師器椀である。217～221については形・器壁の薄さ・作りの丁寧さ等、須恵器椀の関連がみられるため、椀Cとして後述する。

椀A

223～227が該当する。K-1においては椀Aはヘラ切りで須恵器のみであったが、包含層中からは土師器の椀Aが出土しており、底部の切り離しも確認できるものは糸切りとなっている。ひびのきサウジ遺跡SE 1でも土師器、須恵器ともに椀Aが出土しており底部の切り離しは糸切りとなっている。ひびのきサウジ遺跡SE 1・土佐国衙跡SX 11⁽⁶⁾・田村遺跡SK 31⁽⁷⁾では「播磨系須恵器椀とそれを模倣した土師器椀が同時に展開し、供膳形態の組成が大きく変容する中世的土器様式の成立期」とされる⁽⁸⁾。

須恵器椀

椀A

247・249～250・252～257が該当する。奥谷南遺跡K-1出土のものとはほぼ同じ底径・器高を持つが、K-1ではヘラ切りのみであったのに対し、包含層出土の中にはヘラ切りと、糸切りのものがある。

椀C

238～245が該当する。また、218～221は焼成は土師質であるが形態的には類似する点がみられることから土師器椀として一括して考え椀Cとする。土師質、須恵質ともに精選された胎土をもち器壁は非常に薄く丁寧な作りである。

椀Cの焼成は律令期までの須恵器とは焼成が異なり、部分的に還元色を呈す例はあるものの、基本的には灰白色または灰黄色を呈し、軟質である。調整は摩耗のため観察不能な個体が多いが、可能なものは回転ナデ後、ミガキが施されている。また体部下半に回転ケズリが認められる個体も存在する。土師器も軟質で摩耗が激しく調整はほとんど確認できない。

口縁部形態は内面に沈線を持つもの(220・221・242)、外反して丸くおさめるもの(218・220・238～245)と、外反して端部内面に面をなしシャープなもの(219・221)がある。抽出できたものは口縁

部細片が多いが、238は良好な個体である。内外面とも灰白色に発色し部分的に還元された灰色を示す。内外面とも十字の火襷を持つ。底部糸切りで内外面とも回転ナデ後、外面は横方向の、内面は密に縦方向のミガキを施す。内底には同心円状の条線が存する。高台は断面長方形のハの字状に開く輪高台である。242は口縁内面に細い沈線を持ち内面は回転ナデ後放射状に密にミガキを施す。外面上半は回転ナデ後ヨコ方向にミガキを施し回転ケズリも観察できる。底部付近は回転ナデ痕が顕著に残る。外面に火襷を持つ。339は特に精選された胎土を持ち、外底にはケズリ痕が観察される。内外面とも横方向にミガキが施されており、内底立上り部ではタテ方向にナデたのち横方向のミガキが観察される。高台は欠損又は摩耗しているとみられる。ミガキについてははびのきサウジ遺跡SE-1でみられるような外面に回転ミガキが観察される個体は皆無で、すべて断続ミガキである。椀Cの底部は確認された個体が少ないが、すべて断面長方形の輪高台である。このような椀形態は池澤編年Ⅲ-1期に属するひびのきサウジ遺跡SE 1から出土しており、以後瓦器椀が広範に流通する、期までの間存在する²⁰⁾。これら椀Cは今回少数しか出土していないが、摩耗していないもののうち内外面に火襷をもつ個体が一定数存在し、ひびのきサウジ遺跡、尾立遺跡等に同様の火襷を持つ個体が複数確認されていることから現時点では在地産であると考えている。またこの時期、西日本各地で内外面にミガキを施し、白色に近い精良な胎土を持つ輪高台の土器椀が出現し盛行する傾向にあり、奥谷南遺跡出土の椀Cはこの様な流れの中で捉える考え方もできよう。なお、当遺跡出土の供膳具には、確実に律令期に遡る事ができるような形態をもつものは小片でも認められない。このほか胎土は白色だが器壁が分厚く、調整は摩耗のため不明であるが一連の椀Cとは異なると思われる椀も存在する(258)。

黒色土器

263～281は黒色土器である。椀の破片が多いが、全て内黒のA類であると見られる。263～270は胎土が緻密で雲母を含む。搬入品の椀である。また281は口縁部小片であるが胎土が緻密で雲母を含み、内外面ミガキを施された搬入品の甕である。県内では黒色土器の甕の出土例は僅少で大方町宮崎遺跡²¹⁾に例がある。畿内地方では平安。期新から黒色土器A類の煮沸容器の出土がみられ、Ⅱ期に入って増加する。Ⅲ期ではA類が減少しB類主体となり、器形も減少しほぼ椀形態のみになるとされる²²⁾。当遺跡包含層では他の搬入品として10世紀前半～中頃に比定される篠窯産の鉢が出土しており、同時期頃の搬入品として捉えることができよう。271～280、340は胎土からみて内黒の在地産黒色土器椀とみられる。272は杯、273～280は断面三角形の低い輪高台の付く椀である。340は深い椀形ではなく、体部が直線的に立ち上がるものであり、内外面ともミガキを施す。胎土からみて在地産であるとみられる。

この他椀Cとは異なる輪高台椀、高い高台のつく杯あるいは椀が一定量出土している。このように包含層出土土師器供膳具には下ノ坪遺跡SR-3、ひびのきサウジ遺跡、尾立遺跡SK1・SD2との共通性がみてとれ、時期的には池澤編年試案²³⁾Ⅱ-2期からⅢ-2期頃の遺物が多く含まれているとみられる。

②煮炊具

土師器甕

胴部が球形になるもの(282・283)と、半球形で長胴になるものがある。いずれも口縁部は「く」

の字に屈曲し端部を上につまみ出している。胎土により、チャートその他の微細砂を多く含むもの(282・283)、チャートの角粒、風化粒を多く含むもの(117・284・285・286・288・342・350)、素地が粗くチャートの角粒、長石・石英の細粒砂を多量に含むもの(287・289・351)とに分けられる。

土師器羽釜

羽釜はK-1出土のものと同じく撰津型のものである。胎土は287・289・351の甕と同様の粗い素地を持つ。290のみ雲母の微細砂を含み胎土が異なっている。

その他

篠窯産捏ね鉢(299~302)

この他特徴的なものとして包含層第Ⅲ層より篠窯産の須恵器鉢口縁部(299~301)と底部(302)が出土している。口縁部は「く」の字状になり端部が玉縁状に肥厚する。底部は糸切りで明瞭な回転ナデ痕が残る。石井、伊野氏の篠窯製品の年代観によれば²³⁾鉢Ⅱ類、伊野編年H期にあたり10世紀前半~中頃のものである。県下での篠窯産鉢の出土例は少なく風指遺跡(中村市)、船戸遺跡(中村市)、下ノ坪遺跡(香美郡野市町)について4遺跡目である。これらの遺跡では緑釉陶器、黒色土器、篠鉢がセットで出土しており、遺跡の性格を示す遺物とされている。奥谷南遺跡においてもこれらが出土しており当遺跡の性格づけの根拠の一つとなっている。

双耳壺(303)

肩部に1条の凸帯を巡らせ、耳は帯状の粘土を2ヶ所に貼り付ける。県内では類例が見られないものであるが、9世紀末葉から11世紀初頭に操業していたとされる兵庫県三田市の相野窯跡²⁴⁾群では須恵器の円盤状高台椀、輪高台椀、小型の壺、大型の甕、撰津型の羽釜などと共に双耳壺が出土しており、普遍的な器種とされる。奥谷南遺跡でもK-1及び包含層出土中に須恵器円盤状高台椀、輪高台椀、小型の壺、大型の甕、撰津型の羽釜と双耳壺が出土しており、共伴性のはっきりしない出土状態ではあるが、同様の器種が揃っていることとなる。

転用硯(343)

須恵器甕の破片を転用したものである。転用硯は県内では曾我遺跡²⁵⁾、土佐国衙跡、宮崎遺跡について4例目の出土である。いずれも郷家、駅館など特殊な性格を考えられている遺跡である。

以上包含層出土遺物について特徴を述べてきたが現時点でそれらの実年代を求めれば10世紀初頭~13世紀初頭頃を示すと考えられる。今回詳しく触れることができなかったが包含層中からは布目瓦(丸瓦9点、平瓦13点、どちらか不明40点)が出土しており、瓦を使用した何らかの建物の存在を想定させるものである。ロストル構造を持つ須恵器窯は現在の所県下では系譜が追えず、また周辺地域でも類例の少ない形態の窯である²⁶⁾。今後、類例の増加と前代を含めた研究の進展の中で、窯の位置付けを考えて行きたい。

今回遺物の整理を進めるにあたり、香川県埋蔵文化財センターの佐藤竜馬氏、豊科町郷土博物館の山田真一氏、立命館大学の木立雅朗氏には窯の構造、須恵器の焼成などについて貴重なご教示を頂いた。また高知県埋蔵文化財センターの出原恵三氏、松田直則氏、吉成承三氏、松村信博氏、池澤俊幸氏、藤方正治氏、浜田恵子氏、筒井三菜氏、武吉真裕氏をはじめとする諸氏にも助言頂いた。末筆ながら記して感謝申し上げます。

〈註〉

- (1) 池澤俊幸「土佐」『平安時代の土器・陶磁器研究-90年代の回顧と今後の展望-』 第18回 中世土器研究会 報告資料 1999年
- (2) 出原恵三・泉 幸代・浜田恵子・藤方正治『小籠遺跡Ⅱ』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 1996年
- (3) 高橋啓明『ひびのきサウジ遺跡(土佐山田町埋蔵文化財調査報告書第8集)』土佐山田町教育委員会 1990年
- (4) 『後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ 風指遺跡・アゾノ遺跡』高知県埋蔵文化財調査報告書27集 高知県教育委員会 1989年
- (5) 『船戸遺跡-中村・宿毛道路関連遺跡発掘調査報告書Ⅱ-』高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 1996年
- (6) 小松大洋『下ノ坪遺跡Ⅱ-農業農村活性化農業構造改善事業上岡地区区画整理事業に伴う発掘調査報告書-』高知県野市町教育委員会 1998年
- (7) 坂本憲昭「古代末から中世にかけての高知県の貯蔵具・調理具について」『四国中世土器 研究 創刊号』四国中世土器研究会 1996年
- (8) 京都府遺跡調査報告書 第2冊『篠窯跡群Ⅰ』(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1984年
- (9) 兵庫県文化財調査報告書 第115冊『相野古窯跡群』近畿自動車舞鶴線関係埋蔵文化財調査報告書(XⅧ) 兵庫県教育委員会 1992年
- (10) 吉成 承三「土佐の古代末から中世にかけての土器様相-高知平野を中心に-」『中近世土器の基礎研究 XⅡ』日本中世土器研究会 1997年
- (11) (註10)に同じ。
- (12) (註1)に同じ。
- (13) 江戸秀輝・松村信博『尾立遺跡-四国横断自動車道(南国~伊野)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』(財)高知県埋蔵文化財センター 1995年
- (14) (註10)に同じ。
- (15) (註10)に同じ。
- (16) 廣田佳久『土佐国衙発掘調査報告書第11集-金屋地区の調査-』高知県埋蔵文化財調査報告書第32集 高知県教育委員会 1992年
- (17) 『田村遺跡群 第7分冊』高知空港拡張整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 高知県教育委員会 1986年
- (18) (10)に同じ。
- (19) (1)に同じ。
- (20) (1)に同じ。
- (21) 廣田佳久『竹シマツ遺跡・宮崎遺跡』大方町埋蔵文化財発掘調査報告書第2集 高知県大方町教育委員会 1992年
- (22) 小森俊寛「概要」『古代の土器2 都城の土器集成Ⅱ』古代の土器研究会編 1993年
- (23) 百瀬正恒・橋本久和「中世平安京の土器様相と各地への展望」『考古学ジャーナル』No.299 1988年

(24) (註9)に同じ。

(25)「曾我遺跡発掘調査報告書(野市町埋蔵文化財調査報告書第2集)」野市町教育委員会 1989年

(26)ロストル構造を持つ窯は登窯に比較して火焰の調整が用易で比較的失敗が少ないこともあってか瓦生産では奈良時代以降現代にいたるまで用いられており畿内をはじめ検出例が認められる。瓦陶兼用の窯も多い。兵庫県法鑑遺跡では7世紀後半～8世紀初頭に操業していたとされる、ロストル構造をもつ窯が確認されている。土師器の甕、甔、鉢を焼成したとみられる。この他香川県ではすべつと2・6・7号窯跡等、十瓶山窯の一支群にあたる9世紀後葉～10世紀前葉の有牀式平窯が確認されている。「小型でロストルに傾斜があることが特徴で小型器種専用の効率的な焼成を指向する動きを背景に採用された窯といえ、構造こそ異なるが、同時期の播磨地方の須恵器生産に通じる現象である」と佐藤竜馬氏は述べている。

(参考文献)

『須恵器窯の技術と系譜－豊科、信濃、そして日本列島－発表要旨集』窯跡研究会 豊科町郷土博物館 1999年

片桐節子「十瓶山窯跡群すべつと6号窯について」『窯研通信 第5号』1996年

佐藤竜馬「各地域の土師器生産と土師器焼成遺構－近畿以西－」『古代の土師器生産と焼成遺構』窯跡研究会編真陽社 1997年

木立雅朗「土師器焼成坑を定義するために」『古代の土師器生産と焼成遺構』窯跡研究会編 真陽社 1997年

望月精司「土師器焼成坑の分類」『古代の土師器生産と焼成遺構』窯跡研究会編 真陽社 1997年

岡崎正雄「兵庫県法鑑遺跡の紹介」『古代の土師器生産と焼成遺構』窯跡研究会編 真陽社 1997年

『かめ焼谷1号窯跡－香川県綾歌郡綾南町陶十瓶地区工業団地造成に伴う須恵器窯跡の発掘調査－』香川県教育委員会 1991年

松田直則「土佐における古代末から中世の土器様相－模倣系土器の展開を中心にして－」『中近世土器の基礎研究V』日本中世土器研究会 1989年

松田直則「土佐の古代末～中世の煮炊具について」『第3回四国中近世土器研究会発表資料』1991年

『四国横断自動車道(南国～伊野)建設に伴う 平成7年度奥谷南遺跡発掘調査概報』(財)高知県埋蔵文化財センター 1996年

中村浩『考古学ライブラリー13 窯業遺跡入門』ニューサイエンス社

森 隆「西日本の黒色土器(上)」『考古学研究 146』考古学研究会 1990年

百瀬正恒・橋本久和「中世平安京の土器様相と各地への展望」『考古学ジャーナル』No.299 1988年

松田直則「各地の土器様相 四国」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 1995年

池澤俊幸「ユニット7出土の土器」『下ノ坪遺跡Ⅲ－農業農村活性化農業構造改善事業上岡地区区画整理事業に伴う発掘調査報告書－』高知県野市町教育委員会 2000年

第2節 奥谷南Ⅵ区包含層出土の緑釉陶器について

今次出土したFig.9-28は、陰刻花文が施された猿投窯の製品とみられる。本県では猿投窯製品の出土例自体が僅少であり、遺跡の性格を考える上でも重要であるので、同窯製品をめぐる基礎的事項をまとめておく。出土したⅥ区は、掘立柱建物群や須恵器窯が検出されたⅦ区およびⅦ-S区の下方にある。

①猿投窯における緑釉陶器生産の概要

平安期の緑釉陶器の技術系譜は基本的に奈良三彩に求めることができるが、緑釉単彩化や器種構成の変化など生産内容が変容したことにより、区別して扱われる⁽¹⁾。猿投窯は愛知県のほぼ中央部、猿投山西南の低丘陵に数100基の窯跡が構築された大窯業地帯として知られる。5世紀代に須恵器生産窯として開窯され、灰釉陶器の人工的な焼成の成功により急激に発展し、生産の中心が瀬戸や常滑などの中世陶器に移る14世紀まで存続していた。猿投窯のうち緑釉陶器の生産が行われていたのは19基の窯跡で、灰釉陶器の生産が最盛期をむかえる9世紀前半に開始され、11世紀初頭まで行われており、それぞれK-14号窯式(前期)・K-90号窯式(中期)・0-53号窯式(後期)の3時期に比定される⁽²⁾。

②奥谷南遺跡の緑釉陶器について

Fig.9-28は灰白色の精良でやや軟質な素地をもち、内外面ヘラミガキが観察され、釉は薄手でにぶい緑色に発色している。内底の段部で復元すると内底面が直径9cm程の、段から上の口縁部に近い部分の破片であるとみられ、陰刻花文が施されている。平安京出土の土器群と供伴する緑釉陶器は大まかにⅠ～Ⅴ段階に分けられており⁽³⁾、第2段階(Ⅰ期新～Ⅱ期古)から量産型の緑釉陶器がみられる。この時期は良質な製品が多く、越州窯などの青磁あるいは白磁、金属器、漆器などと共通する器形を持つ椀皿類や耳皿、段皿もある。また硬質の素地と、厚い釉層を持ち輪花や、精緻で多様な陰刻花文を施すものが多くみられる。第3段階(Ⅱ期古～Ⅱ期新)には周辺地域ではやや粗雑な量産品がみられるようになるが猿投窯においては引き続き良品の生産が続けられる。陰刻花文もモチーフが減り定型化したものとなるが、K-90、K-89などでは優美な文様が施されたものが多い。当遺跡出土の緑釉陶器は破片のためその文様の全体は不明であるが、平安京で見られる第2段階のもののような精緻さはなく、また釉も薄くなっていることから、平安京の第3段階(9世紀後半～10世紀初頭)、生産地でみるとK-90号窯式、9世紀後半頃に比定される時期であり、緑釉陶器生産の全盛期で生産量が増加安定し器種も豊富になり、量産型が波及する時期である。

猿投産緑釉陶器は、前期には官衙・寺院関連・貴族邸宅など特異な性格を持つ遺跡から出土しており、儀器や祭祀的な色合いの強い器種が多く中国から輸入された金属器を忠実に模倣した祭祀具の代用品として供与されたものともいわれる。中期には静岡県修善寺町で金銅独鈷杵、金銅製火舎香炉蓋と火炉、金銅製花瓶とともに東海系緑釉陶器の輪花椀と段皿が出土する例もあり、密教法具との関連性が考えられている。この他器種や陰刻花文の文様も安定的に焼成され、関東地方では国衙、国分寺の他一般集落からも多数出土するようになる。後期の10世紀代になると密教が広まることで民間においても日常的な小祭祀の頻度が高くなったと考えられ、住居址から単独で緑釉椀皿が出

土する例もみられるようになる。⁽⁴⁾

本県下での緑釉陶器出土遺跡は16遺跡をかぞえる⁽⁵⁾が、猿投製品の出土例は僅少である。緑釉陶器の出土点数が多い遺跡をあげれば官衙関連遺跡とされる曾我遺跡⁽⁶⁾では45点中1点のみであり他はすべて京都産と報告されている。川津の可能性が指摘されている岩村遺跡群⁽⁷⁾でも14点中2点が確認されているのみである。四国における緑釉陶器の出土の概況は、管見ではあるが、香川県では京都洛北・洛西窯が圧倒的に多く讃岐国分寺遺跡(寺院跡)、大浦浜遺跡(祭祀跡)、買田岡下遺跡(集落跡)で数点確認されているのみである。愛媛県では東濃産は数点出土しているが京都産が多数を占め、近江産が少量混じる。遺跡の性格は集落跡が多い。徳島県では京都産と近江産が官衙跡、集落跡などから出土しているが猿投産の報告例はない⁽⁸⁾。全国的な分布も「9世紀に着目すれば東海産が多数を占める東日本型、畿内産が多数の西日本型に分かれる」⁽⁹⁾とされており、その後10世紀中頃には畿内産は近江産に取って変わられるようになるが東海産緑釉陶器が西日本で主体をなす時期はないようである。

このように奥谷南遺跡で西日本では普遍化しない東海猿投窯産の段皿が出土したことは、当遺跡の性格を示す一要素であろう。

〈註〉

- (1) 高橋照彦「緑釉陶器」『概説 中世の土器・陶磁器』 中世土器研究会編 1995年
- (2) 日永伊久男「近江産緑釉陶器の生産体制について」『中近世土器の基礎研究Ⅳ』
- (3) 平尾政幸「緑釉陶器の変質と波及」『古代の土器研究会第3回シンポジウム 古代の土器研究－律令的土器様式の西・東3 施釉陶器－』古代の土器研究会 1994年
- (4) この段落はすべて 前川要「平安時代における東海系緑釉陶器の使用形態について」『中近世土器の基礎研究Ⅲ』1987年 による。
- (5) 池澤俊幸「土佐における古代の遺跡」－官衙的遺跡を中心に－ 『律令国家における地方官衙遺構研究の現状と課題－南海道を中心に』古代学協会四国支部第12回大会発表資料 1998年
- (6) 『曾我遺跡発掘調査報告書(野市町埋蔵文化財調査報告書第2集)』野市町教育委員会 1989年
- (7) 『岩村遺跡Ⅲ岩村地区県営担い手育成基盤整備事業に伴う発掘調査報告書－』高知県南国市教育委員会 1998年
- (8) 『日本の三彩と緑釉 天平に咲いた華』愛知県陶磁資料館 1998年
- (9) (1)に同じ

〈参考文献〉

山元素子「四国の緑釉陶器－香川県を中心に－」『古代の土器研究会第3回シンポジウム 古代の土器研究－律令的土器様式の西・東3 施釉陶器－』古代の土器研究会 1994年

矢部良明「晩唐五代の越州窯青磁と平安前期の緑釉陶・灰釉陶の相関関係」『考古ジャーナル』No.211 昭和57年

第7章 付編 奥谷南遺跡の自然科学分析

<目次>

10世紀の遺構に関する自然科学分析調査

はじめに	82
1. 試料	82
2. 分析方法	83
(1) 花粉分析	83
(2) 炭化材同定	83
(3) 鉍物分析	83
(4) X線回折分析	83
(5) 薄片観察	84
3. 結果	84
(1) 花粉分析	84
(2) 炭化材同定	84
(3) 鉍物分析	84
(4) X線回折分析	85
(5) 窯壁薄片の顕微鏡観察	85
4. 考察	91
(1) 遺跡周辺の高植生と燃料材	91
(2) 焼成遺構から出土した粘土の由来と被熱の状況	91
(3) ロストル窯内部の被熱状態	92
5. 焼成遺構出土骨の鑑定	94
引用文献	94

<図表・図版の一覧>

表1 10世紀の遺構に関する分析試料一覧	図版1 炭化材
表2 炭化材同定結果	図版2 重鉍物・軽鉍物
表3 焼成遺構出土被熱粘土の重鉍物・軽鉍物分析結果	図版3 花粉分析プレパラートの状況・炭化材
表4 焼成遺構出土被熱粘土の薄片観察結果	図版4 薄片顕微鏡写真(1)
図1 焼成遺構出土被熱粘土の重鉍物および軽鉍物組成	図版5 薄片顕微鏡写真(2)
図2 焼成遺構出土被熱粘土のX線回折図	図版6 薄片顕微鏡写真(3)
	図版7 薄片顕微鏡写真(4)
	図版8 薄片顕微鏡写真(5)

10世紀の遺構に関する自然科学分析調査

はじめに

今回の奥谷南遺跡の発掘調査では、10世紀のロストルを持つ窯跡や焼成遺構などが検出されている。今回は、これらの遺構の性格に関する情報を得ることを目的とした自然科学分析調査を実施する。焼成遺構では、被熱状況に関する情報を得るためにX線回折分析・鉍物分析、出土骨片の種類検討を目的として骨同定を実施する。ロストル窯では、燃料材として利用された樹種を明らかにするために炭化材同定、窯壁の被熱温度を検討するために壁体断面の薄片を作製し観察を行った。また、当時の植生に関する情報を得ることを目的として花粉分析を実施する。なお、焼成遺構から出土した骨の鑑定は、早稲田大学金子浩昌先生の協力を得た。その経緯から署名原稿として掲載する。

1. 試料

試料の一覧を表5に示す。花粉分析は、ロストル窯灰原と焼成遺構炭化物集中土層から採取された3点である。炭化材同定は、ロストル窯内部と灰原出土の炭化材4点である。X線回折分析および鉍物分析は、焼成遺構から出土した粘土4点(焼土サンプル7~10)である。薄片観察は、ロストル窯の窯壁6点(サンプル1~6)である。

表1 10世紀の遺構に関する分析試料の一覧

サンプル名	遺構	層位・番号等	時期	分析項目						
				R	W	M	X	薄片	骨	
花粉サンプル16	ロストル窯灰原	II-2層	10世紀	○						
花粉サンプル17	SK-17	焼成遺構炭化物集中土層	10世紀	○						
花粉サンプル18	SK-11	焼成遺構炭化物集中土層	10世紀							
		III層	10世紀	○						
炭化材(樹種同定)	K-1	No. 38	10世紀		○					
		No. 69	10世紀		○					
		落ち込み	10世紀		○					
		ロストル窯灰原		10世紀		○				
焼土サンプル7	SK-10 サンプルNo.	焼成遺構の被熱粘土	10世紀			○	○			
焼土サンプル8	SK-13	焼成遺構の被熱粘土	10世紀			○	○			
焼土サンプル9	SK-14	焼成遺構の被熱粘土	10世紀			○	○			
焼土サンプル10	SK-17	焼成遺構の被熱炭化物層	10世紀			○	○			
サンプル1	ロストル窯窯壁	R-16 (分炎柱下半)	10世紀						○	
サンプル2	ロストル窯窯壁	R-17 (分炎柱)	10世紀						○	
サンプル3	ロストル窯窯壁	R-1 (左側壁)	10世紀						○	
サンプル4	ロストル窯窯壁	R-2 (煙道床面)	10世紀						○	
サンプル5	ロストル窯窯壁	R-3 (左側ロストル上面)	10世紀						○	
サンプル6	ロストル窯窯壁	R-4 (左側ロストル奥)	10世紀						○	
骨片	SK-10	焼成遺構出土	10世紀?						○	

凡例) P:花粉分析 W:炭化材同定 M:鉍物分析 X:X線回折分析 薄片:薄片観察 骨:骨同定

2. 分析方法

(1) 花粉分析

試料を湿重で約10g秤量し、水酸化カリウム処理、篩別、重液分離(臭化亜鉛, 比重2.3)、フッ化水素酸処理、アセトリシス処理(無水酢酸:濃硫酸=9:1)の順に物理・化学的な処理を施して花粉・孢子化石を分離・濃集する。処理後の残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製した後、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数を行う。

(2) 炭化材同定

木口(横断面)・柀目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

(3) 鉍物分析

試料約40gに水を加え超音波洗浄装置により分散、250メッシュの分析篩を用いて水洗し、粒径1/16mm以下の粒子を除去する。乾燥の後、篩別し、粒径1/4mm-1/8mmの砂分をポリタングステート(比重約2.96に調整)により重液分離する。得られた重鉍物を偏光顕微鏡下にて250粒に達するまで同定する。同定の際、不透明な粒については、斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するもののみを「不透明鉍物」とする。「不透明鉍物」以外の不透明粒および変質等で同定の不可能な粒子は「その他」とする。

軽鉍物は重鉍物分析の処理により得られた軽鉍物分を偏光顕微鏡下にて観察、250粒を同定する。火山ガラスは、便宜上軽鉍物に含め、その形態により3つの型に分類する。各型の形態は、バブル型は薄手平板状あるいは泡のつぎ目をなす部分であるY字状の高まりを持つもの、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは塊状のもの、軽石型は表面に小気泡を非常に多く持つ塊状および気泡の長く伸びた繊維束状のものとする。

(4) X線回折分析

105℃で2時間乾燥させた試料をメノウ乳鉢で微粉碎し、X線回折用アルミニウムホルダーに充填し、X線回折分析試料(無定方位試料)を作成する。作成したX線回折分析試料(無定方位試料)について以下の条件でX線回折分析を行う(足立, 1980; 日本粘土学会, 1987)。

検出された物質の同定解析は、測定回折線の主要ピークと回折角度から原子面間隔および相対強度を計算し、それに該当する化合物または鉍物をX線粉末回折線総合解析プログラム(五十嵐, 未公表)により検索する。

装置：島津制作所製XD-3A	Time Constant：1.0sec
Target：Cu(K α)	Scanning Speed：2°/min
Filter：Ni	Chart Speed：2cm/min
Voltage：30KVP	Divergency：1°
Current：30mA	Receiving Slit：0.3mm
Count Full Scale：5,000C/S	Scanning Range：3~45°

(5) 薄片作製観察

窯壁試料の断面を切断し、琢磨して0.03mmの薄片を作製して顕微鏡下で観察した。

3. 結果

(1) 花粉分析

花粉サンプル16でシダ類胞子が1個、花粉サンプル18で木本花粉のツガ属が1個とシダ類胞子が64個検出される程度である。これらわずかに検出される化石は、保存状態が著しく悪く、外膜が溶けて薄くなっている。

(2) 炭化材同定

樹種同定結果を表6に示す。試料番号38と落ち込みには2種類が認められる。これらの炭化材のうち、試料番号38・69の1点は共に散孔材で同じ種類と考えられるが、保存状態が悪く、種類の同定には至らない。また、灰

表6 炭化材同定結果

サンプル番号	地点・遺構	番号等	樹種
炭化材	K-1	No. 38	広葉樹（散孔材）
		No. 69	コナラ属アカガシ亜属 広葉樹（散孔材）
		落ち込み	コナラ属アカガシ亜属 クリ
	灰原		広葉樹（散孔材）

原から採取された炭化材も散孔材であるが、種類の同定までに至らない。その他の試料は、常緑広葉樹1種類(コナラ属アカガシ亜属)と落葉広葉樹1種類(クリ)に同定された。各種類の解剖学的特徴を以下に記す。

- ・コナラ属アカガシ亜属(Quercus subgen. Cyclobalanopsis) ブナ科

放射孔材で、管壁厚は中庸～厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高のものと複合放射組織とがある。

- ・クリ(Castanea crenata Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

環孔材で孔圏部は1～6列、孔圏外で緩やかに管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高。

(3) 鉱物分析

結果を表7・図3に示す。以下、各試料ごとに結果を示す。

焼土サンプル7は、「その他」を除くと不透明鉱物を比較的多く含み、斜方輝石および角閃石を少量～微量含む。

焼土サンプル8・9は「その他」がほとんどを占める。「その他」を除く鉱物は焼土サンプル8が不透明鉱物、焼土サンプル9が斜方輝石と不透明鉱物を微量含む。「その他」とした粒はいずれ

表7 焼成遺構出土被熱粘土の重鉱物・軽鉱物分析結果

試料名	カンラン石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	酸化角閃石	ジルコン	不透明鉱物	その他	合計	バブル型火山ガラス	石英	長石	その他	合計
焼土サンプル7	0	29	3	8	1	0	60	149	250	6	6	72	166	250
焼土サンプル9	0	1	0	0	0	0	14	235	250	1	5	47	197	250
焼土サンプル9	0	16	0	1	0	0	15	218	250	4	3	28	215	250
焼土サンプル10	1	6	0	6	0	1	99	137	250	14	6	37	193	250

も不透明で不定形を呈する。落射光下で主に赤褐～赤黒色を呈し、表面に凹凸が認められる。

焼土サンプル10は「その他」を除くと不透明鉱物が比較的多く、微量の斜方輝石と角閃石を含む。

軽鉱物は「その他」を除くと長石が比較的多く、微量の石英を含む。また、焼土サン

プル10では微量のバブル型火山ガラスが認められる。バブル型火山ガラスのほとんどが無色透明のものであるが、褐色のものも微量含まれる。この火山ガラスはその特徴から、約6300年前に九州南方の鬼界カルデラから噴出した鬼界-アカホヤ火山灰(K-A h：町田・新井，1978)に由来すると考えられる。

(4) X線回折分析

結果を図4に示す。焼土サンプル7～10は類似した回折パターンを示し、主な検出鉱物として石英(quartz)、斜長石(plagioclase)、緑泥石(chlorite)、雲母鉱物(mica minerals)が確認される。ただし、焼土サンプル8～10は赤鉄鉱(hematite)の存在が明瞭に認められ、焼土サンプル7とやや異なる特徴を示す。さらに焼土サンプル8～10の中では焼土サンプル8・9で赤鉄鉱(hematite)の回折強度が強い傾向にあり、焼土サンプル10でカリ長石(K-feldspars)、ギブサイト(gibbsite)の存在も認められ、焼土サンプル8・9と焼土サンプル10はやや異なる。

(5) 窯壁試料の顕微鏡観察

岩石顕微鏡下で炉壁を構成する基質と含有される碎屑片(鉱物片と岩片)、およびその組織を観察した。高温で焼成された試料は、その焼成温度に応じて、鉱物や組織に加熱変化を生じている。顕微鏡観察の結果は別添の観察記録表に記載し、一覧表に示した(表8)。

・サンプル1 R-16 分炎柱下半(図版6 1-2)

頁岩・チャート・砂岩・流紋岩の岩片が多くみられる。

鉱物片

鉱物片として微量の石英が含まれる。

石英：石英は微量存在し、粒径最大0.45mmの他形破片状を呈する。加熱変化はみられない。

岩片

岩片として頁岩・チャート・砂岩・流紋岩が認められる。

頁岩：少量で存在し、最大粒径3.2mmの角礫状を呈する。含鉄セリサイトを主成分鉱物とするが、一部は石英細片に富み、シルト質である。セリサイトは加熱変化を受けずに残存してい

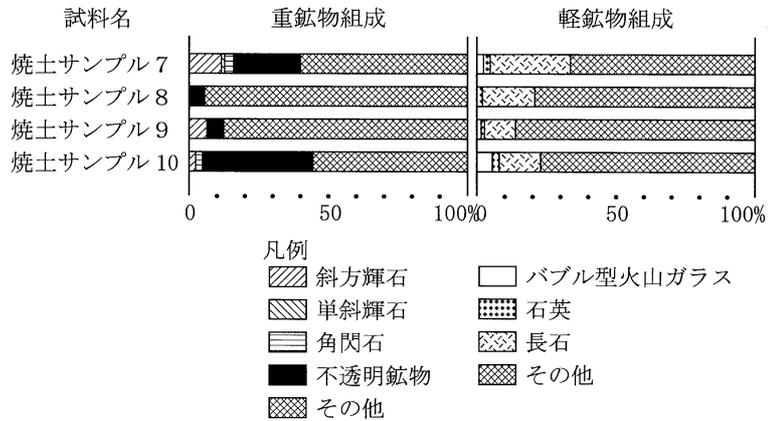


図3 焼成遺構出土被熱粘土の重鉱物および軽鉱物組成

検出鉱物略号

Qz: 石英 (quartz)
 Pl: 斜長石 (plagioclase)
 Kf: カリ長石 (K-feldspars)
 He: 赤鉄鉱 (hematite)
 Ch: 緑泥石 (chlorite)
 Mi: 雲母鉱物 (mica minerals)
 Gb: ギブサイト (gibbsite)

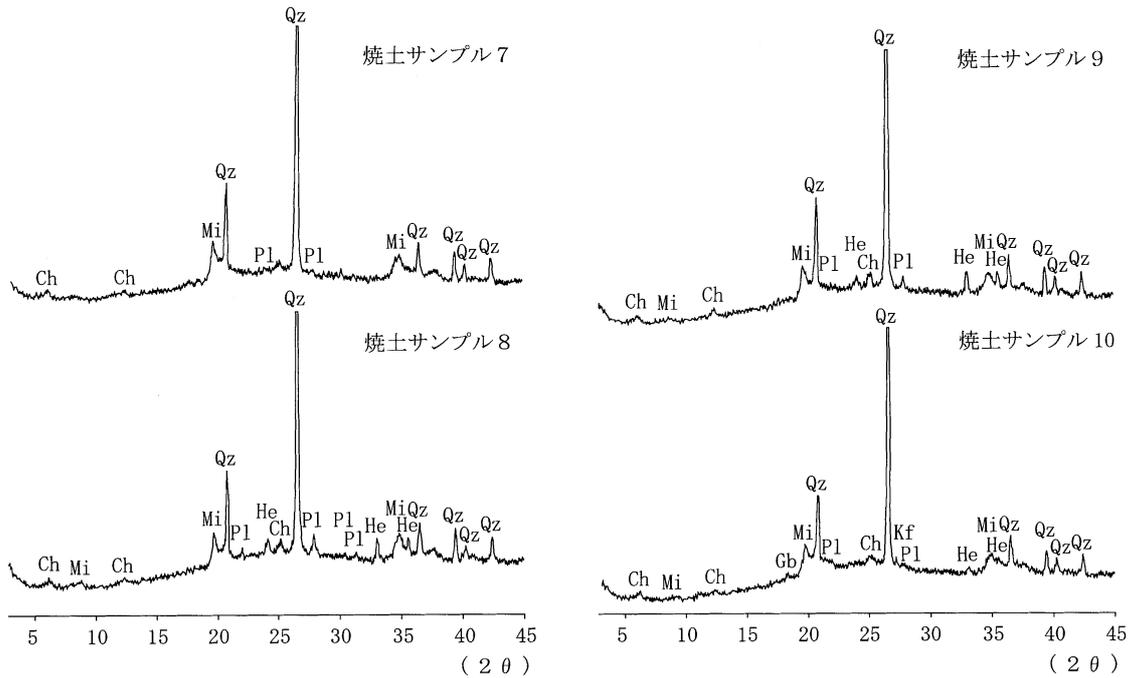


図4 焼成遺構出土被熱粘土のX線回折図

る。

チャート：少量～微量で存在し、最大粒径2.2mmの亜角礫状を呈する。微晶質石英の集合体で構成されている。

砂岩：少量～微量存在し、最大3.6mmの角礫状を呈する。粘土を多く伴う細粒砂岩の岩片である。

流紋岩：少量～微量で存在し、最大2.7mmの角礫状を呈する。石基は火山ガラスで構成される。球顆組織の発達が顕著である。

素地鉱物等

石英：微量存在する。粒径0.02mm以下の破片状を呈し、素地中に点在している。

粘土鉱物：中量存在し、素地の主要成分となっている。含鉄質で赤褐色を呈する繊維状粘土鉱物で、セリサイト質と思われる。一部は加熱変化し、非晶質化が認められる。

酸化鉄：中量～少量存在し素地の粘土鉱物と共在している。試料の表面から約1cmは被熱による赤鉄鉱化が著しく、赤色化しているが次第に褐色に変じ、あまり大きな被熱効果はみられ

表8 顕微鏡下の鉱物片・岩片・素地鉱物および素地の性状一覧表

サンプル	鉱物片		岩片					素地鉱物				素地の性状				推定比熱 温度	備考
	Qz	Pl	Ch	Sh	Ss	Rh	Q-s	Se	Qz	FeO	FeC	Col	Ori	Cly	Srt		
1	+	±	△~+	△	△~+	△~+		○	+	○~△		○~△	+	+	+	900°C+	分炎注下半
2	+	±	+	△~+	△~+			◎~○	+	○~△	△~+	○	+	△~+	+	900°C+	分炎柱
3	+		△~+	△~+	△		+	◎~○	+~±	○~△	△	○~△	+	△~+	+	900°C	左側壁
4	+		△~+	△	△~+			◎~○	±	○		○~△	+	+	+	900°C	煙道床面
5	+		△~+	△~+	+			±	△~+	+		○~△	+	△~+	+	900°C+	左側ロストル上面
6	+		△~+	△~+	+			◎~○	±	○~△	+	○~△	+	△~+	+	900°C-	左側ロストル奥

凡例

鉱物略号 Qz:石英 Pl:斜長石
 岩片略号 Ch:チャート Sh:頁岩 Ss:砂岩 Rh:流紋岩 Q-s:石英片岩
 素地鉱物 Se:セリサイト Qz:石英 FeO:酸化鉄 FeC:酸化鉄結核
 量比 ◎:多量 ○~○多量~中量 ○中量 ○~△:少量 △~+:少量~微量 +:微量 +~±:微量~きわめ
 素地の性状
 Col:素地の色調 ○:濃色 ○~△:濃色~中間 △:中間 △~+:少量~微量
 Ori:素地の配向性 ○:強い ○~△:強い~中程度 △:中程度 △~+:中程度~弱い +:弱い
 Cly:素地の粘土量比 ○:多い ○~△:多い~中程度 △:中程度 △~+:中程度~少ない +:少ない
 Srt:淘汰の程度 ○:良好 ○~△:良好~中程度 △:中程度 △~+:中程度~不良 +:不良

ない。

素地の性状

顕微鏡下で黄褐色~濃赤褐色の色調を示し、配向性はほとんど認められない。細礫と粗砂に富み、粘土分の少ない、淘汰度が不良である土を使用している。セリサイトを主成分鉱物とする粘土鉱物の一部は加熱変化して非晶質化しているが、大部分は光学性を残存していることから、赤色化した部分の加熱温度は900°C+と判定される。

・サンプル2 R-17 分炎柱

試料番号1と同質で、頁岩・砂岩に富むが、流紋岩は含まれない。細礫と粗砂で構成され、粘土の含有量は比較的少ない。

鉱物片

石英:微量存在する。最大粒径0.6mmの他形粒状を呈する。加熱変化はみられない。

斜長石:きわめて微量で存在し、粒径0.33mmの他形粒状を呈する。集片双晶が発達し、一部は風化作用によるセリサイト化が顕著である。加熱変化は認められない。

岩片

チャート:微量で存在し、最大1.6mmの角礫状を呈する。微晶質石英の集合体となっている。

頁岩:少量~微量で存在し、最大粒径3.6mmの垂角礫状を呈する。含鉄セリサイトを主成分鉱物とするが、一部は石英細片に富み、シルト質である。セリサイトは加熱変化を受けずに残存している。

砂岩:少量~微量で存在し、最大4.0mmの角礫状を呈する。粘土を多く伴う細粒砂岩である。

素地鉱物等

石英:微量で存在し、粒径0.02以下の破片状を呈して素地中に点在する。

セリサイト:多量~中量存在し、粒径0.02以下の鱗片状を呈する。含鉄質で、一部は加熱変化し、非晶質化している。

酸化鉄：中量～少量存在する。本試料は窯壁に平行に約1cmの場所を切断して作成したため、全面に被熱による赤鉄鉱化が著しく、赤色化している。

酸化鉄結核：素地中に水酸化鉄が凝固し、加熱されて赤鉄鉱化した部分で、少量～微量存在し、粒径最大1.5mmに粒状を呈する。

素地の性状

素地の色調は濃色の赤褐色で、素地の鉱物や碎屑片の配列には配向性は認められない。素地の粘土量は少なく、大型岩片を細礫または粗砂の状態が多く含むために淘汰度は不良となっている。水酸化鉄の赤鉄鉱化と、素地粘土鉱物のセリサイトが一部非晶質化していることから被熱温度は900°C+と推定される。

・サンプル3 R-1 左側壁

碎屑片は主として砂岩・チャート・頁岩で構成されているが、このほかに微量の石英片岩が含まれている。

鉱物片

石英：微量存在し、最大粒径0.5mmの他形粒状を呈する。加熱変化はみられない。

岩片

砂岩：少量で存在し、最大粒径10.0mmの角礫状を呈する。細粒砂岩が多くみられるが、一部は石英質砂岩の岩片である。

チャート：少量～微量で存在し、最大粒径1.15mmの角礫状を呈する。主体は微晶質石英の集合体で構成されているが、セリサイトが比較的多く共在している。

頁岩：少量～微量で存在し、最大粒径3.5mmの垂角礫状を呈する。セリサイトを主成分鉱物とする。セリサイトの一部は非晶質化しているが、大部分は加熱変化を受けずに残存している。

石英片岩：微量存在し、最大粒径2.9mmの角礫状を呈する。細晶質石英集合体で、顕著な片理組織を有している。

素地鉱物

石英：微量～きわめて微量で存在し、粒度0.02mm以下の破片状を呈して素地中に点在する。

セリサイト：多量～中量で存在し、粒径0.02mm以下の鱗片状を呈する含鉄セリサイトである。一部は加熱変化して非晶質化するが、大部分は光学性を残存している。

酸化鉄：中量～少量存在し素地の粘土鉱物と共在している。試料の切断面は試料1ときわめてよく類似し、試料の表面から約1cmは被熱による赤鉄鉱化が著しく、赤色化しているが次第に褐色に変じている。

酸化鉄結核：素地中に少量存在し、粒径最大0.75mmの粒状を呈する。赤鉄鉱で公欠されている。

素地の性状

素地は褐色～濃赤褐色で、試料表面ほど赤味が強い。粘土鉱物や碎屑片の配列に配向性は認められない。素地の粘土は含鉄質粘土で加熱により一部分は非晶質化している。全般に大型岩片を含むために淘汰度は不良である。

表面から5mmの薄片では加熱による変化がみられ、含鉄セリサイトの一部は非晶質化している。しかし、粘土鉱物の大部分は残存することから被熱温度は900°C±と推定される。これに対し、表面から17mmの薄片ではセリサイトに加熱変化がみられず、900°Cと判定される。

・サンプル4 R-2 煙道床面

頁岩・チャート・砂岩の岩片が多く含まれ、粘土含有量は少ない。

鉱物片

石英：微量存在し、粒径最大0.25mmの他形粒状を呈する。加熱変化はみられない。

岩片

頁岩：少量で存在し、最大粒径3.4mmの亜角礫～亜円礫状を呈する。セリサイトを主成分鉱物とするが、一部は石英細片に富み、シルト質である。セリサイトは加熱変化を受けずに残存している。

チャート：少量～微量で存在し、最大粒径3.4mmの角礫状を呈する。微晶質石英の集合体で構成されている。

砂岩：少量～微量で存在し、最大3.4mmの角礫状を呈する。石英質の細粒砂岩の岩片である。

素地鉱物

石英：きわめて微量存在し、粒径0.02以下の破片状を呈して素地中に点在する。

セリサイト：多量～中量存在する。粒径0.02以下の鱗片を呈する含鉄質セリサイトで、一部は加熱変化して非晶質化し、大部分は光学性を保って残存している。

酸化鉄：中量存在し、赤鉄鉱化して素地を結膠している。

素地の性状

素地は黄褐色～濃赤褐色を示し、配向性はほとんど認められない。粘土は含鉄セリサイトで含有量は少なく、一部は加熱により非晶質化している。大型岩片を細礫状に多く含むために淘汰度は不良である。本試料も試料2と同様に表面に平行に約1cmの場所を切断して薄片を作成したため、全面に被熱による赤鉄鉱化が著しく赤色化している。本試料では素地のセリサイトの一部が非晶質化している状態から被熱温度を900°C±と推定した。

・サンプル5 R-3 左側ロストル上部

チャート・頁岩の岩片に富む釜土を使用している。

鉱物片

石英：微量存在し、粒径最大0.28mmの破片状を呈する。波状消光が発達している。加熱変化は認められない。

岩片

チャート：少量～微量で存在し、最大粒径3.04mmの角礫状を呈する。微晶質石英の集合体で構成されている。

頁岩：少量存在し、最大粒径3.0mmの亜角礫～亜円礫状を呈する。セリサイトを主成分鉱物と

するが、一部は石英細片に富みシルト質である。セリサイトは加熱変化を受けずに残存している。

砂岩：微量で存在し、最大3.0mmの角礫状を呈する。石英質細粒砂岩の岩片である。

素地鉱物

石英：少量～微量で存在し、粒径0.02以下の破片状を呈して素地中に散在する。

セリサイト：きわめて微量で存在し、粒径0.02mmの鱗片を呈する。他試料と比較するとセリサイトの含有量は極端に少なく、非晶質粘土が多い。表面付近での素地粘土は加熱変化し、組織を残して濃色化し、きわめて微量で存在するセリサイトも非晶質化している。これに対し、表面から約10mm離れると加熱変化はほとんどみられない。ただし、頁岩等に含まれるセリサイトや10mm程度表面から離れた部分にきわめて微量で存在するセリサイトは加熱変化を受けていない。

酸化鉄：少量～微量存在する。赤鉄鉱化し素地の粘土を結膠している。他の試料と比較すると含鉄量が少ない。

素地の性状

素地の色調は黄褐色～濃黄褐色で、配向性はほとんど認められない。粘土量は中程度ないし少量で、加熱により大部分は非晶質化している。大型岩片を多く含むために淘汰度は不良である。

素地にきわめて微量で含まれるセリサイトが加熱変化を起こしていることから被熱温度は900°Cを超えるが、石英に加熱変化がみられないことから1,150°Cには達していないと推定される。

なお、本試料の空隙や割れ目には二次的に沈積したと考えられる含鉄モンモリロナイト質粘土鉱物が多くみられ、最大0.4mmの幅を示す。モンモリロナイト質粘土鉱物は表面ほど濃色で、赤橙色を呈し、内部では橙色になるが、加熱を受けた形跡はみられない。

・試料番号6 R-6 左側ロストル奥

頁岩・チャートの岩片が多く含まれ、粘土含有量は比較的少ない。

鉱物片

石英：微量存在し、粒径最大0.32mmの他形粒状を呈する。加熱変化はみられない。

岩片

チャート：少量～微量で存在し、最大粒径5.9mmの角礫状を呈する。微晶質石英の集合体で構成され、放散虫化石痕がみられる。

頁岩：少量～微量で存在し、最大粒径3.3mmの亜角礫～亜円礫状を呈する。セリサイトを主成分鉱物とするが、一部は石英細片に富み、シルト質である。セリサイトは加熱変化を受けずに残存し、片理組織が発達している。

砂岩：微量で存在し、最大2.8mmの角礫状を呈する。石英質砂岩の岩片である。

・素地鉱物

石英：きわめて微量存在し、粒径0.02以下の破片状を呈して素地中に点在する。

セリサイト：多量～中量存在する。粒径0.02以下の鱗片を呈する含鉄質セリサイトで、加熱変化

を受けずに残存している。

酸化鉄：中量～少量存在し、赤鉄鉱化して素地を結膠している。

酸化鉄結核：微量存在し、粒径0.32mmの粒状を呈し、微晶質赤鉄鉱の集合体となっている。

素地の性状

素地は褐色～赤褐色を示し、配向性はほとんど認められない。粘土は含鉄セリサイトで含有量は比較的少ないが、加熱による赤鉄鉱化が顕著であるが、光学性は残存している。大型岩片を細礫状に多く含むために淘汰度は不良である。本試料も表面から約1cmの部分で赤鉄鉱化が著しく赤色化している。本試料では素地のセリサイトに加熱変化がみられない状態から被熱温度を900°Cと推定した。

4. 考察

(1) 遺跡周辺の高植生と燃料材

花粉化石がほとんど検出されなかった要因は、何らかの要因により花粉化石が分解・消失したことによると思われる。一方、出土する炭化材は、ロストル窯および灰原から検出されており、燃料材の一部と考えられている。この樹種はアカガシ亜属とクリであった。ところで、高知平野のほぼ中央部に位置する岡豊低湿地で行われた花粉分析によると、約7,000年前以降、シイ・カシ類からなる照葉樹林が約2,000年前まで成立していたとされている(山中ほか, 1992)。本遺跡の周辺にも、当時、アカガシ亜属やクリなどが生育しており、周辺に生育していた広葉樹を燃料材として用いていたと推定される。

(2) 焼成遺構から出土した粘土の由来と被熱の状況

今回の分析結果では各試料とも重鉱物は比較的少ないが、X線回折分析結果も含めればいずれの試料も比較的類似した鉱物組成を示す。「その他」とした粒が多い焼土サンプル8・9についてもX線回折分析による鉱物組成が他の試料と類似することから、概ね由来は同様であると考えられる。また、焼土サンプル10についても由来はほぼ類似するが、K-A hに由来する火山ガラスを他の試料より比較的多く含むことでやや異なる。本遺跡の地理的位置および試料中に砂岩、礫岩などの礫も比較的多く認められることを考慮すると、今回の試料はいずれも後背山地の秩父累帯の堆積岩などに由来する碎屑物を主な母材としていると考えられる。

一方、粘土を加熱していくと、種々の鉱物が生成、あるいは逆に消失する。X線回折分析は粘土のこの性質を利用し、試料中に存在する鉱物の種類を検出することによって焼成温度を推定する手法である(東村, 1990)。例えば、イライトは950°Cまでしか存在しないのでイライトの回折スペクトルが検出されないと950°C以上の焼成であり、さらに斜長石は1100°Cまでしか存在しないので斜長石の回折スペクトルが検出されると1100°C以下の焼成温度であると推定される。また、鉱物分析では、角閃石が800°Cで酸化角閃石に変化すること(黒田・諏訪, 1983)が焼成温度の指標となる。

今回の試料では、いずれの試料においても緑泥石(550°Cで約12°の回折線が、750°C以上で約6°の回折線がそれぞれ消失)の存在が明瞭に認められたことから、これらの焼土サンプルは被熱したとしても550°C以下であったと推定される。

さらに、今回の分析結果では各試料間で赤鉄鉱の回折強度に差が見られ、特に焼土サンプル8・9において回折強度が強い傾向にある。また、焼土サンプル8・9の重鉱物組成では「その他」がほとんどを占める。当社におけるこれまでの分析例では、今回の「その他」としたような粒は土器胎土のような焼成物中によく認められるものの、自然堆積物中ではあまり認められない。さらに、当社による粘土の焼成実験によっても、焼成により「その他」とした粒が増加し、焼成温度が高くなるにしたがってその量も増加することが確かめられている(800℃程度まで)。これらのことから、焼土サンプル8・9では、他の試料に比較して被熱温度が高かったため、赤鉄鉱および「その他」とした粒が増加した可能性がある。被熱温度としては550℃を上限とし、焼土サンプル8・9が高く、焼土サンプル7・10がやや低かったと考えられる。

(3) ロストル窯内部の被熱状態

窯壁試料である分炎柱下半、分炎柱、左側壁、煙道床面、左側ロストル上面、左側ロストル奥の鉱物片・岩片の組み合わせを一覧表に示した(表9・10)。窯壁試料は、次の諸点が特徴として挙げられるが、全体的にはほぼ同質の淘汰度の悪い粘土を窯土に用いている。

- 1) 単体の鉱物片は微量で、石英のほかには2試料(サンプル1, 2)に、きわめて微量の斜長石が検出されたにすぎない。
- 2) 粘土中の岩片として頁岩・砂岩・チャートの三岩種が細礫～粗砂の粒度で普遍的に含まれ、粘土堆積場の後背地には中～古生層が分布することを示唆している。
- 3) 上記3岩種の他には流紋岩(サンプル1)と石英片岩(サンプル3)が各1試料中に検出されるにすぎない。

表9 試料中の鉱物片・岩片量比の頻度(試料数6)

鉱物・岩片	◎	◎～○	○	○～△	△	△～+	+	＋～±	±	検出試料数
石英							6			6
斜長石									2	2
チャート						5	1			6
頁岩					2	4				6
砂岩					1	3	2			6
流紋岩						1				1
石英片岩							1			1

凡例

量比 ◎:多量 ◎～○:多量～中量 ○:中量 ○～△:中量～少量 △:少量
△～+:少量～微量 +:微量 +～±:微量～きわめて微量、±:きわめて微量

表10 試料中の鉱物片・岩片の最大粒径の比較(単位mm, 試料数6)

鉱物・岩片	最大値	最小値	平均値	2.0+	2.0～1.0	1.0～0.75	0.75～0.5	0.5～0.25	0.25-	検出試料数
石英	0.60	0.25	0.40				2	4		6
斜長石	0.33	0.25	0.29					2		2
チャート	5.90	1.15	2.88	4	2					6
頁岩	3.60	3.00	3.37	6						6
砂岩	10.00	2.80	4.47	6						6
流紋岩	2.70	2.70	2.70	1						1
石英片岩	2.90	2.90	2.90	1						1

4) 素地の粘土は含鉄質セリサイトで構成されている。ただし、サンプル5での含鉄量は他と比較すると低く、他の試料とは異なる粘土を使用している。総合的には中-古生層堆積岩類が発達した地区の含鉄粘土を使用していると考えられる。

5) 6試料ともに被熱しているが、被熱による変化は表面から約10mmまでの部分に限られ、それ以上の内部での被熱変化はきわめて小さい。その被熱温度について以下に推定する。

一般に粘土を高温で加熱すると、その温度条件と化学組成に対応した鉱物の晶出(代表的な鉱物はムライト)、溶融・非晶質化などの現象がみられる。観察試料では、加熱温度の推定に次の現象について検討して指針として適用した。

- 1) 角閃石が酸化角閃石に変化している試料は800°C以上の加熱を受けている。
- 2) 素地を構成する主要粘土鉱物のセリサイトが加熱変化を受けていない試料の焼成温度は900°C-と推定される。
- 3) 粘土鉱物の一種であるセリサイトの一部は加熱変化を受けて非晶質化しているが、大部分は残留している状態を900°C±の焼成温度と推定する。
- 4) セリサイトの大部分は加熱変化を受けて非晶質化しているが、石英・長石類に加熱変化がみられない試料の焼成温度は900°C+と見積もる。
- 5) セリサイトは加熱により非晶質化しているが、石英・長石類にあまり加熱変化がみられない試料の焼成温度を1,150°C-と推定される。
- 6) 石英に高温加熱で生じたクラック(高温クラック)がみられ、カリ長石の周縁部が微溶化している状態の試料の焼成温度は1,150°C±と推定される。
- 7) 石英に高温クラックと溶融組織がみられ、カリ長石に顕著な溶融組織が認められるが、曹長石のムライト化は明瞭ではない試料の焼成温度は1,150~1,200°Cと推定される。
- 8) ムライトの生成が褐色リムまたは短針状で顕在化した試料の加熱温度を1,200°C±と推定する。
- 9) 針状ムライトが粗に生成している試料は1,200~1,250°Cの焼成温度と見積もられる。
- 10) 針状ムライトが密に生成する試料は1,250°C+の焼成温度と見積もられる。

なお、酸化鉄に関して、含水酸化鉄(褐鉄鉱)は、実験的には320~350°Cの加熱で脱水して赤鉄鉱に転移する。従ってかなり低温の焼成物中でも赤鉄鉱化が生ずることになる。ただし、経験的には被熱温度が高くなると赤鉄鉱の赤色の程度が変化するので、定性的に高温・低温の程度を推定することができる。

以上の基準に従えば、奥谷南遺跡出土試料の表面に近い部分での被熱は2)~4)の段階に相当すると判定され、石英や長石類が加熱変化を起こすような高温の被熱現象は観察されていない。したがって、推定被熱温度はサンプル1(R-16 分炎柱下半)が900°C+、サンプル2(R-17 分炎柱)が900°C+、サンプル3(R-1 左側壁)が900°C±、サンプル4(R-2 煙道床面)が900°C±、サンプル5(R-3 左側ロストル上面)が900°C+、サンプル6(R-6 左側ロストル奥)が900°C-と推定される。

許諾手続き中

許諾手続き中

陶磁器等顕微鏡観察記録表

試験番号	1			試料名	R-16
採取地	分炎柱下半			備考	
鉱物・岩石名	量比	最大粒径	形状	その他	
鉱物 片	石英	+	0.45	他形破片状	加熱変化なし。
	斜長石	±	0.25	他形粒状	累帯組織がある。
岩 石 片	チャート	△～+	2.2	亜角礫状	微晶質石英集合体。
	頁岩	△	3.2	角礫状	一部はシルト質。セリサイトが残留している。
	流紋岩	△～+	2.7	角礫状	大部分は火山ガラスで構成される。球顆組織が発達している。
	砂岩	△～+	3.6	角礫状	細粒砂岩。粘土を多くともなう。
素 地 鉱 物 等	酸化鉄	○～△		粒間充填	表面に近い部分は赤鉄鉱で膠結される。
	石英	+	0.02	破片状	素地中に点在する。
	粘土鉱物	○	0.3	繊維状	含鉄質である。
素 地	色調	濃色～中間		黄褐色～濃赤褐色。	
	配向性	弱い			
	粘土量	少ない			
	淘汰の程度	不良		大型岩片を含む。	
記事：					
推定焼成温	900℃+				

鉱物・岩片などの量比 ○：多量 ○：中量 △：少量 +：微量 ±：きわめて微量

陶磁器等顕微鏡観察記録表

試験番号	2			試料名	R-17
採取地	分炎柱			備考	
鉱物・岩石名	量比	最大粒径	形状	その他	
鉱物	石英	+	0.6	他形粒状	加熱変化なし。
	斜長石	±	0.33	他形粒状	集片双晶が発達している。
岩石	チャート	+	1.6	角礫状	微晶質石英集合体。
	頁岩	△～+	3.6	亜角礫状	セリサイト質。一部はシルト質。
	砂岩	△～+	4.0	角礫状	細粒粘土砂岩。
素地 鉍物等	セリサイト	◎～△	0.02	鱗片状	素地の主成分粘土鉍物。含鉄質で加熱変化し、一部非晶質化。
	石英	+	0.02	破片状	素地中に点在する。
	酸化鉄	○～△		粒間充填	赤鉄鉍で膠結される。
	酸化鉄結核	△～+	1.5	他形粒状	赤鉄鉍で膠結される。
素地	色調	濃色		濃赤褐色	
	配向性	弱い			
	粘土量	中程度～少ない		含鉄セリサイト質粘土。加熱により一部非晶質化。	
	淘汰の程度	不良		大型岩片を含む。	
記事：					
推定焼成温	900℃+				

鉱物・岩片などの量比 ◎：多量 ○：中量 △：少量 +：微量 ±：きわめて微量

陶磁器等顕微鏡観察記録表

試験番号	3			試料名	R-1
採取地	左側壁			備考	
鉱物・岩石名	量比	最大粒径	形状	その他	
鉱物片	石英	+	0.5	他形粒状	加熱変化なし。
岩石片	チャート	△～+	1.15	角礫状	セリサイトを含む微晶質石英集合体。
	頁岩	△～+	3.5	亜角礫状	セリサイトが残存している。
	砂岩	△	10.0	角礫状	細粒粘土砂岩。一部は石英質砂岩。
	石英片岩	+	2.9	角礫状	石英集合体片理組織顕著。
素地鉱物等	セリサイト	◎～○	0.02	鱗片状	含鉄質。加熱変化し、一部非晶質化。
	石英	+～±	0.02	破片状	素地中に点在する。
	酸化鉄	○～△		粒間充填	赤鉄鉱で膠結される。
	酸化鉄結核	△	0.7	粒状・筋状	赤鉄鉱で膠結される。
素地	色調	濃色～中間		褐色～濃赤褐色。	
	配向性	弱い			
	粘土量	中程度～少ない		含鉄セリサイト質粘土。	
	淘汰の程度	不良		大型岩片を含む。	
記事：					
推定焼成温	900℃				

鉱物・岩片などの量比 ◎：多量 ○：中量 △：少量 +：微量 ±：きわめて微量

陶磁器等顕微鏡観察記録表

試験番号	4			試料名	R-2
採取地	煙道床面			備考	
鉱物・岩石名	量比	最大粒径	形状	その他	
鉱物 片	石英	+	0.25	他形粒状	加熱変化なし。
岩石 片	チャート	△～+	3.4	角礫状	微晶質石英集合体。
	頁岩	△	3.6	亜角礫-亜円礫状	セリサイト質。一部はシルト質。
	砂岩	△～+	3.4	角礫状	石英質砂岩。
素地 鉱物 等	セリサイト	◎～○	0.02	鱗片状	素地の主成分粘土鉱物。含鉄質で加熱変化し、一部非晶質化。
	石英	±	0.02	破片状	素地中に点在する。
	酸化鉄	○		粒間充填	赤鉄鉱で膠結される。
素地	色調	濃色～中間		黄褐色～濃赤褐色	
	配向性	弱い			
	粘土量	中程度～少ない		含鉄セリサイト質粘土。加熱により一部非晶質化。	
	淘汰の程度	不良		大型岩片を含む。	
記事：					
推定焼成温	900℃				

鉱物・岩片などの量比 ◎：多量 ○：中量 △：少量 +：微量 ±：きわめて微量

陶磁器等顕微鏡観察記録表

試験番号	5			試料名	R-3
採取地	左側ロストル上面			備考	
鉱物・岩石名	量比	最大粒径	形状	その他	
鉱物片	石英	+	0.28	破片状	加熱変化なし。波状消光がある。
岩石片	チャート	△～+	3.04	角礫状	微晶質石英集合体。
	頁岩	△～+	3.0	亜角礫-亜円礫状	一部はシルト質。
	砂岩	+	3.0	角礫状	石英質砂岩。
素地 鉱物等	石英	△～+	0.02	破片状	素地中に散在する。
	セリサイト	±	0.02	鱗片状	加熱変化し、表面では非晶質化。
	酸化鉄	+		粒間充填	赤鉄鉱で膠結される。
素地	色調	濃色～中間		黄褐色～濃黄褐色	
	配向性	弱い			
	粘土量	中程度～少ない		加熱により一部非晶質化。	
	淘汰の程度	不良		大型岩片を含む。	
記事：					
推定焼成温	900℃+				

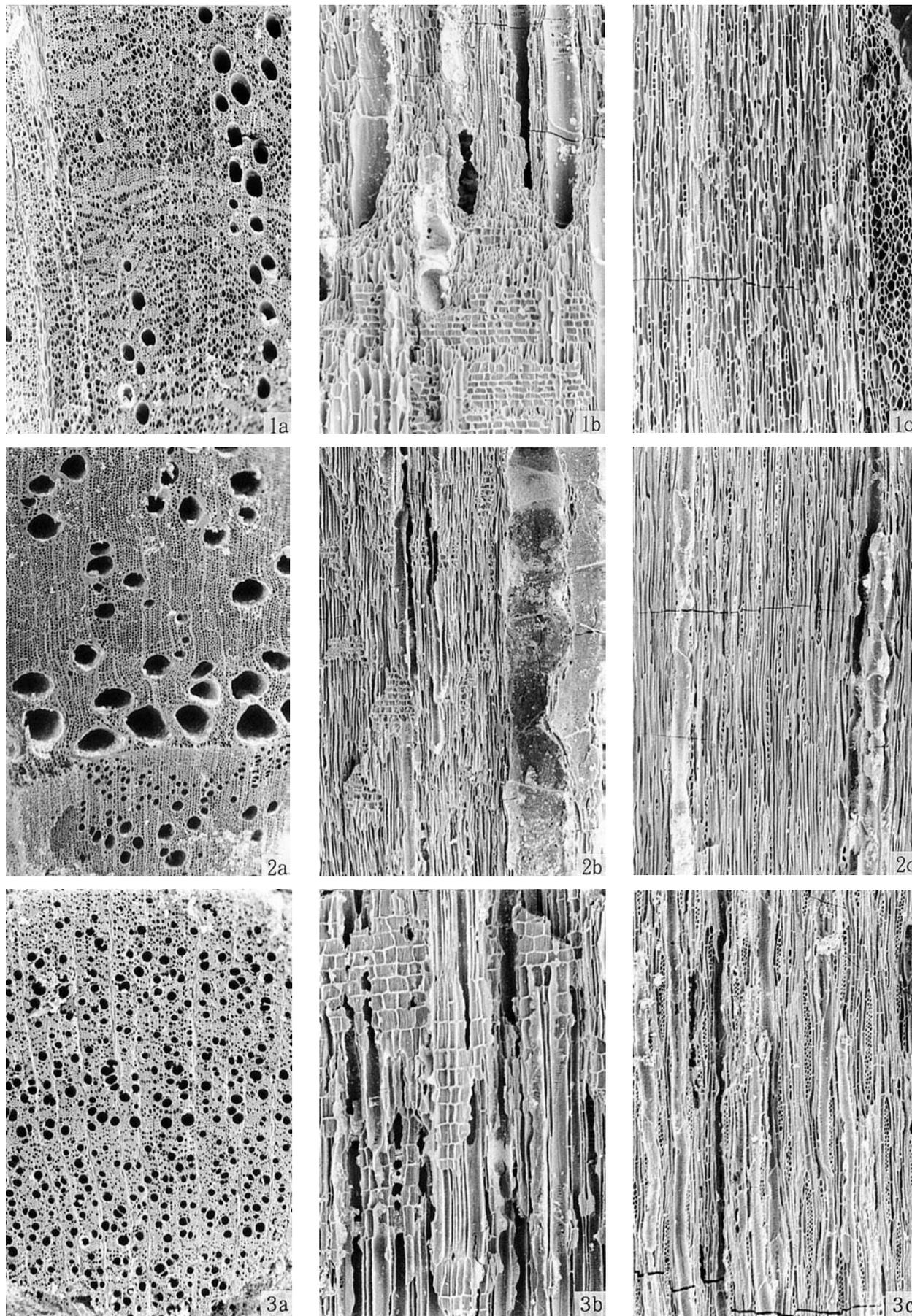
鉱物・岩片などの量比 ◎：多量 ○：中量 △：少量 +：微量 ±：きわめて微量

陶磁器等顕微鏡観察記録表

試験番号	6			試料名	R-6
採取地	左側ロストル奥			備考	
鉱物・岩石名	量比	最大粒径	形状	その他	
鉱物 片	石英	+	0.32	破片状	加熱変化なし。
岩石 片	チャート	△~+	5.9	角礫状	微晶質石英集合体。放散虫化石痕がある。
	頁岩	+	2.8	角礫状	石英質砂岩。
	砂岩	△~+	3.3	亜角礫-亜円礫状	セリサイト質。一部はシルト質。片理組織顕著
素地 鉱物 等	セリサイト	◎~○	0.02	鱗片状	含鉄質である。素地の主成分粘土鉱物。
	石英	±	0.02	破片状	素地中に点在する。
	酸化鉄	○~△		粒間充填	赤鉄鉱で膠結される。
	酸化鉄結核	+	0.32	粒状	赤鉄鉱で膠結される。
素地	色調	濃色~中間		褐色~赤褐色	
	配向性	弱い			
	粘土量	中程度~少ない		含鉄セリサイト質粘土。岩片を多く含む。	
	淘汰の程度	不良		大型岩片を含む。	
記事：					
推定焼成温	900℃-				

鉱物・岩片などの量比 ◎：多量 ○：中量 △：少量 +：微量 ±：きわめて微量

図版1 炭化材



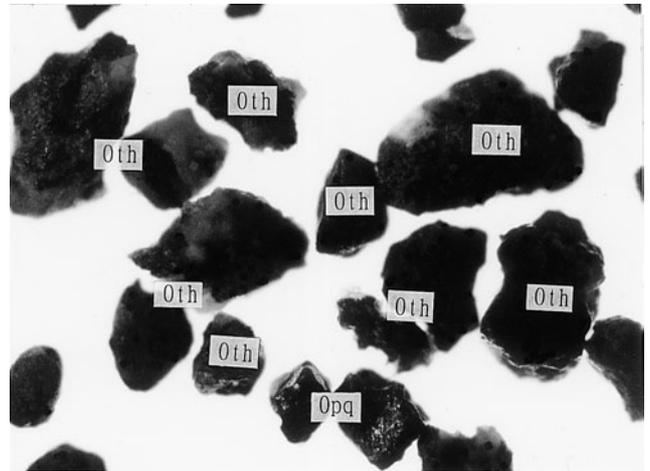
1. コナラ属アカガシ亜属 (K-1 落ち込み) 2. クリ (K-1 落ち込み)
 3. 散孔材 (試料番号38) a: 木口, b: 柁目, c: 板目

200 μm : a
 200 μm : b, c

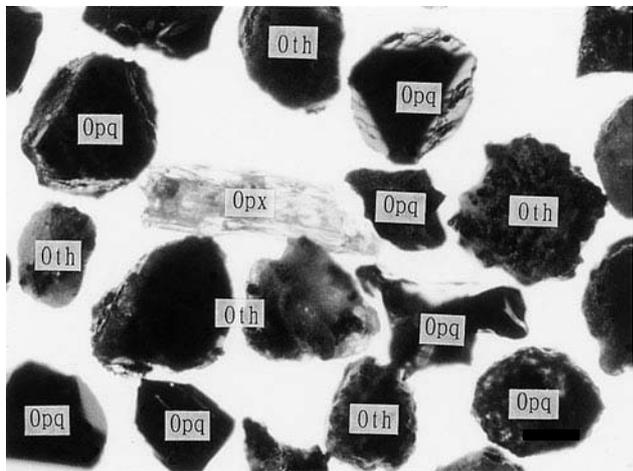
図版2 重鉱物・軽鉱物



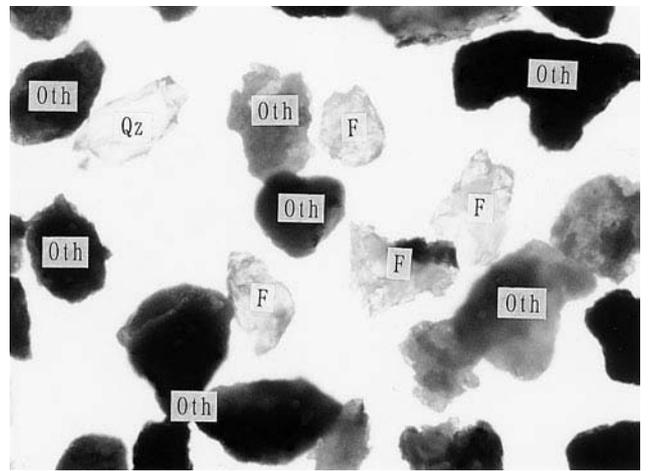
1. 重鉱物 (焼土サンプル7)



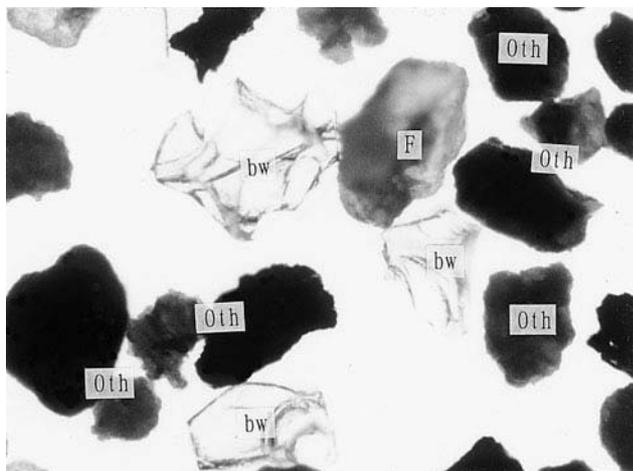
2. 重鉱物 (焼土サンプル8)



3. 重鉱物 (焼土サンプル10)



4. 軽鉱物 (焼土サンプル7)

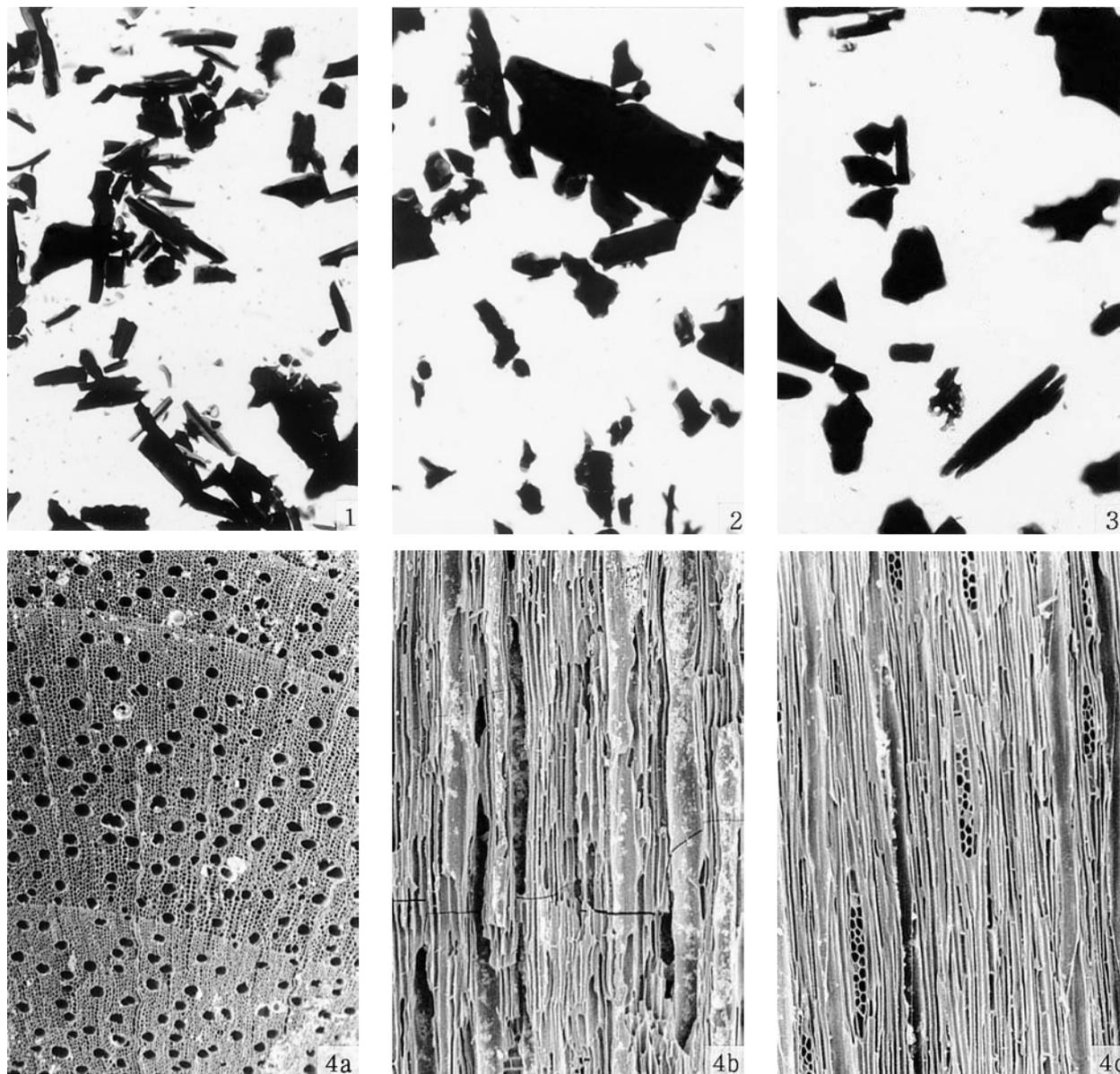


5. 軽鉱物 (焼土サンプル10)

0.5mm

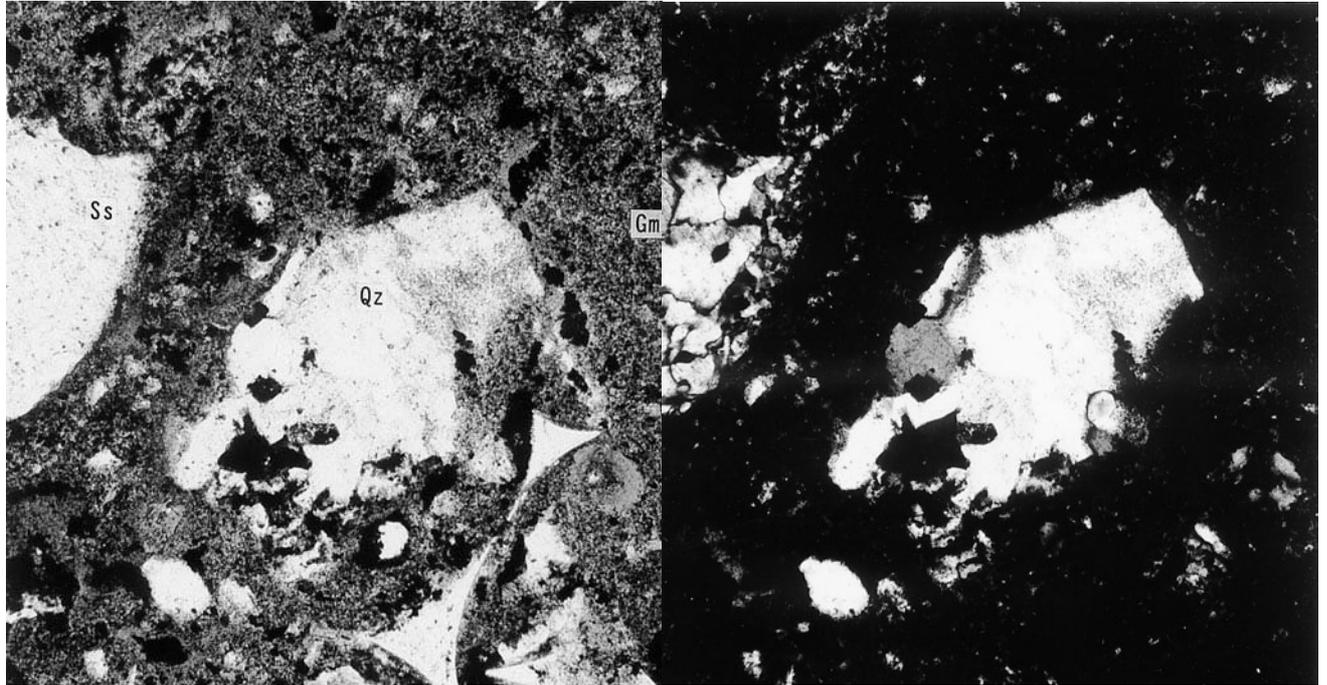
Opx：斜方輝石. Ho：角閃石. Opq：不透明鉱物. bw：バブル型火山ガラス.
Qz：石英. F：長石. Oth：その他.

図版3 花粉プレパラート内の状況・炭化材



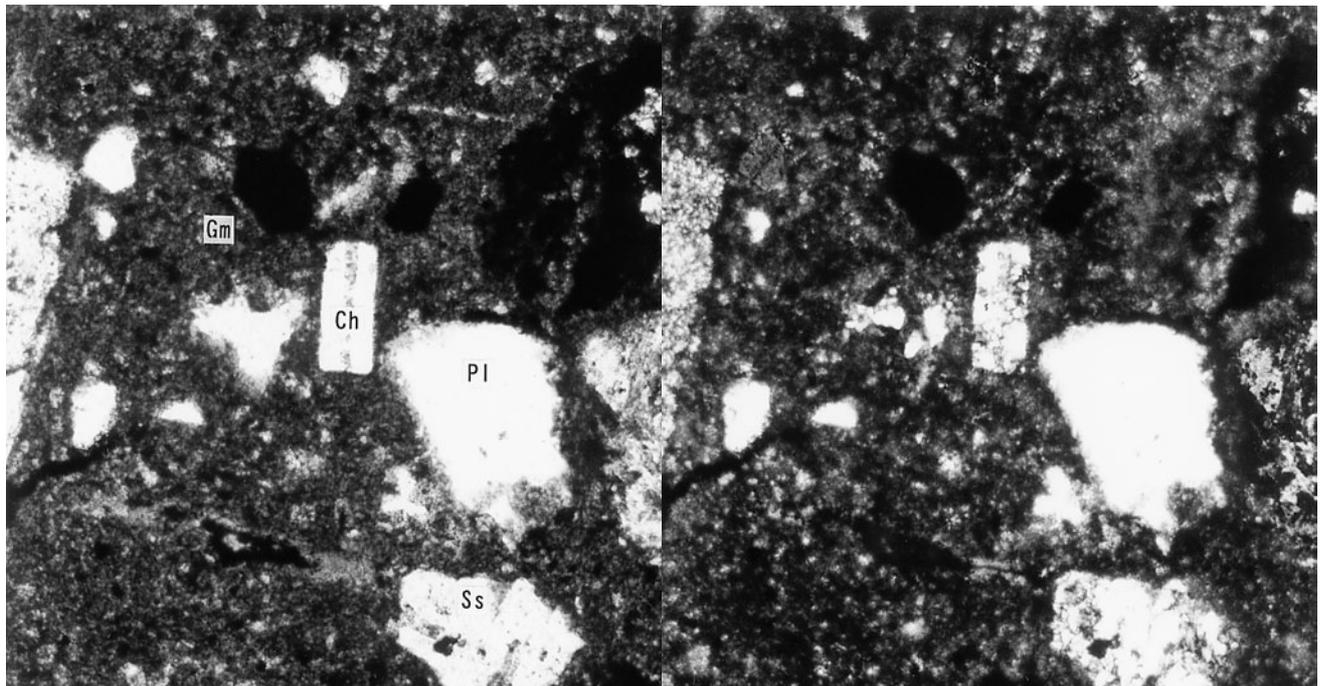
1. 花粉サンプル16 2. 花粉サンプル17 3. 花粉サンプル18
 4. 散孔材（灰原） a: 木口, b: 柁目, c: 板目

100 μ m : 1 - 3
 200 μ m : 4 a
 200 μ m : 4 b, 4 c



サンプル1 (R-16 分炎柱下半: 表面から約2 cm)

砂岩の岩片 表面から8mmと素地の色を比較すると褐色味が強い。



平行ニコル

直行ニコル

サンプル1 (R-16 分炎柱下半: 表面から約8 mm)

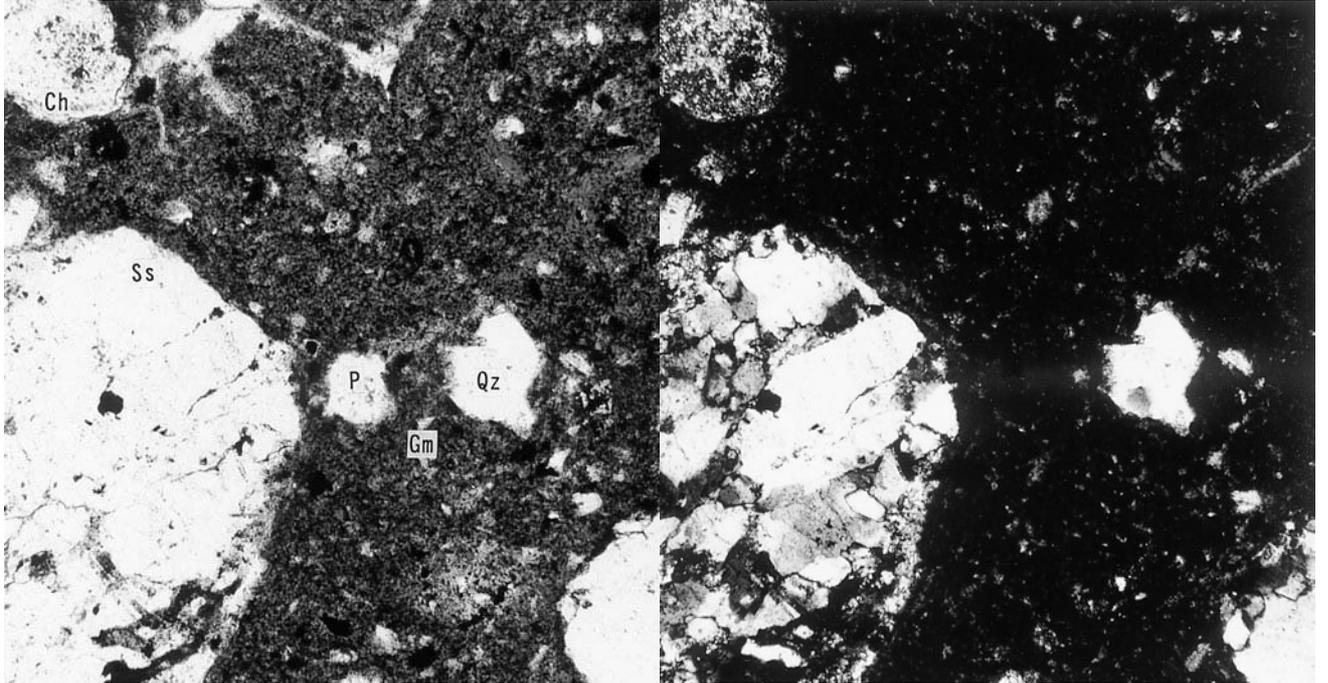
チャート・斜長石・砂岩。

表面から約2 cmより赤みが強く、赤鉄鉱化が著しい。

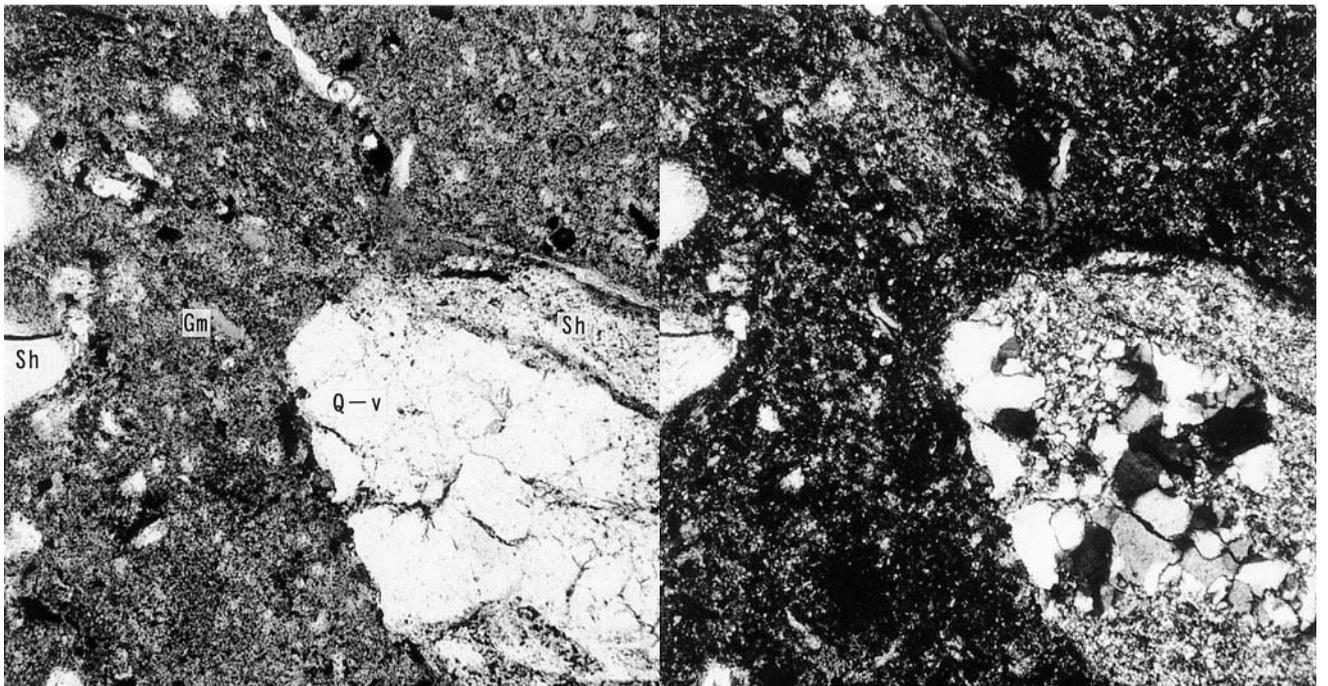
0.2 mm

Qz: 石英 Pl: 斜長石 Ch: チャート Ss: 砂岩 Gm: 基質

図版5 薄い片顕微鏡写真(2)



サンプル2 (R-17 分炎柱)
砂岩・チャート、基質はセリサイト。



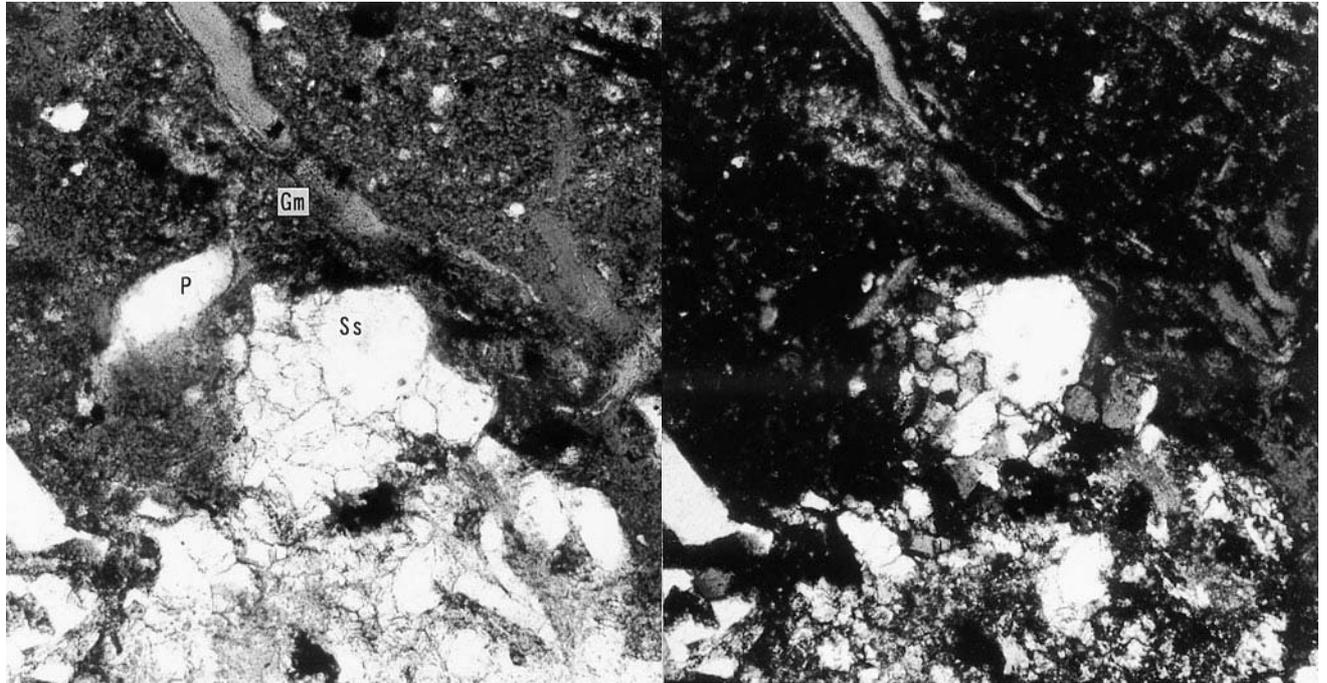
平行ニコル

直行ニコル

サンプル3 (R-1 左側壁：表面から約17mm)
セリサイトで構成される頁岩と石英細脈を伴う頁岩。
いずれもセリサイトが残存し、基質中にもセリサイトが残存している。

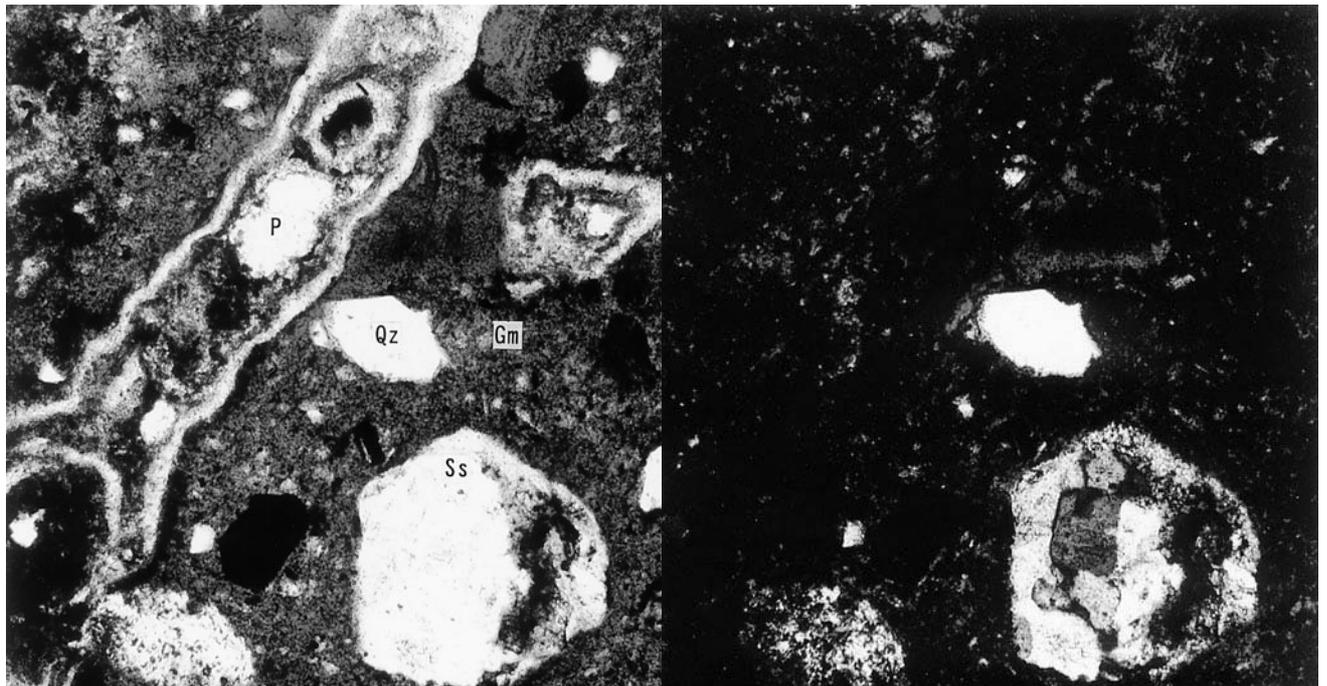
0.2 mm

Qz：石英 Ch：チャート Sh：頁岩 Ss：砂岩 Q-v：石英細脈 P：孔隙 Gm：基質



サンプル3 (R-1 左側壁：表面から約5 mm)

砂岩。基質の含鉄セリサイトは加熱変化を受け、赤鉄鉱に結膠されている。



平行ニコル

直行ニコル

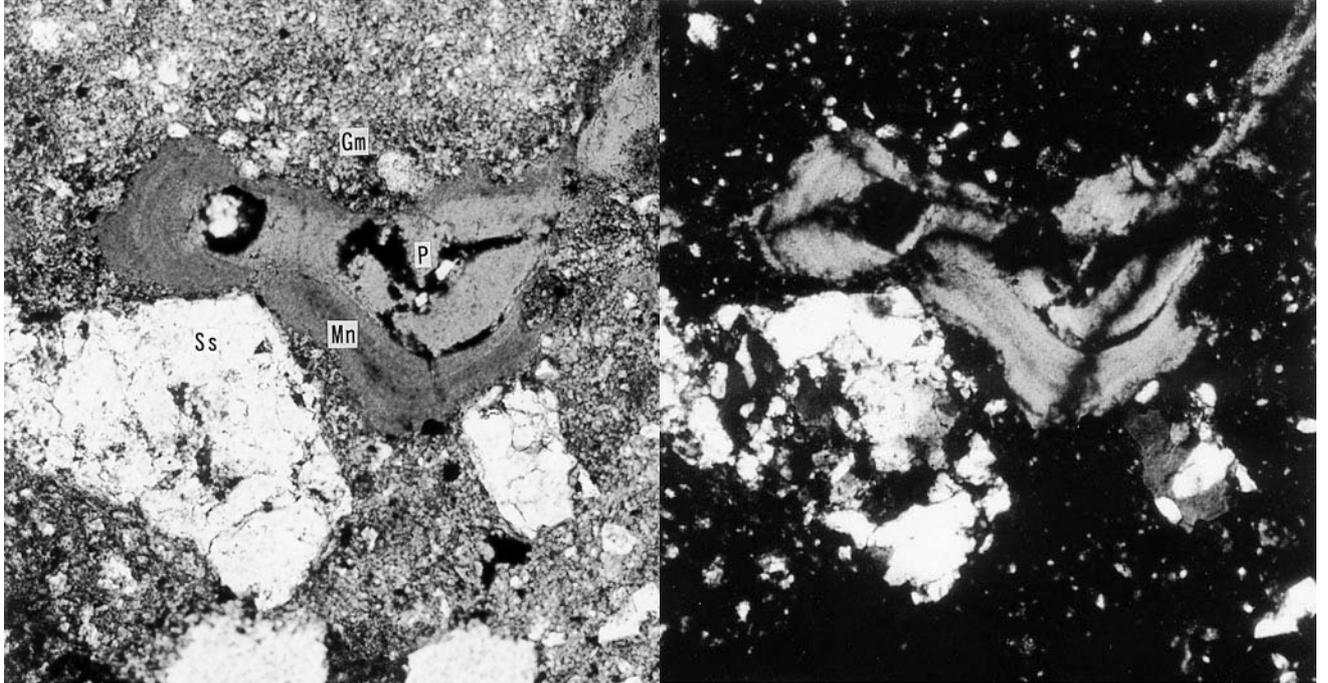
サンプル4 (R-2 煙道床面)

砂岩。基質の含鉄セリサイトは加熱変化を受け、赤鉄鉱に結膠されている。

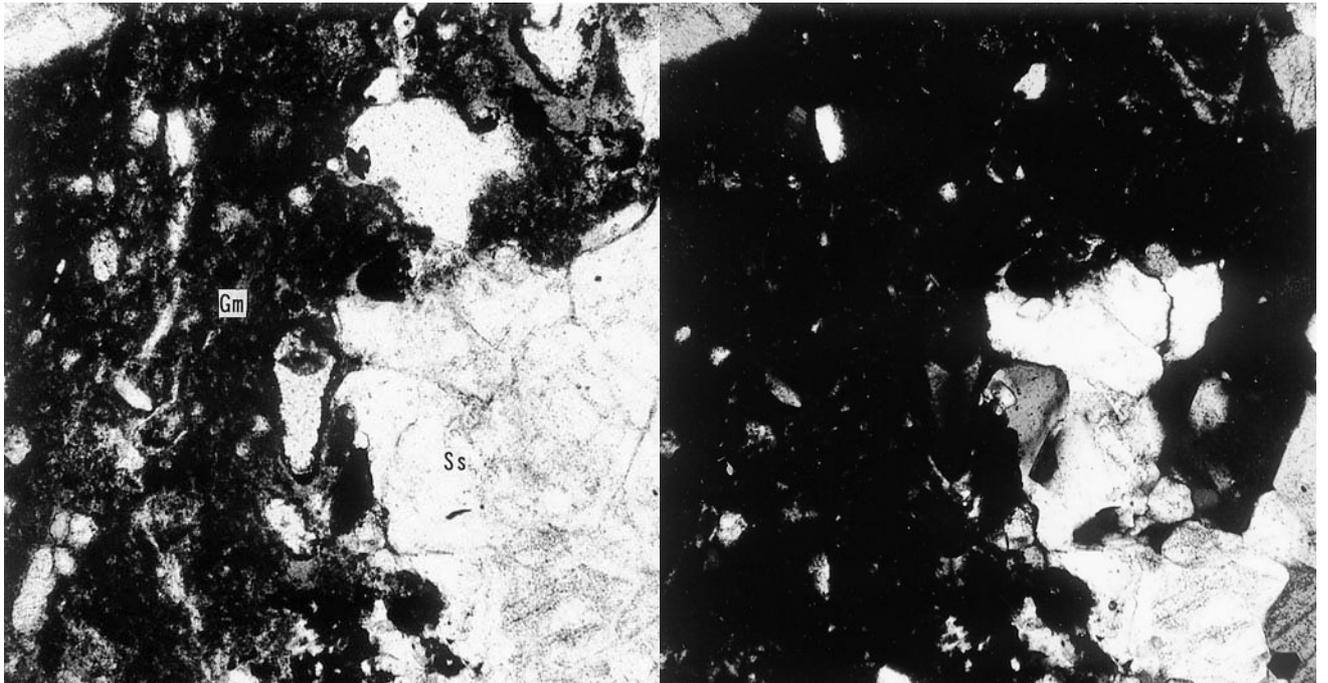
0.2 mm

Qz：石英 Ss：砂岩 P：孔隙 Gm：基質

図版7 薄い片顕微鏡写真(4)



サンプル5 (R-3 左側ロストル上面：表面から約15mm)
 空隙に二次的なモンモリロナイト質粘土が沈積している。



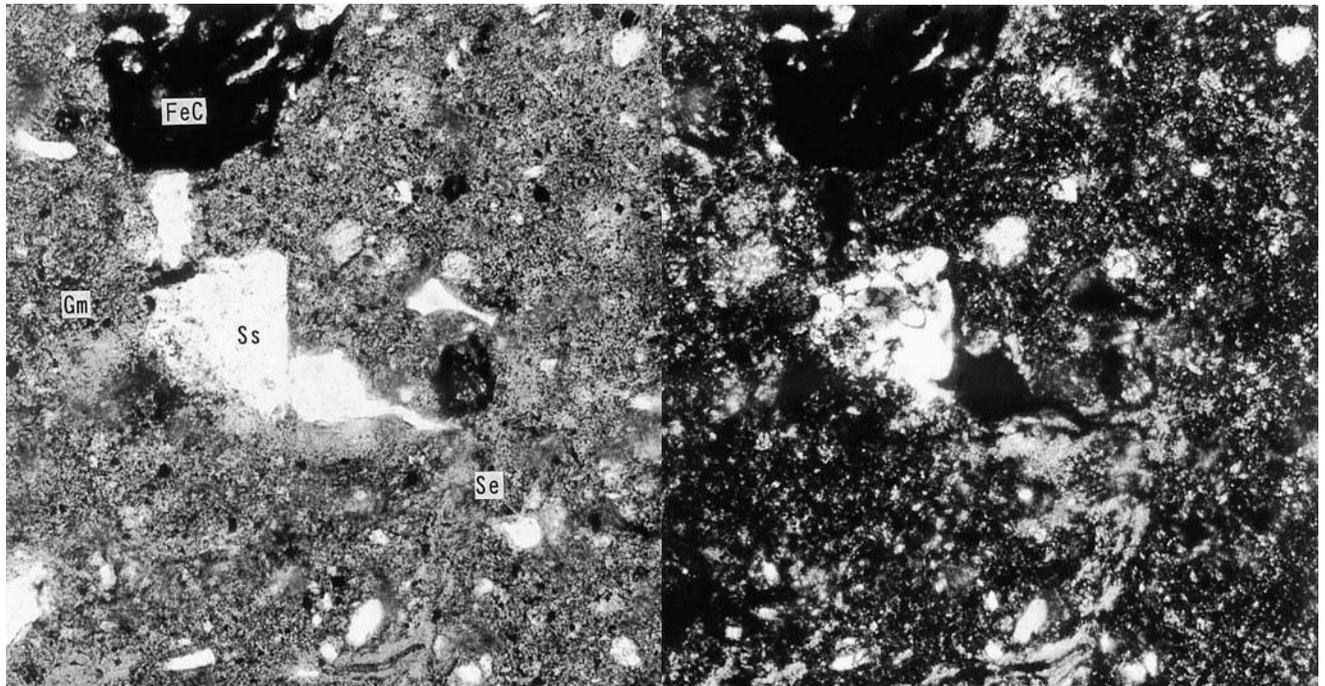
平行ニコル

直行ニコル

サンプル5 (R-3 左側ロストル上面：表面付近)
 砂岩。基質の粘土の色が濃色となっている。
 非晶質である。

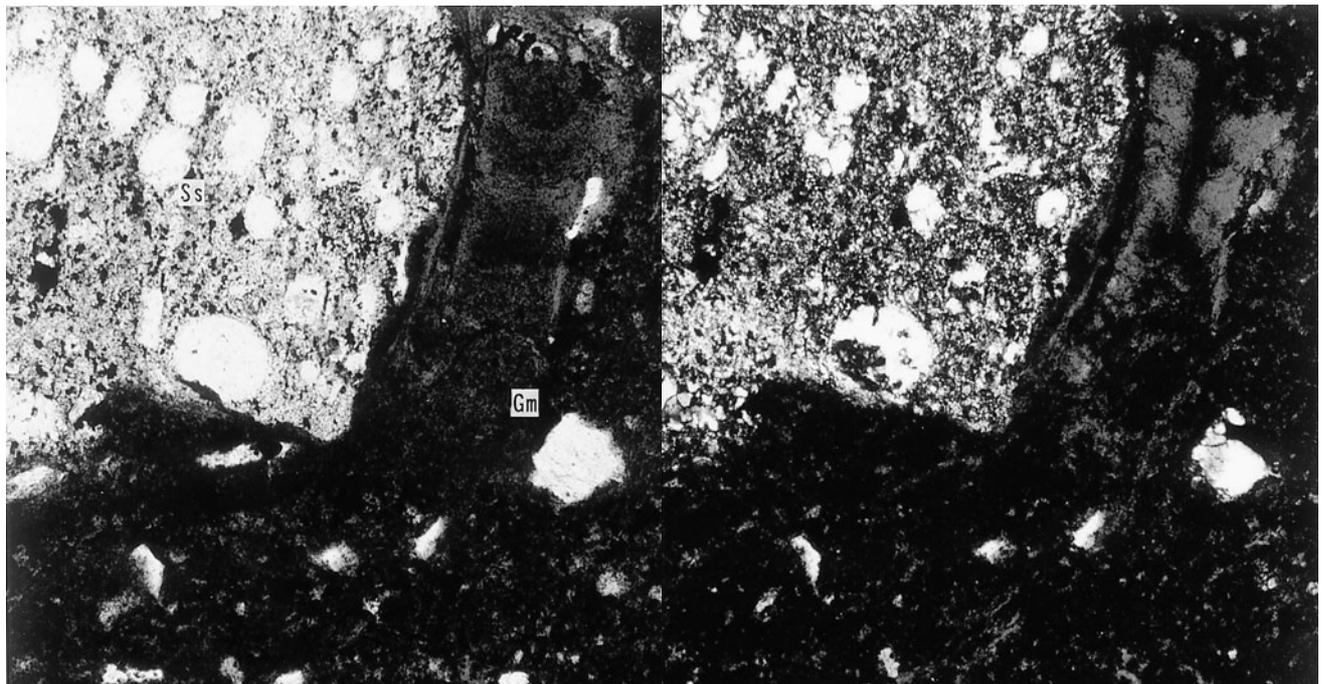
0.2 mm

Mn：モンモリロナイト Ss：砂岩 P：孔隙 Gm：基質



サンプル6 (R-6 左側ロストル奥：表面から約18mm)

石英質細粒砂岩・酸化鉄結核。基質は含鉄セリサイトで、加熱変化は受けていない。



平行ニコル

直行ニコル

サンプル6 (R-6 左側ロストル奥：表面付近)

砂岩の岩片が含まれる。基質の含鉄セリサイトは赤鉄鉱化が顕著であるが、セリサイトは残留している。

0.2 mm

Se：セリサイト FeC：酸化鉄結核 Ss：砂岩 Gm：基質

写 真 图 版



奥谷南遺跡 VI・VII区 遠景

PL 2



奥谷南遺跡 VII区 全景（上空から）



奥谷南遺跡 VII区 遠景



Ⅵ区 調査前風景（北から）



Ⅵ区 調査前風景（東から）

PL 4



Ⅵ区 遺構完掘状況（北から）



Ⅵ区 遺構完掘状況（南から）

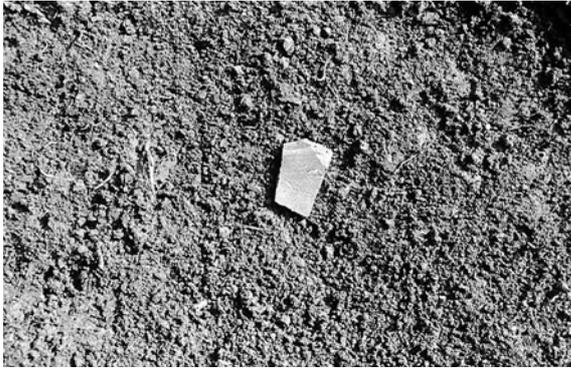


Ⅵ区 SB-1 完掘状況



Ⅵ区 調査区西端セクション

PL 6



Ⅵ区 遺物出土状況



PL 8



Ⅶ区尾根上から西方向（蒲原山・長畝古墳群）をのぞむ



Ⅶ区尾根上から南方向平野部をのぞむ



Ⅶ区 調査前風景



Ⅶ区尾根上から東方向（岡豊山）をのぞむ



Ⅶ区 山岳寺院関連遺構面検出状況



Ⅶ区 山岳寺院関連遺構面完掘状況



Ⅶ区 山岳寺院関連遺構面完掘状況（南東から）



Ⅶ区 山岳寺院関連遺構面完掘状況（東から）



Ⅶ区 山岳寺院関連遺構面完掘状況（南から）



Ⅶ区 山岳寺院関連遺構面



Ⅶ区 遺物出土状況 (SK-2)



Ⅶ区 遺物出土状況 (包含層)

PL 14



土坑墓完掘状況 (SK-3、SK-4)



Ⅶ区 遺構全体図 (上空から)



Ⅶ区SK-2、SB-1 柱穴 礫出土状況



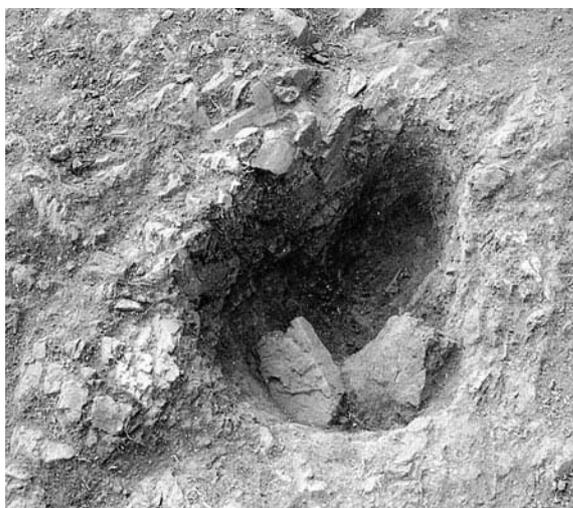
Ⅶ区SK-2及びSB-1 柱穴 完掘状況



Ⅶ区SB-1 柱穴、礫出土状況



Ⅶ区SB-1 柱穴、礫出土状況



Ⅶ区SB-1 柱穴、礫出土状況



Ⅶ区SB-1 柱穴、完掘状況

PL 16



Ⅶ区 通路状遺構（南から）



Ⅶ区 TR-10



Ⅶ区 窯体検出状況（西から）



Ⅶ区 窯体検出状況（西上方から）



Ⅶ区 焼成部検出状況（北西から）



Ⅶ区 焼成部検出状況（北東から）



Ⅶ区 焼成部半截状況（北東から）



Ⅶ区 焼成部半截状況（北西から）



Ⅶ区 焼成部遺物出土状況



Ⅶ区 焼成部遺物出土状況



Ⅶ区 焼成部発掘状況（北西から）



Ⅶ区 焼成部発掘状況（東から）



Ⅶ区 焼成部発掘状況（北東から）



Ⅶ区 焼成部発掘状況（南東から）



Ⅶ区 焼成部発掘状況（北東から）



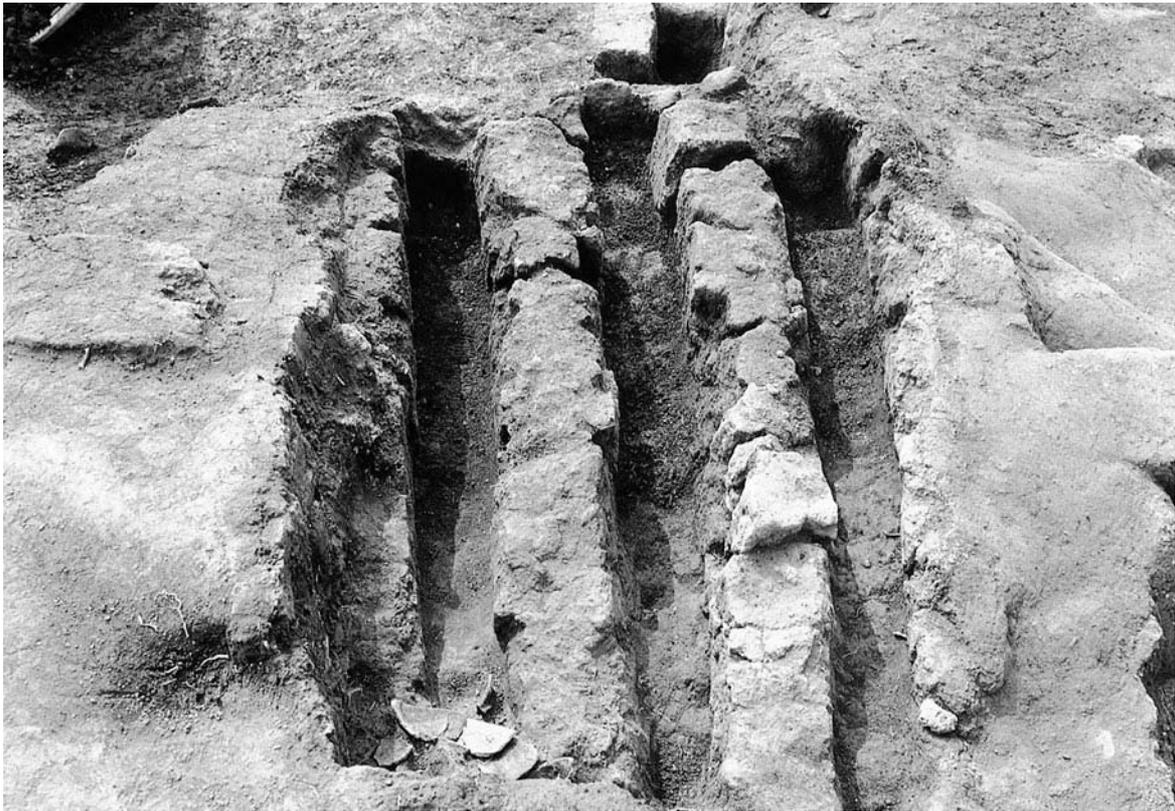
Ⅶ区 焼成部発掘状況（南東から）



Ⅶ区 焼成部発掘状況（西から）



Ⅶ区 焼成部発掘状況（北西から）



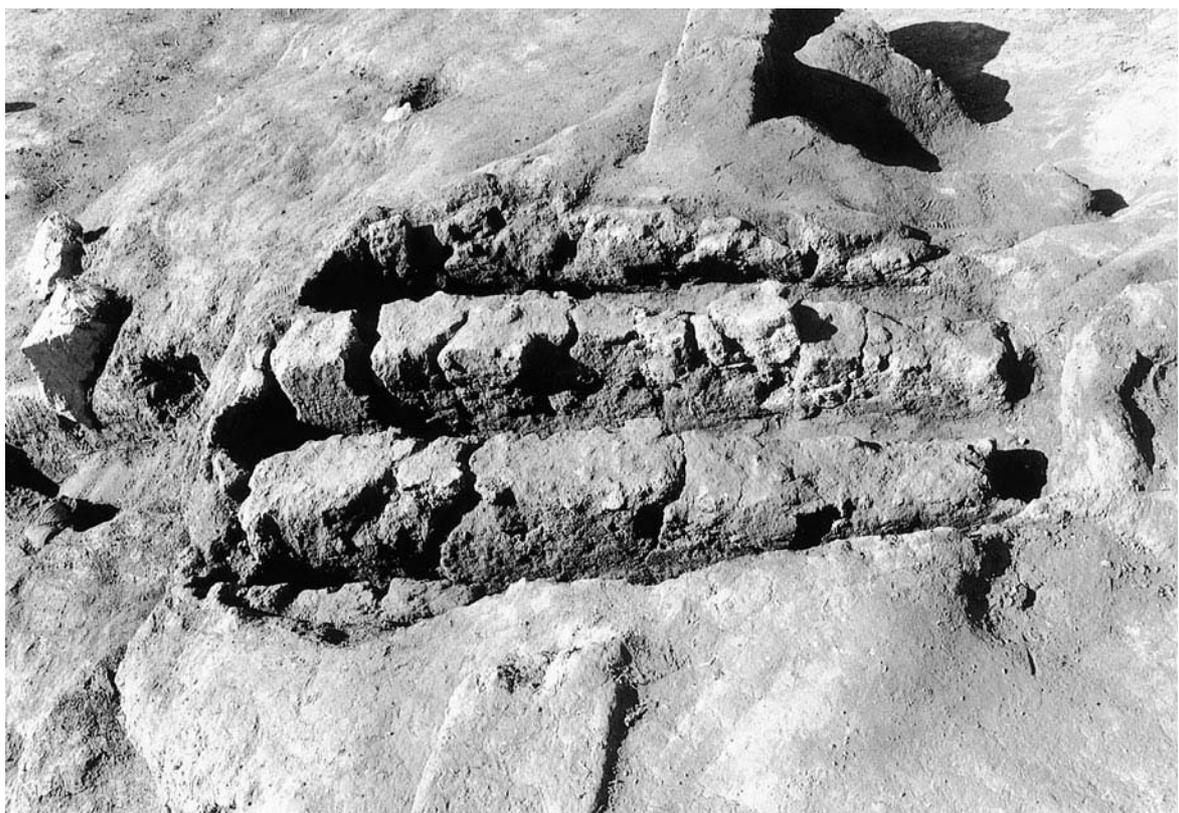
Ⅶ区 焼成部発掘状況（北東から）



Ⅶ区 焼成部発掘状況（北西上から）



Ⅶ区 焼成部発掘状況（北西から）



Ⅶ区 焼成部発掘状況（南東から）



Ⅶ区 窯跡及び東側礫集中



Ⅶ区 包含層遺物出土状況



Ⅶ区 窯跡焼き口及び焼成部（西から）



Ⅶ区 窯跡焼き口及び焼成部（南西から）



Ⅶ区 灰原



Ⅶ区 灰原セクション及び燃焼部



Ⅶ区 燃烧部セクション



Ⅶ区 焚口遺物出土状況



Ⅶ区 燃焼部セクション



Ⅶ区 燃焼部完掘状況

PL 32



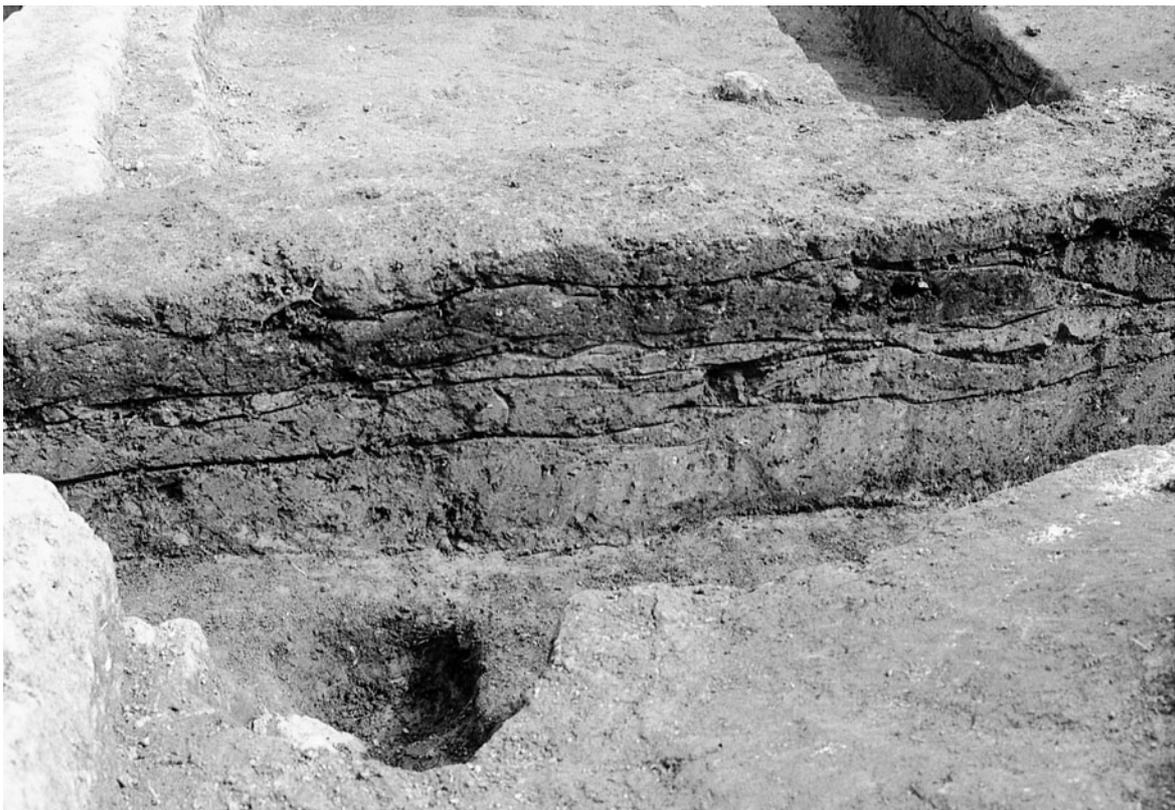
Ⅶ区 焚口セクション



Ⅶ区 焚口前面土手状の高まりセクション



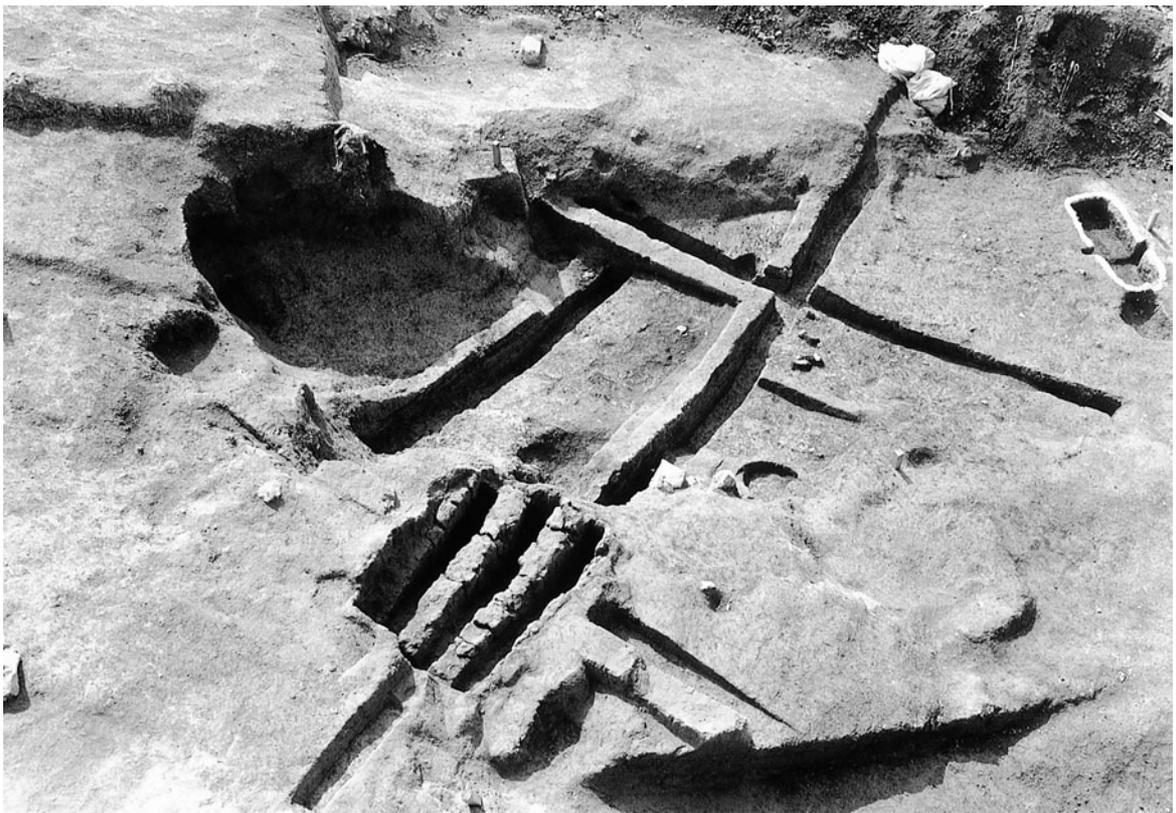
Ⅶ区 灰原南北セクション



Ⅶ区 灰原東西セクション



Ⅶ区 窯跡全景（西から）



Ⅶ区 窯跡全景（北東から）



Ⅶ区 北東上段から窯跡斜面をのぞむ



Ⅶ区 窯跡完掘状況

PL 36



Ⅶ区 しょう 牀断面 (南西から)



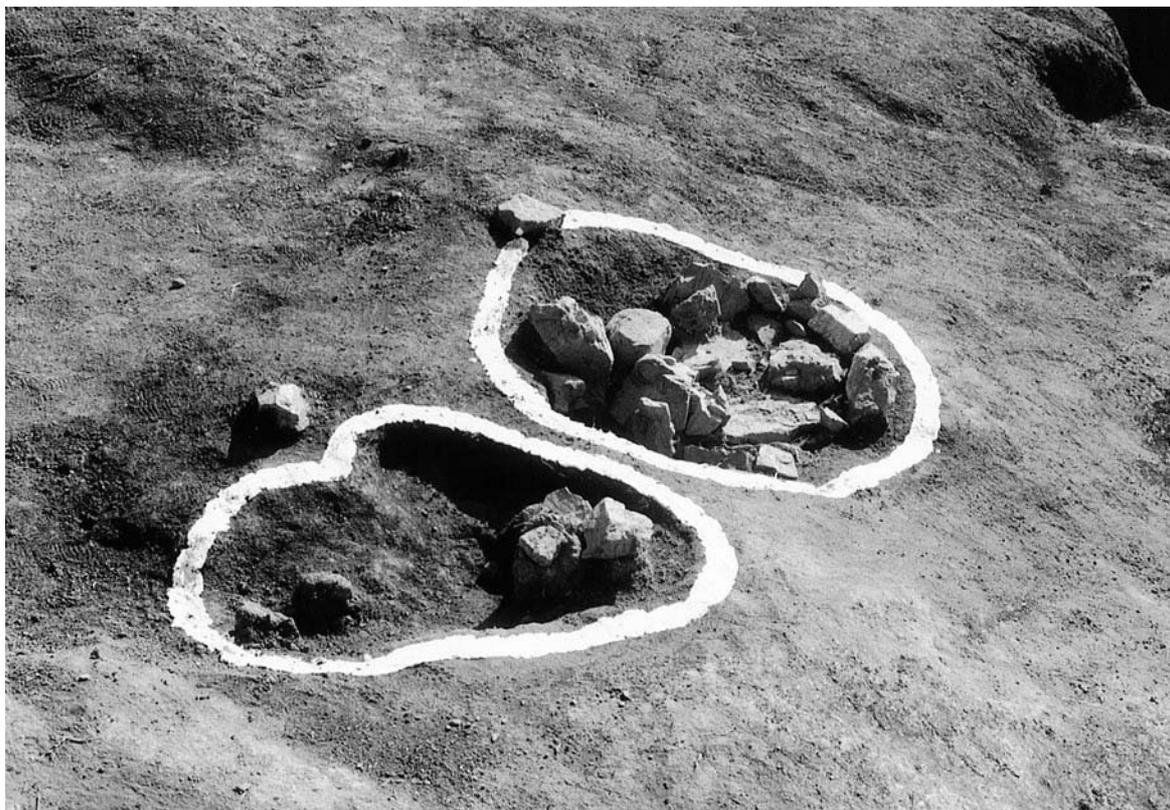
Ⅶ区 しょう 牀断面 (西から)



Ⅶ区 焼成部床断面（北西から）



Ⅶ区 焼成部床断面（南西から）



Ⅶ区 SK-10、SK-12磔出土状況



Ⅶ区 SK-10



Ⅶ区 SK-10骨片出土状况



Ⅶ区 SK-10完掘状况

PL 40



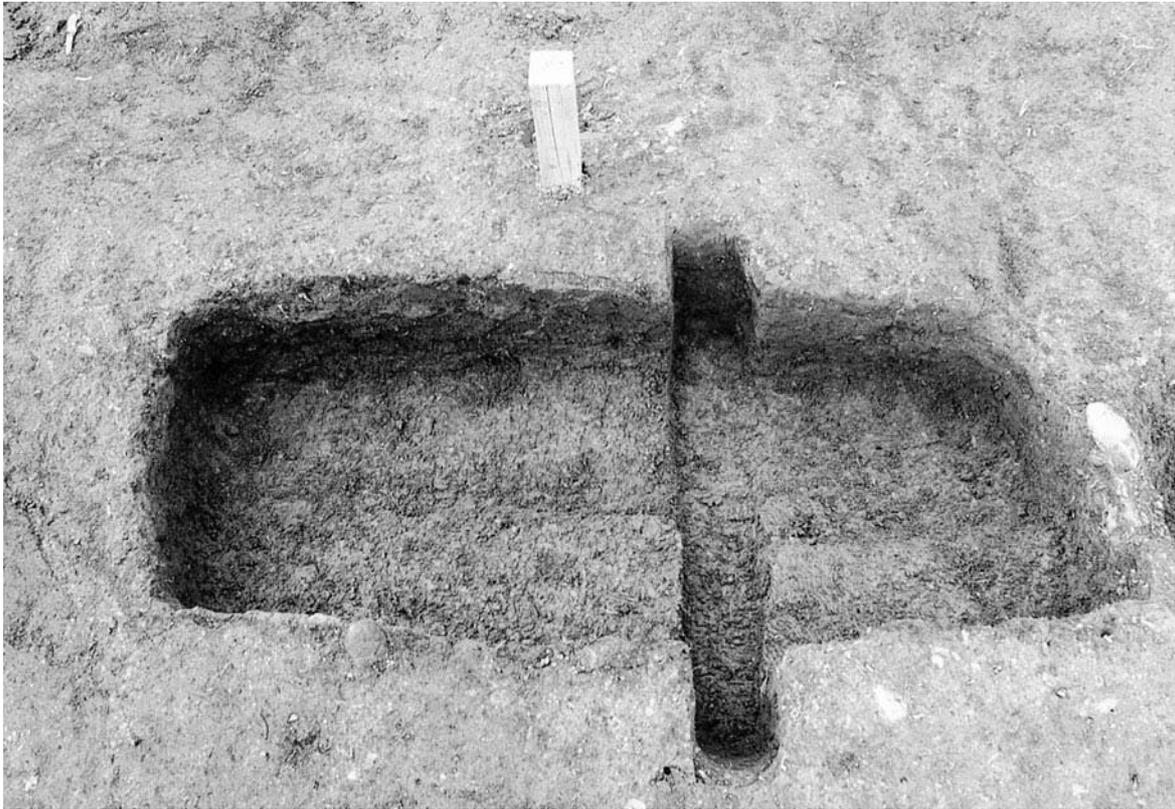
TR-6 北壁セクション



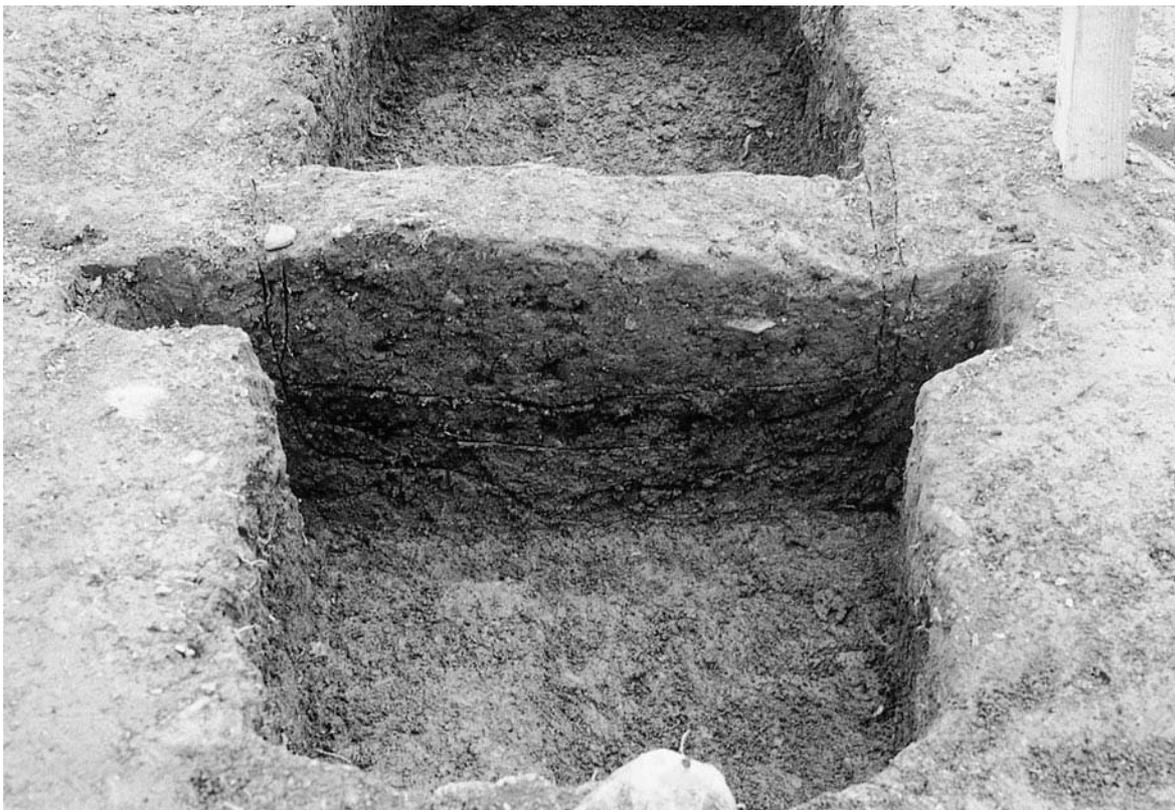
SX-1、SK-13



TR-6~7、TR-9 遺構完掘状況



Ⅶ区 SK-11完掘状況



Ⅶ区 SK-11セクション

PL 42



Ⅵ区 SK-15



Ⅵ区 SK-17



Ⅶ区 調査風景



Ⅶ区 調査風景



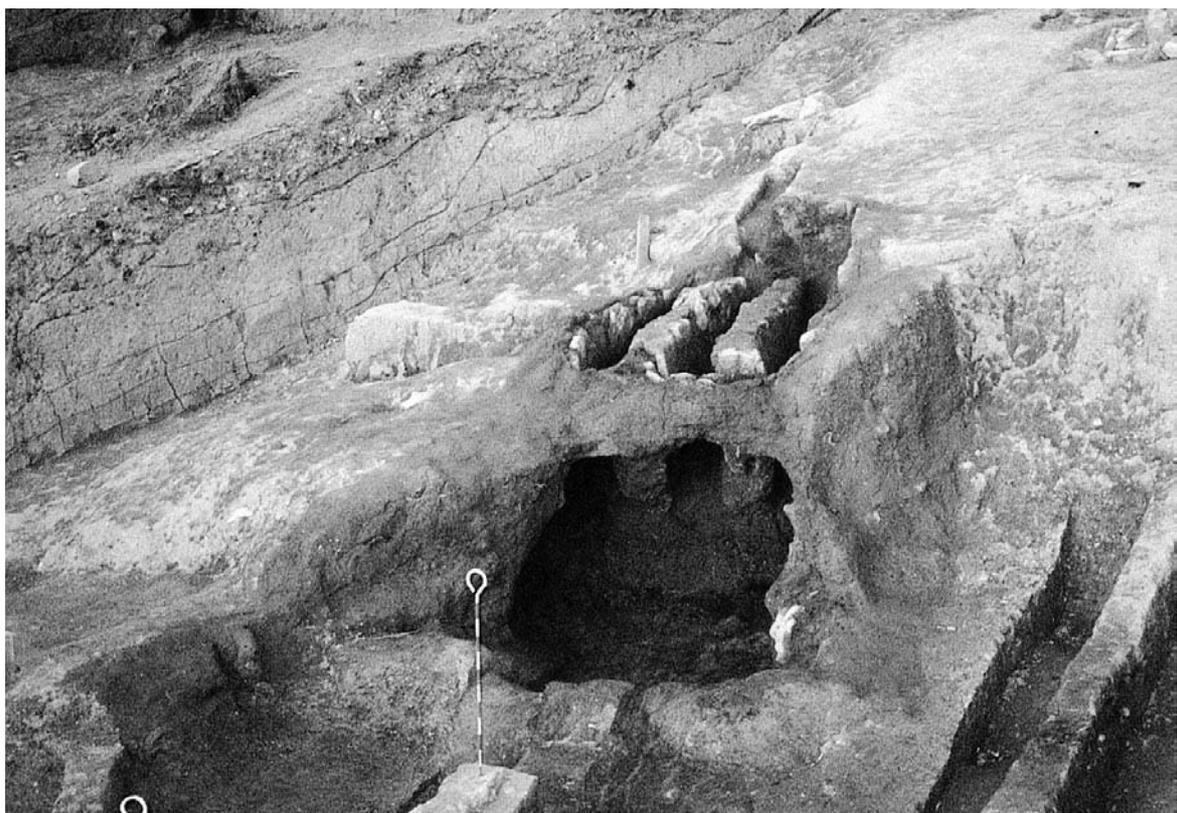
Ⅶ区 調査風景



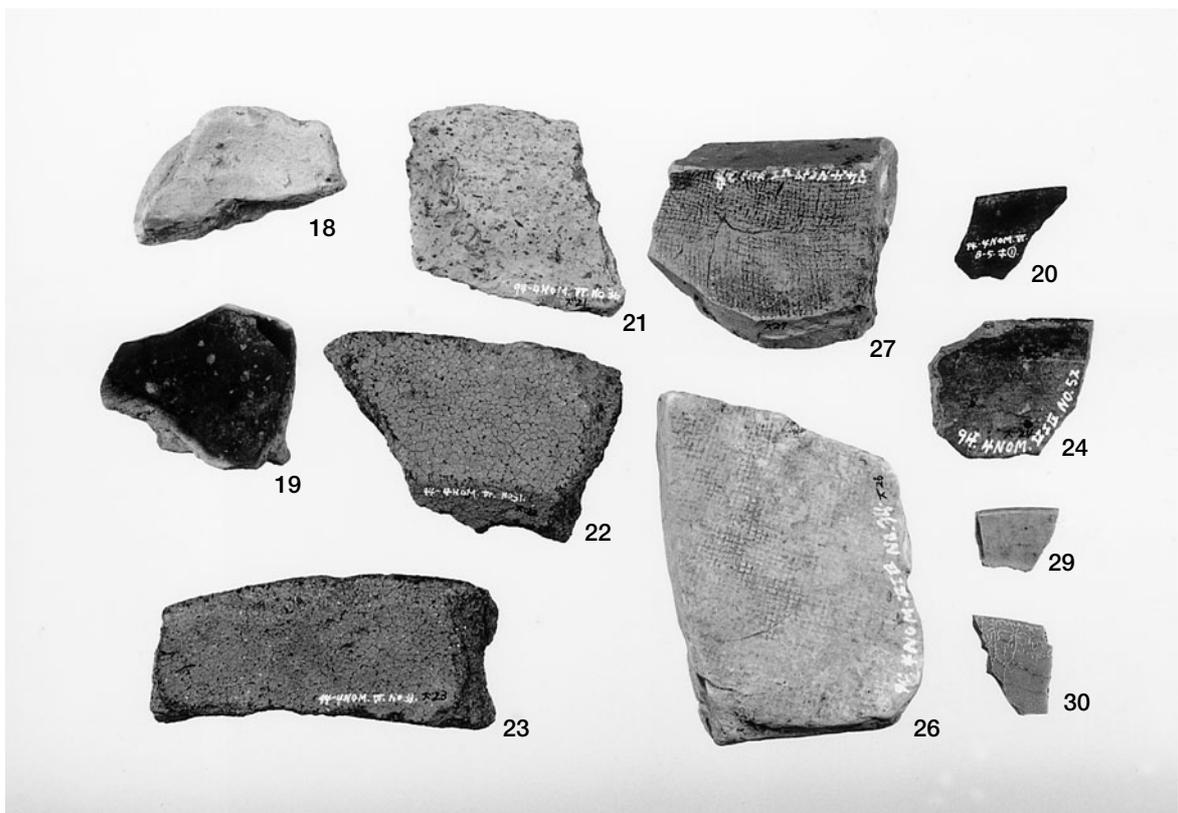
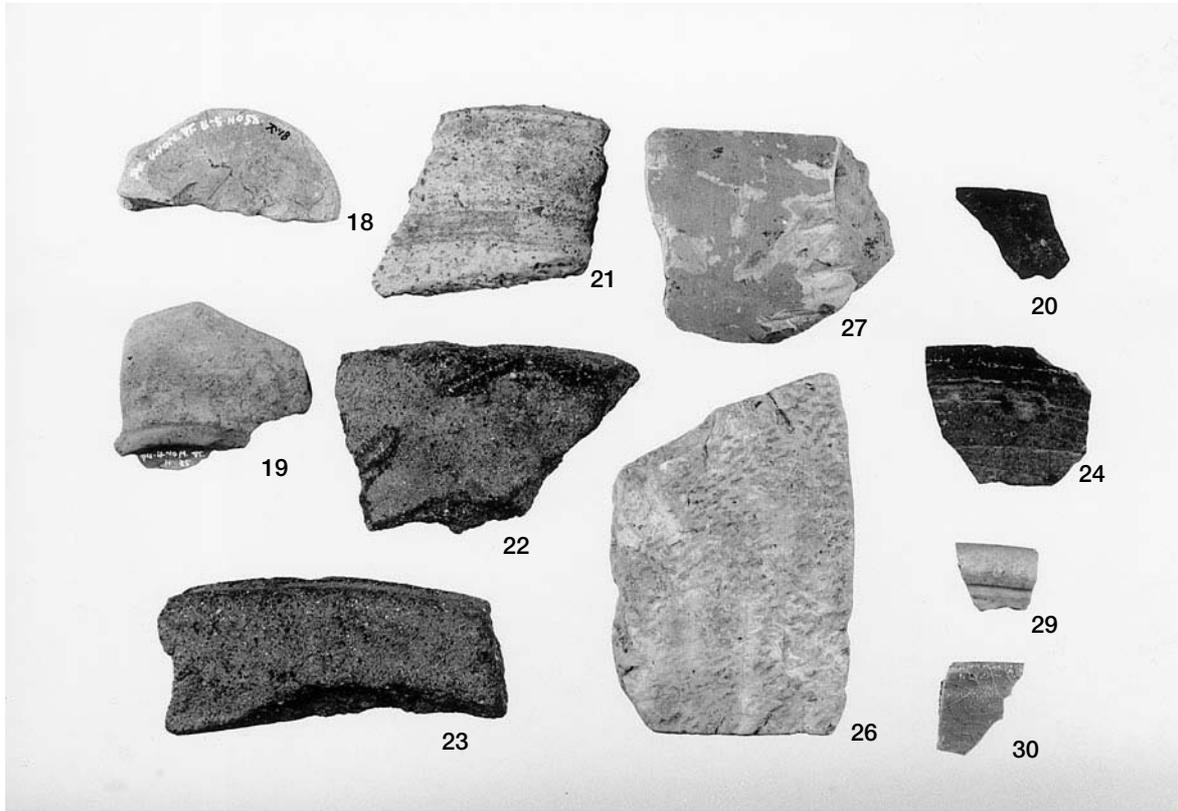
Ⅶ区 調査風景



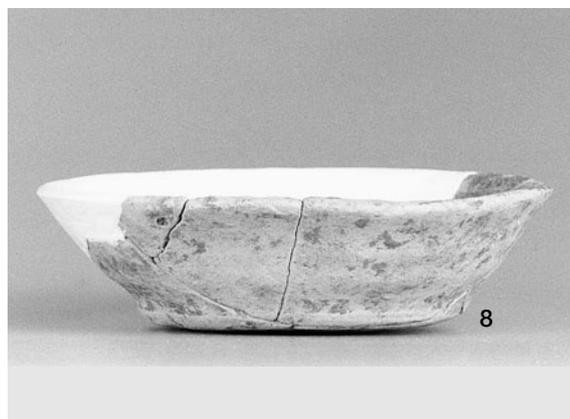
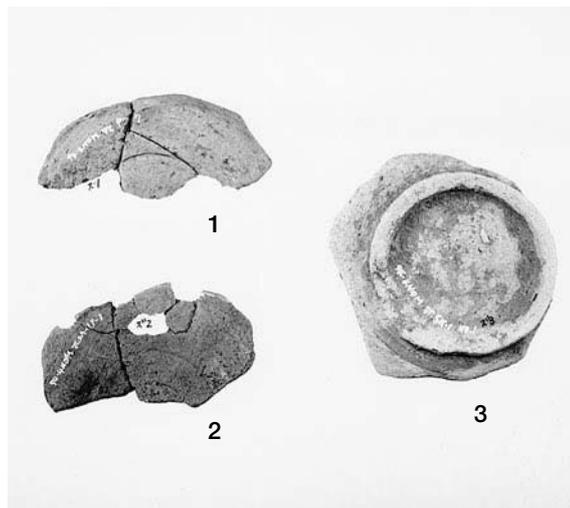
調査に参加した人々

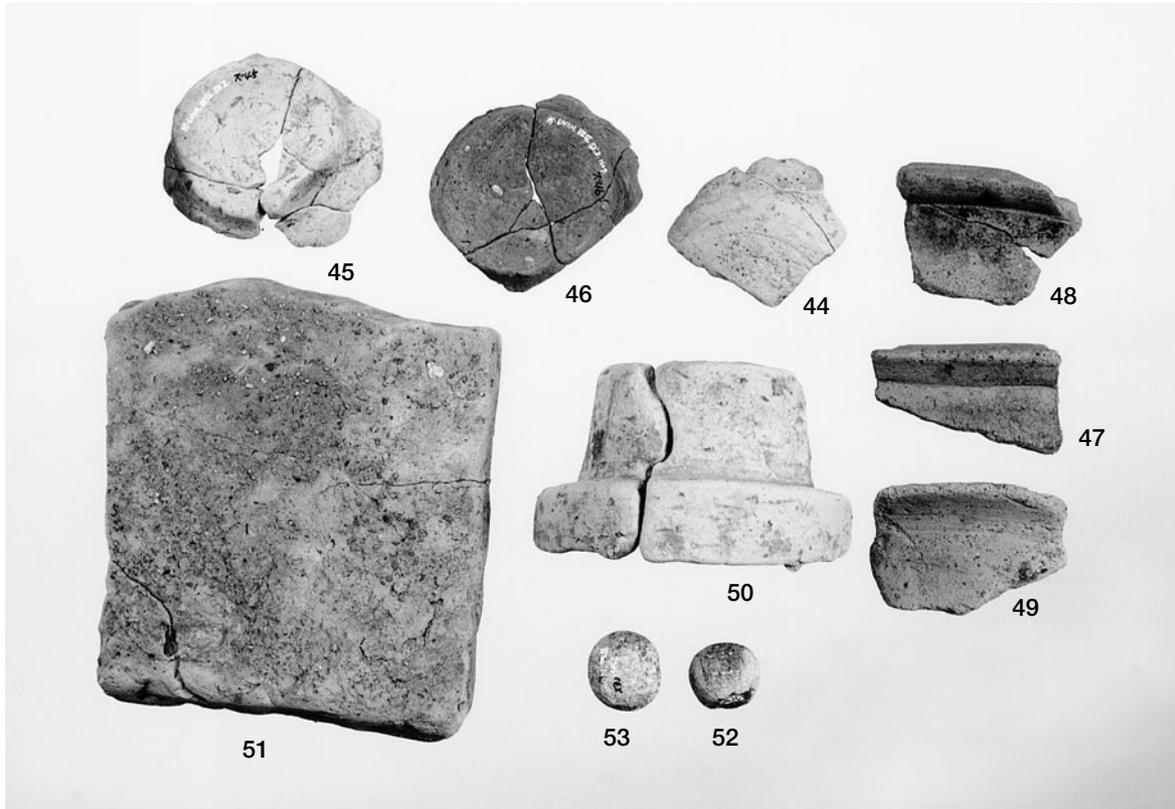


窯 (K-1) 完掘状況

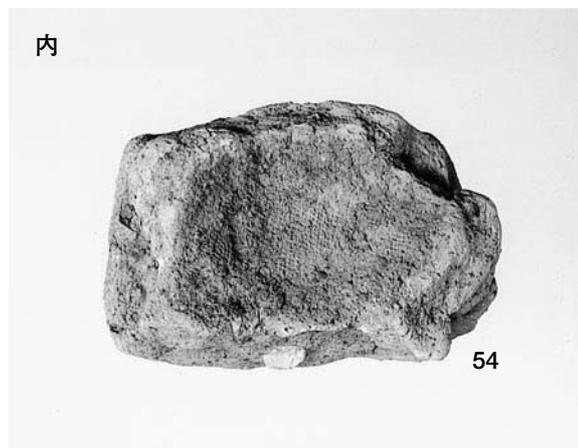
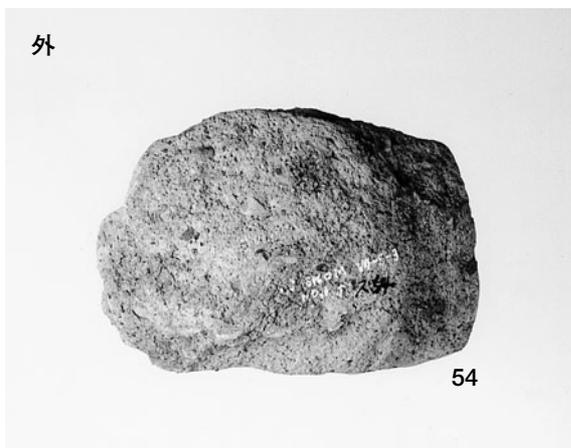


VI区 出土遺物



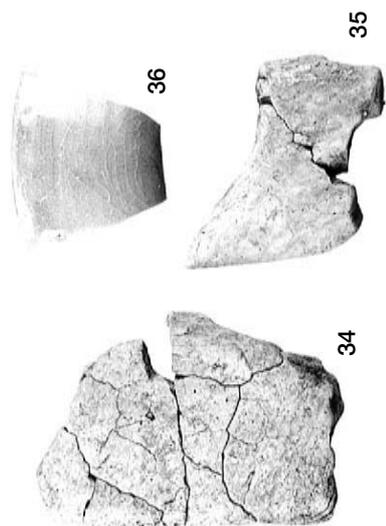


Ⅶ区 SK-2 出土遺物

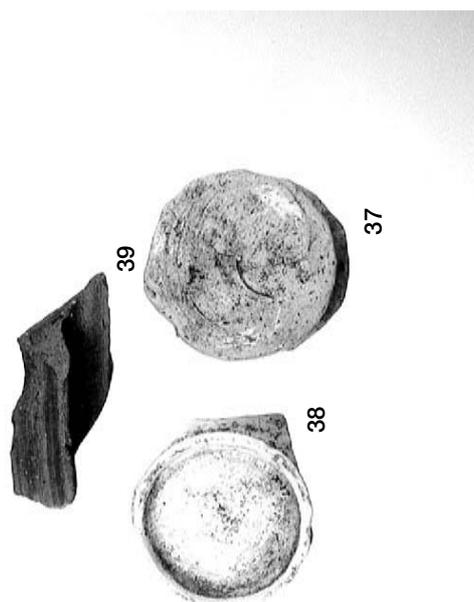
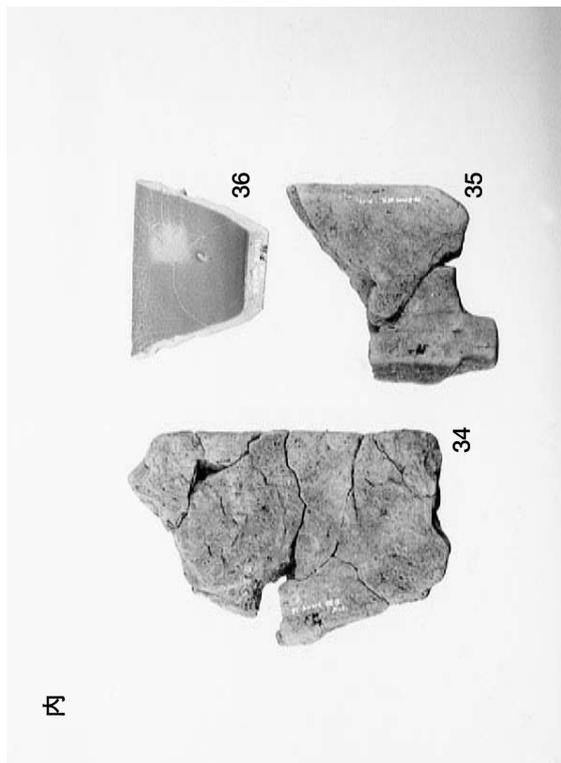


Ⅶ区 下斜面出土遺物

外

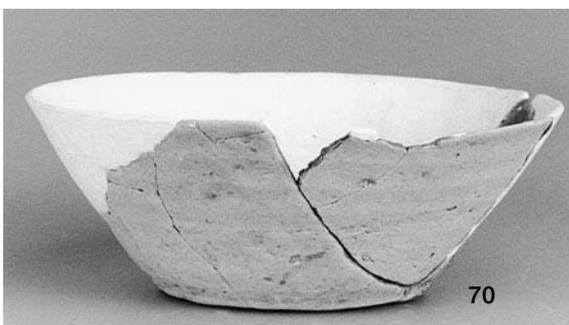
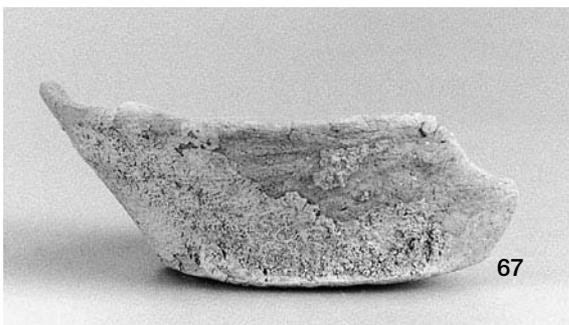
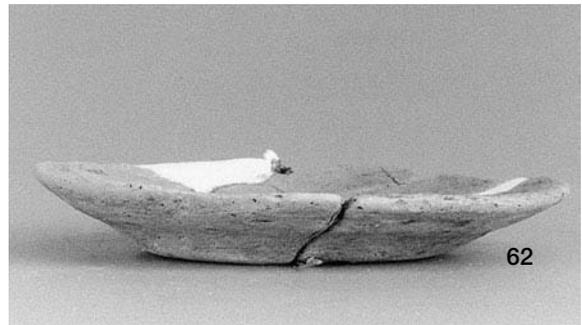


内

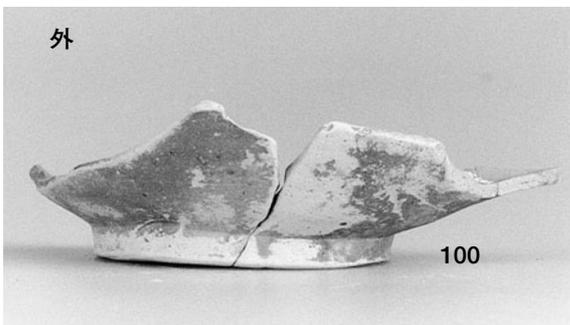
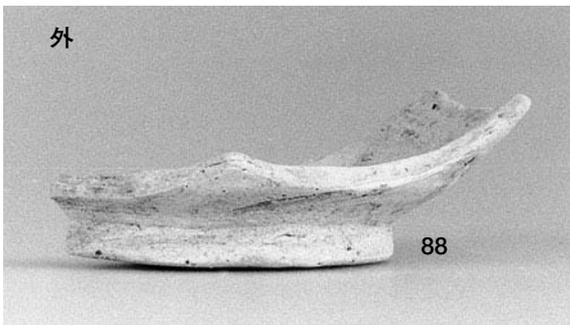
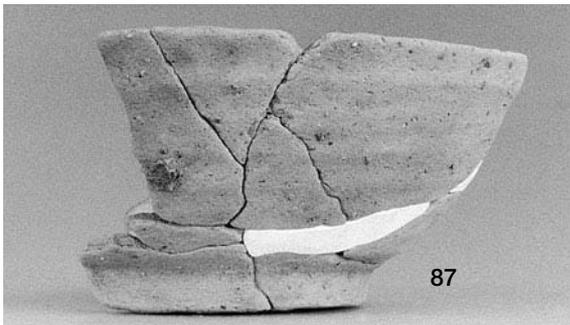


Ⅷ区 P-41、SK-1、SK-2 出土遺物

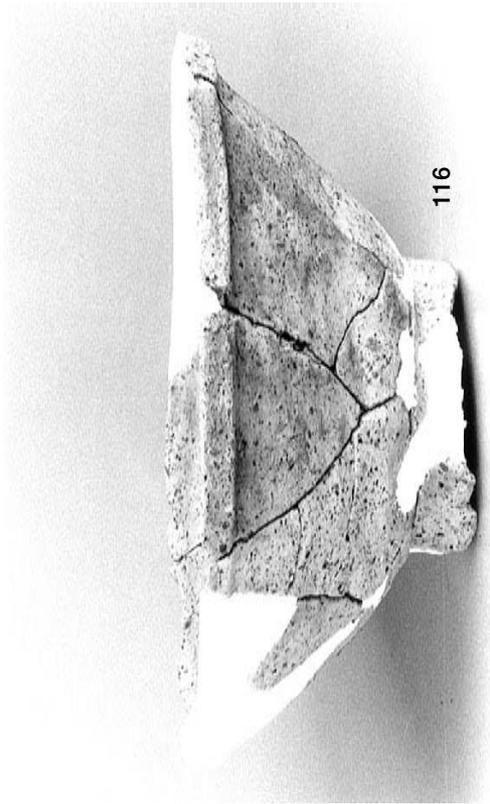
PL 50



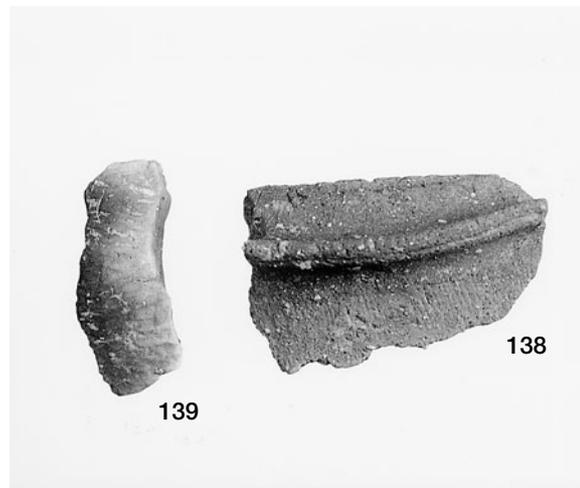
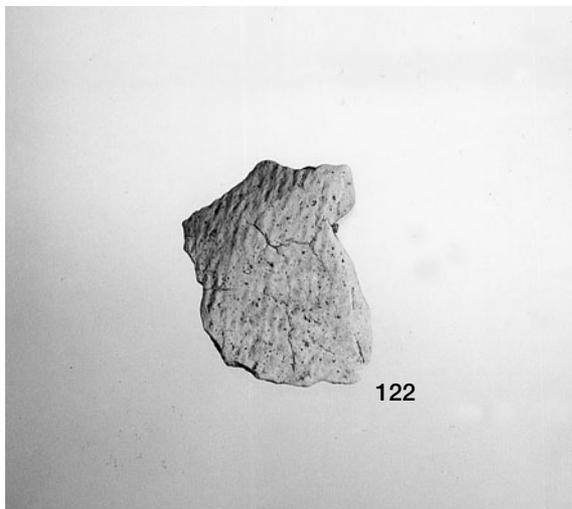
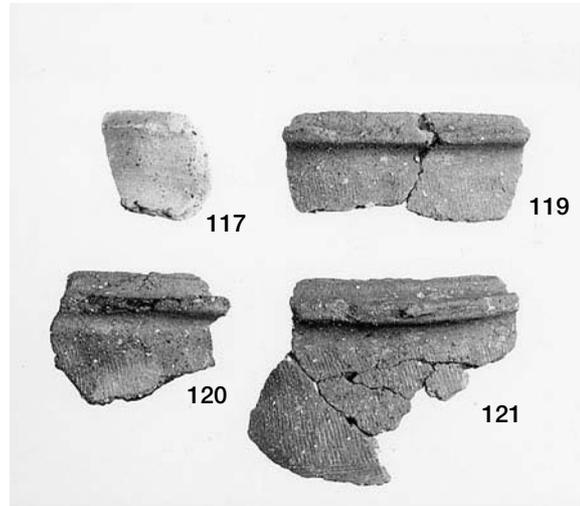
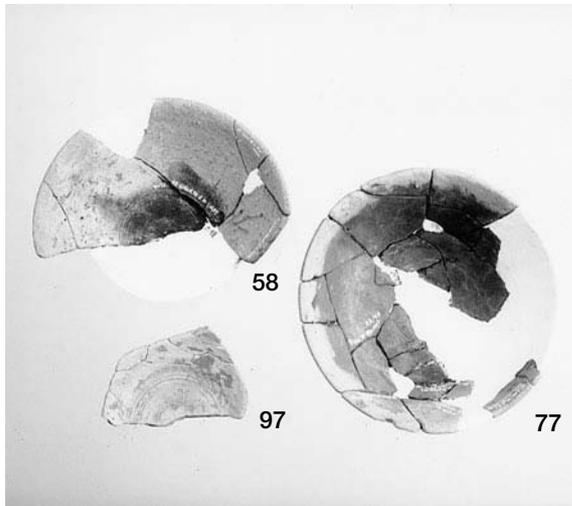
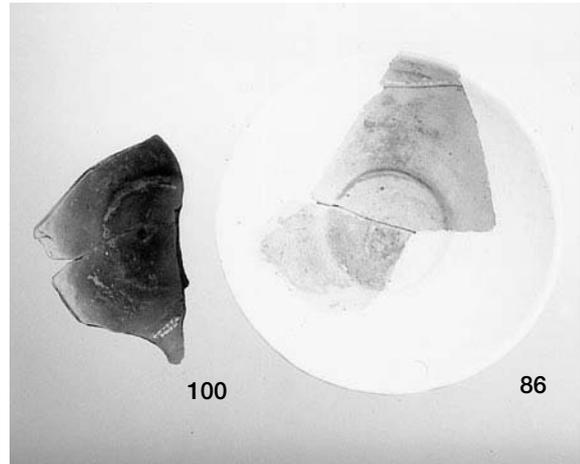
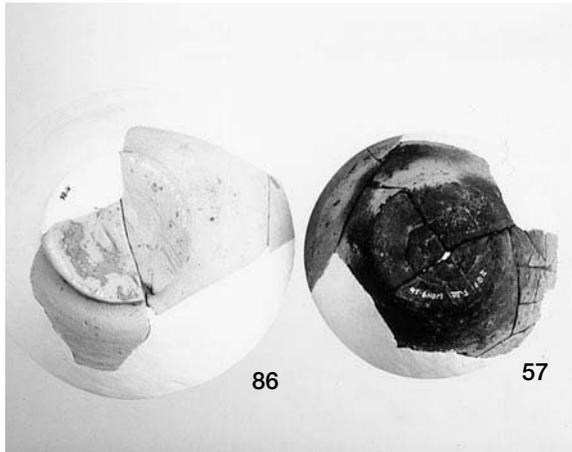
Ⅶ区 窯跡 (K-1) 出土遺物



Ⅶ区 窯跡 (K-1) 出土遺物

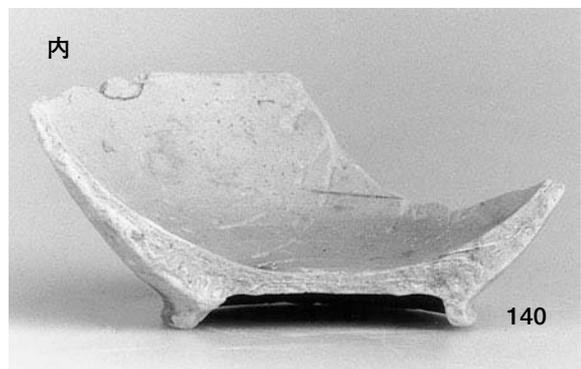
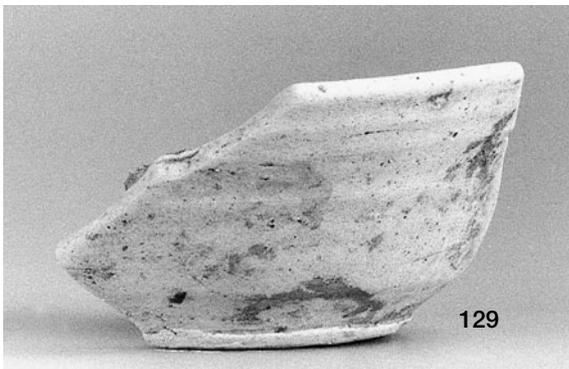


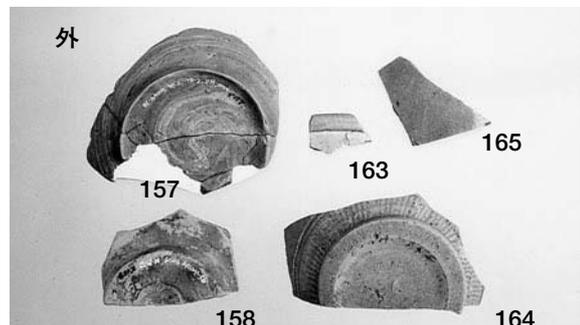
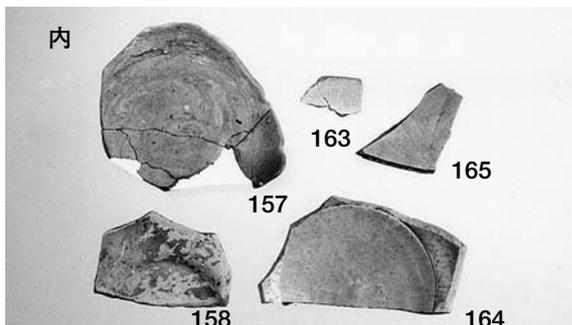
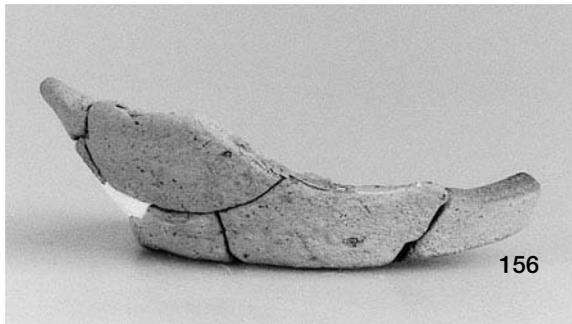
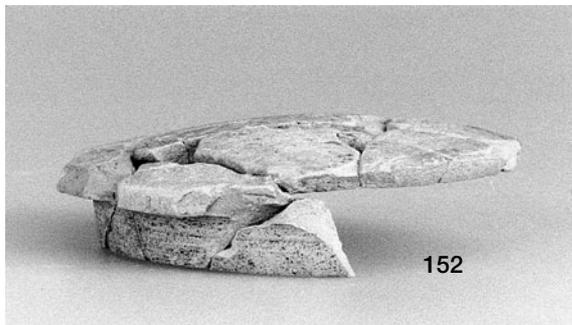
Ⅶ区 窯跡 (K-1) 出土遺物



Ⅶ区 窯跡 (K-1) 出土遺物

PL 54



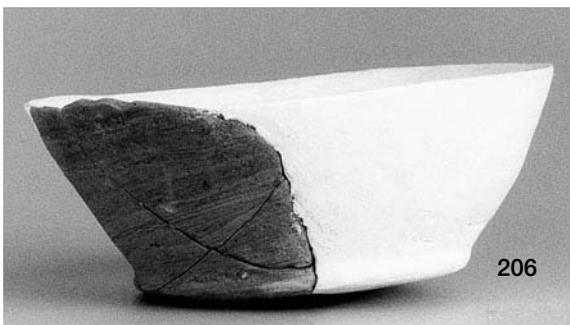
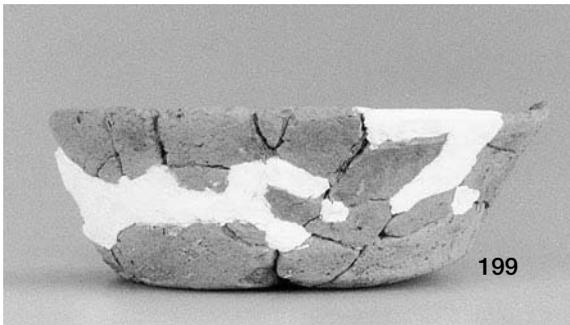
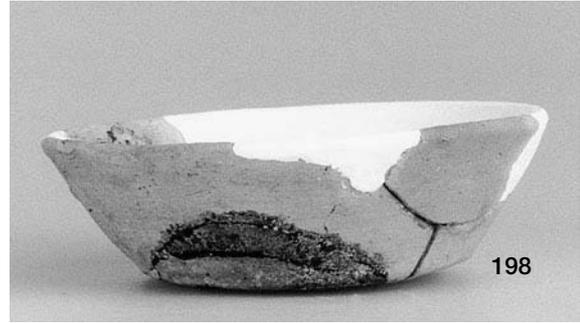


Ⅶ区 表採及び包含層出土遺物

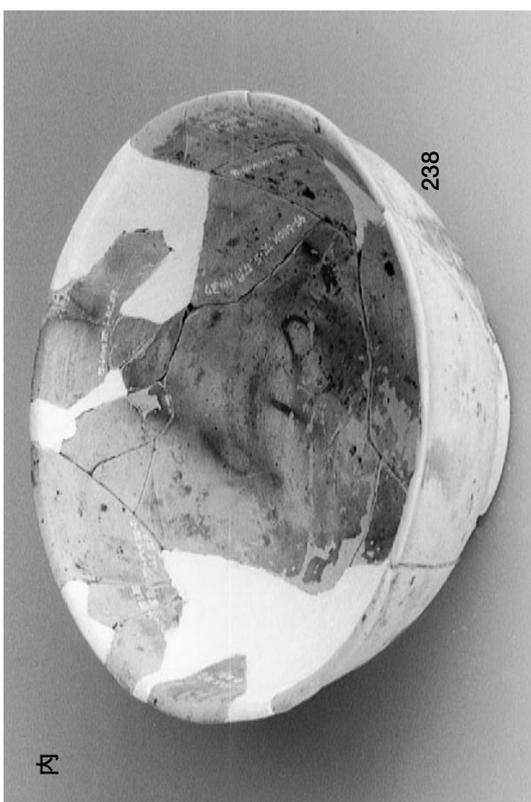
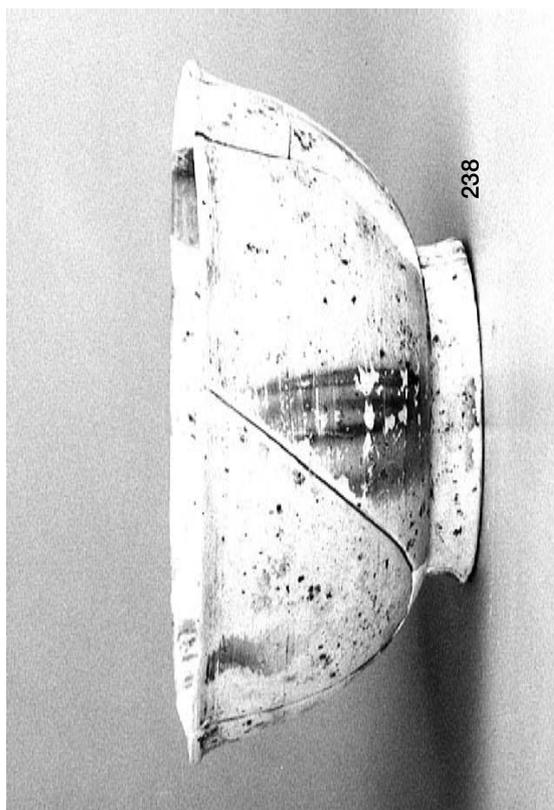
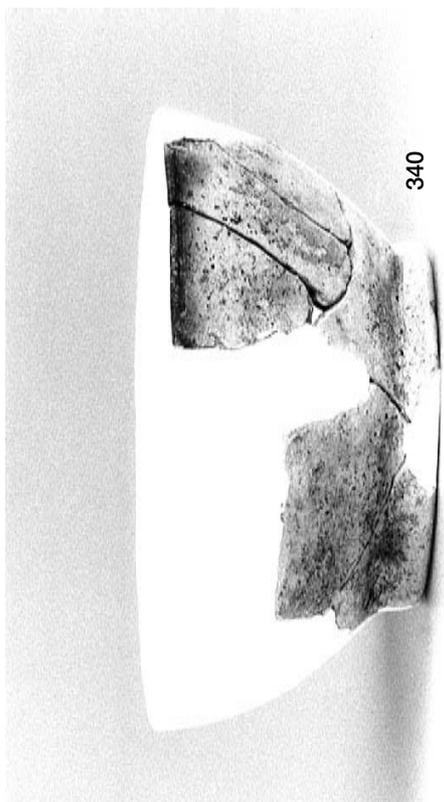
PL 56

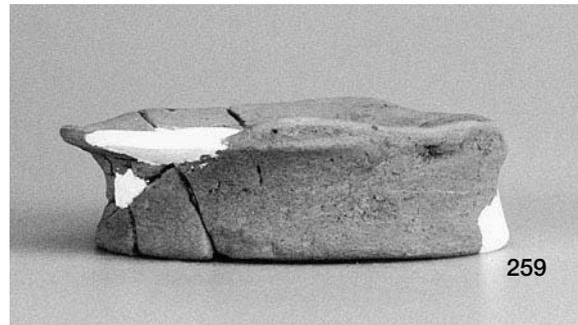
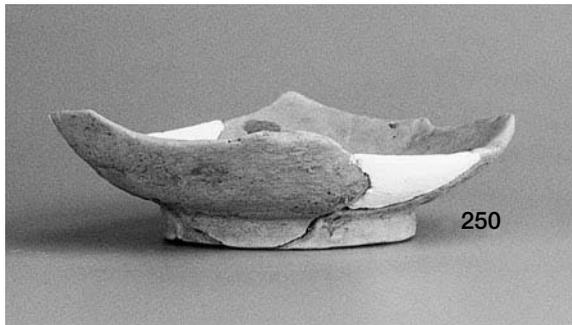


Ⅶ区 包含層出土遺物

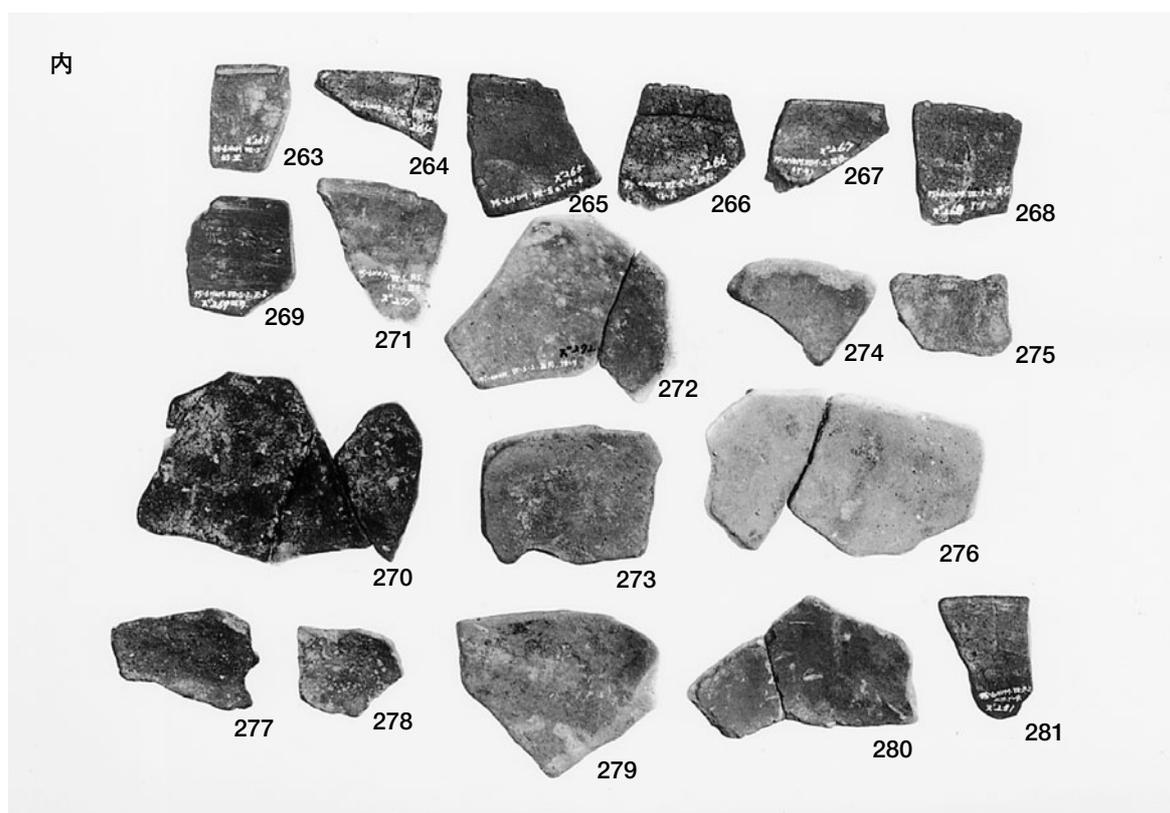
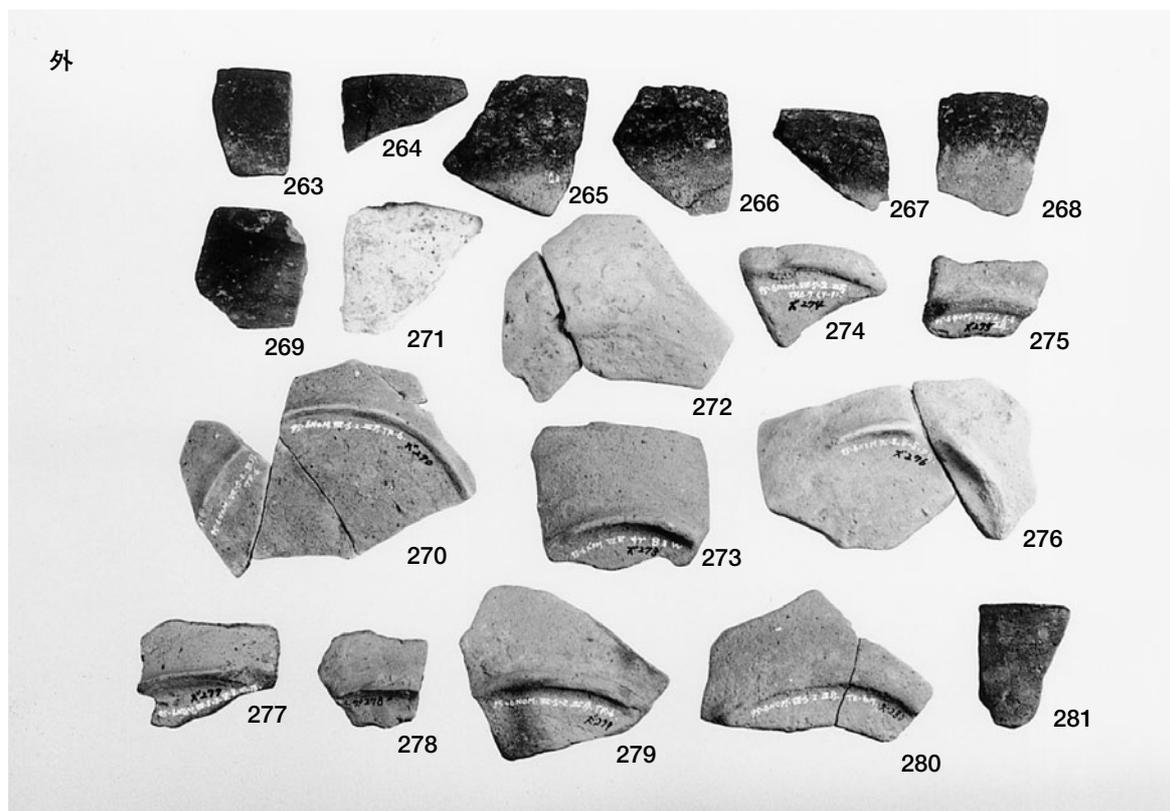


Ⅶ区 包含層出土遺物

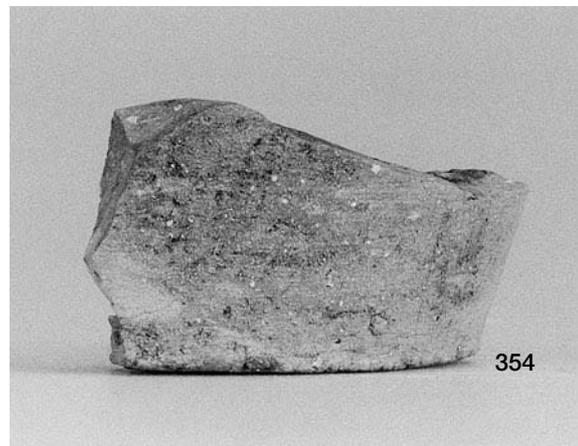
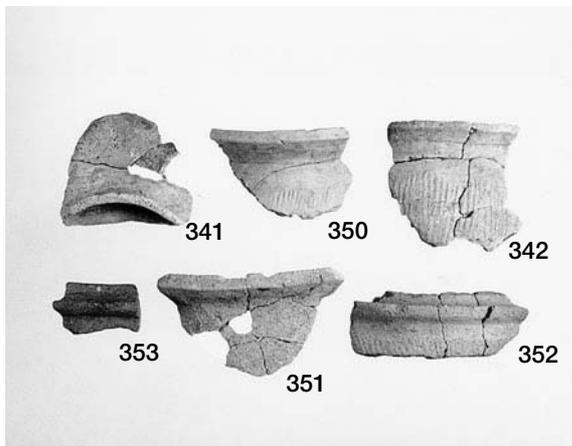
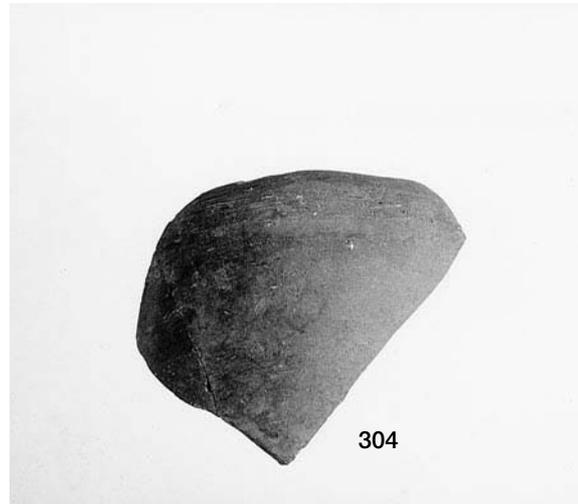
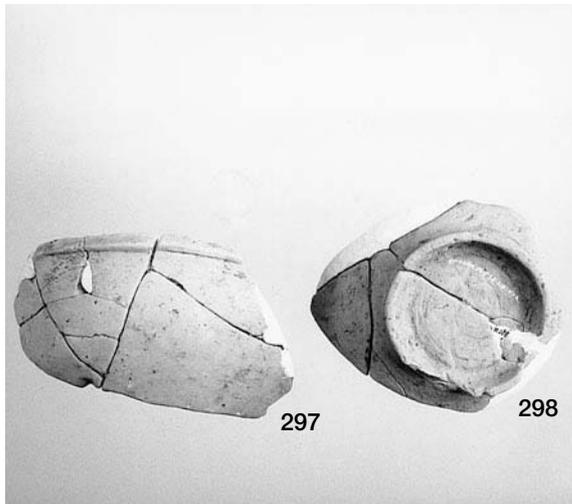
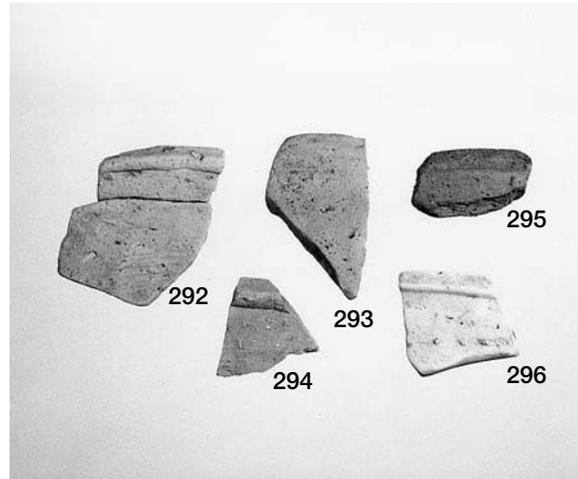
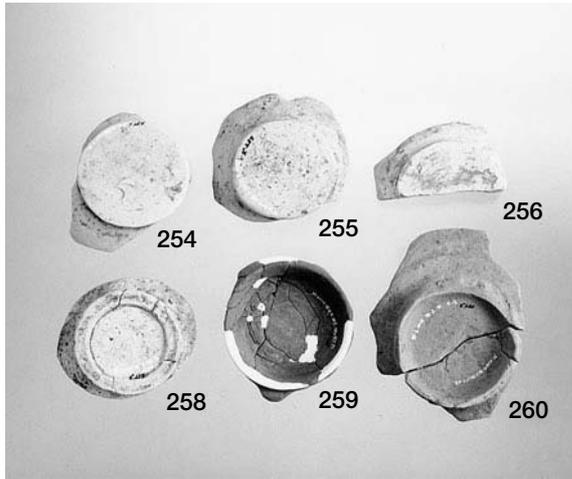




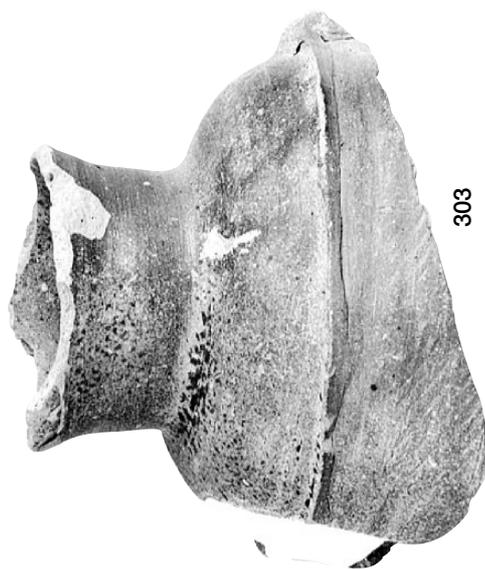
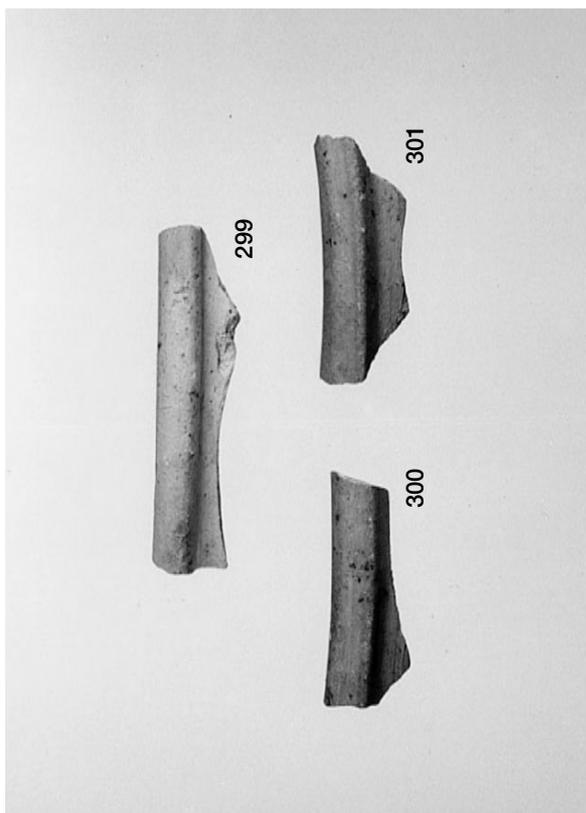
Ⅶ区 包含層 Ⅲ層・Ⅳ層・Ⅴ層 出土遺物



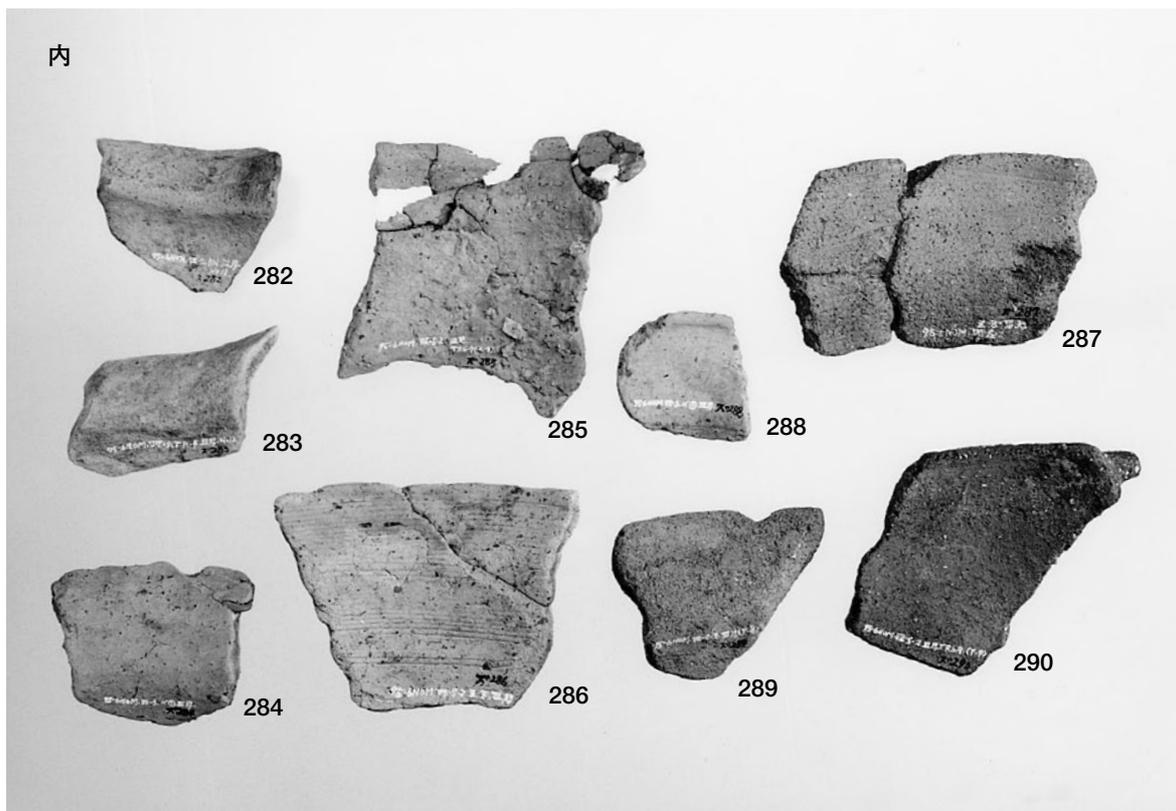
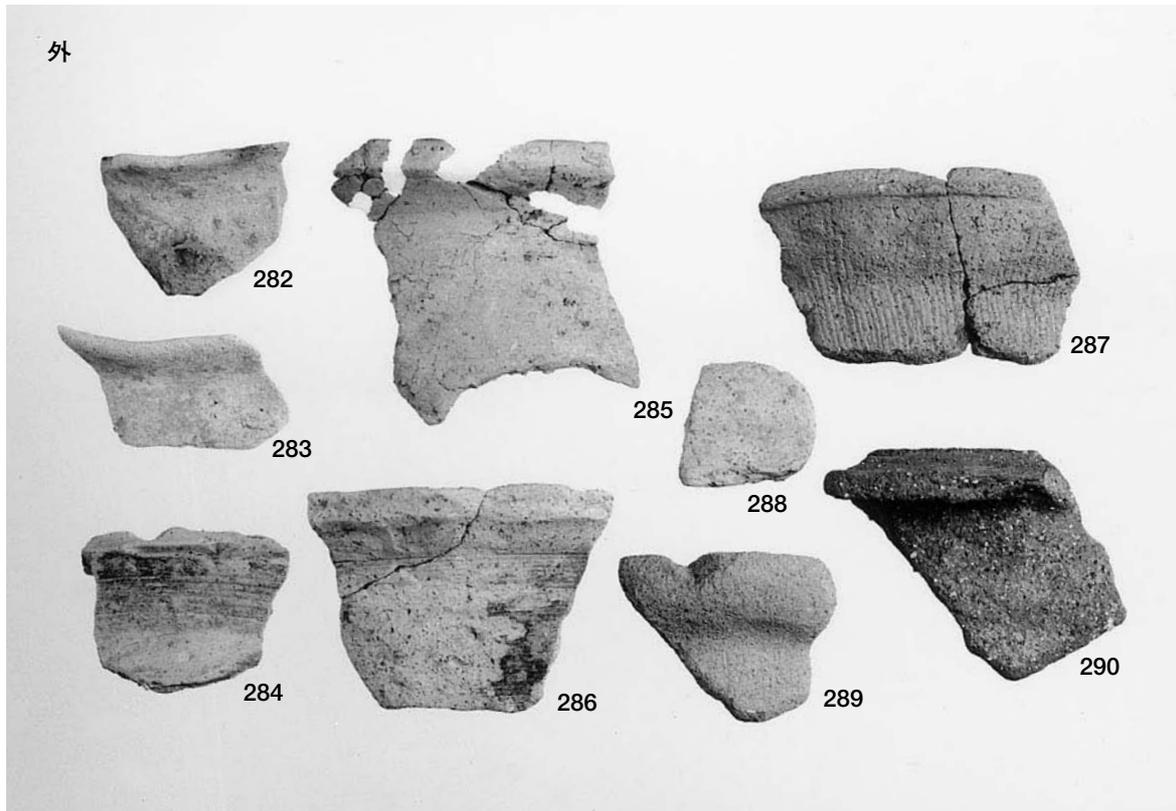
Ⅶ区 包含層出土黑色土器



PL 62



Ⅳ区 包含層出土遺物



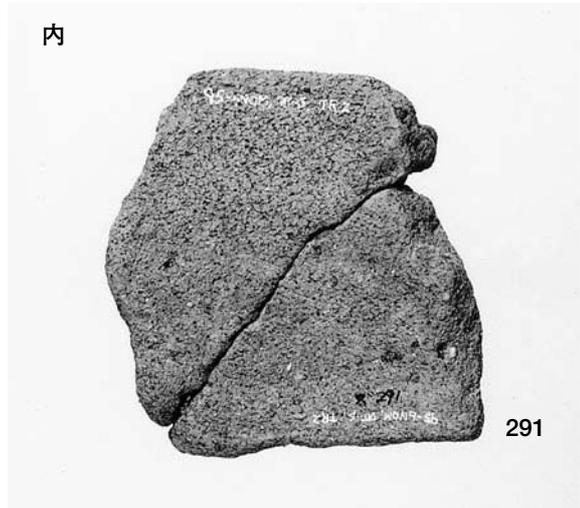
Ⅶ区 包含層出土遺物

PL 64

外



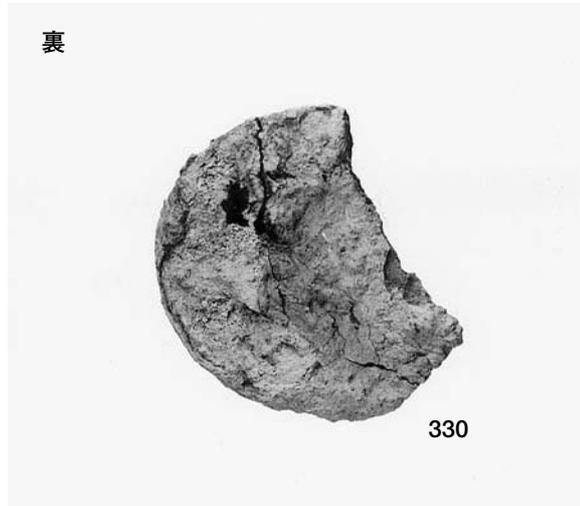
内



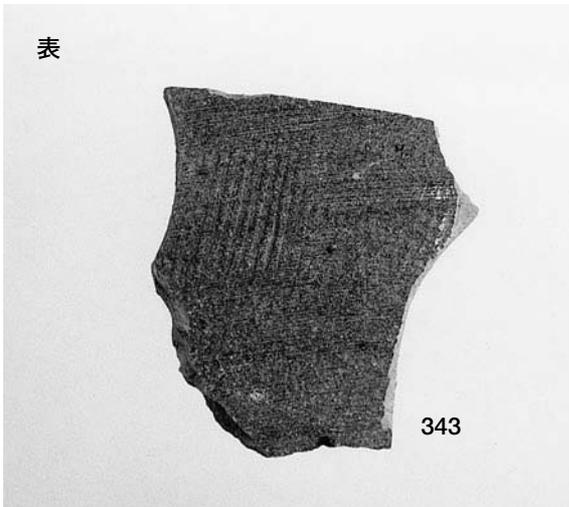
表



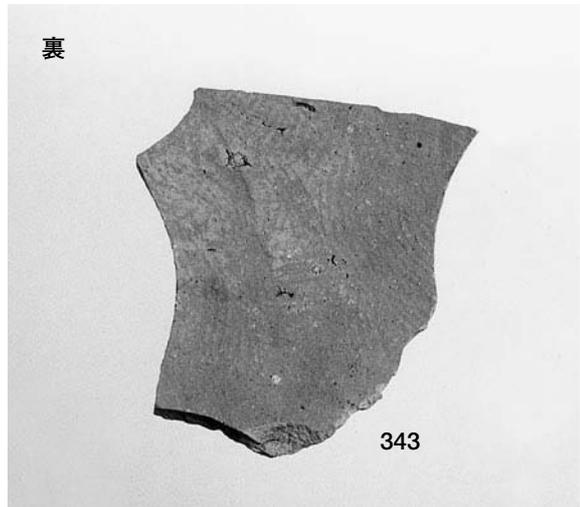
裏

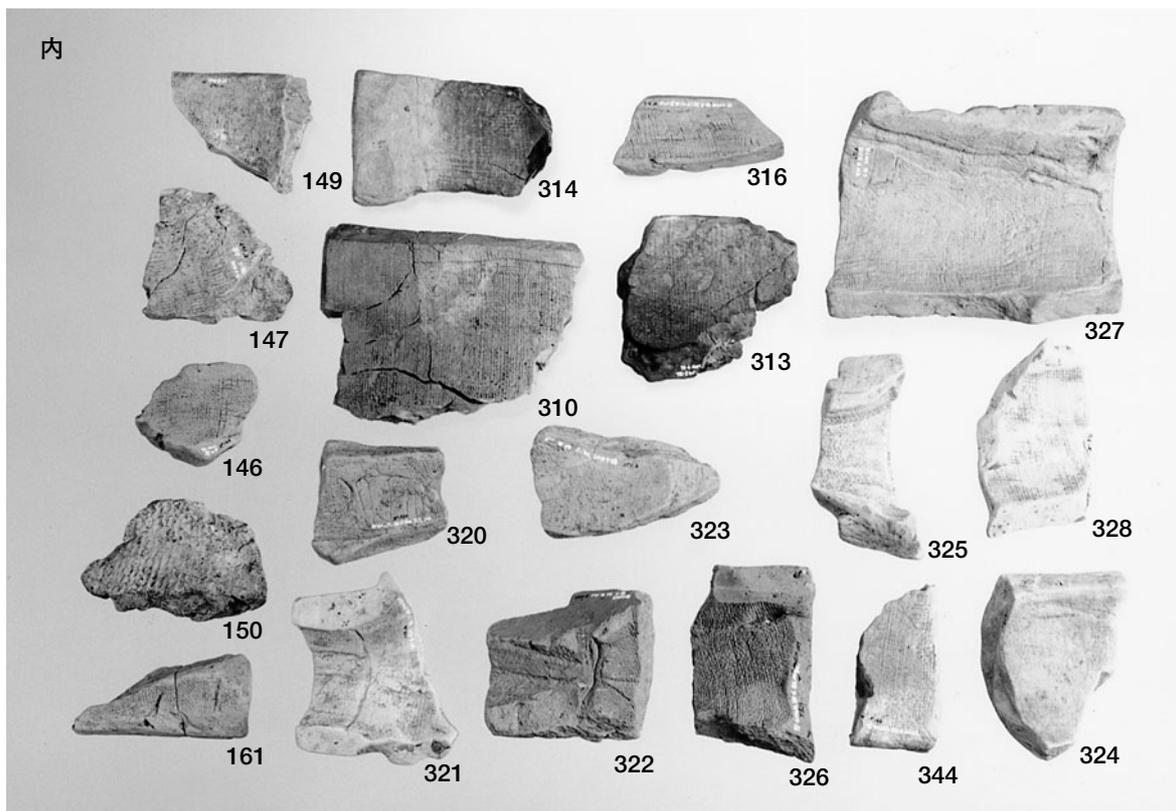
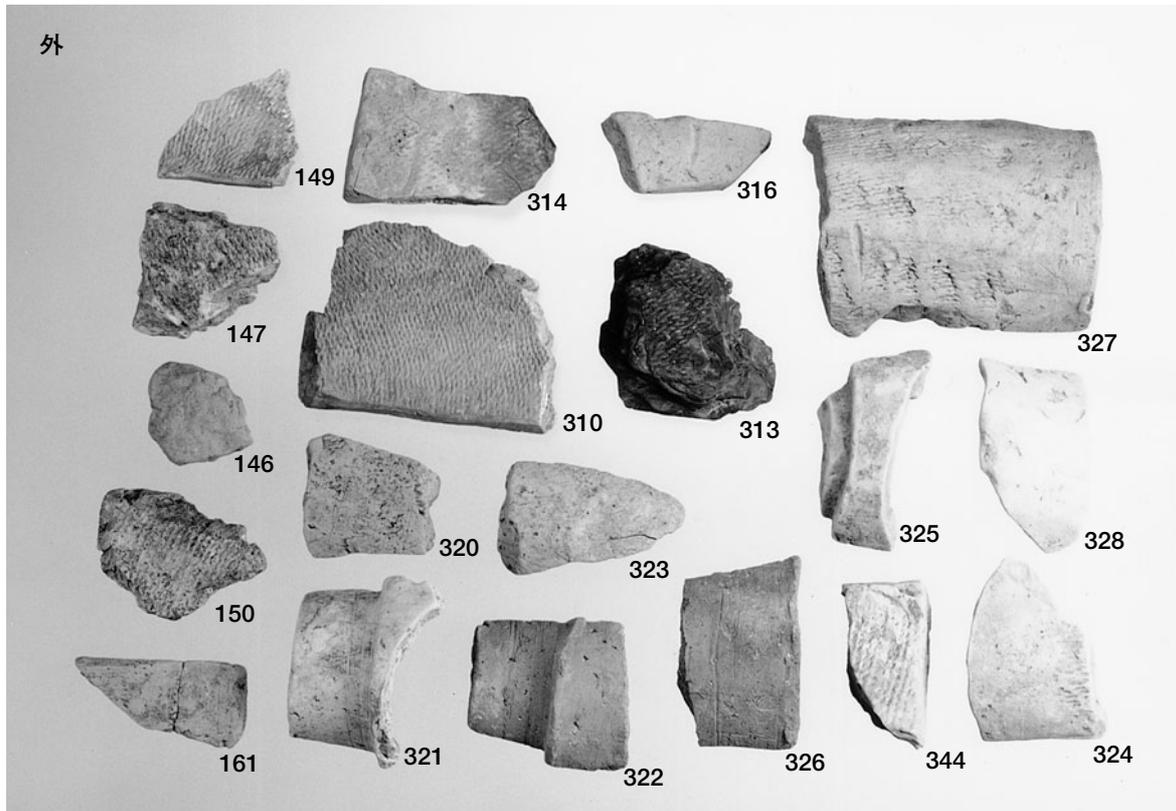


表



裏





Ⅶ区 包含層出土瓦

報告書抄録

ふりがな	おくたにみなみいせきに							
書名	奥谷南遺跡Ⅱ							
副書名	四国横断自動車道(南国～伊野)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第47集							
編著者名	松村信博・山本純代							
編集機関	(財)高知県文化財団 埋蔵文化財センター							
所在地	〒783-0006 高知県南国市篠原南泉1437-1 TEL.088-864-0671							
発行年月日	西暦 2000年 3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
おくたにみなみいせき 奥谷南遺跡 (Ⅵ・Ⅶ区)	こうちけんなんごくし 高知県南国市 おこうちょうこはす 岡豊町小蓮	39204	0063	33度 35分 50秒	133度 36分 45秒	Ⅵ区 1995.2.6~ 1995.3.17 Ⅶ区 1995.12.18 ~1996.2.27	950㎡	四国横断自動車道 (南国～伊野間) 建設に伴う事前の 発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
奥谷南遺跡 Ⅵ区	寺院関連遺構	古代 中世	掘立柱建物・ 柵列ピット	土師器・須恵器 ・緑釉陶器		K-90号窯式 陰刻花文緑 釉陶器確認		
奥谷南遺跡 Ⅶ区	寺院関連遺構 窯跡	古代 中世	須恵器窯 (ロストル構造) 焼成土坑 土坑墓 通路状遺構 掘立柱建物 土坑	土師器・須恵器 ・黒色土器・ 布目瓦・青磁・ 白磁		ロストル構造の 須恵器窯確認 山岳寺院関連 遺構確認		

奥谷南遺跡Ⅱ

2000年3月31日

編 集 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

発 行 高知県南国市篠原南泉1437-1

電話(088)864-0671

印 刷 株式会社 飛 鳥